



TITLE:

京都大学フィールド科学教育研究 センター年報:2010

AUTHOR(S):

京都大学フィールド科学教育研究センター

CITATION:

京都大学フィールド科学教育研究センター. 京都大学フィールド科学
教育研究センター年報:2010. 京都大学フィールド科学教育研究センタ
ー年報 2011, 8: 1-144

ISSUE DATE:

2011-12-26

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/152319>

RIGHT:

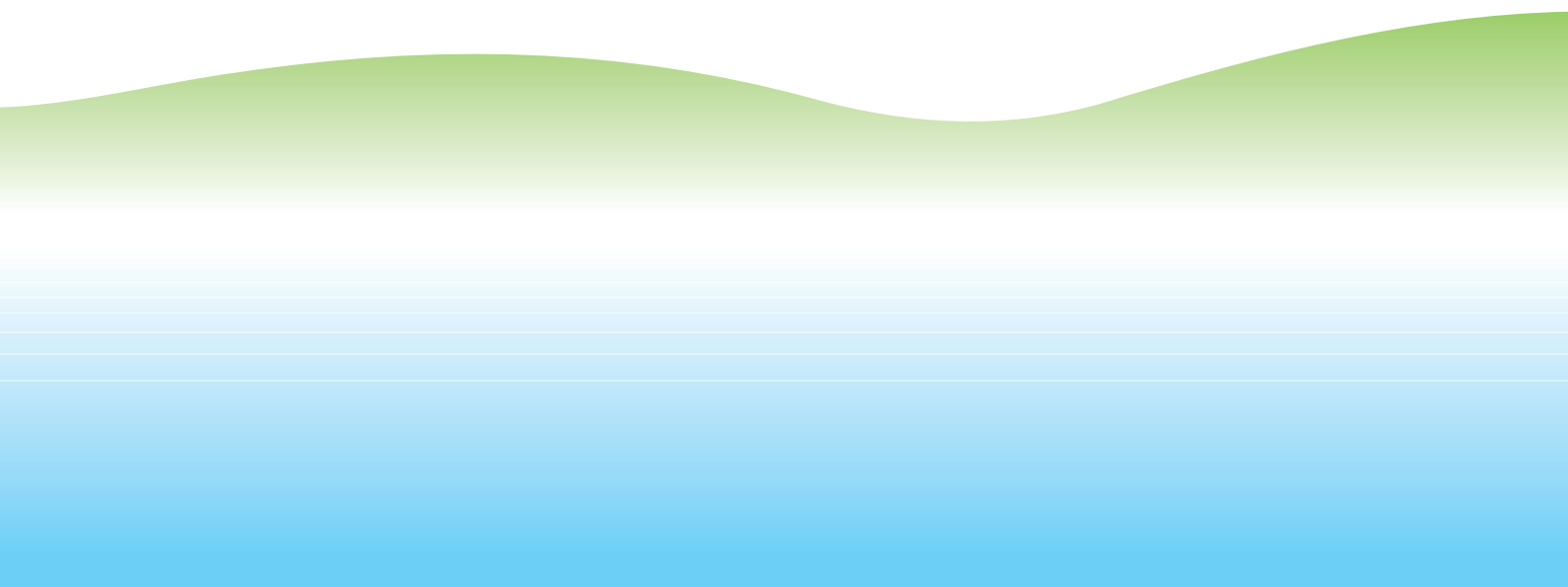
年報

京都大学フィールド
科学教育研究センター

Annual Report

Field Science Education and Research Center,
Kyoto University

No.8 2010



年 報

京都大学フィールド科学教育研究センター

第 8 号

2 0 1 0

目次

組織	1
教育研究部	2
1. フィールド研活動の記録	
(1) 主な取り組みの紹介	
1) 第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」	4
2) 第20回芦生公開講座	6
3) 北海道研究林でミニ公開講座（草木染め）を開催	7
4) 瀬戸臨海実験所所蔵標本のデータベース化	8
5) 舞鶴市ナマコプロジェクト	9
6) 木文化プロジェクト2年目報告	10
7) 「東京で学ぶ 京大の知」	11
8) 全学共通科目（リレー講義）	12
①森里海連環学 ②沿岸環境保全学 ③森林学 ④水圏生物学入門 ⑤アンケート結果	
9) 森里海連環学実習	18
①実習A「芦生研究林ー由良川ー丹後海コース」 ②実習B「紀伊半島の森と里と海」	
③実習C「別寒辺牛川流域における森里海連環学実習」 ④アンケート結果	
10) 少人数セミナー	29
①お魚好きのための魚類研究入門 ②原生的な森林の働き③海岸生物の生活史	
④魚類心理学入門 ⑤森のつくりだすもの ⑥森里海のつながりを清流古座川に見る	
⑦C. W. ニコル“アフアンの森”に学ぶ ⑧フィールド実習“森は海の恋人” ⑨海洋生物の多様性	
⑩木造校舎を造る：木の文化再生へ ⑪豊かな森をめざして！ ⑫海産無脊椎動物-分類群と形の多様性	
⑬サンゴ礁生態学入門 ⑭環境と魚の河口域生態学入門 ⑮環境の評価	
⑯日本海に遊ぶ～日本海学入門 ⑰瀬戸内に見る森里海連環 ⑱京をめぐる森と人の暮らし	
⑲アンケート結果	
11) 暖地性積雪地域における冬の自然環境(実習)	55
(2) 外部資金の獲得状況	56
(3) 2010年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記）	60
2. 各施設における活動の記録	
(1) 各施設の活動概要	
1) 芦生研究林	67
2) 北海道研究林	68
3) 和歌山研究林	69
4) 上賀茂試験地	70
5) 北白川試験地	71
6) 徳山試験地	72
7) 紀伊大島実験所	73
8) 舞鶴水産実験所	74
9) 瀬戸臨海実験所	75
10) 海域陸域統合管理学研究部門	76

11) 森里海連環学プロジェクト支援室	77
12) 企画情報室	78
(2) 各施設を利用した学生実習等	79
(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等.....	82

3. フィールド研教員の活動の記録

(1) フィールド研関連事業における活動	85
(2) 研究成果	92
(3) 教育活動	116
(4) 学会等における活動	122
(5) 社会貢献活動	124
(6) 国際活動	130
(7) 研修参加・資格取得等	132

4. 資料

(1) 職員配置表	135
(2) 常設委員会名称及び委員一覧	136
(3) 全学委員会等	136
(4) 運営委員会	137
(5) 協議委員会	137
(6) 新聞記事	138
(7) 各施設利用者数	142
(8) 人事異動	143
(9) 規程の改正等	144

● ● ● 組織 ● ● ●

■ センターの組織

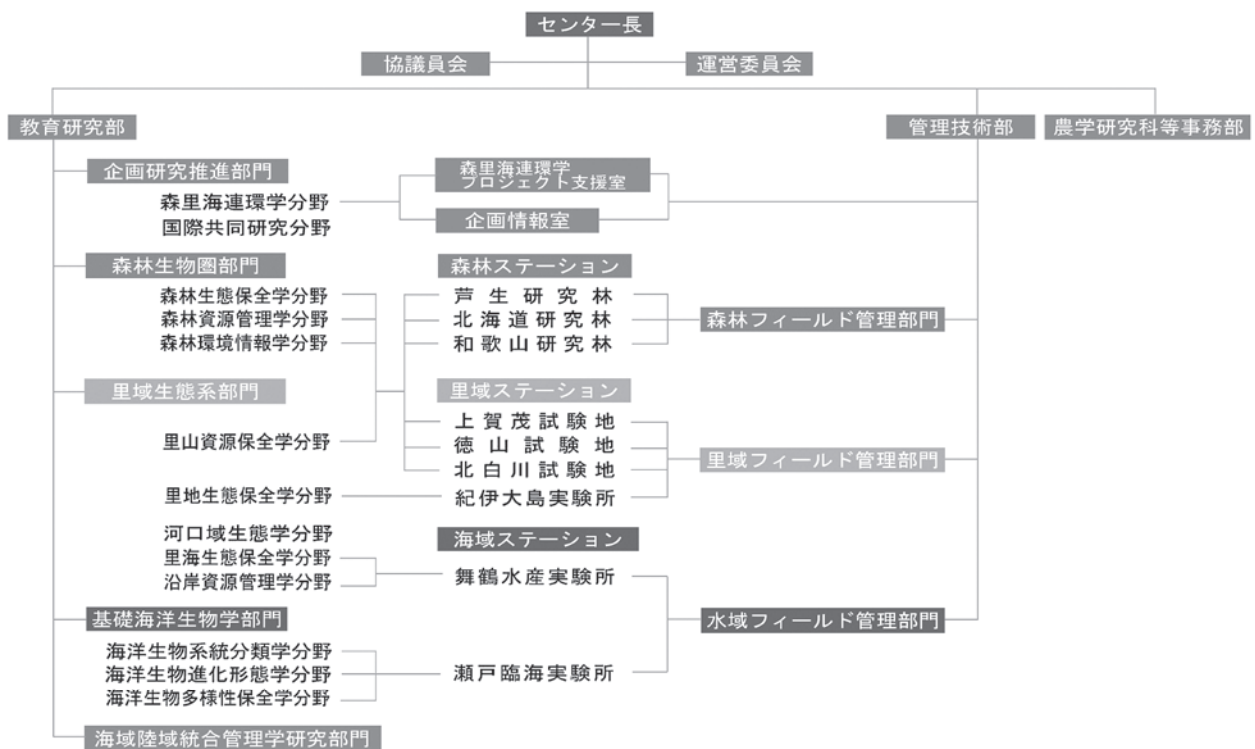
教育研究部と管理技術部からなる。センター本部は本学吉田キャンパス北部構内に置かれ、森林、里域、海域の各ステーションを構成する9の施設が、太平洋側から日本海側に至る近畿圏を中心に広域に位置する。

■ 教育研究部

企画研究推進部門、森林生物圏部門、里域生態系部門、基礎海洋生物学部門、海域陸域統合管理学研究部門（2008年10月新設）の5部門、13分野、及び9施設から構成されている。森－里－海の連環を軸とした教育・研究を進める。

■ 管理技術部

企画情報室、森里海連環学プロジェクト支援室と、森林、里域、水域の3フィールド管理部門、9施設からなる。フィールドの管理・運営および基礎情報の収集、情報管理、技術開発、教育研究支援を行う。



企画研究推進部門

森里海連環学分野と国際共同研究分野から構成される。センターが共通の理念の下に機能的に統合化され、森一里一海連環学の創出を目指す。さらに、国際的にもオープンな組織へ自己革新するための役割を担う。とくに、来るべき環日本海時代を展望した日・中・韓の国際共同研究や、異質気候帯における比較研究のための東南アジア熱帯域における共同研究の展開を図る。

森里海連環学分野

森林域、里域および沿岸海洋域を対象として、隣接する生物圏相互の関連に焦点を当てた研究部門間の共同研究を促進する。多様な共同研究を基礎に、森一里一海の連環に関する研究プロジェクトを企画し、全国の関連研究機関との連携の下、新たなフィールド科学の創出と展開を図る。

国際共同研究分野

東アジアならびに東南アジアを主なフィールドとして、陸域と海域の連環を柱とした地球環境問題に関する国際共同研究を展開し、海外における連携拠点の構築を図る。当面は、世界規模で展開される沿岸域の生物多様性の総合調査（NaGISA・CoML）のリーダーとしての活動を通じて、国際共同研究の基盤を固める。

森林生物圏部門

本部門では、森林科学ならびに森林資源科学に関する大学院レベルの多岐にわたるフィールド研究ならびに教育が行われている。具体的には、森林資源情報学の統合的理解とシステム解析、自然環境や生態的構造、社会経済的状况に基づく森林景観の機能的評価と空間ゾーニング技術、持続的森林資源管理技術の体系化、林学的観点からの森林資源上の持続性と生態系としての生産性の向上、が含まれる。

森林生態保全学分野

森林生態系が示す種・個体（遺伝子）、個体群、群集、集水域、景観といった階層性に注目し、各階層における多様性とシステムの形成維持メカニズムや多様な森林生物種の生活史の解明を主とした教育研究を行う。また野外操作実験を実施し、森林生態系の保全と生物資源の持続的な再生利用のための手法の提示も目指す。

森林資源管理学分野

森林が有する環境、生物、文化としての資源の機能を評価し、これに基づく森林資源の持続的な管理理論の構築と管理技術についての実践的な教育研究を行う。特に当面の課題としては、近年、フィールド研が木文化プロジェクトとして展開しつつある、管理圧の低下から荒廃しつつある人工林・二次林の持続的管理手法の確立に向けた研究を行う。

森林環境情報学分野

持続可能な森林管理に向けて、環境影響評価基準・指標の定量化、GIS/GPSによる森林利用機能区分、LCI/LCAによる環境低負荷型生産技術、森林認証・ラベリング等を中心とした実践的・問題解決型研究を展開する。

里域生態系部門

山間部から沿岸部に至る広く、変化に富む地域は、人間の関与が様々な強度で継続しており、自然と人間の相互作用、もしくは人間と自然との共生によって生み出される特有の生態系を形成する。この生態系には、農業、林業、水産業という人間の生活を維持するために必要な基本的な生業による二次的自然が含まれるほか、居住域としての農山漁村や都市も含まれる。これらの人間が与えるインパクトを把握することは、現在の地球環境問題の本質の把握にも通じるものであり、本部門ではそのために不可欠な人間－自然相互作用環の解明を多くの視点から実践し、その共生システム構築のための教育研究を行う。

里山資源保全学分野

生活圏に接する森林において、人間との相互作用により成立した生態系の特性や機構を明らかにするとともに、多面的なアプローチから、生物多様性および森林の保全、森林と人間との新たな共存に向けた幅広い教育研究を行う。

里地生態保全学分野

人里と一部に里山と里海を含む、いわゆる里地に分布する攪乱依存性植生ならびに攪乱依存性植物の起源と歴史および生態的特性を明らかにし、それらの管理保全体系ならびに持続的利用に関する考察を行う。

河口域生態学分野

陸域と海域の接点にあたる河口域は、多くの海洋生物の再生産に極めて重要な場であり、生物多様性の宝庫でもある。しかし、一方では人間の生活と生産活動の様々なインパクトが集積する場所でもある。有明海などのモデル的な河口域を対象に、資源生物学的ならびに保全生態学的教育研究を行う。

里海生態保全学分野

陸域からの影響も含めた沿岸域の環境特性を把握し、生息する資源生物の生産生態との関係を解明する。とくに、藻場、砂浜域、干潟域などでの仔稚魚の分布、行動、摂餌、成長、生残等を明らかにし、魚介類の成育場としての里海の役割を定性、定量的に評価する。

沿岸資源管理学分野

若狭湾西部海域をフィールドとして主要な資源生物の個体群動態を研究し、海洋環境構造や海況変動の影響を明らかにする。さらに、資源生物の分類と生活史・生態特性を調べ、それらの資源変動機構の解明に取り組む。

基礎海洋生物学部門

本部門では、主に温帯性海産無脊椎動物を材料として用い、分類学・進化生物学・発生生物学・生理生態学・生物地理学といった様々な基礎生物学的な研究教育活動を、分子レベルから生態系レベルにわたって広範囲に展開している。更にその研究フィールドを熱帯域・北方域へと地球規模に広げながら、環境生物学や保全生物学といった応用的な領域へと、その研究教育活動の内容を拡大している。

海洋生物系統分類学分野

系統分類学は、生物の多様性を認識する基本であり、1922年の瀬戸臨海実験所の創設以来、連綿と続けて来た研究分野である。海洋生物の多様性は非常に高く、多くの未知の事柄が残されている。このような多様性の包括的な解明を目指して教育研究を行う。

海洋生物進化形態学分野

形態観察は、生物の多様性を認識するために必須の作業である。本分野では、最新の装置を用いた精密な比較・機能形態学的研究や、分子生物学的手法による形態形成のメカニズムを解明する研究と教育を行う。

海洋生物多様性保全学分野

海洋生物の多様性を保全するために、多様な生物が環境の変動に対してどのように反応するのかを明らかにするとともに、瀬戸臨海実験所島島実験地における30年以上にわたる長期観察や、地球規模の環境変動を把握するための国際共同研究の中核的役割を果たす。

海域陸域統合管理学研究部門

センターが推進してきた森里海連環学を研究と教育に生かし、学問分野として確立すること、そして、この考え方を実践し、行政や市民の運動に浸透させることを目的とし、日本財団からの提案と助成によって2008年10月に発足した。

●●● 1. フィールド研活動の記録 ●●●

(1) 主な取り組みの紹介

1) 第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」

河口域生態学分野 准教授 田川 正朋

2010年11月20日（土）に、時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」を開催した。この日は京都大学の学園祭である11月祭の初日、しかも快晴の土曜日というなかで、210名の参加者があった。

京都大学フィールド科学教育研究センター（フィールド研）では、森里海連環学を基礎にして、豊かな自然環境の復活とその持続可能な利用の実現を目指している。フィールド研の中心的な催しの一つである本対話集会は、今年度が7回目にあたる。今回は、これまでの対話集会の中締めとなるような、未来を指向するテーマを掲げた。未来を末永く担うのは現役世代ではなく次世代である。森里海連環学の理念を持って実践する次世代をはぐくむ教育、人づくりこそが、日本の豊かな生態系や持続可能な自然の利用を実現するうえで不可欠であり、現役世代の責務でもある。

本集会は、白山義久フィールド研センター長と江崎信芳京都大学理事・副学長の挨拶で開幕した。フィールド研の吉岡崇仁教授の司会進行にしたがい、森里海連環学の中心的な提唱者である国際高等研究所フェローの田中克先生より「森里海連環教育の目指すところ—ムツゴロウとオランウータンの会話」と題する熱のこもった基調講演をいただいた。このご講演によって、会場の聴衆全体の意識が一方向を向いた、そのような印象があった。続く基調講演は、法然院との連携で小中学生への環境教育活動に長年取り組んでこられたフィールドソサイエティー事務局長の久山慶子先生に、「子供たちと森で学んだこと」と題する、しっかりとした方向性をもった暖かいご講演を頂いた。子供を対象にした環境教育とは、場づくり、時間作りであって、子供は自分で吸収して学び育っていくものだというお話しは、自然を対象とした教育を大学が考える上で貴重な示唆に富むものであったと思う。



田中克先生による講演



久山慶子先生による講演

休憩をはさんでの第2部では、まず、パネリストとして御登壇頂く2名の先生方のご講演から始まった。社会連携によって河川保護活動を行っている作家・アウトドアライターの天野礼子氏からは、「“森里海連環学”と社会連携」、続いて、森里海連環学実習を担当しているフィールド研の上野正博氏からは、「まず大人が変われ…日本のフィールド教育」と題した、それぞれの先生方のご経験に基づく叱咤激励・刺激的・挑戦的なお話を伺った。続いて、白山センター長をコーディネーターとして、パネルディスカッション、および会場との対話が行われた。会場からは、和やかな雰囲気の中、次世代の人づくりについて、理想や現実、問題点などが、会場全体で活発に議論がなされた。また、今後のフィールド研や森里海連環学への期待や激励の声も頂いた。

「人づくり」をテーマとした対話集会は今回が初めてであった。基調講演およびパネリストの方々の講演内容は、ま

さにテーマに即したものであった。今回は 210 名の参加があったが、約半数の方が対話集会への初参加であったことから、教育というテーマが新たな参加者を呼び込んだと考えられる。事後のアンケート結果からも 80%以上の方が「良かった」と回答しており、満足度は大変高かったことが伺われる。参加者には、対話集会リーフレットに加えて、田中克氏と天野氏がそれぞれ作成した資料が配布された。後日、本対話集会の内容を収録した冊子を 2500 部作成し、関係各位に配布して本事業の成果を広く周知した。



上野先生と天野先生



参加者との対話

本対話集会は、今年度で7回目を数えた。テーマおよび議論の内容は年々、深化しており固定的な参加者も多い。その反面、新規の参加者はやや減少傾向にあり、特に大学生以下の若い世代の参加が少ない。この点に関しては、さらに積極的な広報活動などの改善の必要を感じている。また、時計台対話集会は7回目の本集会をもって第一期を終了する。今後も森里海連環学の考えを元にして自然環境保全を継続していくことを考え、次世代を担う「人づくり」をテーマとしたことで、前述のように新規な参加者を呼び込み、議論にも新たな方向性を加えることができた。この意味で、当初目標の市民対話、社会還元は十分に達せられたと自負している。また、これまで時計台対話集会は、大学や研究者に対して市民が積極的に意見を述べる機会を提供してきた。自然環境保全意識の高まりの受け皿として、この役割はますます重要になると予想されるが、今後、フィールド研としては、これまで同様に市民との連携を図る方策を検討していく必要がある。

フィールド研としては来年度には時計台対話集会の開催計画はないが、嬉しいことにアンケートでは継続して開催を求める意見も複数寄せられた。この結果をふまえて再度、社会連携委員会で議論したが、単に前年を踏襲するようにして継続するよりも、よりよい形を模索し全く新しい形の対話集会として再開を計画する方が、より建設的であるとの意見があった。そのため、平成 23 年からその準備のための議論を開始することとなった。

最後になったが、ご講演を頂いた 4 名の先生方はもとより、ご参加いただいた多くの市民の方々、ご後援頂いた京都府教育委員会様、京都市教育委員会様、フィールドソサイエティー様、および、ご協賛頂いた村田製作所様、全日本空輸様、エコロジー・カフェ様、サイファアソシエーツ様に、この場をお借りして深く感謝の意を表す。



ポスター

2) 第 20 回 芦生公開講座

里山資源保全学分野 准教授 長谷川 尚史

芦生研究林で開催する公開講座は 1991 年に開始され、2 泊 3 日の日程で一般市民を対象に、初日と 3 日目に講義、2 日目に芦生天然林の観察・解説と簡単な調査方法の実習、という形態で続けてきた。2010 年度は 20 回目にあたり、これまでの総括として、芦生で長年、調査を行ってきた研究者や技術職員、演習林時代の歴代の林長らを講師として招き、第 20 回芦生公開講座「森のしくみとその役割ー芦生のあゆみ」を開講した。受講者は 24 名であった。

まず初日は、長期にわたり芦生研究林において森林動態を調査されてきた安藤信フィールド研准教授から、「芦生の森はどう変化したか？」と題してその研究成果の報告をしていただき、続いて元林長である川那辺三郎京都大学名誉教授から「大学の山「芦生」」と題して氏の学生時代の芦生の森の姿や芦生をとりまく社会情勢などを交えた講演をしていた。さらに元林長の神崎康一京都大学名誉教授から、「山（森）を活かす」と題して、氏の過去の芦生での研究やこれからの森林管理の方向性、木質バイオマス資源利用の最新情報などをご紹介していただいた。初日最後は、芦生研究林の西岡裕平技術職員および荒井亮技術職員から、実際の樹木の枝を用いた「樹木識別実習」が行われた。

2 日目午前中は例年通り天然林の観察・解説を行った。参加者を 4 班に分け、フィールド研教員および芦生研究林技術職員から、樹木の識別法、種ごとの生育環境特性、近年の研究テーマなどを解説、時に雑談を交えながら、ゆっくりと杉尾峠から長治谷まで歩行した。午後は受講者それぞれの体力と興味に応じて、健脚コース、水を量るコース、木を測るコース、長治谷ぶらつきコースに分かれた班別行動とした。健脚コースは三国峠を往復しながら森林の解説を行い、水を量るコースでは由良川源流域における量水堰等の見学とバックテスト体験、木を測るコースでは立木の樹高計測実習と実際に伐採しての計測などを行った。2 日目終了後の夕食は、芦生山の家において懇親会を行い、講義中には聞けなかった質問などを受けるとともに、様々な立場の受講者との交流を図った。

3 日目は、まず、元芦生研究林長である酒井徹朗京都大学大学院情報学研究科教授から、「山の暮らしの未来」と題した講義で、日本および世界の森林資源の現状と林業の動向、過疎化など人口問題を含めたこれからの社会構造の考え方について解説を受けた。最終の講義は野外講義とし、灰野集落跡まで歩き、中根勇雄元フィールド研技術専門員から「芦生のくらし」として、昔の暮らしの中で利用されていた様々な植物とその用途について解説していただいた。すべての講義が終了したのち、事務所前で弁当による昼食となったが、この際、中根氏のご厚意により、山菜の天ぷらが振る舞われた。

厳しい経済環境もあり、受講料のほかに宿泊費用のかかる公開講座への参加者は減少傾向にあるが、講座終了後に記入していただいているアンケートによると、受講者の評判は非常に良く、特に近年は自然に関する講義だけでなく、限界集落の問題など、人の暮らしについても関心が高いと考えられる。こうした公開講座における一般市民との交流は、京都大学やフィールド研、研究林が求められているものを再認識できる大変良い機会であり、21 回目を迎える次年度以降も、より受講者が増加するような枠組み作りを検討しながら、積極的に開催していきたい。



川那辺三郎名誉教授による講演



灰野集落跡での解説

3) 北海道研究林でミニ公開講座（草木染め）を開催

北海道研究林 技術職員 林 大輔

社会貢献の一環として北海道研究林では初めて、地域の小中学生を対象としたミニ公開講座を開催した。

日程は小中学生が参加しやすいよう、夏休み期間の週末とした。内容は林内への移動がないこと、危険が少ないこと、作業は簡単で結果が分かりやすいことなどから草木染めに決定した。しかし、誰も草木染めについて詳しい者はいなかったため、関連書籍やウェブページなどからの情報収集が必要となった。材料に関しても草木以外は一から買い揃えることとなった。

広報については両町やその教育委員会の協力を得て、町の広報に掲載してもらったほかポスターの掲示も行った。さらに、地元の釧路新聞社と北海道新聞社にプレスリリースを行い、それぞれ7月14日付、7月23日付で募集記事が掲載された。

	日程	時間	参加人数	人工数（準備含む）	材料費
白糠区	7月24日（土）	10:00～14:00	13人	30人・日	35,808円
標茶区	8月1日（日）	10:00～14:00	10人		

当日は、まず草木染めの手順を説明した後、材料集めを行った。途中、樹木の説明も織り交ぜながら構内を全員で歩き、子供たちに材料を選んでもらった。白糠ではホオノキの葉とカラマツの球果を使い、標茶では職員の誘導もあり草木染めの材料として知られているオニグルミの果実とオオヤマザクラの樹皮を集めた。その後、管理棟に戻って小石や輪ゴムで染め抜く模様を作り、実際に布を染める作業を行った。樹種や部位、媒染液によって発色は様々なので、どんな色が出るか興味深そうであった。必ずしも思い通りの色が出るとは限らないのが草木染めの醍醐味ではあるが、その辺をうまく伝えられないとがっかりさせる危険もある。今回はお母さんたちのフォローもあり雰囲気よく行うことができた。

公開講座の参加者は主に町内在住者であったが、研究林には初めて来たという人もおり、地元の森林に触れて興味を持ってもらう機会を提供するという点でも有意義なものであったように感じる。スタッフ側としても伝え方やサポートの仕方など学ぶべき点は多く、今後もこういった機会を持てればと思う。

初めてということもあり手探りの中での準備で、人工数、材料費ともにかさんだが、継続的に実施することで今後はより効率的に実施できると思われる。ただマンネリ化しないよう、内容の検討と実施後の振り返りをその都度行うことが求められる。今回の場合、本来の対象である子供たちが終盤飽き始めた一方、付き添いのお母さん達の方が熱心に参加していたように感じられた。対象とする層に合致したプログラムとなるよう注意したい。スタッフも単に作業を円滑にこなすために指示を出すだけでなく、限られた時間の中で参加者が主体的かつ科学的にそして安全に取り組めるよう、関わり方を工夫していく必要があるだろう。



材料集め（白糠）



染色作業（標茶）

4) 瀬戸臨海実験所所蔵標本のデータベース化

海洋生物系統分類学分野 助教 大和 茂之

2008年度から2010年度にかけて、独立行政法人 科学技術振興機構の補助を受け、生物多様性情報データベース作成課題のひとつとして、「京都大学瀬戸臨海実験所所蔵標本データベース」を作成した。この事業は、地球規模生物多様性情報機構 (The Global Biodiversity Information Facility: GBIF) による国際的科学協力プロジェクトでもある。

本事業によって、瀬戸臨海実験所所蔵の生物標本のかかなりの部分が、世界共通の GBIF フォーマットに準拠して生物種名や採集地などの標本情報がデータベース化され、分散型のデータベース・ネットワークである GBIF の一部として広く公開されることになった。その内訳は、タイプ標本シリーズ 419 点、貴重標本シリーズ 273 点、八放サンゴ類 838 点、イシサンゴ類 1,024 点、多毛類 170 点、蔓脚類 217 点、十脚類 531 点、ウミグモ類 81 点、ツルクモヒトデ類 142 点、ホヤ類 78 点、海藻類 3,721 点で、合計 7,494 点になる。

これらの標本は、瀬戸臨海実験所が 1922 年に創設されて以来蓄積されてきたものであり、特に世界的な分類学者である内海富士夫、時岡隆が在職中に研究標本として残したものが多数含まれている。中でも、新種記載などに用いられたタイプ標本や、論文で使用された証拠標本や海外から分類学的検討のために集められた標本などを含む貴重標本シリーズは、特に大切に管理されてきた。それらに加えて、その他の分類群毎の標本においても、論文で言及された証拠標本を多数含んでいることが、今回の調査で明らかになった。

瀬戸臨海実験所では、原田英司元所長の在職当時から標本のデータベース化を進めており、1991 年にはタイプ標本のリストが出版され、実験所のホームページでも公開してきた。しかし、タイプ標本以外の標本については、研究者の退職や建物の建て替えによる移動などで、十分に整理されていなかった。今回の作業によって、これら未整理の標本を掘り起こすことができただけでなく、発表論文と照合することによって、その学術的価値が高められた。登録標本の点数としては 7500 点と多くはないが、分類学の研究標本として、学問的に配慮された取り扱いになったものと考えている。

これらの作業は、研究分担者となった瀬戸臨海実験所教員および技術職員のみならず、多くの研究者の協力の下に行われた。特に、今原幸光・岩瀬文人（黒潮生物研究所）・松本亜沙子（千葉工業大学および麗澤大学）・岡西政典（東京大学）・伊谷行（高知大学）の各氏には、実験所にお越しいただいて標本の確認や分類の再検討、データの入力などに尽力いただいた。また、西川輝昭（東邦大学）・鯨坂哲朗（京都大学）の両氏には、データ全般に関する貴重なアドバイスを受けた。なお、研究代表者は、2009 年度の途中までは伊勢戸徹特定助教が、その後は大和が担当し、データ全般のとりまとめを行った。

今回の作業で、多くの標本群がほぼ完全に整理されたが、未解決の標本については、引き続き関連研究者から協力を得られることとなっている。また、瀬戸臨海実験所で現在行われている研究で扱われた標本についても、今回の登録フォーマットに従って登録を進めていく予定である。海洋生物標本のコレクションとして、瀬戸臨海実験所が対外的に誇れるものとなるよう、今後もデータベースの充実に努力していきたい。



瀬戸臨海実験所所蔵のタイプ標本



整理が済んだ八放サンゴ類の標本棚

5) 舞鶴市ナマコプロジェクト

舞鶴水産実験所 研究員 大嶋 真謙・南 憲史

ナマコ（マナマコ）は舞鶴湾における重要な漁業対象種の一つであるが、近年、一大消費国である中国で日本産ナマコの需要が増加したことから、舞鶴湾でも漁獲圧が高まり資源の枯渇が懸念されている。そこで、ナマコ資源の増殖と管理を目的として、2009 年 11 月から京都府漁業協同組合－京都大学－舞鶴市が連携した産学官共同プロジェクト「舞鶴湾におけるナマコ資源の増殖等に係る研究（ナマコプロジェクト）」を開始した。本研究では、舞鶴湾での人工種苗生産方法の確立や天然採苗方法の開発を行うとともに、舞鶴湾におけるマナマコの生態を解明し資源の増殖と管理方策の検討に取り組んでいる。

人工種苗生産と天然採苗において、2010 年度末までに以下のような研究成果が得られた。

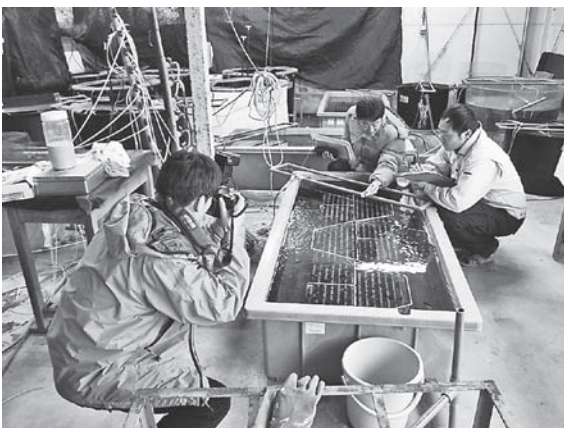
まず、人工種苗生産としては、舞鶴湾内で採集された親ナマコ 61 個体にクビフリン（産卵刺激剤）を注入し、158 万個の受精卵を得た。孵化した浮遊幼生に植物プランクトン、着底以降の稚ナマコには付着藻類や配合餌料を与えて飼育し、3547 個体の稚ナマコを放流サイズ（平均体長 30 mm）まで育てることができた。稚ナマコは屋外、屋内（非空調）、屋内（空調）の 3 カ所で飼育したが、成長と生残ともに屋外で最も良かった。

次に、天然採苗の研究として、舞鶴湾 14 地点で天然採苗試験を実施したところ、10kg のカキ殻を詰め込んだ採苗器（目合い 10 mm、深度 2 m）で平均約 100 個体の稚ナマコが採苗された。特に湾奥では採苗数が多く、稚ナマコの体長も大きかった。また、目合い、付着基の質、付着基の量、設置深度が異なる 9 種類の採苗器 27 個（各種 3 個）を本実験所前に設置し、稚ナマコの採苗数や体長を比較した。その結果、舞鶴湾での天然採苗は、カキ殻 10 kg を付着基とする目合い 10 mm の採苗器を深度 2 m に設置することが効果的であることが示唆された。

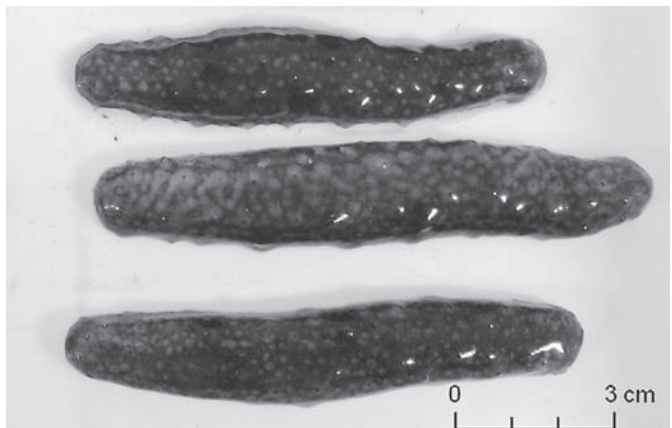
さらに 2010 年度には、大連市において、中国大連市海洋漁業局、大連棒極島海産股份有限公司（加工工場、種苗生産工場）、陸上ナマコ養殖業者を訪問し、中国でのナマコの需要や養殖施設など、ナマコ産業に関する情報を収集した。

2010 年度の研究報告会を 2011 年 2 月に開催し、舞鶴市水産課、京都府漁業協同組合、漁業者らに技術提供を行うとともに 2011 年度の研究に関する意見交換を行った。その結果、2011 年度の研究計画は以下の通りとなった。まず、人工種苗生産においては、中国での手法にならない、屋外に加えて遮光環境下でも稚ナマコを飼育する予定である。天然採苗の研究としては、2010 年度の結果を踏まえた採苗器（100 個）を用いて、1 万個体の採苗を目標に天然採苗を実施する。さらに、資源管理方策として、ナマコ分布調査や海洋環境調査を実施し、稚ナマコの放流エリアの選定や保護区の提案等を行う。これら種苗生産、天然採苗、資源管理方策に関しては、京都府漁業協同組合や漁業者に技術指導を行う予定である。

なお、今回得られた稚ナマコは、地域貢献の一環として、保育園児の食育・環境教育にも使用しており、「ナマコの保育所」、「給食でナマコ」など、新聞やテレビニュースで紹介された。



種苗生産の様子とそれ取材する地元新聞社の記者



天然採苗された稚ナマコ

6) 木文化プロジェクト2年目報告

里山資源保全学分野 教授 柴田 昌三

2009年度から文部科学省の概算要求事業（プロジェクト分）として本格始動した木文化プロジェクト（正式名称は「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」）は2年目を迎えた。2010年度はプロジェクト開始以前から徐々に蓄積してきたデータや基盤を築くことに終始してきた初年度の成果を踏まえて、その展開を開始した年であったといえる。対象としている京都府由良川水系と高知県仁淀川水系のそれぞれにおける2010年度の進捗状況は以下のとおりである。

由良川水系では、当初想定していた河内谷支流水系における人工林の間伐施業とそれに伴う生態系の推移に関する調査計画を断念することとなった。これはフィールド研が考えていたシナリオと、協力をお願いしていた京都府及び森と緑の公社のシナリオがうまく整合できなかったことが大きな原因であり、フィールド研としては計画の甘さを反省せざるを得ない結果となった。河内谷に代わる対象としては芦生研究林下谷に白羽の矢を立て、計画の練り直しとその実践に向けた活動が行われたのが2010年度であり、量水堰の設置と、水質及び水量に関する調査を開始した。

仁淀川水系では、対象の吉ヶ成支流水系で、作業道の作設と作業道に沿った間伐が進んだ。また、植生、水圏生物相、水質調査のための定点では調査を継続した。間伐作業の進捗は想定よりは遅れたが、作業道の作設は予定通り進められた。林業施業を継続していただいた池川林産企業組合には、心から感謝する次第である。作業道の先端は地域の聖域であるガラクと呼ばれる地域の近傍まで届いた。高齢化が進む地元の方々には、車で再びガラクに行ける可能性が高まったことで、大きな期待を集めている。また、2011年度早々には、仁淀川町長もここを視察に訪れたという。仁淀川の広域に関する調査では、共同研究協定のもとに、高知県の研究機関からの多大なるご支援をいただいている。植生調査に関しては県森林技術センター、水圏生物相と水質調査に関しては県環境研究センターと地元NPO団体である「仁淀川の”緑と清流”を再生する会」のご協力を得ている。

2010年度は、これらの自然科学的調査に加えて、社会科学的調査として、両流域における住民の意識調査も行った。対象としたのは、両流域とも、上流域、中流域、下流域の三地域である。2010年度の意識調査は主として、木材資源に対する住民の意識の把握であった。

得られたさまざまな調査結果は、いずれの流域においても、日本財団の支援のもと、地域連携講座として、発信した。講座は、由良川流域では12月4日に京都府福知山市で、仁淀川流域では10月30日に高知市内で開催した。また、京都においては例年行っている時計台対話集会の場（2010年度は11月20日に第7回を開催）で、その成果を報告した。



ガラクに点在する八十八か所めぐりの仏像



芦生研究林に完成した量水堰（下谷）

7)「東京で学ぶ 京大の知」

沿岸資源管理学分野 准教授 益田 玲爾

2011年1月から2月にかけて、京都大学東京オフィスにおいて、連続講演会「東京で学ぶ京大の知」シリーズ2～生きものの多様な世界へが開催され、フィールド研から4人の教員が話題を提供した。講演会の主催は京都大学、後援は朝日新聞社であり、各講演に関する詳しい紹介記事は、本学および朝日新聞社のホームページにも掲載された。

初回の1月15日には、瀬戸臨海実験所の久保田信准教授が「人類の夢、不老不死のベニクラゲの神秘」と題して講演した。講演ではまず、地球上の多細胞動物が140万種にもおよび、現在これらは40の門に分けられていること、そのうち多くが海洋に生息することなどを話した。続いて、同准教授が研究を進めているベニクラゲの生活史について紹介した。自作の「ベニクラゲ音頭」を歌い、またDVDを上映するなど、視聴覚機材を駆使したプレゼンテーションとなった。

第2回の1月29日には、筆者（益田）が「海洋生物の行動学」と題して話した。舞鶴湾で行っている毎月2回の定例潜水調査の結果から、魚の種類や個体数が水温と対応して増減していること、30年前の調査に較べると南方系の魚種が増えたこと、さらにはクラゲに寄生する魚やクラゲを捕食する魚などに関する最近の研究成果について紹介した。若狭湾の各地で出会った水中の様々な生物についても、水中写真を示すとともに、その生態や料理法にまつわる話題などを提供した。

第3回の2月5日は上賀茂試験地の安藤信准教授が「マツ枯れナラ枯れ」と題して講演した。1970年代後半から猛威を振るったマツ枯れと、90年代以降に急速に拡大したナラ枯れによって、日本の森林景観はこの30年間に大きく変化した。その被害の実態と防御の試み、そして森林再生への取り組みについて紹介した。

最終回の2月12日は、瀬戸臨海実験所の白山義久教授（当時）が「海洋生物の生物多様性」と題して講演した。生物多様性条約のCOP10が昨年10月に名古屋で開催され、多様性の重要性が広く世間で認知されるようになった。こうした動きに先駆け、10年前から80カ国2700名の科学者の協力により進められてきたCENSUS of Marine Lifeの結果がこのほどまとめられた。白山教授は同プロジェクトを通して映画「オーシャンズ」の監修にもたずさわっており、これについても紹介した。

京大の東京オフィスは品川駅港南口を降りてすぐの高層ビルの27階にあって、講演会を随時開催している。また、休憩室からの眺望は素晴らしく、東京湾が一望できる。「京大の知」と題したシリーズは2度目の試みであり、本シリーズの直前には文学部の教員らが中心となり「王朝文学の世界」という講演会が行われた。

講演に際しては、本学と朝日新聞社のホームページで聴講者が募集されたほか、朝日新聞社の紙面でも広報および報告が行われた。毎回100名程度の聴講者があり、年齢層としては60代、職業は会社員または退職者が多く、男女比は2:1程度である。京都大学の出身者や、マスコミの記者、出版社の編集者の来聴も多く見受けられた。講演直後の質問やアンケートに見られる質問やコメントには、高度に知的なものが多かった。



会場の様子



白山先生

8) 全学共通科目（リレー講義）

① 森里海連環学－森里海のつながり－

里海生態保全学分野 教授 山下 洋

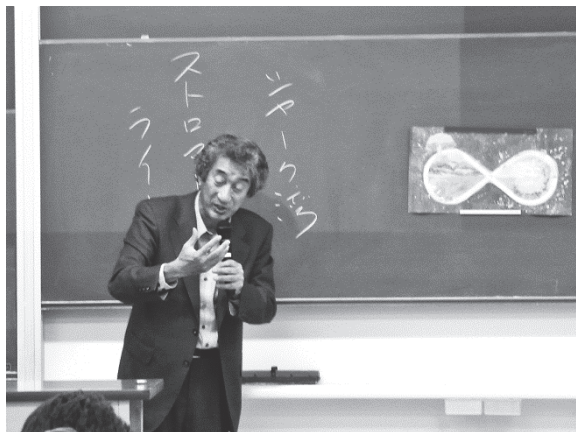
リレー講義形式により、平成 22 年度後期に吉田南総合館共北 27 号室（金曜日 4 限目 14:45～16:15）にて開講され、13 名の講師が 1～2 回の講義を行った。対象は、文系、理系を問わず 1 回生から 4 回生までとした。また、成績は出席および各回の講義の最後に実施する小テストの成績を総合して評価した。

学内の受講者数は 91 名であり、理科系学部 36 名、文科系学部は 55 名（総合人間学部を含む）であった。本科目はコンソーシアム京都提供科目であり、立命館大学、龍谷大学など 5 大学から 6 名の受講生があった。平成 20 年度以降、文科系の受講生の割合が全体の 60～70% と高い傾向が続いている。人数制限を行った影響や、カリキュラムにおける他の理系必修科目との競合なども考えられるが、本科目の趣旨からは文系・理系半々程度が望ましい。本科目では、環境経済学や社会学的視点の重要性を強調しているが、そのせいか、例年経済学部の受講生が多く、今年度も 23 名に及んだ。例年、工学部、理学部の受講生が少ないことから、シラバスにおいて理工学的視点を取り入れ、地球環境を考えるうえでの基礎的教養科学をわかりやすく伝える努力を行ったが、22 年度も両学部からは 2 名の受講しかなく、新たな方策の検討が必要である。学年分布では 1 回生が 80% を占め、将来の方向性に自由度があり知識欲の旺盛な学生が、この講義をきっかけとして環境や生態系を広い視野で見ることの重要性を認識することを期待している。

今年度から、C.W. ニコル氏に代わり本学生態学研究センターの谷内茂雄先生に講師陣に加わって頂いた。講義を提供くださった先生方に感謝申し上げます。

- | | |
|---------------------------|---------------------------------|
| (1) 森里海連環学 | — 山下 洋（フィールド研教授） |
| (2) 森と里山の生態 | — 柴田昌三（フィールド研教授） |
| (3) 森林の利用と保全 | — 長谷川尚史（フィールド研准教授） |
| (4) 森里海間の物質循環 ミネラル成分 | — 中野孝教（地球研教授） |
| (5) 物質循環 栄養塩 | — 徳地直子（フィールド研准教授） |
| (6) 森の恵みと海の恵み | — 畠山重篤（牡蠣の森を慕う会代表、フィールド研社会連携教授） |
| (7) 森里海間の物質循環 水と土砂 | — 中島 皇（フィールド研講師） |
| (8) 沿岸海洋域の生態 | — 白山義久（フィールド研教授） |
| (9) 流域環境における人間・自然相互作用系の研究 | — 吉岡崇仁（フィールド研教授） |
| (10) 河川生態系の構造と機能 | — 竹門康弘（防災研准教授） |
| (11) 琵琶湖の農業濁水と流域管理 | — 谷内茂雄（生態研准教授） |
| (12) 河口域の物質循環 栄養塩 | — 藤原建紀（農学研究科教授） |
| (13) 森里海の連環と経済 | — 佐藤真行（フィールド研准教授） |

フィールド研：京都大学フィールド科学教育研究センター、農学研究科：京都大学大学院農学研究科、防災研：京都大学防災研究所、生態研：京大大学生態学研究センター、地球研：総合地球環境学研究所



畠山重篤 社会連携教授



受講する学生

②沿岸環境保全学

海洋生物多様性保全学分野 教授 白山 義久

「沿岸環境保全学」は、リレー講義形式により、2010年10月1日から2011年1月28日まで12回、吉田南総合館共北27号室（金曜日3限目13:00～14:30）において開講された。対象は、文系、理系を問わず1回生以上のすべての学年とした。講師、内容は以下の通りである。

第1,2回（10月1,8日）イントロダクション 沿岸海洋学の基礎 — 向井 宏（フィールド研特任教授）

沿岸の海洋を理解するのに必要な基礎的事項の解説を行う。特に森林が沿岸環境に与える影響について詳説する。

第3,4回（10月15,22日）森里海の持続的な経済マネジメントシステム — 佐藤 真行（フィールド研特定准教授）

森里海の経済的な相互連関において、環境への影響を考慮すると、どのような経済システムが持続性確立の上で最適なのかを解説する。

第5,6回（10月29日,11月5日）森里と沿岸海洋との連環 — 柴田 昌三（フィールド研教授）

沿岸環境に重大な影響を与える森林および里と沿岸海洋との関連について解説する。

第7,8回（11月12,26日）河川管理と沿岸海洋との連環 — 萱場 祐一（独法）土木研究所自然共生研究センター長）

河川管理の理念・現状・課題などについて解説し、沿岸海洋との連環についても論ずる。

第9,10回 沿岸管理と法律（12月3,10日） — 磯崎 博司（上智大学・教授）

環境管理に不可欠な、行政の役割と関係の国内法令・国際法などについて解説する。

第11,12回 統合的沿岸環境管理論（1月21,28日） — 松田 治（広島大学・名誉教授）

沿岸環境を統合的に管理するために必要な論点を解説する。

受講者の人数は65名と昨年よりも減少した。内訳は、総合人間学部7名、文学部6名、教育学部1名、法学部5名、経済学部21名、理学部2名、医学部5名、工学部1名、農学部17名であった。受講者の学部の分布状況を見ると、理科系が32名（農学部、理学部、工学部、医学部、総合人間学部）、文科系は33名（経済学部、文学部、法学部、教育学部）であり、文科系学部生が昨年に比べて大幅に減少した。しかし依然として、経済学部の学生が学部別ではトップであり、講義がめざす「将来の経済界を支える学生に統合管理の基礎知識を修得させる」という目標は達成されつつあるといえるだろう。一方、理科系では農学部が圧倒的多数を占めていた。学年の分布を見ると、1回生が35名、2回生以上が30名となっており、例年に比べて1回生の割合が低かった。

登録した65名のうち、合格して単位を得たものは37名で合格率は56.9%と昨年より低かった。昨年同様毎回提出させているレポートを厳正に採点したことが、このような結果となった。また本講義は大学コンソーシアム京都に開放されている。今年度は3名が登録し、うち1名が単位を取得した。講義の最終回にアンケート形式で収集した結果をみると、「本講義により知的に刺激された」が70%、「内容をよく理解できた」が82%、「国土の環境管理に関する問題点が理解できた」がともに82%など、今回の講義に対する学生の評価は非常に高いものであった。



佐藤先生



磯崎先生

③森林学

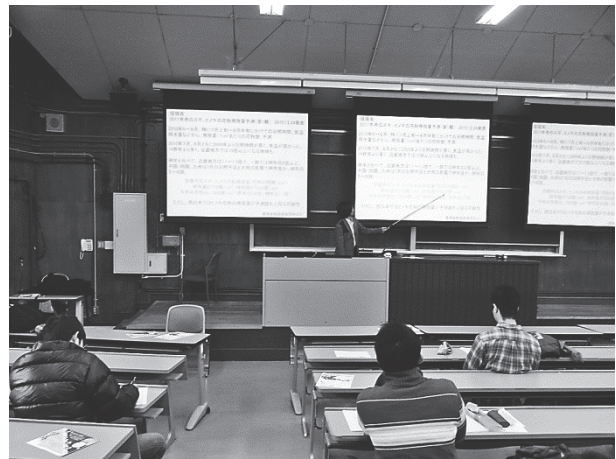
森林生態保全学分野 准教授 徳地 直子

近年の生活様式の変化や、地球規模での環境変動は、身近な近郊林だけでなく遠隔地にある森林生態系にも大きな変化をおよぼしている。この講義では、森林について、森林をとりまく社会情勢、林業の現状、森林の生態学的把握、森林の生み出す機能、森林をよりよく利用するための方策など、多方面から森林を解析し、総合的に森林に対する理解を深めることを目的としている。講義の形式は、森林を考える場合、自然科学の面のみならず、林業などを含んだ人間とのかかわりを考えることが欠かせないため、各分野の専門の教員によるリレー講義としている。

講義では、まず、安藤信准教授により日本の森林の現況やわが国の森林面積の4割を占める人工林とその施業について紹介された。次いで、柴田昌三教授により日本の里山の現状について講義があった。これらの森林が成立する過程や維持機構について、寄元道德助教が森林のダイナミズムと樹木の生態について紹介した。続いて、徳地直子が森林の生み出す森林生態系機能（2回）について述べ、中島皇講師により森林と水・土（2回）の関係について述べられた。さらに吉岡崇仁教授による森林を流域の中で位置付け、流域と環境に対する意識についての講義がなされた。今後の森林とのかかわりの上で、重要な森林政策について農学研究科国際農林経済学の川村誠准教授が講義され、坂野上なお助教により木材の消費・流通システムが考察された。また、森林資源の利用について長谷川尚史准教授（2回）による講義、中西麻美助教による森林樹木の一次生産についての講義があった。これらを通じ、森林の持続可能な利用についての総合的な講義が行われた。



川村先生



中西先生

④水圏生物学入門

海洋生物進化形態学分野 講師 宮崎 勝己

前年度に引き続き、全学共通科目として「水圏生物学入門」を、前期（木曜・4 限）に提供した。

前年度は創立記念日の関係で全 13 回だったが、今年度は 1 回多くなった。担当講師の顔ぶれは前年度と同じであり、前年度は一回で行った宮崎担当の講義と全体総括・アンケートを、別々の回で行う事で対応した。例年通り授業の最後に小レポートを課し、時間内に提出させ、それにより出席を確認し、出席数とレポートの評価を総合して成績を判定した。それぞれの講師の先生は、水圏すなわち水の世界と、そこに生息する様々な生き物たちの関係性について、それぞれの立場・視点から活き活きとした解説・論究を行い、出席率やレポートの内容からも、受講生の満足度の高さが伺えた。

前年度に引き続き定員 376 名の最大教室を確保したが、今回も初回のオリエンテーションに 450 名を越える学生が出席したため、やむなく無作為抽選により 413 名に受講制限した。前年度アンケートで苦情が多かった学生の私語については、オリエンテーションの際に、授業の進行及び聴講の妨げになる行為を厳に慎む旨、注意を喚起したが、今回に関しては一定の効果は得られたように感じる。

今年度の講義の順番・題名は以下の通り。（各講師の所属・役職はいずれも当時のもの）

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| (1) 水圏生物学入門オリエンテーション | － 宮崎 勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師） |
| (2) 渚の自然史 | － 加藤 真（人間・環境学研究科・教授） |
| (3) 潜水調査の可能性と限界 | － 益田 玲爾（フィールド研・舞鶴水産実験所・准教授） |
| (4) クラゲの生物学 | － 久保田 信（フィールド研・瀬戸臨海実験所・准教授） |
| (5) 水辺のつながりが育む生物多様性 | － 奥田 昇（生態学研究センター・准教授） |
| (6) 深海の生物学 | － 白山 義久（フィールド研・瀬戸臨海実験所・教授） |
| (7) 魚の初期生活史：小さな卵から大きな体へ | － 田川 正朋（フィールド研・河口域生態学分野・准教授） |
| (8) 海産生物の生き残り機構 | － 山下 洋（フィールド研・舞鶴水産実験所・教授） |
| (9) サンゴの生物学 | － 深見 裕伸（フィールド研・瀬戸臨海実験所・助教） |
| (10) 日本海と太平洋：生物の分布と環境 | － 上野 正博（フィールド研・舞鶴水産実験所・助教） |
| (11) フジツボ類における性表現の進化 | － 大和 茂之（フィールド研・瀬戸臨海実験所・助教） |
| (12) 水圏の植物学：磯焼けと藻場造成について | － 鯨坂 哲朗（農学研究科・助教） |
| (13) ウミグモの生物学 | － 宮崎 勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師） |
| (14) 全体総括・アンケート | － 宮崎 勝己（フィールド研・瀬戸臨海実験所・講師） |



講義風景（久保田先生）

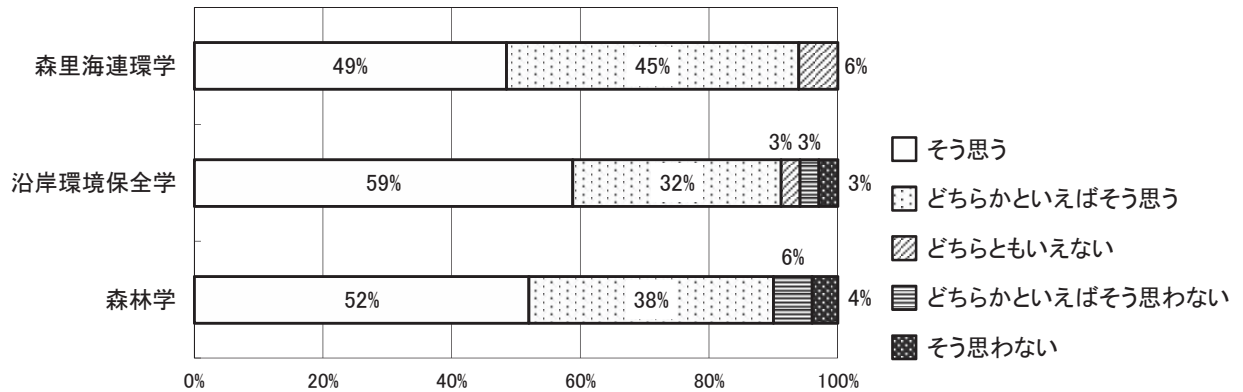


講義風景（山下先生）

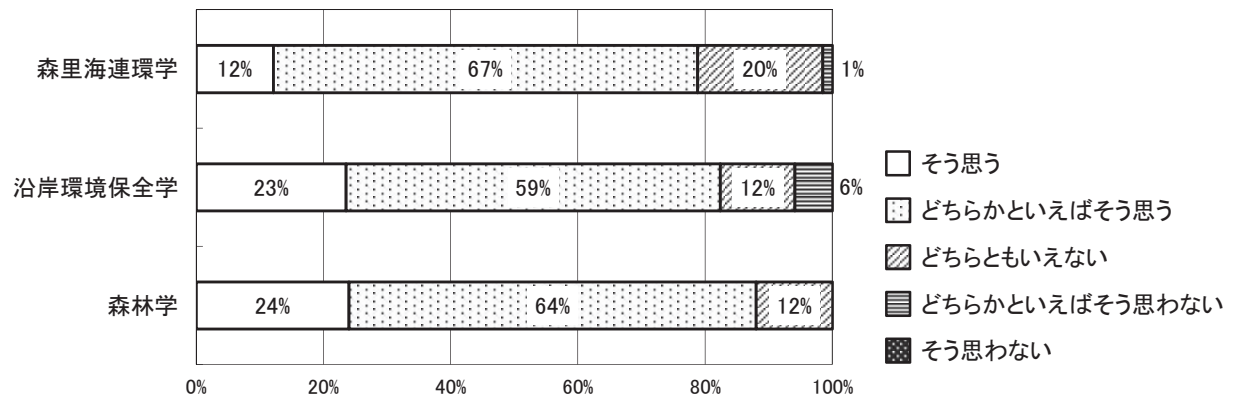
⑤全学共通科目に対するアンケート結果

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターのリレー講義を今後、より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。有効回答者数は、森里海連環学：66名、沿岸環境保全学：34名、森林学：50名であった。以下、設問ごとに、集計結果をグラフで表示した。

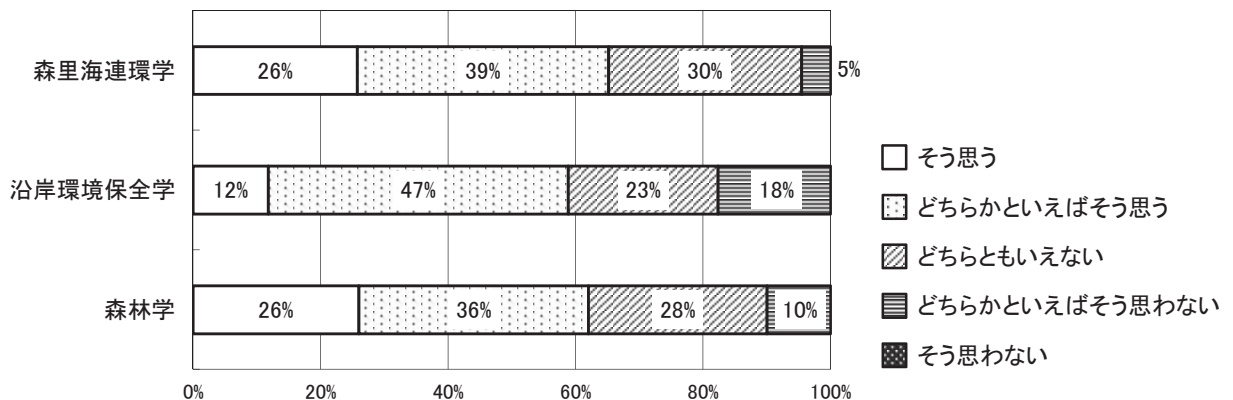
○この授業にはほとんど出席した



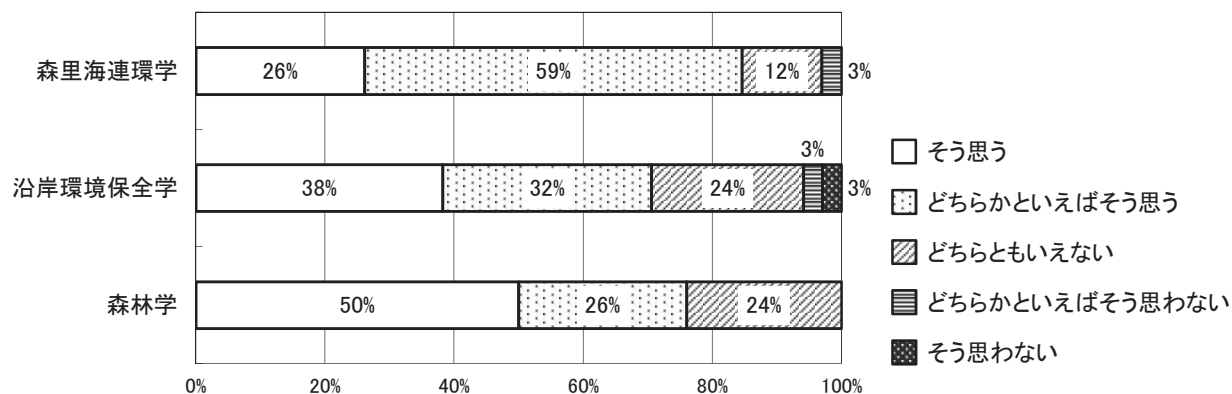
○この授業の内容はよく理解できた



○この授業は体系的であった



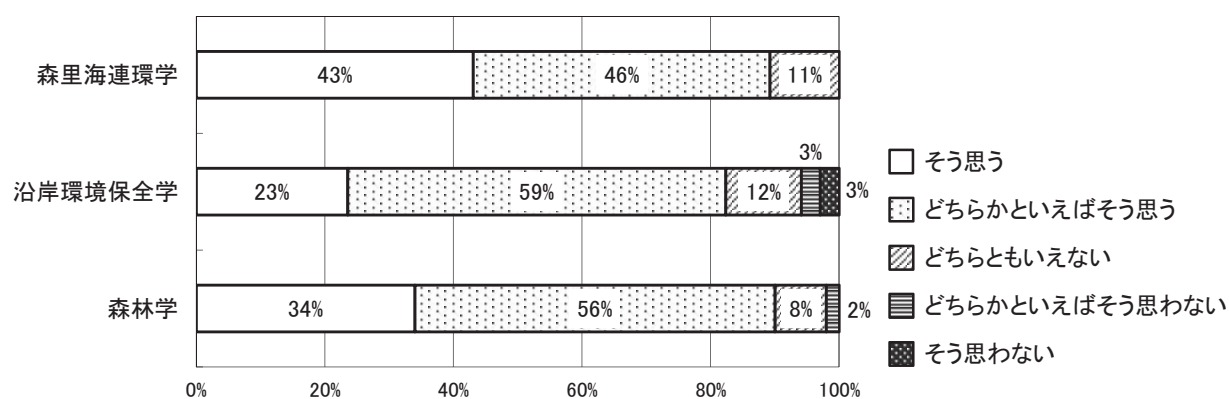
○この授業で知的に刺激された



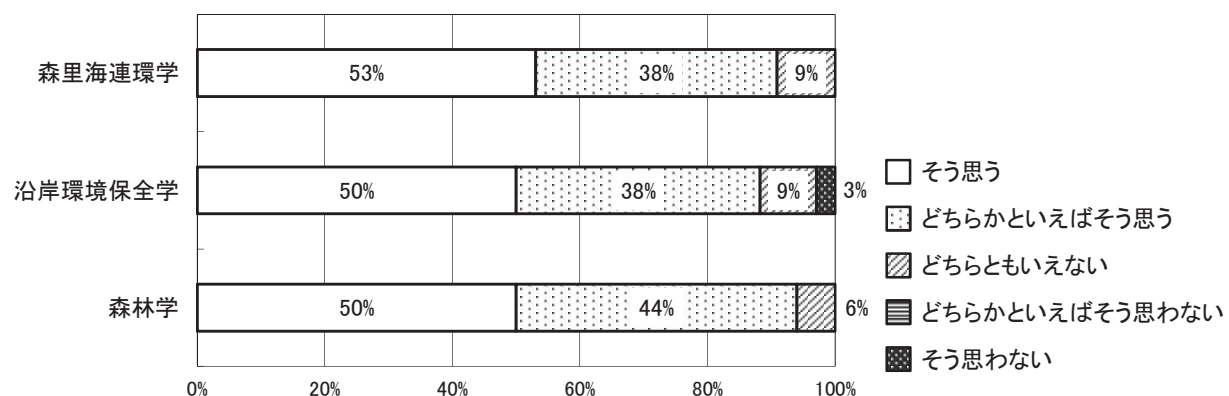
○この授業で森から海までのつながりの機構と問題点がよく理解できた(森里海連環学)

この授業で国土の環境管理に関する問題点がよく理解できた(沿岸環境保全学)

この授業で森林の機構と問題点がよく理解できた(森林学)



○この授業は自分の学習にとって有益であった



9) 森里海連環学実習

①森里海連環学実習A「芦生研究林ー由良川ー丹後海コース」

里海生態保全学分野 教授 山下 洋

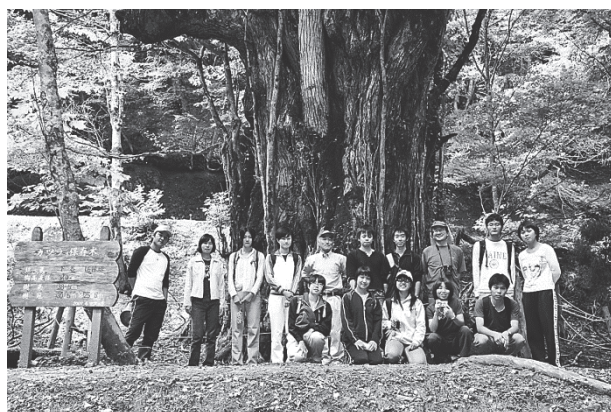
京都府の北部を流れる由良川は、京都大学芦生研究林を源流とし若狭湾西部の丹後海に注ぐ。本実習では、森林域、里域、農地、都市などの陸域の環境が、由良川の水質、生物多様性、沿岸域の生物環境にどのような影響を与えているかを分析し、川を通した森から海までを生態系の複合ユニットとして、科学的に捉える視点を育成することを目的としている。今年度は、芦生研究林における森林構造と生態系、鹿による食害の影響観察、由良川に沿って源流域から美山、和知、綾部、福知山を經由して河口域までの水質（水温、塩分、電気伝導度、溶存酸素、COD、硝酸態窒素、アンモニア態窒素、珪酸、懸濁物質）調査、魚類、水生昆虫などの水生生物の採集調査および土地利用様式の調査を行った。今年度の特徴は、新たに大野ダム湖内の水環境、水質、プランクトンを詳しく調査したことである。大野ダム湖内では、水深 5m域を中心に活発に植物プランクトン生産が行われ、和知など大野ダム下の中流域においても多くの植物プランクトンが採集された。大野ダムについては詳しい調査を行ったが、全体としては採集点数を減らして標本分析とデータ処理のための時間を増やすことにより、参加学生がじっくりとデータを解析しレポートを作成できるよう配慮した。陸域から河川への物質流入、源流域から河口までの水圏環境の変化と水生動物の群集構造や多様性との関係を分析し、森林管理や人間活動との関係も含めて考察した。例年いくつかの班に分けてデータ解析と考察を行っているが、今年度は 1 班が懸濁物質の流入の特徴、2 班が環境と魚類の食性、3 班が環境と水生昆虫および魚類の量的関係に関する報告を行い、それぞれにユニークな着眼点が披露された。実習に参加した学生は 10 名（農学部 5 名、工学部 2 名、理学部 1 名、経済学部 1 名、薬学部 1 名）であった。

日程と実習内容は以下の通りである。

- 8 月 8 日（日） 京大農学部発芦生研究林へ移動（出発前にガイダンス）、芦生研究林、由良川源流域調査、講義「実習の目的と内容」、「芦生研究林の概要」
- 8 月 9 日（月） 由良川上中流域調査（芦生～福知山）
- 8 月 10 日（火） 由良川支流調査（岡田川）、由良川河口調査（神崎）、標本分析及びデータ解析
- 8 月 11 日（水） 水質分析、魚類・水生昆虫同定、魚類胃内容物分析、データ解析、レポート作成
- 8 月 12 日（木） レポート作成と研究報告会、反省会の後京都大学農学部へ移動



スズキが捕れた（由良川河口付近）



下谷大カツラ（芦生研究林）

②森里海連環学実習B「紀伊半島の森と里と海」

里地生態保全学分野 准教授 梅本 信也

本実習は、紀伊半島南部に広がる古座川流域と串本湾岸域に展開する自然域と里域（里海、里地、里川、里池、里谷、里原、里山、里空）を対象に、フィールド調査の理論と実践的手法を体感させ、現地観察や聞き取り、各域から得られるサンプルのデータ分析に基づいて、地域連環の諸相について考究し、観光振興と環境保全を総合的に把握しながら、今後の地域適正化対策を検討する実習である。今回で 8 回目となった。2010 年度も引き続き、古座川最上流域に位置する北海道大学北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林と共催で、フィールド研・紀伊大島実験所を活動拠点とし、9 月 16 日（木）から 9 月 22 日（水）に開催された。北海道大学 1 回生 9 名（経済学部 1 名、工学部 1 名、農学部 4 名、水産学部 2 名、薬学部 1 名）、京都大学学生 6 名（工学部 1 名、農学部 3 名、理学部 2 名）が参加した。担当職員は北大側が、准教授 2 名、技術職員 1 名、TA1 名、京大フィールド研側が准教授 2 名、講師 1 名、助教 1 名であった。日程と実習内容は以下の通りである。

- 16 日（金） JR 紀勢線串本駅に 12 時 10 分に集合、北大マイクロバスに乗車、紀伊大島実験所に到着、12 時半から全体ガイダンスを行ない、「古座川合同調査報告集」や「地域フィールドガイド」など資料を配布、該当地域の諸相連環を考察する上で効果的で相互に関連する参考テーマを提供し、戦略的に課題に取り組むための仮の班分けを行った。
- 17 日（土） 里域と自然域各系およびその相互連環性を把握し易いテーマを作成、それぞれの担当教員と共に実習・現地調査に入った。一部は北大和歌山研究林に向かい、それぞれで宿泊しながら取り組んだテーマは「古座川流域の衣食住文化要素における連環」「水生昆虫類から見た連環」「エビ類から見た連環」「ニホンミツバチから見た連環とその地域性」「ツーリズムと地域連環」であった。
- 18 日（土）～20 日（月） テーマ別に調査、分析、検証、作戦会議、議論を行った。なお、19 日午後には、古座川本流中流域の奇岩名勝・一枚岩河川敷にて全班合同で中間報告会を行った。
- 21 日（火） 紀伊大島実験所で調査結果を分析し、仮報告書を作成、班ごとに調査内容の発表を行った。夕刻以降には森里海連環学的視座からの活発な質疑応答が展開された。北大側前任者の野田真人先生も参加された。
- 22 日（水） 清掃や報告書・アンケート用紙を提出、記念撮影し、無事に解散した。
- なお、A4 で約 150 ページにもおよぶ各班の正式報告書は「古座川合同調査報告集第 5 巻」に掲載された。



古座川中流域に位置する一枚岩河川敷公園で行われた中間報告会（2010. 9. 19）



古座川中流域七川ダム直下の真砂地区における聞き取り調査風景（2010. 9. 20）

③森里海連環学実習C 「別寒辺牛川流域における森里海連環学実習」

森林資源管理学分野 教授 吉岡 崇仁

平成 22 年度の森里海連環学実習 C は、京都大学フィールド科学教育研究センターの北海道研究林標茶区と北海道大学北方生物圏フィールド科学センターの厚岸臨海実験所を拠点として、9 月 6 日から 12 日の日程で実施した。

- 9 月 6 日 実習生集合、ガイダンス、安全教育、講義
- 9 月 7 日 厚岸湖および厚岸湾の水質・底質・水生生物調査
- 9 月 8 日 別寒辺牛川の水質と水生生物調査、講義、水質分析実習
- 9 月 9 日 ガイダンス、安全教育、パイロットフォレスト視察、牧草地土壌調査、水源域調査、樹木識別
- 9 月 10 日 天然林土壌調査、樹木同定、講義、グループ発表準備
- 9 月 11 日 グループ発表、レポート作成
- 9 月 12 日 レポートとアンケートの作成・提出、解散

受講した実習生は、直前のキャンセルが続いたため例年より少なく、京都大学から 8 名、北海道大学から 6 名の計 14 名であった。教職員・TA の数は、京大・北大合わせると 20 数名と実習生よりも多く、とくに多くの技術職員の協力によって、きめの細かい実習内容にすることができた。

今年は受講生が 14 名と少なかったため、班構成を「森」「川」「海」の 3 班（4 ないし 5 名）とした。また、厚岸湖の潮汐の関係で、実習の開始を厚岸臨海実験所での厚岸湖と厚岸湾の実習からはじめ、別寒辺牛川から標茶研究林の森に遡る形で実習を実施した。厚岸湾での実習では、大黒島のゴマフアザラシのコロニーを間近に観察することができた。厚岸湾、厚岸湖、別寒辺牛川の実習内容はほぼ昨年通りであった。水生生物相が、海、湖、河川でどのように異なり、また、動物の餌資源が、海、湖、川起源から陸起源に移り変わる様子を消化管内容物の調査から把握した。標茶研究林の天然性林内での実習に関しては、毎木調査のプロット規模を 25×25m から 10×10m へと縮小し、代わりに天然性林内の作業道沿いでの樹木同定実習を加えた。これは、毎木調査にかかる時間を短縮し、樹木を同定する実習を充実させるための変更であった。水質調査では、デジタル・バックテスト・マルチ（携帯型分光計による定量分析）と携帯型イオンクロマトグラフィーを併用して分析の原理と実際の試料測定を実習した。水質分析では、事前に採取していた研究林周辺及び別寒辺牛川流域内の河川水をバックテストおよびイオンクロマトグラフによる水質調査に供し、実習生に水質分析を行わせた。上流から下流に向けて、人間活動（酪農など）や湿原の影響によると思われる水質の変化があり、森里海の連環を考察するのに役立つ多くのデータが得られた。

「森」「川」「海」の各班それぞれに異なる場の視点から各自が実習で得たデータを解析し、森里海の連環について考察しグループ発表を行った。各班独自の考察がなされており、たいへん興味深い発表であったが、水質分析の結果や樹木同定実習の結果を盛り込んだ考察はむずかしかったようである。

別寒辺牛湿原の水鳥観察館見学やパイロットフォレストのビデオ鑑賞・見学、標茶研究林の人工林間伐区を見学することによって、自然と人間のかかわりの一端に触れることができたものと思う。また、パイロットフォレスト事業に関連して林業に関する講義を加えた。しかしながら、さらに「里」に関する教育内容を充実させる必要があると思われる。



標茶区での樹木同定実習

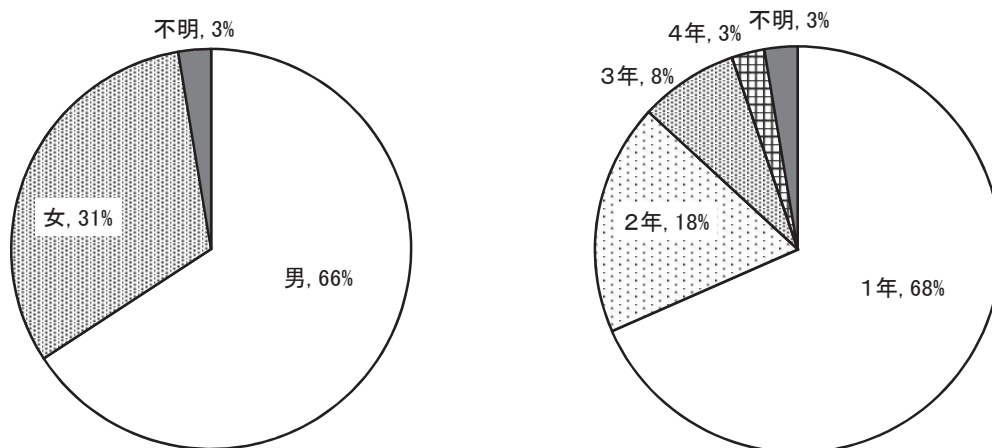


別寒辺牛川での水生生物採取

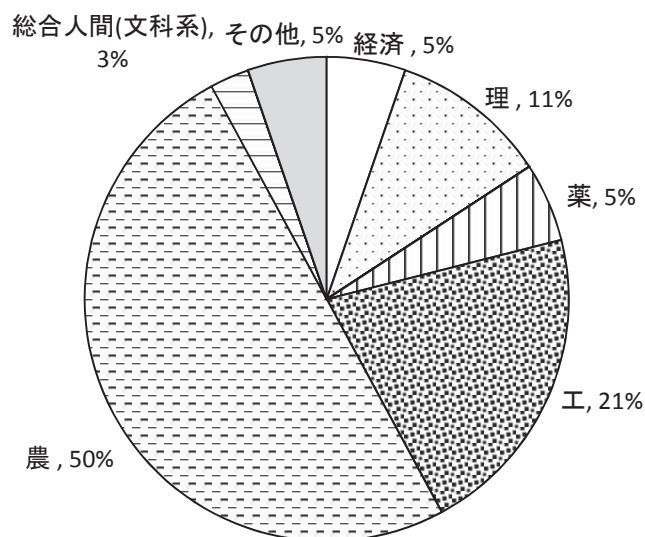
④森里海連環学実習（ABC）に関するアンケート

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターの森里海連環学実習を今後より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは10設問からなっており、有効回答者数は38名（うち北大生は15名）であった。以下、設問ごとに、集計結果をグラフで表示した。なお、集計には有効回答のみを用いた。

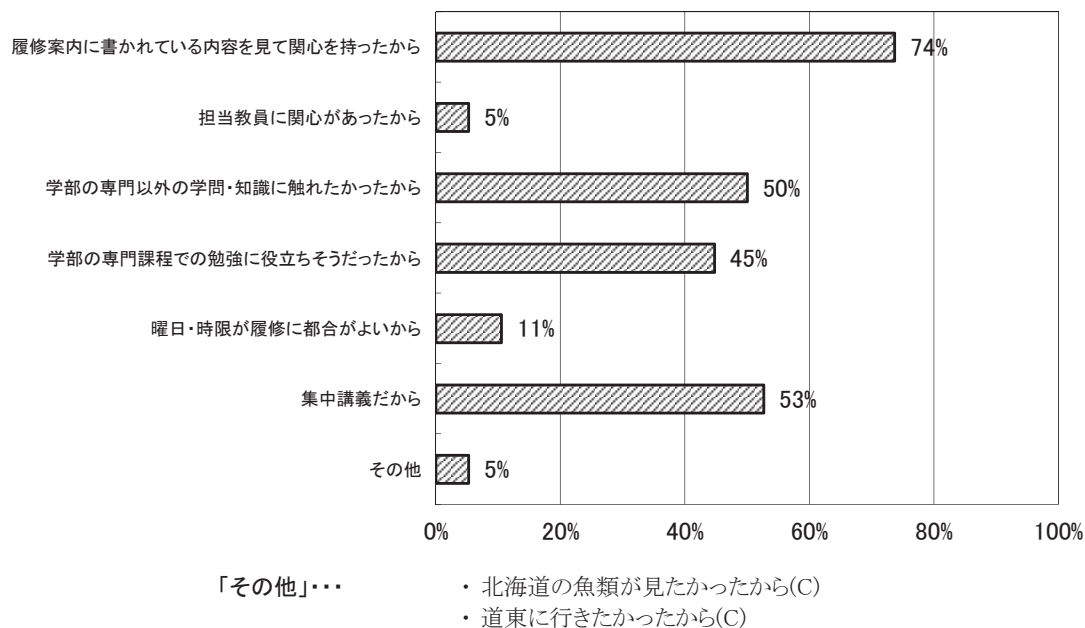
Q1 あなたの性別と学年を答えて下さい。



Q2 あなたの所属学部を答えて下さい。

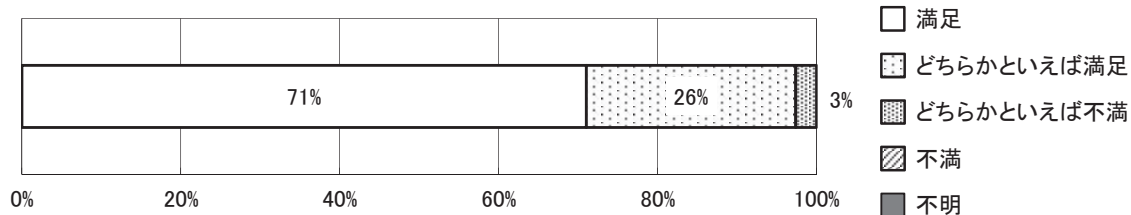


Q3 この実習を受講することにした理由を答えて下さい。(複数回答可)



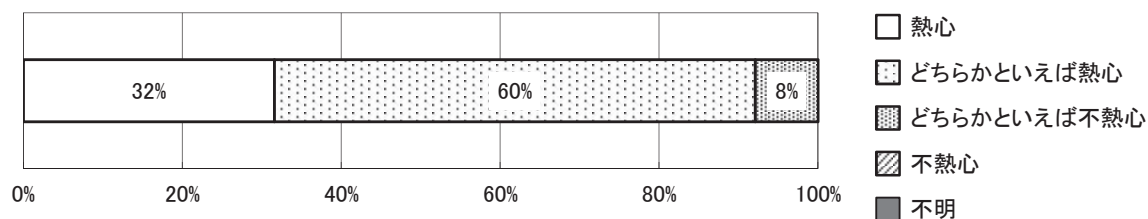
Q4 この実習を受講しての感想をうかがいます。

(1) この実習の授業内容に満足していますか。

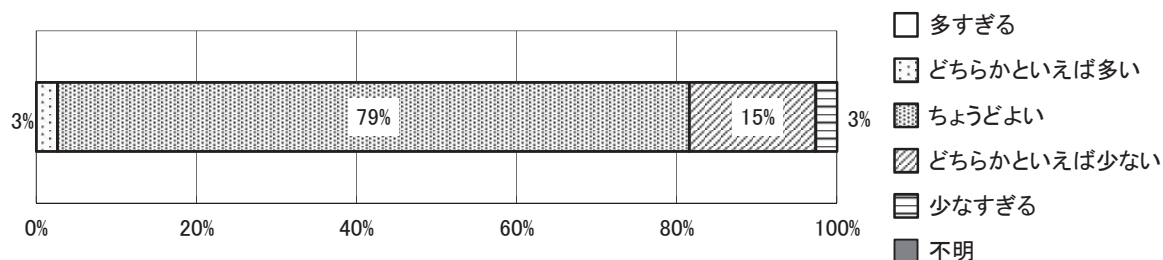


「どちらかといえば不満」を選んだ理由 …… 班が一人だった(B)

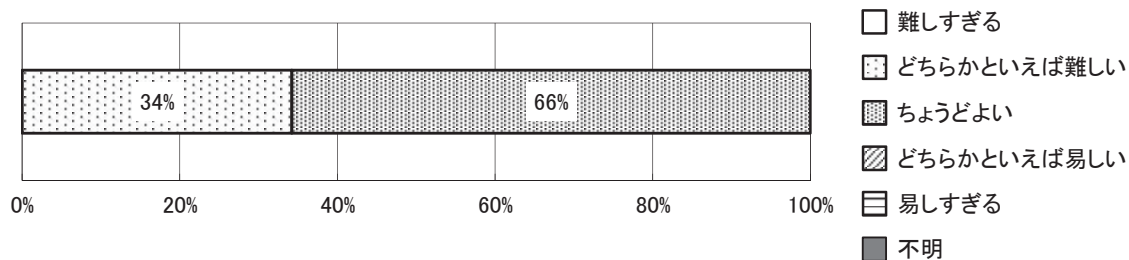
(2) あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3) この実習の学生数についてはどう思いますか。

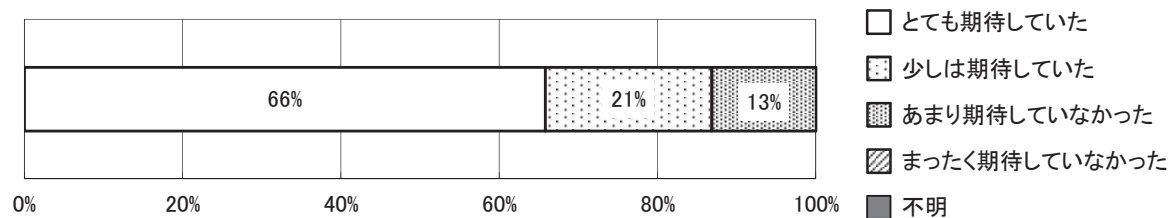


(4) 授業の難易度はどうでしたか。

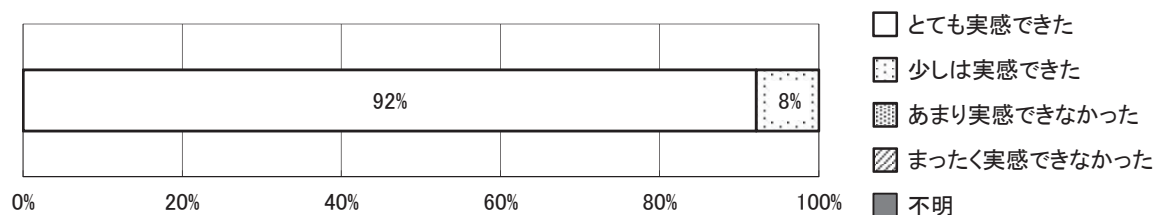


Q5 森里海連環学実習の授業形式についてうかがいます。

(1) この実習を受講する前、講義などの授業よりも多くのものが得られることを期待していましたか。

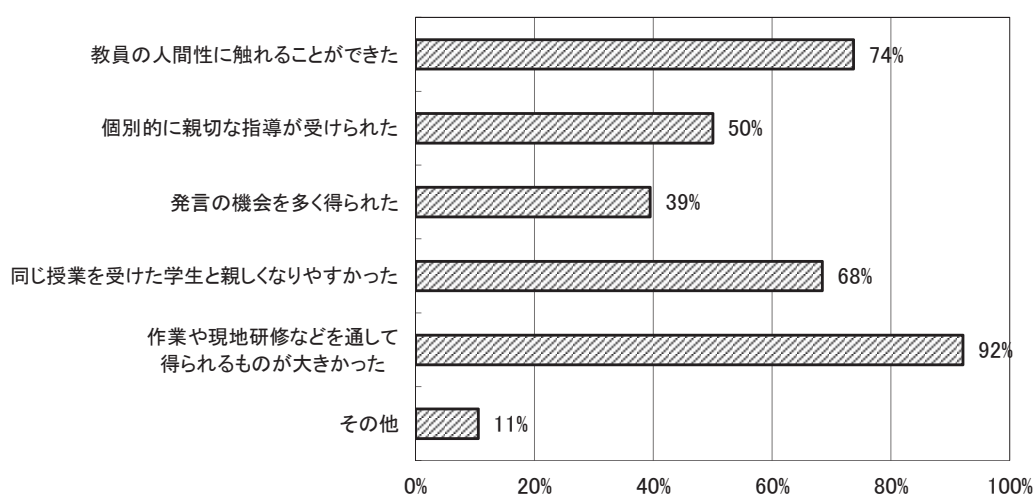


(2) では、実際に受講してみて、この実習でしか得られないものがあると実感できましたか。



(3) 前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。

この実習でどのような点がよかったと思いますか。(複数回答可)

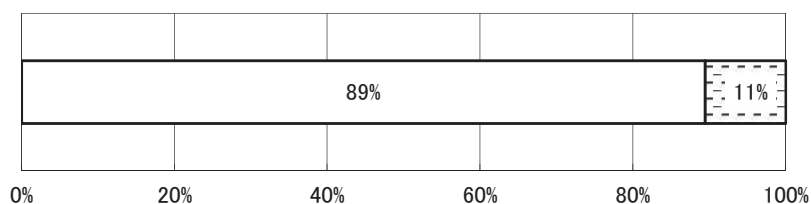


「その他」・・・

- ・フィールドで得た情報を基にして、普段は考えてない事を考えることができた(A)
- ・仮説を立て、調査を通じて検証することができた(B)
- ・魚を獲ることができた(C)
- ・焼カキを食べれた。温泉に入れた(C)

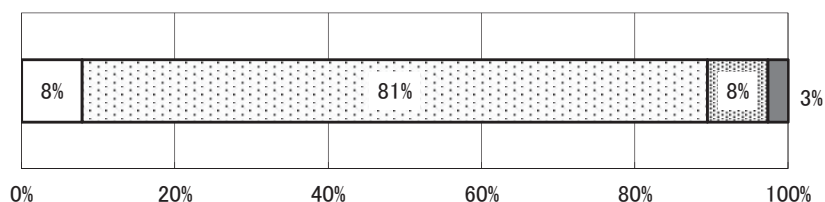
Q6 森里海連環学実習の実施方法等についてのご意見をうかがいます。

(1) 今回の実習の開講時期についてはどう思いますか。



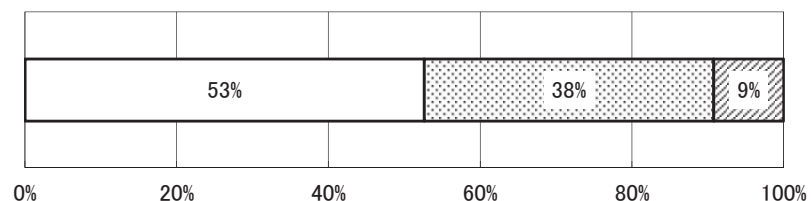
- ☐ 現行のままでよい
- ☒ 他の季節の方がよい
- ☐ 通年の方がよい
- ☐ 特に希望はない
- ☐ その他
- ☐ 不明

(2) この実習の実施期間についてどう思われますか。



- ☐ 長すぎた
- ☒ 適当であった
- ☐ 短かった
- ☐ 不明

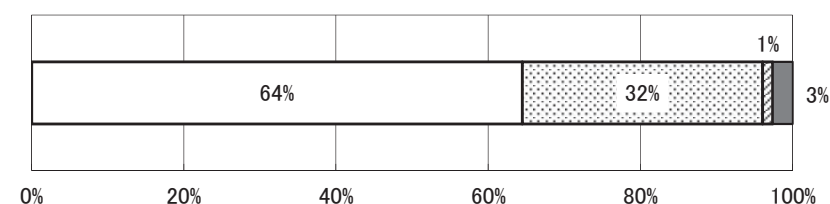
(3) この実習の実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。



- ☐ とても充実していた
- ☒ 少しは充実していた
- ☐ あまり充実していない
- ☐ まったく充実していない
- ☐ 不明

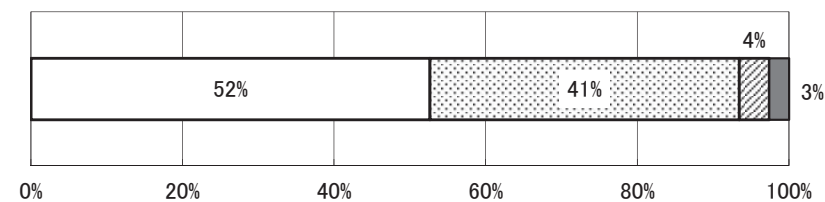
(4) この実習の宿泊についてうかがいます。

・ 共同の宿泊生活は



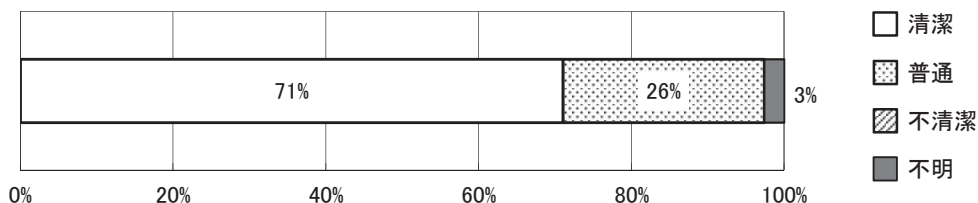
- ☐ 快適
- ☒ 普通
- ☐ 不快
- ☐ 不明

・ 宿泊施設の整備は

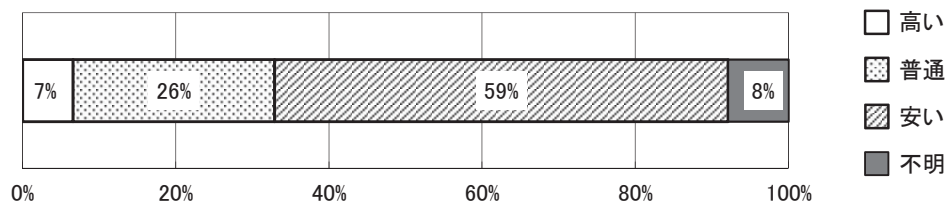


- ☐ よい
- ☒ 普通
- ☐ 悪い
- ☐ 不明

・ 宿泊施設の寝具は



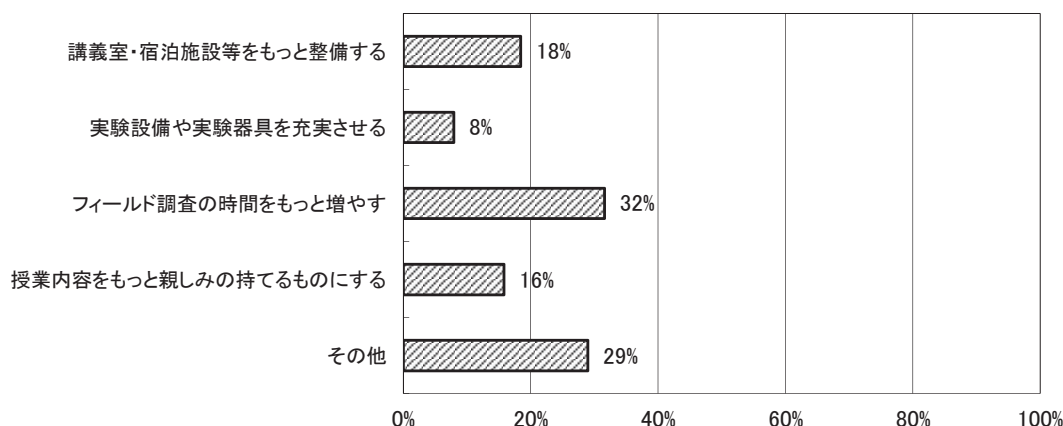
・ 宿泊施設の経費は



(5) 宿泊施設や食事について、何かご意見やご要望があれば自由に記入して下さい。

- 〈A〉 ・ 次の日のお昼のお茶を用意して無い時は困ったので、用意願います。おにぎりの提供はとても良心的に思った。
- ・ 舞鶴の宿泊施設の階段は、スーツケースを持って昇り降りするのが難しい。スーツケースじゃない方がいいと事前に連絡して欲しかった。
 - ・ 不満点はない。
 - ・ 快適だった。
 - ・ 舞鶴のおにぎりがありがたかった。
 - ・ 舞鶴はお魚がおいしかった。芦生はトイレのカギが心もとなかった。
- 〈B〉 ・ 大きな桶があると、手洗いの洗濯がやりやすい。
- ・ 寝室の網戸を直して欲しい。
 - ・ 洗面所に手を洗うための石けんが欲しい。
 - ・ 北大と紀伊大島の整備の差が大きい。
 - ・ 水洗トイレの方が良かった。
- 〈C〉 ・ 何も言う事がないくらい最高だった。
- ・ 宿泊施設がきれい。食事が美味しい。
 - ・ 標茶の朝の準備が寝不足の身に少しきつかった。
 - ・ 標茶の朝ごはんの用意が大変だった。もっと簡素で良いので簡単に用意できると良い。
 - ・ ベットのハシゴがきしんでうるさいので何とかして欲しい。
 - ・ 風呂をもっと整備して欲しい。
 - ・ 両施設とも風呂設備が弱かった。

Q7 今後、実習をさらに充実させるためには、どのようにすれば良いと思いますか。(複数回答可)



「その他」・・・

- ・インターネットがDELLしか使えなかったのは不便だった。携帯電話の電波条件も改善すると良い。あとCODが正確に測れると良かった(A)
- ・パソコンの使い方が難しかった。これにものすごく時間がかかった(Kingsoft, OpenOffice など)(A)
- ・もう少し実習期間を長くする(A)
- ・自由な散策時間を増やして頂けると嬉しい。もっとゆっくり芦生の森(林)を見て歩きたかった(A)
- ・これくらいがちょうど良い(B)
- ・一人だけの班があるのが大変そうな気がした。私は班員の意見から色々学べたので、少なくとも2人になるように振り分けすると良いと思う(B)
- ・データをきちんと解析・分析する。ネット環境や文献など、先行の研究を探せるようにする(B)
- ・今のままで良いと思う(C)
- ・レポートと発表のどちらかだけに(C)
- ・もう少し時間に余裕がほしい(C)

Q8 森と海のように全く異なった生態系が本来は不可分につながっていることや、そのことが地球環境 問題に深く関わることについて、何か得るものがありましたか。自由に記入して下さい。

- (A) ・ 川は上流の森によって水質が異なることや、水田などの里による作用を受けながら海に流れていく為に、沿岸部では、川の水系の環境によって生態系も影響を受けているということを、一つの川に沿って見ることで実感できた。今回は、生物多様性を今後も維持していく為にどの様に人間が自然に関与していけばいいかという事について考えるきっかけになった。
- ・ 海に注ぐ水は森から流れてきているものだという事を、今回由良川を上流から下流に見ていく事で実感できました。
- ・ 森海川は連環しているとは知っていたが、実際に一本の川を上流→下流にかけて調査したのは初めてだった。私は特に魚と昆虫の捕食関係をデータからまとめたのですが、よく生息する昆虫はよく捕食されている事がわかった。また、そうした状況下でいかに捕食されず存続するか、戦略的に生息する工夫がこらされており、興味深かった。その関係性が人間の手によって壊されると再び形成されるのは大変。
- ・ 川の場所によって生物が違ったり、森から川が流れ、海までつながる過程を見ていけたのがよかった。それと、森林の面積の違いや、植物の違いが関わって、色々な環境が生まれることと、それを調査することの難しさを知った。何より、大学院生や教授の方々の考え方や色々な物の見方を学べて良かったと思います。
- ・ 森と川と海を、やはり普段は全くの別物として認識してしまうが、この実習で、お互いが密接に関係し合っていることが実感できた。川の汚さの測り方に興味をもった。
- ・ Q7と関係していますが、もう少し判り易く詳細な地図が見られたら良かったと思います。それぞれの支流のデータは支流の終わりに触れただけなのが残念だった。
- ・ 由良川河口において、洪水の被害の大きさが衝撃的で、ダムを造ることも仕方がないと思ったが、ダムによる環境汚染の問題も考えていかなければならないと思った。
- ・ 同じ由良川系でも、場所によって地形や生態系が様々で興味深かった。酸性雨や人間活動の影響が調査結果に表れていて、私たちが環境に影響を与えている事を実感できた。
- ・ 一つの川を源流近くから河口まで、水質や生物相を調査することで、色々な表情を見られた。5日間の実習なので時期による違いは分からなかったが、場所による変化は実感できた。
- ・ ひとつの得られた結果の原因を考える場合でも、様々な周辺の事情を理解していないと真の原因に近づいていけないのだろうという事を実感し、ワクワクしました。

- (B) ・ 自分の班を含め、各班の発表を聞いて、一見あまり関係のないようなものでも広く見てみると、意外なところに密接な関係があるということが分かった。
- ・ エビの遡上を通して、川と海が切り離された環境ではないということを強く実感しました。また他の班の発表を通して、古座川地区の文化や生活なども知ることができました。
 - ・ 人間の生活もつながっている。
 - ・ 川の上流と河口で同じ種類のエビがとれた時に森と海をつながりを実感した。
 - ・ 自分のやったことがそのままこのテーマに合致するかと言えば、それは違うと思う。しかし、このテーマを基に考えていたので、良い足がかりにはなった気がする。
 - ・ 森と里のつながりを実感しました。平井の里はゆず畑と蜂と人が共存しており、うまく自然を利用させてもらって人が生きていたと思います。特にゴーラ療法は蜂の気が向けば何年でも留まり、気に入らないと3日経たずに巣を出て行ってしまふというとても自然な形で蜂を飼っています。先生がおっしゃっていた「天然の森が増えればそれだけ野生動物も増える。動物被害も増える。だからスギ林はそれを調節していることにもなる。」という考えに納得し、今後30～40年かけて人口が徐々に減り、天然の森が増え、動物が増えるであろう。日本の暮らしはどのようにになっていくのか？また私たちはどう行動していくのか、考えていきたいと思うきっかけになりました。
 - ・ 今回は里の暮らしと森の生態系のつながりについて学ぶことができました。ゴーラという産業とまでは言えないような小さな文化の中に、人と森の関わり方が端的に見えてくるようでおもしろかったです。林業とゴーラのつながりに特に興味を持ちました。山の仕事について考えるときは、それに付随する様々なことを考慮するべきだと思いました。
 - ・ 生態系同士のつながりで新しく知ることはほとんどなかった。
 - ・ 人と森とのつながりを実感できた。
 - ・ 人間が生態系に与えている影響は計り知れないものだったと思った。
 - ・ 単純にある1つの自然生態系と1つの自然生態系がつながっているだけでなく、人の営みがそこに介在して新たなつながりが生まれていることを実感しました。1つの川の下流から上流でも、文化的差異が明らかに存在することが分かりました。そして、差異はあってもやはり川によってつながっていて、互いに影響し合っていると思いました。
 - ・ 一つの破壊が地域全体に自然を通して広がって、10年後20年後まで影響を及ぼすと実感した。
- (C) ・ 森と海のつながりについてこれまで深く考えたことはなく、とても良い経験になりました。
- ・ 今まででは森と海などがつながっていることは、漠然と考えていたが、実際に調査して分析することで理解が深められたように思う。
 - ・ 自然を相手にして取るデータの解析が難しいことをとても実感した。
 - ・ 生態系という大きなシステムにおける人間のポジショニングに私は興味を持っていますが、人という自然と協和しているとは言えない生物をも生態系は包み込んでいることに驚きつつ、自然にはかなわない人間の無力さを感じました。
 - ・ 森川海どれも大事にしないといけないと思った。
 - ・ 森里海の連環システムを様々な視点から見ることができ、つながりを少なからず理解できた。
 - ・ 普段連環して考えたこともない森川里海に深い関係が明確にあったことは驚いた。「全体を考える」ことを他の場でも生かしたい。

Q9 今回受講された実習について、何かご意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

- (A) ・ 実習の結果やデータが出てからの話合いの時間が短いので、もう少し時間が欲しかった。また、2日目に舞鶴に来た日に講義があっても良いと思った。その代り、夕方に一時間ほど休憩時間があればもっと海と接する機会があつて、もっと楽しめたと思う。
- ・ 森林科学科であることもあって、森林の中を歩く時間がもう少し欲しかったと思います。もちろん、今回の実習の目的が由良川流域の水質調査ということなので、仕方のない部分もありますが・・・普段はなかなか出来ない経験が出来たのは、やはり大学が芦生研究林や舞鶴水産実験所を持っているおかげだと思います。今後も利用する機会があれば、と思います。
 - ・ とても楽しかったです。まとめの時間が少ないように思ったが、自分で最初に方向性を決めておくべきでもあったなと思います。また、データ収集にもっと食欲になるべきだったと思いました。
 - ・ たくさんの生物(魚・虫)と触れられて楽しかった。川岸で陸生の生物(蝶やトンボ(成虫)など)をもっと見るのも楽しそう。虫の同定や魚の胃内容物の観察など普段出来ない事が出来て、すごく充実した毎日でした。
 - ・ すごく面白くて楽しかった。虫とか魚に詳しくなかったので、調査してとても新鮮だった。
 - ・ 貴重な経験が出来たと思う。発表準備が思ってた以上にきつかった。
 - ・ 前回よりも衛生面が改善されていて過ごしやすかった。教授やTAの方々が親身に指導してくれたので良かった。
 - ・ 同じ調査を別の季節でもやってみたい。
 - ・ 元々の魚や植物の知識の有無で面白さが異なってくるのだらうと思い、そのような知識の少ない自分が残念だった。

- 〈B〉・今回は普段の講義ではできないフィールド調査や、皆でご飯を作ったり寝たりといったとても貴重な経験ができました。今後もこの集中講義を続けて行って欲しいです。
- ・他大学の人と交流したりフィールド調査をしたりと、1年生のうちになかなか経験できないようなことを経験できたのはとても良かったと思います。
 - ・体験しなければ分からない多くのことが得られた。具体的には、知らない人に話を聞く技。
 - ・一週間前もしくは1日前に「やりますよ。忘れてませんか？」とメールが来れば、電車の中であんなに不安にならなくて済みます。何の事前連絡もないと(数ヶ月前に一度ありましたが)不安になります。
 - ・「森里海」というテーマが良い足がかりになったとはいえ、紀伊大島の周囲は研究したらおもしろそうなものがたくさんあるように思う。それらを使って何かするのは良いと思う。今回の実習はやっていることも人数も本当にバラバラだったが、これは今まで体験したことのない形で、他班との比較などとても興味深いおもしろさがあった。
 - ・私は6人班だったので、多くの仲間に刺激され、違う学部ならではの物の見方や北大生と京大生の考え方の違いを感じられました。1人の班だと大変そうで、他の意見が得られないため、2人以上にした方が良いと思います。また、郷土料理を食べてみたかったです。
 - ・1週間という短さの中で、研究の一連の流れを体験でき充実していました。テーマに関すること以外でも様々な生態系
 - ・WordもExcelもPower Pointも使わないのは、正直ツライものがある。
 - ・北大と紀伊大島との伝達の改善(情報が伝わってこず、日程も不明のところがあった)。
 - ・楽しかった。
 - ・非常に満足でした。
 - ・来年以降も合同で実施して欲しい。
- 〈C〉・京都からはるばるやってきた意識が高い受講者。色々な事を教えてくれたTAさんや先生方、実習は内容が濃くてあっという間でしたが、すごく刺激的で楽しかったです。本当にありがとうございました。
- ・夜の実習はしんどかった。早く休みたかった。
 - ・川での採取の時間をもっと長くして欲しい。
 - ・講義だけでは経験することの出来ないことを体で感じる事ができて良かった。
 - ・違う分野の勉強が出来て楽しかった。
 - ・レポート作りの時間を「後半に多く」ではなく、「毎日少しずつ」にする方が良いと思う。
 - ・少し予定を詰め込みすぎだったかもしれない。

Q10 当センターのホームページにアクセスしたことがありますか。内容についてどう思われますか。

- ・分野ごとに分かれていて判りやすいと思う。
- ・適切に書かれていて判りやすかった。
- ・あまりじっくり見ていないので、またじっくり見ます。
- ・教授の方々のプロフィールが面白かった。
- ・紀伊大島付近について書かれた部分しか見ていないが、詳細がしっかり分かる内容で良かったと思う。デザインもきれいだった。個人的にはもう少し写真が欲しかった。
- ・短くまとまっていて良い。センダンの木の絵本のPDFに表紙が付いていなくて読みづらかった。
- ・実習の過去のデータを見られなかった(発見できなかった)ので、是非判りやすくしていただきたい。
- ・あまり情報がない。
- ・実習についての情報更新がやや遅く思った。
- ・判りにくい。もっと実習についての情報を書いておいて欲しかった。

10) 少人数セミナー

①お魚好きのための魚類研究入門

河口域生態学分野 准教授 田川 正朋

助教 中山 耕至

少人数セミナー「お魚好きのための魚類研究入門」では、京都大学農学部において8回の講義と実習を行い、フィールド研舞鶴水産実験所において2泊3日のフィールド実習を実施した。実際に手を動かしながら、かつ議論しながら進めるため募集人数を6名に制限した。抽選により男子学生6名（文3，理1，法1，経1）が受講生となった。京都での講義は全員が皆勤であったが、舞鶴での実習は体調をくずした学生が1名いたため、5名の参加であった。

京都での講義と実習（月曜4限）

第1・2回目：魚について、考えられる限り多様な「問い」をブレインストーミング様式で発してもらった。討論を行いながらこれらを魚類研究の学問分野に割り振りを行い、学問体系の雰囲気の把握を行った。

第3・4回目：小型魚類（メダカ）を用いて、実際に受精卵が卵割する瞬間を各自に実体顕微鏡下で見てもらった。また、各自が受精卵を自宅に持ち帰り、河川や池の水で発生する経過を観察した。翌々週に全員のデータを集計し、データの分析法や結果の考え方について討論をおこなった。

第5・6・7回目：各自が釣ってきた魚、あるいはこちらで準備した魚を材料とした。検索表を用いた種同定の方法、外部形態の詳しい観察法のトレーニングを行った。さらに、解剖を行い、各種臓器や胃内容物の観察も試みた。これらのデータとネットや文献による情報に基づき、その魚の「生き様」を推測する作業を各自に行ってもらった。データを教官がパワーポイントのファイルにまとめ、発表会形式で討論を行った。

第8回目：舞鶴での実習に備えてのガイダンス、魚の飼育に関する生理学的な基礎知識、およびピーターセン法による資源量調査の基礎知識などを講義した。

舞鶴での実習（8月9日から8月11日）

9日：12時10分に栗田に到着し、宮津エネルギー研究所水族館（丹後魚っ知館）を訪問した。普段は見ることができない水槽裏側の設備や繁殖水槽等を、飼育担当の吉田氏から詳しい説明を受けながら見学した。3時半頃に舞鶴水産実験所に到着し、飼育設備および標本館の見学を行った。

10日：舞鶴の院生に手伝ってもらい、由良川河口近辺（神崎）にてケタ網採集を行った。採れた魚類のうち、マハゼおよびヒメハゼのヒレを切除して放流し、1時間後に再捕を試みた。採れた両魚種の全個体数およびヒレ切除個体数を計数した。安全のため全員にウェットスーツを着用してもらったが、一方で暑さのため体力を消耗した。3時前に実験所にもどり、採集用具の洗浄等の後始末やデータの集計等を行った。

11日：上野先生と佐藤船長のお世話になり、緑洋丸にて由良浜沖でケタ網採集を行った。5m、10m、30mの3深度で採集される生物相の差異を観察した。また、普段実物を目にする機会のない魚群探知機や海洋観測機器の説明を受けた。昼食後に昨日行った資源量調査の計算と討論、およびこのゼミ全体のまとめなどの最終ミーティングを行い2時過ぎに実験所をあとにした。



由良川河口近辺での魚類資源量調査



緑洋丸による由良浜沖ペントス採集

②原生的な森林の働き

森林環境情報学分野 講師 中島 皇

今年度は5月、6月に1回ずつ北部キャンパスで1コマセミナー、6/20(日)には上賀茂試験地で1 day セミナー、7月に芦生研究林で後述の合宿形式セミナー(2泊3日)を行った。参加者は5名(男3, 女2)とポケゼミとしては理想的な人数であった。学部別は(理1, 工1, 農3), 出身地は宮崎市, 福山市, 豊中市, 豊橋市, 伊那市と九州地方から中部地方までの違う環境で育った仲間が集まった。フレッシュな新入生諸君がフィールド(森林)に出て, 自ら体験し, 考え, 自然と人間の関わり方に興味を持つ契機とすることがこのセミナーの目的である。

芦生での集中セミナーは, 7/3(土)の広河原バス停集合で始まった。バスを降りるといきなり傘がいる雨に迎えられての実習開始である。芦生に移動して昼食をとり, 身支度を整えて雨の中を由良川本流沿いのトロッコ道をのんびり歩く。芦生の標高が低い谷沿いの自然を観察しながら行くが, 由良川源流最後の民家にある田んぼのシカネットに並んでいるアマガエルには大はしゃぎであった。これは雨の御陰である。夕食は鍋。夏でも夜になれば鍋ができるのが, 芦生の良いところ。夕食後は芦生研究林が抱えている問題点を話し合った。

7/4(日): 天気はやはり雨模様, しかし傘まではいらないか。昼食のにぎりめしを作って出発した。幽仙谷の大面积・長期プロットと暖温帯と冷温帯の移行帯についての説明を受け, ヒカゲノカズラなどの珍しい植物や林道の水たまりにあるモリアオガエルの卵に触れながら, 標高差で400m程上がっていく。杉尾峠下からブナの林に入る。尾根筋では霧がまいてなかなか幻想的な光景。芦生の森では10年くらい前からシカが増え, 林床にはシカが嫌う植物以外はほとんど生えない状況になっている。傘をさしてのんびり歩ける上谷の現状は, 昔の藪こぎを知る者にとっては少し悲しいことである。小雨の中, 途中の木の下で何とか昼食をとり, ウツロ谷のシカ柵プロットの昆虫調査やかつての木地師たちの住み跡を確認しながら, 長治谷へ。午後小雨。川の水量は多少増加していたものの, 今年のメンバーの足回りは100点で, 流量観測も難なくこなした。その後, 下谷では大桂, 二次林と人工林を観察し, 幽仙谷では天然林からの流出物を回収した。夕食はお好み焼き。焼きながら, 食べながら, 作り方談義に花が咲いた。TAである先輩たちの研究紹介では, 今年も質問時間はなかなかの盛況であった。

7/5(月) 昨日の流量観測データをレポートにまとめ, 回収してきた流出物と水生昆虫の観察とデッサン。最後に宿舎・食堂の片付けとフィールド研からのアンケートを書いてセミナーは終了となった。感想文には, 芦生の森に触れた興奮と2泊3日の心地よい疲れと満足感が素直に表現され, 将来の抱負なども述べられていた。この感想文を見ていると, TAの院生諸君による良い影響が表れているのだろうと感じている。



にぎりめし作り



ヒカゲノカズラの観察

③海岸生物の生活史

海洋生物系統分類学分野 准教授 久保田 信

ポケゼミ「海岸生物の生活史」は、新緑萌え太陽キララな5月のゴールデンウィークに瀬戸臨海実験所で実施するのが恒例となっている。2010年度の参加者は、文・理・医・工・農学部の7名であった。瀬戸臨海実験所周辺の磯浜海岸や漁港でフィールドワーク中心に、地元産動物を飼育展示した水族館も活用し、標本やオリジナルDVD/CDも駆使した。学生達は、動物の形態・行動の観察・スケッチ等を通し、各々いかなる特性があるのか、「宝の海から」等の参考書や論文などで調べまとめる課題に取り組んだ。

参加者は、ベントスとプランクトン採取を行い、想像を絶する親子関係を確認した。また、「地球の住民たち、動物篇」で現地球に生きる144万動物種の門ランクへのまとめを学習した。さらに、生活史を繰り返して逆転できるベニクラゲの若返り奇跡の各発育段階を実際に観察し、森・里・海の生命体相互営みで息づいてきた太古からの歴史と未来へ思いをはせることができたのではないかと。多様動物群を現場で実地体験する有効性はもとより、専攻の異なる者同志が寝食共にし、整った設備と廉価な宿泊施設で親交も深めた。

受講生からは、次のような感想があった。「漂着物採集、漁港見学、夜の水族館など・・・全てが新鮮でただ感激と驚きでいっぱいでした。いくらでも器具が使え蔵書が読め、調査ができる環境を与えて頂き、京都大学らしさを実感しました。」「人間以外の生物には個にそれぞれの名前はない。その言葉にドキリとした。生存競争の中で暮らし、誰かに名前を知られることもなく死んでゆく生物たち・・・人間に生まれてこれたことを本当に感謝した。苦しいことがあってもこれを思えば頑張れそうだな・・・しかし、これ以上生態系を壊してはいけない。地球上に住む一員として、他の生物たちと共によい世界をつくっていききたい。」「いろいろな幼生とオトナになった時の姿の違いに驚きました。他にも様々なことをたくさん体験でき充実したGWをすごせました。」

受講生には、次のようなメッセージを贈った。「微小な幼生から大型の成体まで海産動物の多彩な顔ぶれに現場で少しでも多く触れあい、ラボや水族館で観察をしてもらえた。この方面の深い知見を得るにはいくら時間があっても足りない。なぜなら生命の母なる宝の海には既知・未知生物が無数に多様に時空的に変化しあい、お互い影響しあいつつ存続してきているからだ。現生144万もの動物種が41門に分類できる基礎を心得、動物門ごとに、綱以下、最小ランクの種まで留意し、今後のそれぞれの人生で地球同朋体の一生、つまり卵から成体へ成長し子孫を残し死んでゆく、連綿と続く「生活史」を常に頭におき、懸命に生きる個体・種・地域個体群・地球全生命体の現在・過去・未来に思いを十二分に寄せてもらいたい。厳しく無情ともいえる食物網中で現存できる人間の特権を理解できれば、個々の生物を慈しみ愛せるはずだ。助け合い励ましあい、高めあえる人に誕生できた幸せを肝に銘じてほしい。生命の星が、おのずと愛おしくなると思う。海洋生物中に興味が湧きあがる何か1種を見つけられ、その生活史を究明し、隣人に語らんとする希望が芽生えれば、本実習参加の意義がさらにあるだろう。」



番所崎での磯観察



実習室での文献調査ととりまとめ

④魚類心理学入門

沿岸資源管理学分野 准教授 益田 玲爾

昨年度はお休みしていたポケゼミを本年度は再開した。募集人数 10 人のところ、これより若干多い応募があったと聞く。「共通教育通信」に紹介記事を書いたため、それを読んで来た学生もいた。講義は以下のタイトルで 6 回行った。

- 第 1 回 研究の道具としてのスキューバ潜水
- 第 2 回 群れ行動の発達心理学
- 第 3 回 魚類心理学を栽培漁業に活かす
- 第 4 回 魚の行動から海の資源の未来を読む
- 第 5 回 回遊魚の行動学
- 第 6 回 研究というゲームの楽しみ方

講師自身の研究成果を中心に 1 時間弱の講義を行い、その後フリーディスカッション、さらに簡単なレポートを書いてもらい、このレポートをもとに次回の講義を組み立てるという構成をとった。最終回には「プレゼンテーションの奥義」というコーナーも設け、講師が一番最近に行った学会発表を例に、口頭発表やポスター発表の技術を伝授した。

実習では、7 月 2 日金曜日に学生らが舞鶴に到着し、まずガイダンスを行った。講義で地産地消や食の安全の話もしていたので、食事はなるべく自炊することにした。土曜日は、朝食のあと、市内の三浜海水浴場へ。漁協の運営する海浜施設「ととのいえ」のシャワーと更衣室を利用し、昼食は同所でサザエご飯とエイの煮付けを頂いた。調査では、ネットにより稚魚を採集し、シュノーケリングで砂地のカレイや岩場のハゼ類、ウミウシ類などを観察した。帰りにスーパーの鮮魚コーナーを見学し、食材としての魚について理解を深めた。今年は天気が悪く、外でのバーベキューは無理と判断し、スピアリブを室内で焼き、買ってきたマアジをたたきに、ブリを刺身にして頂いた。翌日曜日には西舞鶴の京都府漁連のセリを見学した。



講義は jPod にてなごやかな雰囲気で行われる



雨の中、ヒラメ稚魚採集用の網を曳くポケゼミ生たち

⑤森のつくりだすもの

森林生態保全学分野 准教授 徳地 直子

森は有形・無形のさまざまなものを私たちにもたしらしてくれるが、森の実際の姿や森の作り出す機能の創出のためにどのようなしくみがあるのか、よく知っているとはいえない。このポケゼミ“森のつくりだすもの”は、森に入って、森にふれ、さまざまな森の性質をとらえることを目的としている。

本実習は、和歌山研究林において夏季休業期間に行われる。和歌山研究林はフィールド研の研究林においても集落から離れた自然にめぐまれた地域にあり、また人工林率の高い森林からなる。そのため、以前は人工林の育成に関する林学教室の実習が行われていた。このような特徴を生かし、自然の森林を体験するだけでなく、現在産業として厳しい状態にある林業についても考えるきっかけとしてもらいたいとカリキュラムを立てている。また、大学で行われている研究活動に触れる意味で、今年度は特に、森と川のつながりにおいて見落とされがちであった河川内での水質形成プロセスに関わる実験を加え、以下のようなスケジュールとなった。

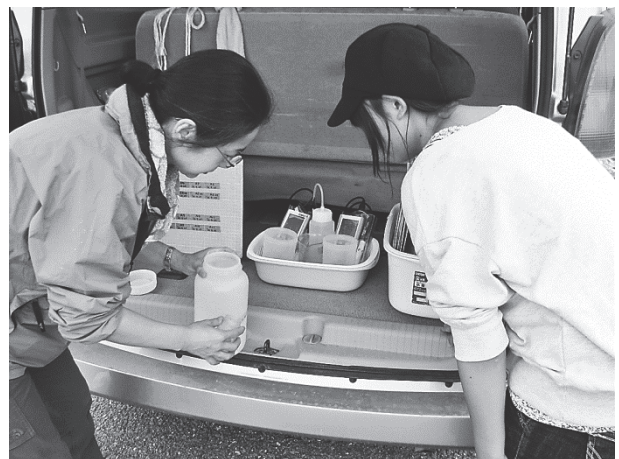
- 第一日目 研究林を源流のひとつとする有田川の下流地点に集合し、上流に向かって河川水をサンプリング・調査しながら研究林にはいる。
- 第二日目 和歌山研究林が設置されて以来手付かずで残されている貴重な天然生林とそれを取りまく人工林内を散策し、樹木の識別を通して自然の営みを見つけ、天然林、人工林のそれぞれの特徴を学習する。
- 第三日目 研究林内の河川において、栄養塩、塩など異なる溶質を添加する実験を行った。その際に導電率計を用い、河川内での水質形成について考える。また、人工林を管理することの重要性を学び、実際に間伐体験を行う。
これらのまとめのレポートを作成する。

河川内での水質形成については、これまで見落とされがちなプロセスであり、これまで我が国での研究も数河川で行われていない。そのため、“森が水をつくる”というキャッチフレーズめいた感覚をもつにすぎない新入生にとっては、河川内を対象にすることは非常に不思議に（？）思われている様子であった。

非常にささやかな体験ではあるが、林業という生業の部分、そこにある木材生産やそこから派生する水質形成の科学的な見方など、少し何かを感じてもらえたのではないかとと思っている。



河川水のサンプリング



河川水の pH 測定

⑥森里海のつながりを清流古座川に見る

里地生態保全学分野 准教授 梅本 信也

2010年8月23日（月）から27日（金）まで古座川流域と串本湾岸域、合計約400km²に展開する里域生態系諸相連環の体感をメインテーマにしたボケゼミが行われた。幸運にも初日から最終日まで天候に恵まれ、連日の猛暑にもかかわらず朝晩は涼しく過ごせた。参加予定者10名のうち、体調不良で6名が欠席、文学部、教育学部、農学部からなる少数精鋭メンバーとなった。

初日はガイダンスと資源博物学的調査方法の説明を行った。「古座川合同調査報告集・第1, 2, 3, 4巻」、「清流古座川物語」、調査用地図などの資料と野帳を配布し、古座川流域と串本湾岸域の概観、地形、気象、植生、土壌、生物相、文化相を把握させた。今年度は聞き取りと観察により、古座川と各漁業区の漁業の諸関係における歴史、現状と課題を探らせた。具体的には古座川流域および串本湾岸域における古座川水体を漁業関係者や一般居住者がどのように捉えているのかを、そのイメージが歴史的にどのように変遷してきたのか、問題点があるとすればどのように解決していけばよいのかを明らかにすることがテーマであった。ガイダンスの後、紀伊大島実験所構内に広がる照葉樹林からなる旧薪炭林で植物同定実習と資源的価値に関する野外講義を実施した。

第2日は2名ずつの2班にわかれ、古座川河口域の中湊地区、串本湾岸域の檜野地区を訪問し、景観観察と聞き取り調査を行い、情報提供者ごとの基礎カルテを作成した。時間の制約もあったが、地区当り6～16名の情報提供者からの聞き取り情報が得られた。学生にとってはアポなし聞き取り調査はまったくの初体験であり、南紀方言の問題、学生同士の心的距離の問題など最初是不慣れであったが、相手の心に自己の心を同調させる術も徐々に体得し、急速に調査技術が向上した。移動中の車内では積極的な仮報告や議論が続いた。いつものことだが、各学生の目の輝きが日に日に増加、他人への配慮が向上していくのが印象的であった。

第3日は中下流域の高池、西向地区を訪問、同様な作業を行った。調査完了後には古座川流域の地質学的サイトを見学した。住民からの天然ウナギの差し入れがあり、全員で舌鼓を打った。

第4日の午前にはデータ整理やレポート作成作業に入り、一部の班は追加・補足的現地調査を行った。午後からは基礎カルテを集結、全人数分を複製して配布、情報の共有化を図った。分量はA4のレポート用紙で厚さ1.5cmとなった。こうした基礎情報をもとに森里海のつながり、古座川と漁業との関係、地域性、歴史変容といったキーワード内容で表現されるレポートを各自作成した。結論から言えば、古座川という存在は古座川流域だけでなく、遠くはなれた串本湾岸域の漁業や生活や文化、心理形成にも多大な影響を及ぼしていることが理解できたようだ。また、教科書世界とは異なり、現実の里域フィールドは大変に複雑に繋がっており、多様性に満ちていることも体感できたようだった。

第5日目は、宿泊施設の片付け、発表会、レポート提出ならびにアンケート協力が行われ、正午前に解散となった。気恥ずかしさや気後れさが感じられる初日とは打って変わり、これまた例年通りではあるが、共同作業と共同自炊を、規則正しい共同生活を重ねるに連れ、学生の顔や言動にエネルギーが満ち溢れていくのが指導教員として大変に嬉しく思われた。



紀伊大島実験所における現地調査計画会議



涼風が吹きぬける古座街道のセンダン並木緑陰で

⑦C. W. ニコル “アフアの森” に学ぶ

里山資源保全学分野 教授 柴田 昌三

少人数セミナー「C. W. ニコル “アフアの森” に学ぶ」は、2010 年度も高い競争率から選ばれてきた 7 名の一回生の登録を得た。しかし、実際には 1 名の日程調整がつかず、参加した学生の所属学部は、文学部 1 名、法学部 2 名、工学部 1 名、農学部 2 名（男子 3 名、女子 3 名）となった。まず、顔合わせを兼ねて 5 月 17 日に説明会を行い、6 名が勢揃いした。その後、予習会を 7 月 11 日に行った。

アフアの森訪問は、8 月 9 日～14 日に行った。今回の補助は長谷川尚史准教授にお願いした。彼の献身的な補助なしには、このポケゼミは成立しないものであった。また、今回は特別参加で中学生 2 名も参加した。10 日にまず長野県下の森林を見学した。今年は日本海上を台風が接近しており、戸隠神社奥社で雨が降り始めた。奥社からいつもの宿であるラボランドくろひめへの道では豪雨となり、濁流が流れ落ちて危険を感じたため、山麓の店で一休みすることとなった。しかし、ここでは地元産の食材に出会うことができ、学生たちはこの味を満喫していた。

翌 11 日はアフアの森訪問の初日である。我々を迎えてくださったのはアフアの森財団代表のニコルさん、森を実質的に管理しておられ地元農民でもある松木さん、現地で財団をしっかりとお守りしておられる石井さんの実質上トップスリーのお三方である。いつものようにニコルさんを森の中のベンチで囲んだレクチャーから実習は始まった。学生たちが徐々に心を開き、ニコル・ワールドに引き込まれる様子は、例年のことではあるが、興味深いものであった。翌日は、近づいてくる台風の影響を考え、予定を変更して黒姫高原を訪れた。ここでもニコルさんとの会話を楽しんだが、昼前には雨が降り始めた。午後にはアフアの森を訪問し、松木さんの案内を受けた後、松木小屋でおいしいキュウリをいただきながら、さまざまな示唆に富む会話を楽しんだ。また、夜には、これも恒例となったニコルさんの宿訪問をしていただいた。今年のメニューはシカシチューであった。しかし、学生たちがまだ遠慮気味であったのは、返す返すも残念であった。13 日には延期した妙高高原訪問を行った。空模様はまだ十分には回復していなかったが、ミズナラ古木の見学や、水たまりのイモリの観察などをしてから、笹ヶ峰で昼食を楽しんだ。ここでアフアの森財団のご一行とは別れて、同じ妙高山系の東麓にある燕温泉で露天風呂を楽しんでから、宿に戻った。翌日は無事に京都に戻ることができたことは幸いである。

今回も、学生たちはニコルさんからさまざまな薫陶を受けたようである。そのことは帰洛後に集めたレポートとアンケートからも知ることができる。今回は、いつも通っている食堂での食事で、食中毒的な症状を示す学生が現れたり、悪天候に予定が左右されたり、と反省すべき点がいくつかあった。これらは今後のポケゼミの実施に反映していきたいと考えている。また、アフアの森にもついにナラ枯れが到達したことが判明した。豊かなアフアの森にもこのような影が忍び寄っていることも知ることができたポケゼミであった。

なお、ポケゼミ終了後の 9 月 27 日には、同窓生が主催するバーベキューパーティが上賀茂試験地で開催された。アフアの森から強い印象を持って帰ってきた 1 回生と、懐かしい思い出をたくさん持っている 2 回生以上の学年の交流は心温まるものであり、ニコルさんの思想をしっかりと受け継いでいる学生達の会話は日本の将来を楽しみにさせるものであった。ここで同窓生たちのメーリングリストの立ち上げが提案され、その後、やりとりが活発に行われている。



ニコル氏の案内でアフアの森を巡る



ニコル氏が我々の宿を今年も訪問

⑧フィールド実習「森は海の恋人」

海洋生物多様性保全学分野 教授 白山 義久

2010 年度フィールド実習「森は海の恋人」を、8 月 20 日から 25 日まで（移動日を含む）宮城県気仙沼市唐桑町にある水山養殖場と南三陸町自然環境活用センター（志津川ネイチャーセンター）において実施した。宿泊には、民宿を利用した。

参加者は 5 名が登録していたが、1 名が欠席したため、結局 4 名となった。内訳は文学部 1 名、工学部 1 名、農学部 2 名だった。そのうち 1 名は女性だった。講師として、畠山重篤氏（京大フィールド研社会連携教授・水山養殖場）とそのご子息の畠山信氏、並びに横浜康継氏（南三陸町自然環境活用センター所長・筑波大学名誉教授）の参加を得た。協定書を交わしている NPO 法人エコロジー・カフェの会員が 4 名参加した。

8 月 20 日は移動日で、仙台から南三陸町へ移動した。

8 月 21 日には NaGISA プロトコルにもとづく岩礁域のフィールド調査を、南三陸町において実施した。サンプリング終了後は、サンプル処理として海藻サンプルの分類・同定・重量測定、1mm のフルイでのマクロベントスサンプルの解析(分類・同定・計数)と 0.063mm フルイを用いたメイオベントスサンプルの作成を行った。

8 月 22 日はまず気仙沼に移動し、午後から畠山氏による森里海の連環に関する講義を受講した。また白山も海洋酸性化などの海洋の諸問題に関する講義をした。

8 月 23 日は、畠山氏の案内で気仙沼湾・大川水系を見学した。そして、昨年同様、「ひこばえの森」における植林を行った。この経験は、学生にとって大きかったようで、将来自分の植えた木を見に来たいという感想があった。実際、昨年度植えた木も元気に育っていたのが印象的だった。その後、森は海の恋人運動の原点である牡蠣の森の見学を行った。

8 月 24 日には、早朝に気仙沼漁港を見学し、その後水山養殖場の養殖いかだから、もっとも岩礁性生物の多様性が高い養殖カキのサンプルを採集した。そして、動物を分別し、その分類について解説を行った。昼食後は、海草も場のマクロベントスを、ドレッジを用いて採集した。

8 月 25 日には、現地を出立して仙台にて解散した。

学生には、初体験のことが多く、森里海の連環について強い印象を持ったものと考えられた。特に植林は学生にとって初めての経験で、特にインパクトがあったようだ。今後も長い学生と地元との触れ合いが続くことが期待できる、充実した 6 日間を過ごすことができたものと評価している。



ひこばえの森での記念撮影



和船の櫓を初めて扱う

⑨海洋生物の多様性

海洋生物多様性保全学分野 教授 白山 義久

ポケゼミ「海洋生物の多様性」は、瀬戸臨海実験所での実習形式のポケゼミである。実習は、9月21日から24日まで3泊4日の日程で、瀬戸臨海実験所において実施した。実習内容としては、1. 磯観察、2. メイオベントスの採集と観察、3. スキンダイビングによるメガベントスの目視観察、4. 海産生物の解剖、5. 南方熊楠記念館の見学、6. 水族館の見学の6項目を実施した。

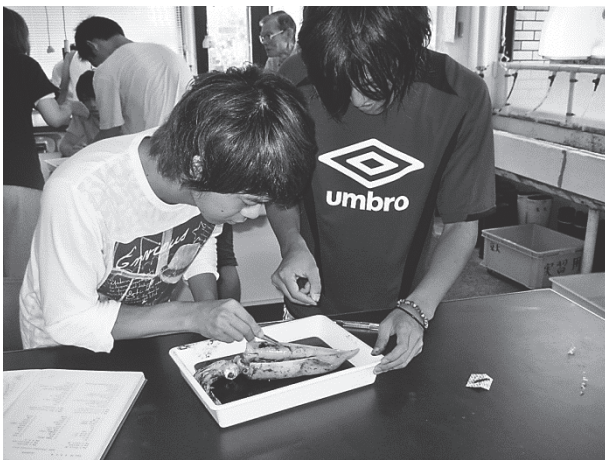
今年度の本実習の参加者は、8名（農学部6名、医学部1名、工学部1名）であった。登録者は定員一杯の10名であったが、実施時期が遅かったため、2名の学生が参加できなくなってしまった。

本実習は、協定書を交わしているNPO法人エコロジー・カフェ（エコカフェ）との協力事業という位置づけでもあり、その会員も参加した。具体的には、上記実習内容3・4・6は、エコカフェの会員も一緒に現場と実験室の作業を行った。

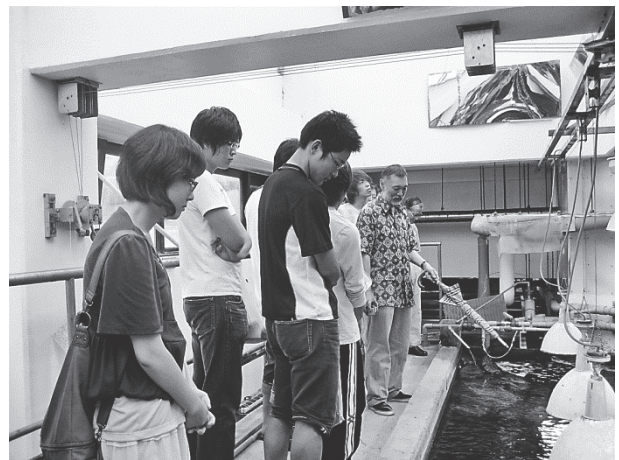
また、実習時間外のアクティビティも多数行い、そのなかでも学生とエコカフェ会員とは、充実した交流をした。特に夜のバーベキューにおいて、エコカフェの方々（社会人）と学生との交流は、どちらにとっても有意義なものとなったようである。

学生にはやはり実習の方が講義よりインパクトが強い。しかし昨年度に講義が全くなかったことは、ガイダンス不足という面も発生させていることがわかったので、今年度は現地で多少講義も行った。この試みはよかったと思う。また、エコカフェとの連携は、学生にとってもよい機会となったので、今後も続けていきたい。

エコカフェにとっては、会員が本当の自然に触れる機会を得たことに満足感があつたようである。特にスキンダイビングとメイオベントスの観察はどちらも普通にはできないものだったため、貴重な体験となり、今後も実習に継続して参加したい意向である。



解剖実習の様子



水族館の見学の様子

⑩木造校舎を造る：木の文化再生へ

里山資源保全学分野 教授 柴田 昌三

少人数セミナー「木造校舎を造る：木の文化再生へ」は2010年度も例年通り10名の登録者を迎えて行った。登録者はすべて一回生で、所属学部の内訳は、法学部1名、経済学部1名、薬学部1名、工学部6名、農学部1名（男子8名、女子2名）であった。実際に講義を受けに来た学生数は平均すると毎回7名程度と、例年よりもやや少なかった。

今年度の少人数セミナーを担当したのは、地球環境学堂の小林正己教授と小林広英准教授、フィールド研の芝正己准教授と柴田である。小林教授と小林准教授には、京都大学が知的財産権を有し、耐震性に優れた木造構造物である京大フレーム工法に関する講義や日本の木造建築物に関する講義等をいただいた。芝准教授及び柴田は、日本の森林に関する総論的な知識を伝えたほか、木質資源を供給する人工林や里山等の現状を紹介した。

学内における講義はすべて、京大フレーム工法によって京大キャンパスに最初に建てられた、実験的構造物である建物を使って行った。これらの講義に加えて、二回の学外での実習も行った。芝准教授による京都府立植物園見学と、柴田によるフィールド研上賀茂試験地における伐木・製材体験である。植物園においては木本を中心とするさまざまな植物種を学び、その高い多様性と豊富さを学ぶことを目的とした。学生たちは植物の豊富さを学ぶとともに、その中から有用な植物を学ぶこととなった。

上賀茂試験地においては、試験地の技術職員の懇切丁寧な指導を受けながら、まず試験地内にあるヒノキを自らの手でチェーンソーを用いて伐採した。伐採したヒノキを作業小屋に運んだあと、昨年の受講生が伐採し、乾燥させてあったヒノキ材を用いて製材を経験した。乾燥させたヒノキは加工するには十分な状態になっており、すばらしい香りのヒノキ材を製材することができた。製材後の木材は適当な大きさに切り、まな板に加工した。学生たちはサンドペーパーで表面を磨き上げ、仕上げた。これは彼らに持ち帰ってもらい、使ってもらうよう、お願いした。これらの見学及び体験実習は、従来の一コマの時間では行い得ないため、午後半日を用いて行わざるを得ない。そのため、過密な受講スケジュールを組んでいる学生たちの中には参加できない者もいた。このことは残念なことであるが、現状のカリキュラムのシステムの中では致し方ないことである。

講義終了後の学生たちからのアンケート結果を見ると、木造建築のみを学ぶつもりで受けた講義が予想外に木材生産も含めた講義であったことを感謝し、実際に生産の場も体験することができたことを高く評価するものが多かった。



上賀茂試験地におけるヒノキの製材



まな板に加工

⑪豊かな森をめざして！

森林環境情報学分野 准教授 芝 正己

2010 年度新入生向け少人数セミナー“豊かな森をめざして！： The Way to a Richer Forest”は、例年のスケジュールとは異なり、5 月 15 日（土）に終日の集中講義、翌週の 5 月 20 日（木）と 21 日（金）の両日の芦生研究林での野外実習を行った。今回の受講生の構成は、法学部（3 名）、経済学部（1 名）、文学部（1 名）、農学部（3 名）、理学部（1 名）の計 9 名（男性 3 名、女性 6 名）であった。

本講義の目的は、地球規模で問題となっている世界の森林の状況、日本での森林の保全・利用の現状を対比させながら、環境-経済-社会面からみた森林資源管理のあるべき姿を分野の異なる受講生全員で模索議論することである。21 世紀に向けて森林を持続的に管理し、その多面的な機能を発揮させるためには、従来の専門領域に止まることなく、異分野間の連携を図ることが必要であり、そのためにも、隣接する領域やこれまで無関係だと考えられてきた分野についての正確な知識の習得が求められている。その具現化として「森里海の連環」を教示しつつ、以下の内容構成で解説した。

講 義

- 1：諸外国の森林・日本の森林の特徴について
- 2：森林の利用と保全に関わる問題点について
- 3：新たな森林の管理評価ー 森林認証・ラベリング制度
- 4：総合討論

野外体験実習 5 月 20 日（木）～21 日（金） 芦生研究林

芦生研究林での野外実習（受講生 8 名、TA1 名）の初日は、午前 10 時に JR 園部駅西口に集合、研究林のマイクロバスで「園部・日吉：郊外の土地利用や森林風景」、「美山町：由良川沿いの景観と土地利用、茅葺きの里」等を順次見学しながら研究林までのほぼ 1 時間半のコースを移動した。研究林構内での昼食後、芦生研究林の技術職員の支援を得て、内杉谷から長治谷までのコースを移動しながら、「暖温帯林から冷温帯林への森林の変化」、「シカの食害地・クマ剥ぎ木」、「カシノナガキイムシ被害木」、「溪畔林の植生」等を観察した。翌日は、朝食後、由良川本流に沿ったトロッコ軌道敷で樹木識別を行いながら、灰野集落地跡まで散策し、昼食後、後片付け・レポート作成後、前日の逆コースを経て JR 園部駅で解散した（17:00）。

例年より一日少ない実習期間となったが、初めて芦生を訪れた受講生に対しての芦生のスタッフの皆様の親切な指導、TA として参加してくれた大学院生の施設利用や食事の準備等のきめ細い補助等、今回も多いに助けられた。皆さん、本当に有難うございました。わずかな芦生での滞在であったが、フィールドでしか得られない何かを受講生全員が感じ取ってくれたような気がする。彼らのこれからの学生生活に期待したい。小生にとって、今回が最後のポケゼミとなったが、最高の思い出となった。深謝！



トロッコと記録撮影



大カツラの前で

⑫海産無脊椎動物-分類群と形の多様性

海洋生物進化形態学分野 講師 宮崎 勝己

昨年度に引き続き「海産無脊椎動物-分類群と形の多様性」を開催した。登録は農学部3名、文学部1名の計4名であったが、農学部の1名が急病のため実習不参加となり、単位取得は出来なかった。

まずフィールド研会議室にて二回の講義を行った。第一回目の講義では、オリエンテーションとして、全体の概要説明・各自の自己紹介・今後の日程調整を行った。また、ある海洋生物学の英語の教科書から海岸動物の採集と保全に関する部分を抜き出し、その和訳を宿題として課した。二回目の講義では、動物の多様性についての概説的な講義・実習日程の調整・宿題の回収を行った。

実習は8/26-30の四泊五日の日程で、瀬戸臨海実験所にて行った。初日のオリエンテーションと所内見学の後、二日目に顕微鏡の使い方講習・磯採集・走査電顕試料作成、三日目に水族館見学・海岸の砂やフジツボからの洗い出し採集・電顕の続き、四日目に同定結果の整理・電顕観察・レポート作成・反省会を行い、最終日の午前中に片付けを行って、レポートの提出をもって解散とした。最終日に予定していたアンケートの配布を忘れてしまい、後日メールへの添付で記入・提出をお願いした。また今年度は、大阪大学の臨海実習と日程が重なったが、受講生と先方の学生や先生方との間で、有意義な交流が図られた。

最終的な成績は、出席回数、宿題及び実習レポートの内容、更に全体的な受講態度を総合して、判定した。



海岸の砂からの生物の洗い出し作業



顕微鏡を使った採集動物の同定作業

⑬サンゴ礁生態学入門

海洋生物進化形態学分野 助教 深見 裕伸

ポケゼミ「サンゴ礁生態学入門」は、京都大学本学での講義2回（4月と5月）と和歌山県白浜町にある瀬戸臨海実験所での2泊3日（参加者の日程があわず、2回開催：6月4～6日、6月11～13日）の野外実習で実施した。昨年度は高知県にある横波林海実験所にて行ったが、今年度は諸事情により瀬戸臨海実験所にて開催した。参加者は、女子2名を含む定員一杯の5名（法学部1名、医学部1名、薬学部1名、工学部1名、農学部1名）であった。

実習は、初日の夕方に白浜駅にて集合し、瀬戸臨海実験所に到着した後、今後の予定などを話し合い就寝した。2日目から実際にウェットスーツ、水中マスク、スノーケル、フィンをつけて海に入った。皆、ウェットスーツの着用が初めてであったこと、および水中マスクとスノーケルを初めて使った学生もあり、最初は海で泳ぐのに戸惑っていたように見えたが練習しているうちにすぐに上達した。天気もよく円月島の周囲で泳ぐ練習をした後、実際に生きているイシサンゴの観察を行った。多くのイシサンゴとそれらの周囲を泳ぐ熱帯魚という完全な熱帯の風景を見て、学生が感動していたのを見てうれしい気持ちになったものである。その後、イシサンゴの種類をある程度覚えてもらい、さらに数種類のイシサンゴを採集した。夕方以降は夜中までかかって、採集したイシサンゴの表面および内部にどれくらいの生物が生息しているのかを実際に観察し、そうすることで、サンゴ群集がどれだけ生物にとって多様性を生み出しているのかを実感してもらった。最終日は、午前中も海に入り、どれくらいの割合でイシサンゴが生息しているのかをライトランセクト法にて調査し、その結果を午後にまとめ、夕方には解散した。調査では水深2m程度まで潜る必要があったため、実際の調査がかなりつらいということも学生が実感したようであった。

当初計画していた横波林海実験所から瀬戸臨海実験所に変更になったことが少し残念であったが、それ以外は全体的に大きな問題もなく終了することができた。私にとって最後のポケゼミであったが、学生がサンゴに非常に興味を持ちながら参加してくれ、非常に良い思い出となった。学生達に感謝である。



参加した学生達



海中での観察

⑭環境と魚の河口域生態学入門

里海生態保全学分野 教授 山下 洋

河川は、森林、水田、畑、都市などの陸域で生産された物質を河口まで輸送し、沿岸海洋生態系へ供給する。河口域は複雑な環境構造を持つが、陸からの栄養により生産力が豊かであり、多くの水生動物の成育場として重要な役割を果たしている。さらに、生活史の中で川と海の間を行き来する魚類（アユやスズキ）やエビ・カニ類（テナガエビやモクズガニ）などが通過する水生動物たちの交通の要所とも言える。ポケゼミ「環境と魚の河口域生態学入門」は、このような河口域において、環境と生態系に関する調査を実際に体験し、河口域を例に健全な生態系の保全について考えることを目的として開講した。

受講生は工学部工業化学科1名、農学部地域環境学科2名、経済学部経済経営学科1名の計4名であった。2010年5月に講義を行い、6月に2泊3日で舞鶴水産実験所において実習を実施した。

講義では、フィールド研と舞鶴水産実験所の紹介、河川・河口域の構造と環境変動の特徴、通し回遊生物の生態、河口域における魚類を中心とした生物生産構造、実習を行う由良川の環境や魚類相の特徴などを概説した。

6月18日（金）～20日（日）に由良川河口域において実習を行った。調査は河口から約15km上流の地点から河口の神崎海岸までの区間で、川の様子や流域の構造を観察し環境測定（水温、塩分、溶存酸素、電気伝導度、酸化還元電位、pH）を行った。八雲橋の上流、神崎浜河口側、神崎浜沿岸側の3カ所において小型稚魚まき網を用いた幼稚魚採集調査を行った。八雲橋のやや上流のポイントでは、ゴクラクハゼ、ウキゴリ属、スズキ、神崎浜の河口川側では、スズキ、ボラ、マハゼ、ヒイラギ、海側ではヒラメ、スズキ、マダイ、ヒメハゼが採集された。フィールド調査の後、標本を舞鶴水産実験所に持ち帰り、環境データの分析、魚類の同定方法、魚類の解剖、胃内容物の査定、耳石による年齢査定などについて実習した。また、夜には舞鶴水産実験所内で実験所所属の大学院生とともに、実習で採集した魚類、水産実験所周辺などで採集された魚類などを材料に、実習生にも役割分担して夕食を作った。ここでも、魚のさばき方などを大学院生が指導した。さらに20日には舞鶴魚市場を見学し、マダイ、ヒラメ、ブリ、サワラ、多くの沿岸魚に加えて、この日はバショウカジキがたくさん水揚げされていたのが特徴的であった。

本実習を通して、実習参加者は多様な観点から自然環境や魚類などの水圏生物に触れる機会を得ることができたのではないかと考えている。



でかいスズキだ 舞鶴市魚市場



魚の種を調べる

⑮環境の評価

森林資源管理学分野 教授 吉岡 崇仁

少人数セミナー「環境の評価」は、A・B群のセミナーとして開講し、自然環境を評価することの意味について、自然科学的、社会科学側面から解説と討論の形式で実施した。受講生は、工学部3名、農学部3名、理学部2名、総合人間学部1名、医学部1名の合計10名であった。教室で8回の講義形式の授業と芦生研究林での合宿を実施した。

教室でのゼミでは、「環境を評価する」とはいったいどういうことかという点について、環境の持つさまざまな価値を人間が認識し、自らの態度や行動を決定する際には、その環境の価値を判断している、という枠組み設定に基づいて議論を進めた。

講義のはじめの段階で、環境を評価するということの意義について各自の意見を求めると、環境保全や人間が自然と共生するために必要であるという意見とともに、そのためには自然科学的に数値化する必要がある、それが環境の評価であるという踏み込んだ意見も出され、活発な議論でゼミが進んだ。人びとの価値観が多様であることに気づいている学生もいて、環境を評価する目的は環境についての価値観を共有することにある、それによって環境を良くすることであるという議論に発展していった。また、自然環境を金額で評価するという点に関しては、よくないという意見が多いようであったが、議論する内に環境を守るために評価することもあるということに同意する学生も増えていった。毎回のゼミ終了時に提出する感想を読むと、自らが考える中で自問自答しながら意見をまとめようとしている様子が見て取れる。ポケット・ゼミでは、学生の意見を如何にすくい上げ議論することが重要であるのかを再認識した。森林の多面的機能の中でよく似たものをグルーピングした際には、人間にとっての森林の利用の観点からグループ分けする傾向が見られ、「環境の価値」の議論に入ることが容易であった。価値の分類から、自然に対する価値観が人間中心主義的であるか非人間中心主義的であるかの検討をし、「自分が考える地球温暖化解決法」について討議することで、それぞれが立場を議論した。レポートは、環境に関する新聞等の記事を選び、そこに含まれる「環境評価」の文脈の抽出と解説を課した。

芦生研究林での合宿は、8月10～11日に実施した。あいにくの天候であったが、長治谷のシカ排除実験地の観察（写真左）や植生の説明をうけ、夜にはそれぞれのレポートの内容を発表して、意見を交換した（写真右）。



芦生研究林長治谷シカ排除実験地の観察



芦生研究林宿泊施設内の食堂でレポート発表

⑯日本海に遊ぶ～日本海学入門

沿岸資源管理学分野 助教 上野 正博

昨年度、手伝ってくれた院生たちに「一回生なんだから、もう少し優しくしてあげないと来年からは誰も来ませんよ」と叱られた言葉通り、今年度は履修登録者がわずかに6名。しかも、内2人は授業連絡メールにも梨の礫で、結局4名での開講となった。

ところが、わずか4名の受講者なのだから、なるべく出席可能な日に京都での授業をと日程調整をしたことが徒になり、開講日がなかなか決められない。おまけに、例年に比してやたらと飛び入り調査が多くて京都に行けない日が多く、結局、舞鶴での集中講義と実習で一気に済ませることになった。

2月21日に西舞鶴駅に着いた学生たち3名（病欠1名）を拾って、さっそく市内の魚屋を巡る。普段、せいぜいスーパーに並ぶバック詰め魚しか見たことがない学生たちにとって、市場から仕入れたトロ箱もそのまま並ぶ魚屋の店先は新鮮な驚きに満ちていたようだ。実は水産の勉強で魚屋巡りは基本のキ。店先に並ぶ魚介類の生態やら水産物流通の問題やらを講義しながら、ついでに夜の宴会用も仕入れる。

午後は日本海の形成から始めて、環境・生物・日本人の暮らしと4時間ぶっ続けで授業。ついで、舞鶴水産実験所の花板をつとめる院生の指導で調理実習。朝仕入れた魚介類を使って魚介類の捌き方、料理法を学ぶ。そして院生達も交えての大宴会。自ら拵えて味わうこともまた、水産の勉強の基本である。

翌日は、実験所の緑洋丸に乗船し、由良川河口沖から若狭湾沖までの海洋観測と桁網による生物採集を体験した。今年には人数が少ないこともあり、酔って吐きながらも最後まで全員が作業の分担をこなす。さすがに、これで終わりと沖で告げると全員が船室のベッドに直行したが、仕事をするのが船酔いを克服する最良の道ってことを身をもって体験できたようだ。

最終日は、まず西舞鶴の魚市場を見学。運悪く底曳き網の休漁日だったため、定置網主体の漁獲物しか上がっていないかったが、京都府内各地から運び込まれるいろんな魚介類について生態や漁法、暮らしとの関わりなどを説明した。学生たちは初めて見るセリの光景にかなり驚いた様子。続いて、栽培漁業の実態を見せるために宮津栽培漁業センターへ。作り育てる漁業と日本が世界をリードする栽培漁業の現場が、数十万を超える稚魚を数人の研究員で維持管理して育てる過酷な労働で支えられていることに、学生たちはまたびっくり。

最後は一メートルを超える雪に埋もれた成相山に上り、眼下に天橋立を眺めながら海岸地形のでき方について講義して、2泊3日の強行軍ポケゼミは無事終了した。



強い南風に追われるように舞鶴湾を出る。日本海沿岸の南風は山から吹き下ろしてくるのでとても冷たい



雪景色の由良川河口。北近畿タンゴ鉄道由良川鉄橋はさしずめ現代版「由良の渡」

メンバーの顔合わせ、ポケゼミの動機付け(森里海連環や瀬戸内の予備知識、JR 徳山駅までのアクセス方法や瀬戸内地域についてのレポート)に関するセミナーを5月、6月に1回ずつ北部キャンパスで行い、8月7日～10日に徳山試験地で合宿形式ゼミ(3泊4日)を行った。参加者は定員の7名(全て男子)、学部別では理1、薬1、工4、農1となった。フレッシュな新入生諸君が瀬戸内の恵まれたフィールド(環境：森・里・海)に出て、自ら体験し、自然と人間の関わり方、里の意味を考えることがこのセミナーの目的である。昨年同様、特任教授の向井宏先生にご協力を頂いた。

今年は昨年と違ってキャンセルもなく7名全員が参加するので、小出和彰君(森林情報学研究室 M1)にTAを頼み、徳山へは前日入りした。8/7(土)15:30にJR徳山駅集合。街の見晴らしの良い屋上から試験地の森を眺めながら説明を行った。試験地に到着後、4日間のねぐらを確認。「さてどうなるか？」一番不安だったのは私かもしれない。早速何名かを連れて街のスーパーへ夕食を買いに出た。他は明日の夕食(カレー)準備を始めた。買い出し組は小出君の指導でボリュームのある弁当、惣菜や冷奴を手に入れた。夕食後は、瀬戸内に関するレポート発表会第1部を行った。

8/8(日)快晴。暑そう。日曜ではあるが、試験地の技術職員は実習サポートのため出勤してくれた。昨年同様に万葉の森(周南西緑地公園：旧徳山試験地)の見学と大賀ハスを観賞した。末武川を下るコースは最源流部の烏帽子岳(697m)近くの赤松ヶ平展望台からスタートした。瀬戸内海、四国、九州が見渡せる絶好の場所である。山頂から少し下った魚切ノ滝のしぶきやスギやヒノキ林の涼しさに触れながら、人の暮らした跡が感じられるようになって暫くすると緑の鮮やかな水田風景が目飛び込んでくる。八代盆地だ。冬にはナベツルが渡来するのどかな田園地帯である。山里の川辺で昼食をとり、川に入ってはしゃぐ者、昼寝をする者。中流部での2つのダム見学は川の流れを分断することの意味を考えるきっかけに。夜は昨日仕込んだカレーがあると思っていたが、一つの鍋が暑さで悪くなっていた。急遽、もう一つの鍋を増量することで事無きを得た。夕食後は瀬戸内に関するレポート発表会第2部。今年の参加者のレポートは瀬戸内国際芸術祭、小豆島のダム問題など、なかなかよく調べられており、お互いの発表に質問や意見が出ていた。

8/9(月)も快晴。試験地内のヒノキの人工林(ふるさと文化財の森(檜皮))と常緑広葉樹天然林を巡る。末武川下りはお昼に花岡八幡宮から再開した。河口部では予定通り潮は引き始めており、向井先生の指導・解説で川と海との境界部に多くの生き物がいることを実感した。引き続き大島干潟造成事業地に近い磯で、海に入って生物を観察した。この頃から雲行きが怪しくなり、試験地に帰ってバーベキューを焼き始める頃から強烈な夕立。準備していたテントも役に立たないほどであった。それでも皆沢山食べて、肉だけでなくサザエのツボ焼やチヌの塩焼きにも舌鼓を打った。夜には雨も上がり、シャワーの順番待ちの間には、玄関前で星を眺めた。日中とは一転した涼しさと暗さと静けさに感動したようである。

8/10(木)はレポートと感想文を完成させ、後片付けをして、昼食後にJR徳山駅で解散となった。

昨年度復活させた徳山試験地でのポケゼミが定員7名の参加者で実施できたことを感謝したい。当初の不安も皆さんの協力で何とか無事乗り切ることができた。今後は参加者に女子が入った場合の対応などが課題として残されている。次年度も施設・設備を改善しながら継続していきたい。



徳山試験地天然林内で



末武川河口にて

⑱京をめぐる森と人の暮らし

森林生態保全学分野 助教 寄元 道徳
森林資源管理学分野 助教 坂野上 なお

少人数セミナー「京をめぐる森と人の暮らし」は、景観問題などで注目されることが多い京都市周辺の多様な二次的な森林植生を理解することを目的に、初回と最終回の2回の室内講義のほか、京都市周辺の古社寺とその周辺の森林など5ヶ所を訪れて実施した。セミナーには7名（文学部1名、医学部1名、工学部4名、農学部1名）が参加してくれた。

現地での研修に先だって、まず第1回目にはセミナーの趣旨・概要を解説するとともに、森林や樹木の生態、及び樹木の分類法についての入門的な講義を行った。第2回目からは現地での研修と解説のかたちをとり、東山にある知恩院や清水寺などのかつての所有林であった常緑広葉樹林が広がる高台寺山国有林を皮切りに、比叡山延暦寺の境内林・人工林・天然林、銀閣寺の裏手に位置する大文字山から如意ヶ嶽一帯に広がる落葉広葉樹やアカマツなどを主体とした森林、賀茂別雷神社のかつての所有地であった神山・本山国有林などに広がるヒノキ林、そして第6回目には、平安京が造営された際、木材が伐り出されたとされる右京区京北町の山国・黒田地方まで足をのぼし、山国神社や常照皇寺といった古社寺や、原生状態が保全されている片波川源流域自然環境保全林を訪れた。訪れたそれぞれの森林と古社寺では、森や代表的な樹木を対象にそれらの生態について解説する一方で、断片的ながらも残されている古文書、絵図、林業資料などを用いて過去における人々の暮らしぶりについて解説し、森と人の暮らしの関わりについて考えた。

セミナーは4月中旬から6月中旬の土曜日に実施したが、全日晴天に恵まれ、春の爽やかな新緑が風にそよぐ中、気持ちよく楽しく実施することができた。初め、無表情に説明を聞いていた学生らであったが、回数を重ねるにつれて、好奇心が表情にみられるようになり毎週土曜日のセミナーを楽しみにして来てくれているような様子が見えてきた。また、移動の車中などでは、わいわい楽しくやっていたが、現地の研修では、殆どが農学部以外の所属であったにもかかわらず、森林科学の学生を凌ぐような真剣さと意欲をもって森林や樹木への関心を示してくれた。

学生へのアンケート調査では、概ね好評であり、中には更にもっとやってほしいといった要望が多くあった。実施している教員としては嬉しい反面、やっている身にはしんどく、少し複雑な思いがした。また、課したレポートには、ふだん経験することの少ない森の中の様子と不思議さ、個性的な木々の存在への驚き、森にもある歴史性の認識、そして森林景観への思い・考えなどが書かれており、学生には何かしら感じて、考えるものがあつたようである。



境内の300年生スギ大木の横で（延暦寺）

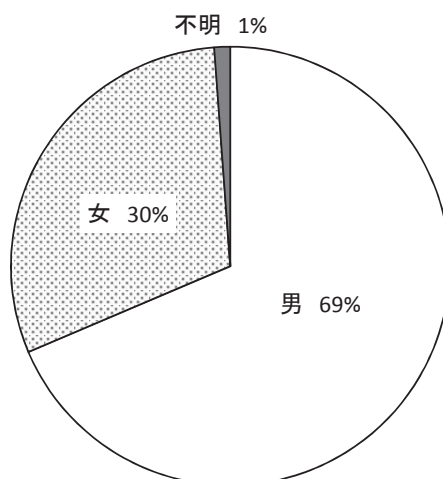


切株の年輪読み（大文字山）

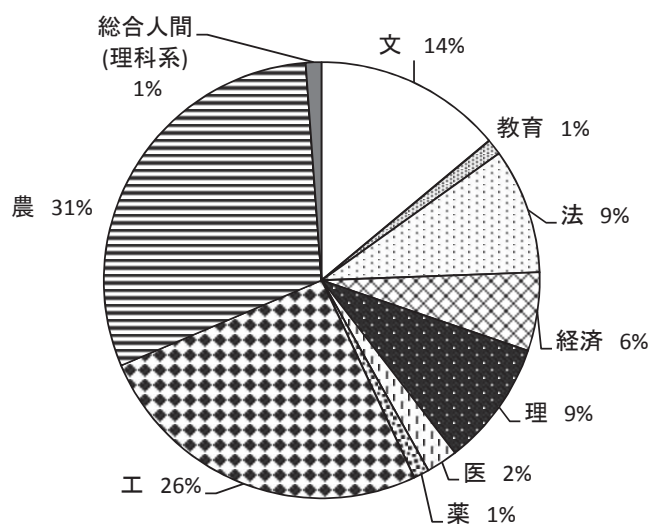
⑭少人数セミナーに関するアンケート結果

このアンケートは、フィールド科学教育研究センターの少人数セミナーを今後より充実したものにしていくため、学生の率直な意見を求めたものである。アンケートは9設問からなっており、有効回答者数は86名（芦生研究林、上賀茂試験地、徳山試験地、紀伊大島実験所、舞鶴水産実験所、瀬戸臨海実験所、その他の施設）である。以下、原則として設問ごとに、集計結果をグラフで表示し、百分率を添えた。なお、集計には有効回答のみを用いた。

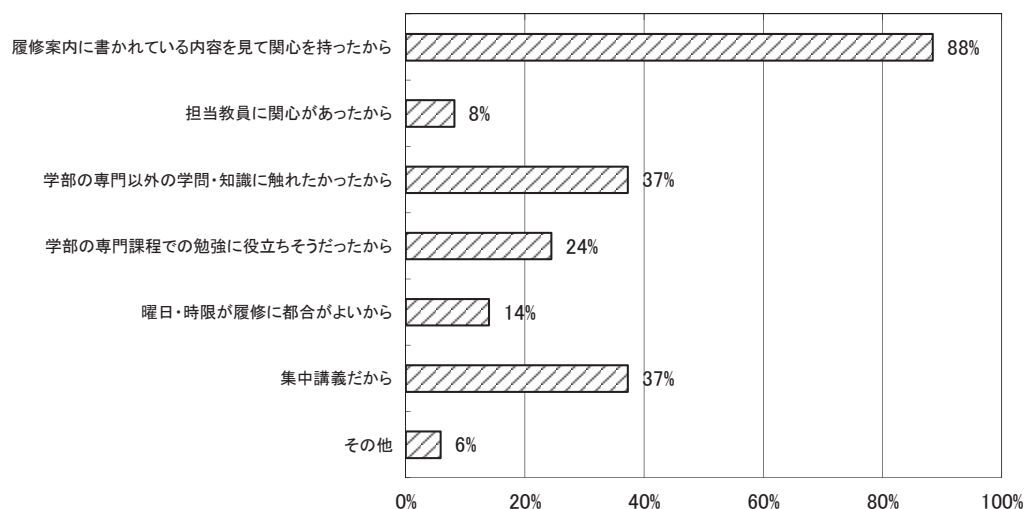
Q1 あなたの性別を答えて下さい。



Q2 あなたの所属学部を答えて下さい。



Q3 このセミナーを受講することにした理由を答えて下さい。(複数回答可)

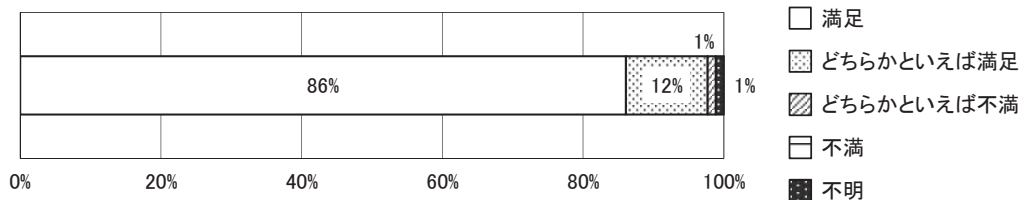


「その他」・・・

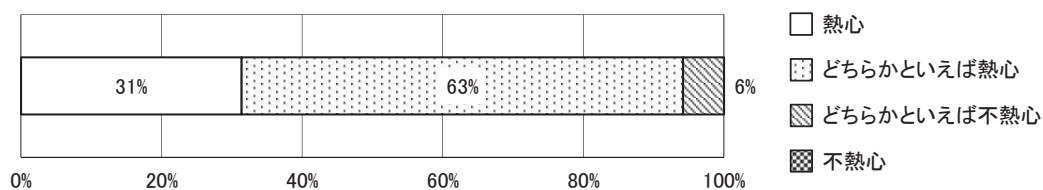
- ・ 魚が好きだから。
- ・ パンフレットで見たから。
- ・ C.W.ニコルさんだから。
- ・ 文系学生も歓迎と書かれていたので。
- ・ 芦生研究林に行きたかったから。
- ・ 去年履修した友達にとてもすすめられたから。
- ・ 里が本当に心に残ったから。

Q4 このセミナーを受講しての感想をうかがいます。

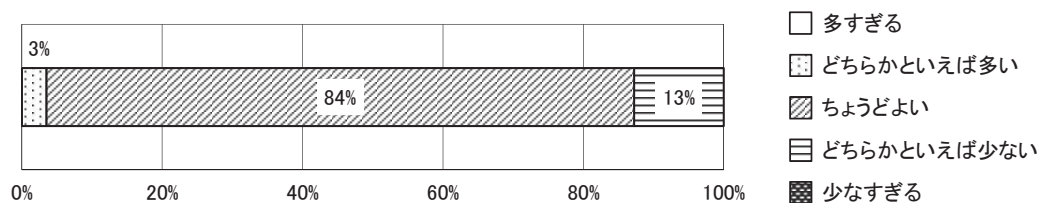
(1) このセミナーの授業内容に満足していますか。



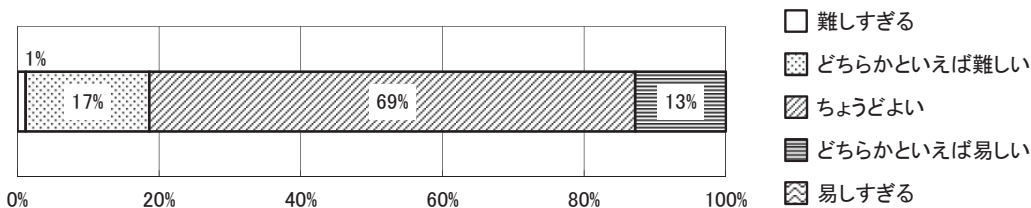
(2) あなた自身の受講姿勢はどうだったと思いますか。



(3) このセミナーの学生数についてはどう思いますか。

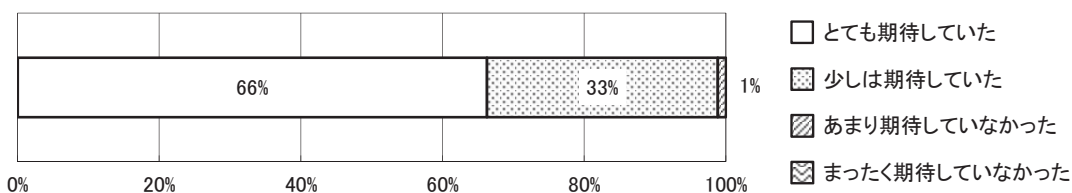


(4) 授業の難易度はどうでしたか。

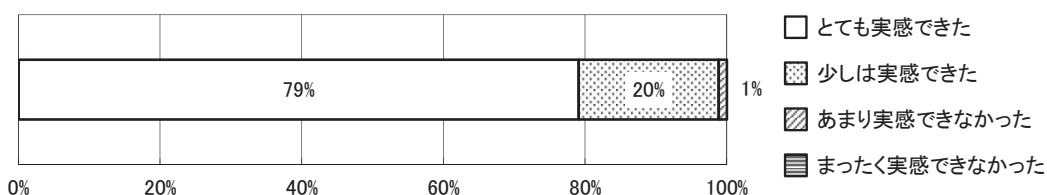


Q5 少人数制の授業形式についてうかがいます。

(1) このセミナーを受講する前、講義のような大人数形式の授業よりも多くのものが得られることを期待していましたか。

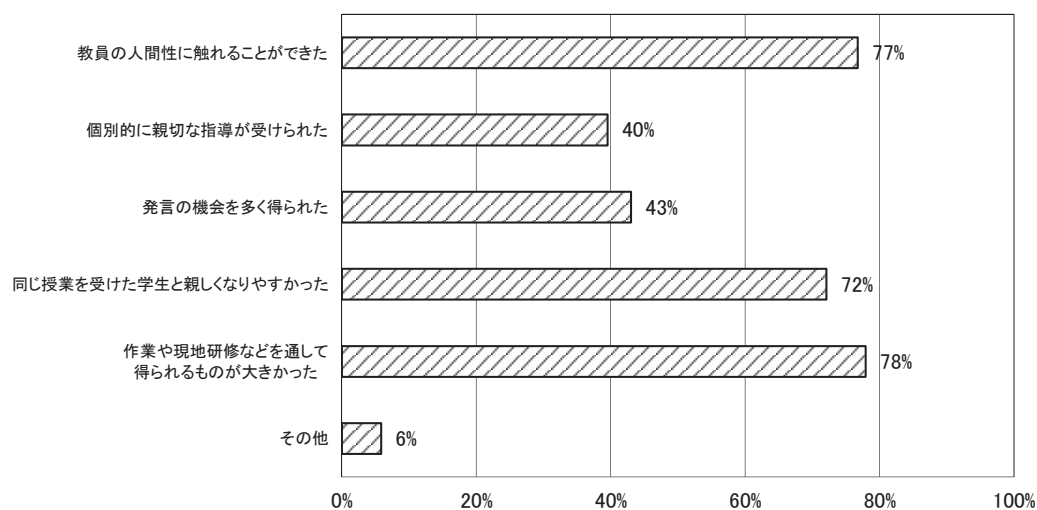


(2) では、実際にこのセミナーを受講してみて、少人数形式でしか得られないものがあると実感できましたか。



(3) 前問(2)で「とても実感できた」または「少しは実感できた」を選んだ方にうかがいます。

少人数形式の授業でどのような点がよかったと思いますか。(複数回答可)

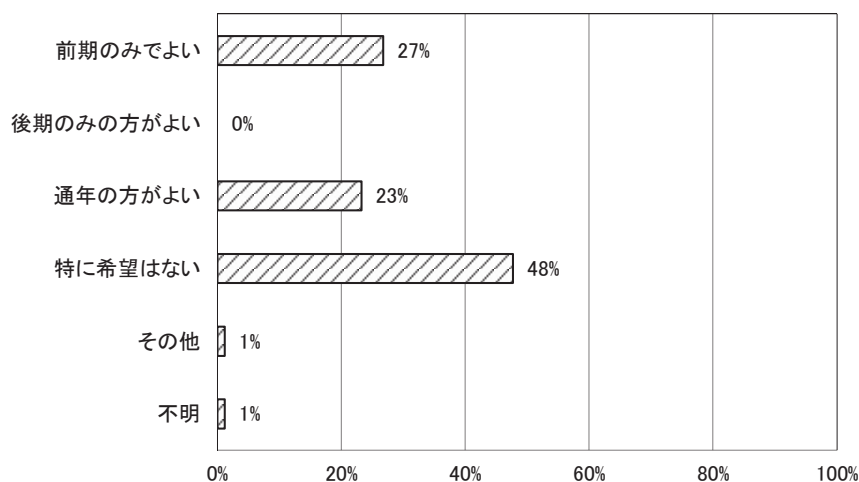


「その他」...

- ・もっと自分の意見を持たないといけないことや、積極的に発言していかないといけないことを実感できた点。
- ・少人数だと活動しやすかった。
- ・他の人の意見を詳しく聞くことができた。

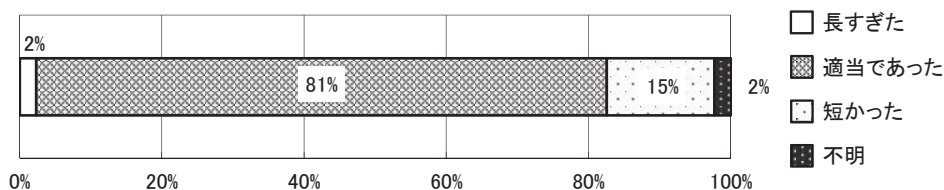
Q6 少人数セミナーの実施方法等についてのご意見をうかがいます。

(1) 少人数セミナーは前期のみの開講となっていますが、この開講時期についてはどう思いますか。

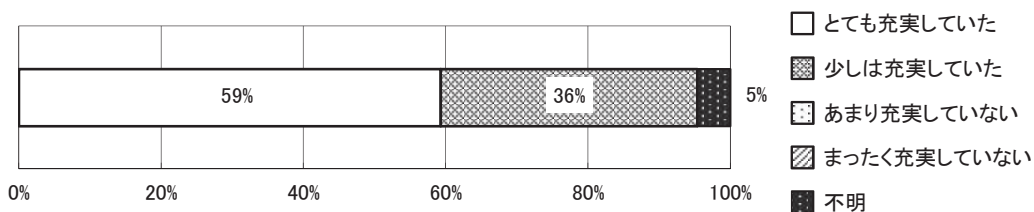


「その他」… 前期、後期、両方あれば良い。

(2) このセミナーの実施期間についてどう思われますか。

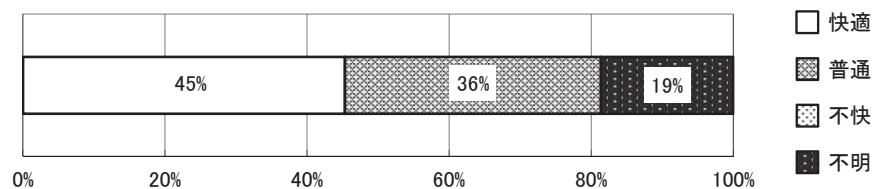


(3) このセミナーの実施場所の実験設備や実験器具についてどう思われましたか。

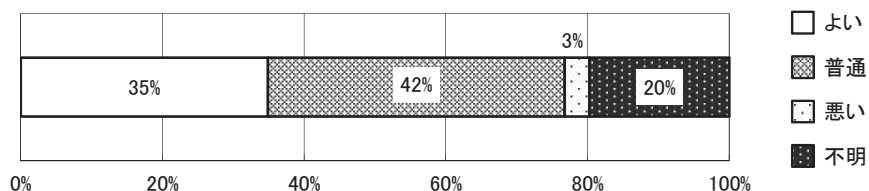


(4) このセミナーの宿泊についてうかがいます。

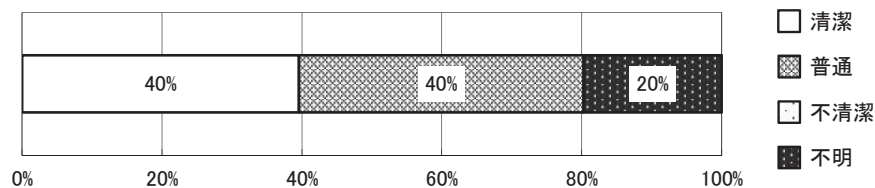
・ 共同の宿泊生活は



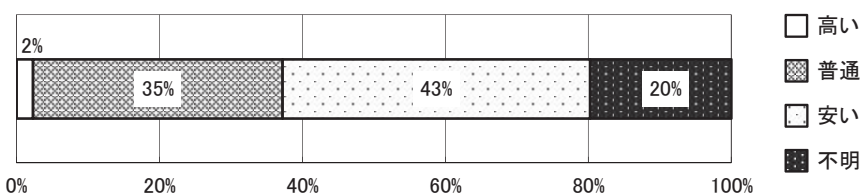
・ 宿泊施設の整備は



・ 宿泊施設の寝具は



・ 宿泊施設の経費は



(5) 宿泊施設や食事について、何かご意見やご要望があれば自由に記入して下さい。

【芦生研究林】

- ・ シャンプーリンスの場所が分かりにくい。
- ・ カメムシが出没しすぎている。なぜこんなにたくさんいるのかわからないが、室内に大量に出てくることに関してはとても不快だった。
- ・ ムシがとにかく多い。

【徳山試験地】

- ・ 食事は多すぎた。余るくらいならば、足りない方が良い。
- ・ 宿泊施設は非常に快適だったので良かった。食事も自炊できて安くあがったので、良かったと思う。
- ・ 寝ている時、アリが体中を歩くのが少し辛かったので、アリ対策を少ししてほしいです。

【舞鶴水産実験所】

- ・ 食事をもう少し温かく食べたいです。
- ・ 一緒にポケゼミを受けているメンバーと分担しながら食事の準備をするのは楽しかったです。
- ・ 食事は皆でつくるのが楽しく、とても美味しかったです。一方、水周りが多少不潔で、風呂場にハチとオオクモがいたので、トイレに消臭香を置いたり、風呂場の窓に網戸をつけると、より良いと思います。
- ・ 海の幸を食べることができてよかったです。特に赤エイは初めて食べました。意外とおしかったです。
- ・ 地元でとれた魚と野菜を使った料理は美味しかった。
- ・ ゴキブリやムカデが出たのがちょっと不快だった。
- ・ 施設はきれいで、食事も美味しくいただきました。

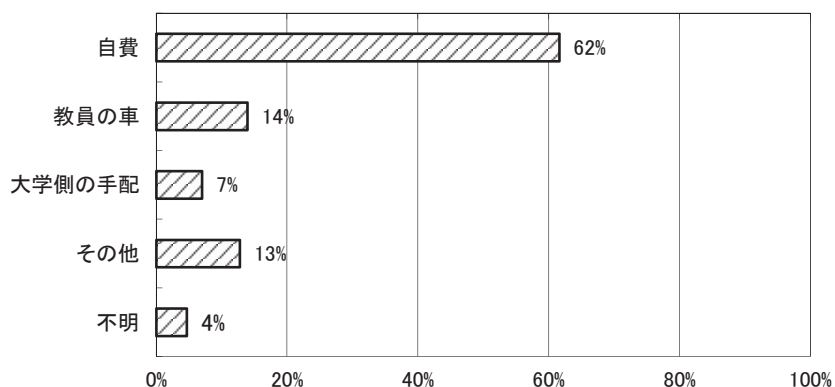
【瀬戸臨海実験所】

- ・ 大きいクモが多くて困りました。
- ・ 文句のつけ所がないです。
- ・ もう少し美味しい夕食が食べたい。

【その他の施設】

- ・ 枕が硬かった、食事の量が多少少なかった。
- ・ 包丁、調味料があれば自炊がスムーズにできたと思う。

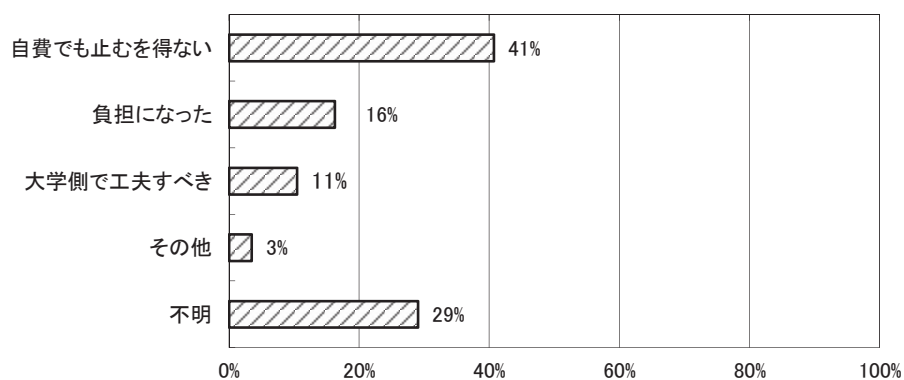
(6) このセミナーの現地集合場所へのアクセスについてうかがいます。



「その他」...

- ・ 自費＋教員の車
- ・ 自費＋大学側の手配
- ・ 教員の車＋大学側の手配

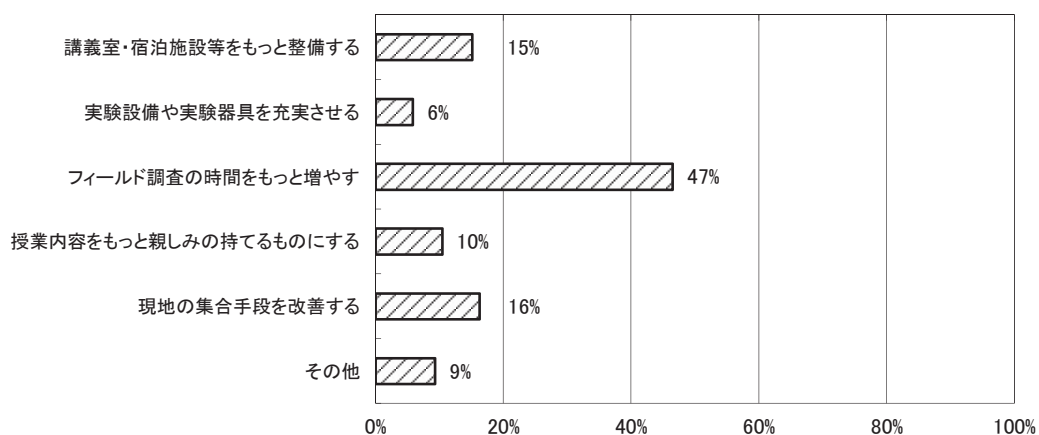
(7) 前問(6)で「自費」を選んだ方にうかがいます。



「その他」...

- ・ バスで行きたかった。
- ・ 自費でもやむを得ないが、大学側の補助があればとても助かる。
- ・ 学部専門科目の試験で遅れて来たため。

Q7 今後、少人数セミナーをさらに充実させるためには、どのようにすれば良いと思いますか。(複数回答可)



「その他」...

- ・ 事前に大学で一度顔合わせがあれば良かったと思う。
- ・ 普段の授業では絶対にできない事が沢山あって、有意義でした。
- ・ 予習をもう少ししたかった。
- ・ あらかじめ予備知識をある程度身につけていられるよう、軽めのレポート課題とその参考文献を設定しておく。実施期間を長くする。
- ・ フィールド調査で得たことも夜の話し合いに取り入れれば良いと思いました。

Q8 今回受講された少人数セミナーについて、何かが意見やご希望があれば自由に記入して下さい。

【芦生研究林】

- ・非常に良い経験ができた。今後もこういったセミナーを続けていって欲しい。
- ・一緒にいらした研究員の方や院生の方の研究に触れることができてとても楽しかった。
- ・少人数だったので、授業も参加型で、ただ言われたことを聞いているだけでなく、自分自身で考えて答えを探すことができて良かった。フィールドワークも楽しかった。様々な木を身近に見て、さわって現実的な感覚を持てたので、良かったと思う。
- ・もう少し長い時期、研究林にいたかった。
- ・人数もちょうどよく、色々な学部の人達と仲良くなることができ、とても楽しかったので良かったと思います。またトロコ電車にも乗ることができて、めったに体験できないこともでき、受講して良かったです。
- ・焼肉も食べたし、花火もしたし、本当に楽しかったです。
- ・カメムシに驚きましたが、2日目には慣れました。施設の人たちも親切にして下さって、少人数ならではのにぎやかな雰囲気です。森は人工林と天然木がまざっていることに驚きました。私は去年参加した人に聞いて申し込んだのですが、今年でこの講座がなくなることが残念です。
- ・席が最初に決まってしまう、ボードまでの距離が遠かった。合宿で雨が降って残念でした。
- ・山道が険しすぎる

【上賀茂試験地】

- ・とても充実した授業でした。この授業をとって良かったです。あえて言うなら、この授業が工学部でもB群もしくはA群として認定してくれたら良かったです。
- ・先生との物理的な距離だけでなく、精神的な距離も近い分、授業の内容がよく印象に残り、とても有意義な時間を過ごせたと思います。
- ・出席者に偏りがみられ、来ない人には全く会わないし、全員がそうだったのがとても残念だった。講義自体は身近なものとして考えることができてわかりやすかった。また、普段行く機会がほとんどない植物園を講師の先生の解説を聞きながら周ったのが、自分だけではなかなかできないことなので楽しかった。上賀茂試験地での製材も、木を切り出すところからカンナをかけるところまで、どれも初めての体験でためになった。
- ・このボケゼミで受講しなければ決して経験できない体験を得ることができました。
- ・もう少し野外実習をしたいと思いました。木々の説明を1回のみではなく2、3回ずつぐらいしてほしいです。「何の木？」と聞かれてもなかなか分からず間違えてばかりでした。
- ・セミナーでなければ行くことができない所に多く行けて楽しかったです。
- ・珍しい体験ができて良かった。
- ・とても楽しかった。
- ・すごく楽しかったです。もともとフィールドワーク(体験学習)をやってみたかったので、すごく面白かったです。山を散策するきっかけになります。山の表面を見て何の木か少しは分かるようになって嬉しいです。樹々や根物など、自然について詳しくなりたいと思いました。これからどの方向に進むかは分かりませんが、樹々を覚えるのを少し頑張ってみようと思います。

【徳山試験地】

- ・車で移動が多かったが、山や川の中を歩いて体を動かす時間がもっと多い方がよい。
- ・先生方から山と海の生物について詳しい説明を受けられたこと、また雑談をする中で先生方の人間性に触れることができたことが良かった。
- ・とても満足だった。やはり大学で講義を受けるだけでなく、実際にフィールドに出て、はじめて得られるものがあったと思う。学んだことも非常に多かった。ありがとうございました。
- ・交通費を大学から出した方が参加しやすくなると思います。
- ・最近触れることが少なくなってきた、自然に触れることができ、その中でも様々なことを学べて本当に良かったです。

【紀伊大島実験所】

- ・京大独自のフィールドワークを文系理系の垣根を越えて体験する事ができ、学術的な物事の他に、人間性や社会性が直接学べる大変質の良いボケゼミであったように感じる。
- ・セミナーに必要な費用がかなり高額で、学生にとっては負担となったので、この点を改善していただきたい。

【舞鶴水産実験所】

- ・実習で初めての体験を色々することが出来たので、良かったです。やはり講義だけでなく、実習も授業概要に含まれている方が、おもしろいと思います。
- ・とても楽しかった。
- ・普段の授業は、先生の話聞くだけなので、同じボケゼミの人でも交流のほとんどない人が多かったのですが、実習に行ったことで全員と話をする機会がもて、さらに先生とも授業中にはできないような話もできたのでとても良かったです。実習ではめったに経験できないようなことができ、海に住む生物をより身近に感じることができました。非常に貴重な経験であったと思います。
- ・とても楽しく有意義なものだったので、2回生の前期にも同じ仲間とまた受講できると幸せだと思いました。
- ・京都市は内陸にあって、下宿を始めてから海に触れる機会が少なくなっていたのでとても貴重かつ面白い経験が出来ました。夏休みを利用して、もう少し長く開講してもいいと思います。
- ・もう少し講義を多くしてほしい。
- ・来年後輩にすすめたいと思います。
- ・とても面白かったです。受講して良かったです。

- ・実際に実験などをしてみることも良いと思います。
- ・もっとたくさん実習とか実験とかができればより面白いと思います。
- ・普段の大学の講義では違う良い体験ができたし、受講者とも仲良くなれてとても有意義だった。このようなフィールドワークの機会種類をもっと増やしても良いと思う。
- ・楽しかった。河口調査だけにとどまらず、魚市場の見学や河川の生物観察、水利用についてなどもわずかながらですが触れることができて、とても有意義な3日間でした。ありがとうございました。
- ・少人数で実際にフィールドに出て作業をして、別の学科の研究内容に触れることができて、とても良い体験になりました。
- ・少人数であったために、教員の方や院生の方と内容のある会話ができ、その方々の研究者としての考え方や、また、生活スタイルに触れることができ、将来研究者になろうか考えている自分にとって、とてもためになり、刺激になった。
- ・普段体験できないことがたくさんできて大変良かった。また疎遠な存在である教授と会話できたことはとても光栄に思った。
- ・現実に実際に赴くことは大切なので、もっとこのようなセミナーを増やすべきだと思う。
- ・魚を実際に取ったり、市場を見たりしたことはとても良い経験になったと思う。

【瀬戸臨海実験所】

- ・海岸生物だけでなく、他にも様々なことを学べて、充実したGWを過ごすことができました。
- ・楽しいし為になりました。
- ・移動手段が車のみだったので自転車などでも使えるようにしたら良いのでは。
- ・普段の授業では絶対にできないことがたくさんあって、有意義でした。

【その他の施設】

- ・人との交流が楽しかった。人とのふれあいの大切さ、森林についての知識がついた。単に講義を受けるだけでなく、自分から積極的に学ぶことができたと思う。
- ・もう少しニ科尔さんの話を聞く機会が多い方が良かった。
- ・2回生も参加できる様にしてほしい。
- ・予習をもう少ししたかった。
- ・講義の内容は、大教室の講義ではなかなか体験しづらい現地での様々な作業実習に触れることができ、非常に良かったと思います。ただ止むを得ないことではあると思いますが、現地への交通費と宿泊費が少々負担になりました。定員に満たなかった原因になっているかもしれません。
- ・大変充実した内容だったと思います。

Q9 当センターのホームページにアクセスしたことがありますか。内容についてどう思われますか。

- ・たくさん写真が載っていて良かったと思います。あと活動内容なども充実していたと思います。
- ・宿泊施設にあるものを載せてほしかった。
- ・分野ごとにわかれているので分かりやすいと思います。
- ・研究の内容がある程度わかって、興味を持って見ることができました。
- ・海の危険な生物などが載っていておもしろいと思う。
- ・色々な情報があって良かった。
- ・写真しか見てません。すごい所だと思いました。

11) 暖地性積雪地域における冬の自然環境(実習)

森林環境情報学分野 講師 中島 皇

今年度の実習(全学共通科目の後期集中講義)は2011年2月10日～13日に3泊4日で行われた。テーマは「暖地性の積雪(山間)地域における冬の自然環境を体感する。雪氷調査法(入門)を習得し、水が態を変えた雪や氷について理解を深めその影響を考究する。特に人間をはじめとする生物への影響をフィールドで実感する。(シラバス)」である。

今年度は雪の心配はなかった。逆に、1月から雪害が出るほどの雪があり、林道でスノーモービルの活用が難しくなる可能性があった。参加申込みは定員の15名を越えキャンセル待ちが出た。しかし、キャンセルが出たり、前日に病気などの理由で不参加になった者もいて、最終参加者は12名(男7,女5)(学部:文1,工2,農7,総人2)であった。実習は1月後半の説明会から始まる。メンバー15人が顔を合わせ、班毎に夜・朝・昼の食事メニューを食材の量も含めて考える。大学院生のTAとやり取りをして、出発前日或いは前々日に買い出しに行く。現地では自分たちで調理と後片付けまでこなす必要がある。準備する食料の多さに面喰らっているがどうにか準備が出来た。

JRバス周山駅 11:00 集合で実習は始まった。例年なら芦生のマイクロバスが迎えに来てくれるのであるが、芦生までの道にも雪が多いそうで数台の乗用車に分乗することになった。途中の説明は無線を通して車内に流れるような方式を技術職員が考えてくれた。途中の自然環境や人間の暮らしを確認しながら、降る雪に迎えられて芦生に到着した。昼食後はカンジキによる歩行訓練、宿舍周辺の積雪状況を通しての自然観察、雪の造形を写真に撮ってくるというプログラムである。夕食後は芦生研究林の概要説明と各自が撮ってきた写真の発表会でにぎやかであった。

翌朝は握り飯を作って内杉谷林道の自然観察に出発した。つららや霜柱、雪害のため真っ二つに裂かれたスギの木、カーブミラーを足元に見ながら進む。曇り空ながら視界は良好で、お昼は幽仙橋の土場でスープを作った。流量観測の水位計は完全に雪に埋もれてしまっており、これを掘り出すのに時間がかかった。どうにか明日のデッサン用の葉や虫が入っている流出物ネットを回収することが出来た。夜のセミナーはTAの研究紹介である。

3日目はまぶしい太陽が出る天気。積雪に層があり、質に変化があることを調べる積雪調査と雪の中での便利な移動手段であるスノーモービルの試乗に挑戦した。昼食は食堂でとって、午前と午後で班毎に交替した。午後は太陽が顔を出してまぶしく暑いくらいだった。昨日幽仙谷でやっと回収してきた流出物の中にいる水生昆虫について、調査隊の境優さん(地球環境学舎 D3)が説明をしてくれた。皆、動物には興味津々。虫と葉のデッサンを熱心に描いていた。夕食はカレー。夜のセミナーは別に来ていた理学部の中川光さん(動物学研究室 D3)が芦生の川の中の生物を紹介してくれた。これもまた印象的だったようである。

最終日は班毎にレポート作成と各自の感想文、そして宿舍の片付けと掃除で昼食後、芦生研究林の車でJR山陰線の園部駅まで送ってもらって解散になった。帰りの雪景色は名残惜しいものであったのだろうか。



雪のフィールド(幽仙橋土場)



出発の日

(2) 外部資金の獲得状況

(金額の単位はすべて千円)

2010 年度 受託研究

委託者	委託研究名	研究担当者	職種	代表者名 (所属)	研究課題名	分担課題名	2010 年度 交付額
京都市	平成 22 年度八丁平植生継続調査	安藤 信	准教授	-	-	-	547
舞鶴市	舞鶴湾におけるナマコ資源の増殖等に係る研究	山下 洋	教授	-	-	-	11,999
独立行政法人 水産総合研究センター	平成 22 年度西日本日本海側外海砂浜域における既存の環境情報及び生物生産に関する情報の収集・分析委託事業	山下 洋	教授	-	-	-	1,500
広島大学	平成 22 年度クラゲ類の大発生予測・抑制技術の開発委託事業	益田 玲爾	准教授	上 真一 (広島大学)	クラゲ類の大発生予測・抑制技術の開発	魚類との相互関係に基づく大型クラゲの発生制御	2,300
九州大学	平成 22 年度環境研究総合推進費	白山 義久	教授	矢原 徹一 (九州大学)	ポスト 2010 年目標の実現に向けた地球規模での生物多様性の観測・評価・予測	海域生物多様性の評価に関する課題の調査	1,772
独立行政法人 国立環境研究所	平成 22 年度CO2増加が沿岸底生生物と生態系に及ぼす影響に関する研究委託業務	白山 義久	教授	-	-	-	7,500
全国漁業協同組合連合会	平成 22 年度有害生物漁業被害防止総合対策事業のうち、有害生物出現調査及び情報提供事業における有害生物出現調査委託事業	久保田 信	准教授	-	-	-	1,574
千葉県水産総合研究センター	平成 22 年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業	宮崎 勝己	講師	鳥羽光晴 (千葉県水産総合研究センター)	カイヤドリウミグモの寄生被害を回避軽減するためのアサリ放流生産手法の開発	ウミグモ初期寄生強度推定手法の開発	3,600
独立行政法人 科学技術振興機構	京都大学瀬戸臨海実験所所蔵標本データベース	大和 茂之	助教	-	-	-	3,100
株式会社 三菱総合研究所	平成 22 年度環境経済の政策研究業務	佐藤 真行	特定 准教授	-	持続可能な発展へ向けた環境政策・経済システム：GS等の動態分析による政策評価	-	10,000
受託研究	計 10 件						43,892

2010 年度 共同研究

委託者	委託研究名	研究担当者	職種	代表者名 (所属)	研究課題名	分担課題名	2010 年度 交付額
柳田産業株式会社	カワハギによるミズクラゲの防除	益田 玲爾	准教授	-	-	-	3,300
マリンバイオ共同推進機構 (JAMBIO)	2010 年度共同利用・共同研究	宮崎 勝己	講師	-	伊豆半島の海産クマムシ相の解明ー実験好適種の発見を目指して	-	100
共同研究	計 2 件						3,400

(金額の単位はすべて千円)

2010 年度 寄附金

寄付者 (団体)	プロジェクト名称	担当教員	職種	2010 年度 交付額
財団法人 自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	吉岡 崇仁	教授	1,740
芦生山の家	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	芝 正己	准教授	179
針畑ルネッサンスセンター	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	芝 正己	准教授	30
財団法人 美山町自然文化村	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	芝 正己	准教授	250
財団法人 河川環境管理財団	森林・河川連続生態系がもたらす水質浄化機能の解明のための研究助成	徳地 直子	准教授	1,300
財団法人 阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	徳地 直子	准教授	500
サントリーホールディングス株式会社 水科学研究所	竹林生態系機能の定量的把握	徳地 直子	准教授	500
財団法人 阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	寄元 道德	助教	500
財団法人 自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	寄元 道德	助教	1,560
財団法人 阪本奨学会	演習林の研究及び施業運営等の助成	柴田 昌三	教授	500
財団法人 自然環境研究センター	森林生態系の長期動態に関する研究助成金	柴田 昌三	教授	1,800
柴田 昌三	和歌山研究林における研究及び施業運営等の助成	柴田 昌三	教授	196
芦生山の家	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	長谷川 尚史	准教授	127
針畑ルネッサンスセンター 針畑活性化組合	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	長谷川 尚史	准教授	70
財団法人 美山町自然文化村	芦生研究林の環境保全を目的とする助成	長谷川 尚史	准教授	175
サントリーホールディングス株式会社 水科学研究所	都市近郊の里山林における「環境林施業と持続可能なバイオマス利用」に関する研究の助成のため	長谷川 尚史	准教授	1,500
社団法人 林業機械化協会	「作業路面処理が林業機械化の走行に及ぼす影響の検証」に関する研究助成	長谷川 尚史	准教授	1,000
財団法人 京都理学研究協会	海洋生物学に関する研究 (京都理学研)	白山 義久	教授	6,180
財団法人 日本財団	N a G I S A プロジェクトの推進	白山 義久	教授	17,622
寄附金 計 19 件				35,729

(金額の単位はすべて千円)

2010 年度 科学研究費補助金

交付機関	研究種目	研究者	職種	代表者名 (所属)	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	分担課題名	交付額 合計 ※予定を 含む	2010 年 度 交付額
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (A) 海外 学術調査	柴田 昌三	教授	—	2008-2011	20255011	インドミゾラム州における竹類の 面積一斉開拓が地域生態系と 焼畑に及ぼす影響	—	45,760	8,970
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B)	徳地 直子	准教授	—	2007-2010	19380086	森林生態系の加齢に伴う窒素飽和現 象の解明と PhET-CN モデルを用いた 影響予測	—	19,240	4,160
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B)	吉岡 崇二	教授	—	2009-2012	21380096	森林土壌・溪流系における溶存有機 物の動態に関する研究	—	11,050	1,820
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B)	山下 洋	教授	—	2009-2012	21380124	水産重要魚類稚魚の成育場としての 河口・沿岸域生産力の定量評価	—	17,030	4,290
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B)	深見 裕伸	助教	—	2010-2014	22370033	造礁生イシサンゴ類の分子系統およ び化石と現世の形態多様性に基づく 分類本系の再構築	—	18,720	10,920
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (C)	田川 正朋	准教授	—	2008-2010	20580202	カレイ類の形態異常出現機構の解明 と防除一最適な変態「前」成長速度 の推定	—	4,420	1,430
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (C)	田中 克	名誉教授	—	2009-2011	21580225	最も原始的異体類バウズガレイの変 態過程に左右される発生起源を 探る	—	4,940	1,430
(独) 日本学術振興会	挑戦的萌芽 研究	深見 裕伸	助教	—	2009-2011	21657025	温帯域イシサンゴ類共生および寄 生する大型無脊椎動物の多様性およ び進化の研究	—	2,400	1,000
(独) 日本学術振興会	若手研究 (B)	長田 典之	研究員	—	2009-2010	21780140	森林樹木の葉と枝の性質が物質循環 に与える影響	—	2,873	1,560
(独) 日本学術振興会	若手研究 (B)	福島 慶太郎	特定 研究員	—	2010-2012	22780145	森林生態系における窒素流出メカニ ズムの解明と窒素飽和の将来予測	—	4,030	1,820
(独) 日本学術振興会	奨励研究	境 慎二朗	技術専門 職員	—	2010	22925011	鳥類による周食型種子散布の空間分 布特性の解明	—	430	430
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (A)	柴田 昌三	教授	中村 太士 (北海道大 学)	2007-2010	19208013	再生すべき生態系の抽出・復元工法 並びに科学的評価に関する学際的研 究	里山生態系の評 価と再生技術	—	130
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (A)	坂野上なお	助教	山本 博一 (東京大学)	2008-2010	20240074	文化遺産遺物の保存に必要な木材及 び植物性資材の安定循環の基礎的要 件に関する研究	社寺有林 山村 調査、檜皮剥皮 実験	—	910
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B) 海外 学術調査	徳地 直子	准教授	杉本 敦子 (北海道大 学)	2009-2012	21403011	東シベリアタイガ林の生態系機能変 動解明	樹木の窒素利用 解析	—	130
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (C)	中山 耕至	助教	木下 泉 (高知大学)	2008-2010	20580203	諫早湾締め切り干拓が本当に有明海異 変を引き起こしたのか?	—	—	78
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (S)	徳地 直子	准教授	石川 登 (京都大学 東南アジア 研究班)	2010-2014	22221010	東南アジア熱帯域におけるブランテ ーション型バイオマス社会の総合的 研究	混合ランドスケ ープにおける生 物多様性の空間 構造と物質循環 (生態学的ロー カル連携)	—	575
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B)	中山 耕至	助教	中坊 徹次 (京都大学 総合博物 館)	2008-2010	20370034	日本近海における海洋構造物区分と対 応した海産魚類の歴史生物地理学的 研究	—	—	1,150
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B)	甲斐 嘉晃	助教	中坊 徹次 (京都大学 総合博物 館)	2008-2010	20370034	日本近海における海洋構造物区分と対 応した海産魚類の歴史生物地理学的 研究	日本海を中心と する魚類の遺言 学的・形態学的 分析	—	920
環境省	循環型社 会形成推 進研究 費補助金	佐藤 真行	特定 准教授	山川 肇 (京都府立 大学)	2008-2010	K22085	リデュース・リユースの分析・評価 手法の体系化とその適用研究	—	—	421

交付機関	研究種目	研究者	職種	代表者名 (所属)	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	分担課題名	交付額 合計 ※予定を 含む	2010 年 度 交付額
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B) 海外 学術調査	柴田 昌三	教授	小林正美 (京都大学 地球環境学 堂)	2008-2011	20401008	インドシナ地域での社会的弱者層を取りまく緩慢なるハザードの実態と地域復元力の解明	人間活動の生態環境へのインパクト評価	-	-
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (A)	山下 洋	教授	渡邊 良朗 (東京大学)	2007-2010	19208018	生態的特性を基礎とした浅海資源の管理・増殖手法の確立	-	-	-
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (B) 海外 学術調査	中西 麻美	助教	縄田 栄治 (京都大学 農学研究科)	2008-2010	20405048	経済発展とグローバリゼーション進行下における伝統的植物流資源利用の変容	農業生態系解析	-	-
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (A)	中西 麻美	助教	柴田 英昭 (北海道大学)	2010-2012	22248016	気候変動による積雪変化が森林土壌の物質循環過程に及ぼす影響	近畿積雪地域での現地調査・観測	-	-
(独) 日本学術振興会	基礎研究 (A) 海外 学術調査	長谷川 尚史	准教授	柴田 昌三 (京都大学 フィールド研)	2008-2011	20255011	インドミゾラム州における竹類の大量開花が地域の生態系と焼畑に及ぼす影響	-	-	-
科学研究費補助金 計 24 件										42,144

2010 年度 科学研究費補助金（特別研究員奨励費）

交付機関	研究者	職種	指導教員名	研究期間 (年度)	課題番号	研究課題名	交付額 合計 ※予定を 含む	2010 年 度 交付額
(独) 日本学術振興会	大沼 (大久保) 奈弥	特別研究員 (PI)	深見 裕伸	2008-2010	20・2948	サンゴの種多様性維持を目的としたキクメイシ科サンゴの種子生産技術の開発	2,400	800
(独) 日本学術振興会	佐藤 拓哉	特別研究員 (SP)	徳地 直子	2010-2012	22・2194	生態系間相互作用と生態系機能：寄生者を介した森林資源輸送の可視化と生態系に与える影響	7,500	2500
(独) 日本学術振興会	西本 篤史	特別研究員 (DCI)	白山 義久	2010-2012	22・2580	海産丸木における生物群集形成プロセスの解明	2,100	700
科学研究費補助金（特別研究員奨励費） 計 3 件								4,000

2010 年度 研究助成金（学生取得分）

助成機関	プロジェクト名称	学生氏名	所属・学年	指導教員名	2010 年度 交付額
財団法人 日本科学協会	平成22年度笹川科学研究助成	藤田 純太	農学研究科応用生物学専攻 博士課程1回生	山下 洋	650
財団法人 黒潮生物研究財団	平成22年度研究助成	藤田 純太	農学研究科応用生物学専攻 博士課程1回生	山下 洋	200
財団法人 日本科学協会	平成22年度笹川科学研究助成	宮島 悠子	農学研究科応用生物学専攻 修士2回生	益田 玲爾	510
財団法人 日本科学協会	平成22年度笹川科学研究助成	高橋 宏司	農学研究科応用生物学専攻 博士課程3回生	益田 玲爾	525
財団法人 日本科学協会	平成22年度笹川科学研究助成	連 怡婷	農学研究科応用生物学専攻 博士課程2回生	深見 裕伸	730
研究助成金（学生取得分） 計 5 件					2,615

(3) 2010 年度 フィールド科学教育研究センターにおける主な取り組み（日記）

- (1) 2010 年 4 月 1 日
北海道研究林長・芦生研究林長・上賀茂試験地長・北白川試験地長が交代
- (2) 2010 年 4 月 1 日
森林フィールド管理部門の勤務地が、北白川試験地から北海道研究林に移動
- (3) 2010 年 4 月～
2010 年度新入生向け少人数セミナーを開講

<ul style="list-style-type: none"> ・「C. W. ニコル “アフエンの森” に学ぶ」 ・「フィールド実習 “森は海の恋人”」 ・「木造校舎を造る：木の文化再生へ」 ・「環境と魚の河口域生態学入門」 ・「海岸生物の生活史」 ・「海洋生物の多様性」 ・「魚類心理学入門」 ・「原生的な森林の働き」 ・「森のつくりだすもの」 ・「森里海のつながりを清流古座川に見る」 ・「豊かな森をめざして！」 ・「海産無脊椎動物一分類群と形の多様性」 ・「お魚好きのための魚類研究入門」 ・「サンゴ礁生態学入門」 ・「環境の評価」 ・「瀬戸内に見る森里海連環」 ・「京をめぐる森と人のくらし」 	<ul style="list-style-type: none"> (アフエンの森) (気仙沼) (上賀茂試験地) (舞鶴水産実験所) (瀬戸臨海実験所) (瀬戸臨海実験所) (舞鶴水産実験所) (上賀茂試験地、芦生研究林) (和歌山研究林) (紀伊大島実験所) (芦生研究林) (瀬戸臨海実験所) (舞鶴水産実験所) (瀬戸臨海実験所) (芦生研究林) (徳山試験地) (上賀茂試験地・北白川試験地) 	<ul style="list-style-type: none"> 柴田 昌三 他 白山 義久 他 柴田 昌三 他 山下 洋 久保田 信 白山 義久 益田 玲爾 中島 皇 徳地 直子 梅本 信也 芝 正己 宮崎 勝己 田川 正朋 他 深見 裕伸 吉岡 崇仁 中島 皇 寄元 道德 他
---	---	---
- (4) 2010 年 4 月～7 月
全学共通科目（リレー講義）「水圏生物学入門」開講（日本財団助成講義）
- (5) 2010 年 4 月～
瀬戸臨海実験所において和歌山県紀の国森づくり基金活用事業「小・中・高・大連携による紀南地域の森林環境学習」として、田辺市内の会津川流域に位置する三栖小学校・高雄中学校・神島高等学校の 3 校を対象に、学習会、デジタルパックテストによる河川環境の調査、間伐体験の活動等を実施
- (6) 2010 年 3 月 28 日～4 月 3 日
瀬戸臨海実験所において、2009 年度公開臨海実習（春期）を実施 参加者 11 人
- (7) 2010 年 3 月 25 日～4 月 7 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において「日替わり解説ツアー・バックヤードツアー」を開催 参加者：一般 56 人、バックヤード（小学生以上）64 人（うち 4 月 1 日以降は、それぞれ 37 人、42 人）
- (8) 2010 年 4 月 10 日～
古座川合同調査（随時開催）
- (9) 2010 年 4 月 15 日
大西珠江理事（財務担当）が舞鶴水産実験所を視察
- (10) 2010 年 4 月 17 日、5 月 15 日、6 月 12 日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」を開催 参加者 計 21 人
- (11) 2010 年 4 月 20 日～1 月 18 日（通年開催）
和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催でウッズサイエンスを開講（週 1 回・計 25 回 3 年生 3 人）
- (12) 2010 年 4 月 24 日
全日空「私の青空・小松空港・安宅関の森」において、フィールドセミナー（青空塾）を開催

- (13) 2010 年 4 月 24 日
上賀茂試験地において「2010 年度上賀茂試験地春の自然観察会」を開催 参加者 25 人（応募 57 人）
- (14) 2010 年 5 月 11 日
舞鶴水産実験所において、京都府立海洋高等学校海洋科学科の生徒に対して、講義と施設案内（27 人）
- (15) 2010 年 5 月 11 日・6 月 22 日・7 月 20 日・2011 年 1 月 13 日・2 月 21 日
海域陸域統合管理学研究部門が、海域陸域統合管理学セミナーを開催（日本財団助成） 参加者延べ 60 人
- (16) 2010 年 5 月 12 日
和歌山研究林において、和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催で「SIMIZU タイム」（ふるさと体験）を実施（1 年生 24 人）
- (17) 2010 年 5 月 17 日
舞鶴水産実験所が、舞鶴生活学校定期総会において、講演「魚の目から見た舞鶴のゆたかさ」を実施（参加者 50 人）
- (18) 2010 年 5 月 22 日
全日空「私の青空・三宅島空港（三宅島）・アカコッコの森」において、フィールドセミナー（青空塾）を開講
- (19) 2010 年 5 月 29 日
舞鶴水産実験所において、兵庫県立神戸高等学校の生徒に対して実習（SSH 事業）を実施（42 人）
- (20) 2010 年 5 月 29～30 日
芦生研究林において、NPO 法人エコロジー・カフェと共催で、第 5 回エコの寺子屋を開講 参加者 10 人
- (21) 2010 年 6 月 1 日～2011 年 1 月 10 日
瀬戸臨海実験所において、開館 80 周年記念特別展 内海富士夫展を開催
- (22) 2010 年 6 月 4 日
和歌山研究林において、有田川町立八幡小学校との共催で、総合的な学習の時間「森は友だち森林の町清水」を実施（5 年生 12 人）
- (23) 2010 年 6 月 5 日
芦生研究林において、芦生の森自然観察会 入門編「春の森を歩きながら樹木観察をしよう」を開催 参加者 21 人（応募者 195 人）
- (24) 2010 年 6 月 5 日
全日空「私の青空・根室中標津空港・シマフクロウの森」において、フィールドセミナー（青空塾）を開催
- (25) 2010 年 6 月 11 日
舞鶴水産実験所が綾部市中央公民館主催の綾部市ふるさと自然講座において、講演「日本海の生物と外来生物」
- (26) 2010 年 6 月 13 日、10 月 3 日、12 月 12 日
徳山試験地において、周南市「みどりの案内人養成プロジェクト」実行委員会と共催で、「みどりの案内人養成プロジェクト」特別講座を開催 参加者 6 月 20 人・10 月 18 人・12 月 14 人
- (27) 2010 年 6 月 15 日
大西珠枝理事（財務担当）が瀬戸臨海実験所を視察
- (28) 2010 年 6 月 22 日
北海道研究林において、標茶町立沼幌小学校との共催で木工教室を実施（2～6 年生 9 人）
- (29) 2010 年 6 月 25 日
舞鶴水産実験所が、京都府の SKY 大学主催の講座において、講演「海から見た舞鶴のゆたかさ」 参加者 45 人
- (30) 2010 年 6 月 30 日
和歌山県古座川町において「第 11 回古座川シンポジウム」を開催（紀伊大島実験所、古座川流域協議会共催） 参加者 38 人
- (31) 2010 年 7 月 1 日
プロジェクト支援室・特定研究員が着任
- (32) 2010 年 7 月 1 日
6 月 30 日の理学研究協会の解散に伴い、7 月 1 日付で、京都大学が理学研究協会の土地、建物等（瀬戸臨海実験所）の資産を受け入れ
- (33) 2010 年 7 月 1 日
大西珠枝理事（財務担当）が上賀茂試験地を視察

- (34) 2010年7月1日
人事異動 芝准教授 琉球大学へ異動／深見助教 宮崎大学へ異動
- (35) 2010年7月1日
北白川試験地長が交替
- (36) 2010年7月12, 22～23日, 9月18日
舞鶴水産実験所において、文部科学省によるH22年度サイエンスパートナーシッププログラム（SPP事業）による「講座型学習活動（プランA）」として、京都府立西舞鶴高等学校の生徒に対し講義を実施（理数探求科2年生44人 7月12日は実習前講義・9月18日は実習成果発表会）
- (37) 2010年7月16日
京都産業会館におけるエコロジー・カフェ主催の第3回関西事務所シンポジウム「食文化と生物多様性から環境を考える」において、白山センター長が講演「海洋生物から見る生物多様性」
- (38) 2010年7月17日
舞鶴水産実験所が、京都府立南陽高等学校において、サイエンスリサーチ科1年生に対して、講義「生物の多様性とそれを探る科学的方法」と解剖学実習（40人）
- (39) 2010年7月24日
北海道研究林白糠区において、ミニ公開講座「自然観察，草木染め」を実施（参加者13人）
- (40) 2010年7月25日
時計台記念ホールにおいて、アサヒビール環境文化講座特別シンポジウム「自然の恵みを明日へ」を開催（アサヒビール株式会社，社団法人日本環境教育フォーラム主催，フィールド研共催）白山センター長がパネリストとして参加
- (41) 2010年7月27日
舞鶴水産実験所が、兵庫県立西宮今津高等学校に対して「フィールド科学実習」を実施（2年生19人）
- (42) 2010年7月27日
芦生研究林において、美山町第4学年合同自然体験教室「美山っ子グリーンワールド」を開催 参加者41人（南丹市美山町内小学校共催）
- (43) 2010年7月28～30日
舞鶴水産実験所において、京都教育大学附属高等学校のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）クラスの臨海実習参加者に対して特別講義と実習（1年生20人）
- (44) 2010年7月30日～8月1日
フィールド科学教育研究センター公開講座2010「森のしくみとその役割」を芦生研究林において開催 参加者23人
- (45) 2010年8月1日
北海道研究林標茶区において、ミニ公開講座「自然観察，草木染め」を実施（参加者10人）
- (46) 2010年8月1～31日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、日替わり解説ツアー及びバックヤードツアーを毎日開催 参加者526人
- (47) 2010年8月3～11日
瀬戸臨海実験所において、公開臨海実習を実施（国立大学法人臨海臨湖実験所長会議 主催・4人）
- (48) 2010年8月3～4日
舞鶴水産実験所他において、京都府立南陽高等学校サイエンスリサーチ科のサイエンスキャンプとして、舞鶴臨海実習を実施（43人）
- (49) 2010年8月5日
平井紀夫監事が舞鶴水産実験所を訪問
- (50) 2010年8月8～12日
全学共通科目（1～4回生対象）森里海連環学実習A（芦生研究林－由良川－丹後海コース）を開講（日本財団助成実習・参加者10人）
- (51) 2010年8月16日
隔地教員研究室が、旧演習林本部事務室棟の改修工事のため、農学部総合館地階N032へ移転
- (52) 2010年8月17日
舞鶴水産実験所が舞鶴市小学校教育研究会社会科夏季研究会において講演「日本近海の水産資源と栽培漁業」 参

加者 15 人

- (53) 2010 年 8 月 18 日
舞鶴水産実験所が、綾部市学校教育研究会（綾部市内の小中学校の理科部所属教員）の夏季研究会において、講義や指導 参加者 25 人
- (54) 2010 年 8 月 20 日～25 日
エコロジー・カフェと共催で「森里海学びツアー in 志津川・気仙沼」を開催
- (55) 2010 年 8 月 24 日～25 日
和歌山研究林が芦生研究林において、森林体験学習を開催（和歌山県立有田中央高等学校清水分校と共催、全日空との提携、1 年生 22 人）
- (56) 2010 年 8 月 22 日
高知県土佐市グランディール(旧ウエディングプラザ寿苑)において、「仁淀川の森と水を考える」シンポジウム 2010 を開催（仁淀川漁業協同組合主催・フィールド研後援）
- (57) 2010 年 8 月 29 日～9 月 5 日
北海道研究林標茶区・白糠区において、全学共通科目「北海道東部の人と自然」（農学部科目「研究林実習 III 夏の北海道」）の実施（18 人）
- (58) 2010 年 8 月 31 日
和歌山研究林において、有田川町立白馬中学校との共催で、総合的な学習の時間を実施（1 年生 9 人）
- (59) 2010 年 9 月 6～12 日
全学共通科目（1～4 回生対象）森里海連環学実習 C 京大・北大合同実習（夏の北海道実習）を開講（日本財団助成実習・京都大学 7 人、北海道大学 10 人）
- (60) 2010 年 9 月 6～8 日
上賀茂試験地・芦生研究林・北白川試験地において、公開森林実習（人間環境大学他）を実施 参加者 5 人
- (61) 2010 年 9 月 10 日
芦生研究林において、京都市立葛野小学校との共催で、総合的な学習の時間を実施（85 人）
- (62) 2010 年 9 月 14 日
舞鶴市商工観光センターで開催された「ネイチャーガイド養成講座」に舞鶴水産実験所が講師を派遣
- (63) 2010 年 9 月 16～22 日
全学共通科目（1～4 回生対象）森里海連環学実習 B 京大・北大合同実習（紀伊半島の森と里と海）を開講（日本財団助成実習・京都大学 6 人、北海道大学 9 人）
- (64) 2010 年 9 月 17 日・10 月 15 日
和歌山研究林において、有田川町産業課との共催で「紀の国森づくり基金活用事業」の一環として町内川下の小学生を対象に「森とあそぶまなぶ」森林体験学習を実施（有田川町産業課との共催・9 月 17 日：有田川町立田殿小学校 4 年生 33 人・10 月 15 日：石垣小学校 23 人）
- (65) 2010 年 9 月 19 日
舞鶴水産実験所が、舞鶴市西市民プラザで開催された第 2 回舞鶴高等教育機関等合同 P R 事業において展示解説及び講演「由良川の自然探検」 参加者 500 人
- (66) 2010 年 9 月 22～23 日
瀬戸臨海実験所において、エコロジー・カフェと共催で、第 6 回南紀白浜まなびツアーを開催 参加者 1 人
- (67) 2010 年 9 月 24 日～26 日
国際高等研究所において、国際高等研究所他と共催で、公開シンポジウム「森里海連環と地球的課題」を開催 参加者延べ 178 人
- (68) 2010 年 9 月 25 日
京都大学ジュニアキャンパス 2010 において、中学生向けゼミ「森の作るおいしい水」を実施 参加者 中学生 18 人・保護者 8 人（京都市教育委員会と共催）
- (69) 2010 年 9 月 28 日～30 日
和歌山研究林において、総合的な学習の時間「職業体験学習」を開催実施（有田川町立八幡中学校との共催 2 年生 6 人）
- (70) 2010 年 10 月 1 日
里域フィールド管理部門の勤務地が、上賀茂試験地から北白川試験地に移動

- (71) 2010年10月5日～
全学共通科目(リレー講義)「森里海連環学ー森里海のつながりー」「沿岸環境保全学」「森林学」を開講(日本財団助成講義)
- (72) 2010年10月14日
芦生研究林において、京都市立大枝小学校との共催で、総合的な学習の時間を実施(76人)
- (73) 2010年10月18日～19日
財務部長が、瀬戸臨海実験所および和歌山研究林を視察
- (74) 2010年10月19日
舞鶴水産実験所において、舞鶴市立中保育所の子供たちに対して、ふるさと保育や環境モデル事業の一環として見学、講話(43人)
- (75) 2010年10月23日
徳山試験地において、櫛浜・久米・大島・杵島・菊川・中央公民館と共催で、周南市環境学習教室「森林とふれあい自分だけのオリジナル図鑑を作ってみよう」を開催(小学生27人)
- (76) 2010年10月26日～27日
塩田浩平理事(総務・人事担当)が北海道研究林を視察
- (77) 2010年10月29日
芦生研究林において、京都府立北桑田高等学校森林リサーチ科1年生に対して、「環境科学基礎」の校外学習を開催(30人)
- (78) 2010年10月30日
高知サンライズホテルにおいて、京都大学高知講演会・第2回仁淀川地域連携講座「森・里・海」を開催(日本財団助成) 参加者約150人
- (79) 2010年10月30日、12月4日、2011年2月6日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の飼育体験」を開催 参加者約26人
- (80) 2010年11月1日
川井秀一副理事(宇治・遠隔地キャンパス担当)が、瀬戸臨海実験所を視察
- (81) 2010年11月5日
舞鶴水産実験所において、舞鶴市立大浦小学校5・6年生を対象として、講演「環境について考えよう 舞鶴の海と魚」を実施(参加者34人)
- (82) 2010年11月6日
厚岸町情報館「本の森」において第3回別寒辺牛川地域連携講座「流域管理と住民参加ー環境保全の担い手へー」を開催(厚岸町・標茶町と共催・日本財団助成) 参加者80人
- (83) 2010年11月6日～7日
北海道研究林標茶区において標茶町教育委員会「しべちゃアドベンチャースクール」第4ステージを開催(北海道研究林後援) 参加者17人
- (84) 2010年11月11日
和歌山研究林において、有田川町立八幡小学校との共催で、総合的な学習の時間「森を守ろう」を実施(5年生11人)
- (85) 2010年11月13日
上賀茂試験地において、「2010年上賀茂試験地秋の自然観察会」を開催 参加者33人(応募者37人)
- (86) 2010年11月13日
北白川試験地において、京都大学ホームカミングデー参加者の見学会を開催 参加者約34人
- (87) 2010年11月20日
第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」を開催 参加者210人
基調講演：田中 克(国際高等研究所フェロー)・久山 慶子(フィールドソサイエティ事務局長)
講演：天野 礼子(作家) 報告：上野 正博
パネルディスカッション：田中 克、久山 慶子、天野 礼子、上野 正博(パネリスト)、白山 義久(コーディネーター)
- (88) 2010年11月24日
吉田事業所産業医が和歌山研究林を巡視

- (89) 11月26日～11月27日
日吉町森林組合間伐作業山林及び京都府立るり溪少年自然の家における第17回森林生産システム研究会の開催に、芦生研究林が後援
- (90) 2010年12月4日
ホテルロイヤルヒル福知山において、第2回由良川市民講座『森・里・海の対話』を開催（京都府中丹広域振興局との共催・日本財団助成・参加者 約130人）
- (91) 2010年12月13日
「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」（木文化プロジェクト）のウェブページを一般公開
<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/proshien/kibunka/index.html>
- (92) 2010年12月16日
紀伊大島実験所が、和歌山県古座川町において「第12回古座川シンポジウム」を開催（紀伊大島実験所、古座川流域協議会共催）参加者30人
- (93) 2010年12月25日～2011年1月10日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、日替わり解説ツアーと、バックヤードツアーを毎日開催
参加者：一般151人、バックヤード（小学生以上）142人
- (94) 2011年1月15日・29日・2月5日・12日
京都大学東京オフィスにおける「東京で学ぶ 京大の知 シリーズ2 生きものの多様な世界」において、連続講演「人類の夢、不老不死のベニクラゲの神秘」・「海洋生物の行動学」「マツ枯れナラ枯れ」「海洋生物の生物多様性」
参加者延べ312人
- (95) 2011年1月22～23日
北海道研究林標茶区において標茶町教育委員会「しべちャアドベンチャースクール」第5ステージを開催（北海道研究林後援）参加者18人
- (96) 2011年2月8日
百周年時計台記念館京大サロンにおける第66回京大サロントークにおいて講演
- (97) 2011年2月10日～13日
全学共通科目「暖地性積雪地域における冬の自然環境」を芦生研究林にて開講
- (98) 2011年2月12日
京都大学総合博物館レクチャーシリーズ no. 87 ジュニアレクチャーにおいて、講演「めったに咲かない竹の花が咲くとき…」を実施
- (99) 2011年2月21～23日
2010年度新入生向け少人数セミナー「日本海に遊ぶ～日本海学入門」（舞鶴水産実験所・上野 正博）を開講
- (100) 2011年2月21～27日
北海道研究林標茶区・白糠区において、全学共通科目「北海道東部の厳冬期の自然環境」（農学部科目「研究林実習Ⅳ冬の北海道」の実施（16人）
- (101) 2011年2月24日
協議会を開催
- (102) 2011年2月26日
瀬戸臨海実験所附属水族館において、きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の飼育体験」を開催
- (103) 2011年3月4日
運営委員会を開催
- (104) 2011年3月17日
紀伊大島実験所が、和歌山県古座川町において第13回古座川シンポジウムを開催（紀伊大島実験所、古座川流域協議会共催）参加者30人
- (105) 2011年3月20～26日
瀬戸臨海実験所において、2010年度公開臨海実習（春期）を実施 参加者12人
- (106) 2011年3月25日～31日
瀬戸臨海実験所附属水族館において「日替わり解説ツアー・バックヤードツアー」を開催（3月25日から31日まで、参加者 解説ツアー 65人・バックヤードツアー 62人）

●●● 2. 各施設等における活動の記録 ●●●

(1) 各施設の活動概要

1) 芦生研究林

芦生研究林長 長谷川 尚史

■教育研究

2010 年度における芦生研究林の利用者総数は延べ 10,539 名であり、ほぼ前年並みであった。実習等の教育利用者数は 2,329 名で、前年 (2,157 名) より増加した。そのうち学内利用が 21 件と 2 件減少したが、他大学の利用が 5 件で 4 件増加した。また研究利用者数は 2,078 名 (前年度 1,569 名) であり、学内利用が 35 件、他大学等が 27 件であった。研究利用申請件数は年々増加しており、特に他大学の研究指導のためのフィールドとして利用されるケースも増えている。一方、フィールド研では平成 21 年度から文部科学省の概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」が行われており、芦生研究林下谷流域に間伐試験地が設定された。ここでは平成 23 年度に間伐を行うこととしており、本年度は間伐試験地における定期的な採水のほか、量水堰の設置および測量を行った。また近年、ニホンジカによる天然林植生の衰退が深刻となっており、様々な分野の研究者が主体となって芦生生物相保全プロジェクト (ABC プロジェクト) が組織されている。16ha の集水域をシカ防護柵で囲うなどの大規模なシカ排除試験が行われており、芦生研究林職員も調査に協力している。本年度も冬期および春期における柵の撤去・再設置作業等に協力した。

■社会連携

フィールド研主催事業として芦生公開講座「森のしくみとその役割」を、歴代演習林長を講師に迎えた第 20 回記念大会として開催した。また芦生研究林主催事業として「芦生の森自然観察会」を春と秋に企画した (秋は台風のため中止)。共同開催事業としては、森林体験学習 (和歌山県立有田中央高校清水分校)、自然体験教室 (美山町内小学校第 4 学年)、郊外森林体験実習プログラム (京都府立北桑田高校)、長期宿泊・自然体験推進事業 (京都市内 2 小学校) が昨年に引き続き行われた。公共団体等が主催する教育講座としては、地域の宿泊施設である芦生山の家、美山町自然文化村、針畑ルネサンスセンターからのガイドツアーを受け入れたほか、NPO 法人や地方自治体が主催する各種の市民講座へのフィールド提供と研究林内での講義、研修への協力などを行った。一方、グリーンツーリズムや環境問題に関する社会的関心の高まりから原生的森林を有する芦生研究林が注目され、取材依頼が急増した。本年は新聞への 1 年間の連載を含む報道関係や出版関係からの 14 件の取材申請があり、教育研究機関としての立場からそれぞれ取材に協力した。その他、南丹市日吉町森林組合において開催された森林生産システム研究会 (177 名) への後援を行った。

■施設の特記事項

平成 22 年度中国・四国・近畿地区大学附属演習林等技術職員研修が獣害・虫害防除をテーマに開催され、10 大学 14 演習林から 15 名の参加者があった。従来、近畿地区が単独で行っていた研修を、中国・四国地区と合同で実施する初めての研修となったが、参加者の意識が高く、各演習林の被害状況の紹介や対処方法など、良い情報交換の機会となった。一方、全国の大学への実習科目提供の試行として、全国大学演習林協議会との連携事業である公開森林実習を企画したが、周知期間を充分に取ることができず応募者がなかった。そこで「京都大学公開森林実習近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴」を開催し、2 大学から 5 名の参加者を集め、公開形式の学生実習の開催における諸課題を検討した。

教育利用において学生実習が減少した理由のひとつは、学休期間に学生実習を集中的に開催せざるを得ないことが挙げられる。学生実習用施設の定員は 35 人であり、大人数の学生実習や、同時に複数の学生実習を受け入れることは不可能である。実習開催中の研究宿泊利用を断るなどして対応しているが、今後は他大学の学生実習の受け入れ拡大も検討しており、宿泊施設の拡充と長期滞在用施設の充実、さらには実習開催可能期間の延長のための除雪機能の拡充を図ることが、喫緊の課題となっている。社会連携においては、一般市民の芦生研究林の認知度は年々高まっており、京都大学の社会に対する窓口の一つとして重要な位置を占めつつある。本年度は、芦生をコアエリアにして国定公園化する案も公表された。しかし近年、過去のナラ枯れ被害木の倒木、枝の落下が多くなっており、場所によっては歩行が危険な状況となっている。現在、一般市民の入林ポリシーの見直しや一般入林可能エリアの再検討を行っている。

2) 北海道研究林

北海道研究林長 吉岡 崇仁

■教育研究

北海道研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の3つの国立公園と至近距離にあり、その地理的特性を生かして全学共通および農学部の実習が年3回行われた。

「北海道東部の人と自然・研究林実習III」は、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに間伐施業などを体験する。8月29日～9月5日の8日間、農学部、経済学部、総合人間学部の2～4年生18名が参加した。「森里海連環学実習C」は北海道大学と共同で行っているもので、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質・水生生物調査を通じて、森-里-海の繋がりを学ぶ。9月6日～9月12日の7日間、標茶管理棟と北海道大学厚岸臨海実験所を拠点に、本学理学部、農学部、総合人間学部の1～4年生8名と、北海道大学、工学部、農学部1年生6名の計14名が参加した。「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習IV」は、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学ぶ。2月21日～2月27日の7日間、農学部、文学部、法学部、総合人間学部、理学部、工学部1～4年生16名が参加した。

■社会連携

「木工体験学習（沼幌小学校共催）」は、自然の中で木工工作を体験し、木工に対する興味・関心や自然に対する敬愛心を育てることを目的としている。6月22日に小学生9名が参加した。北海道研究林主催の夏休みミニ公開講座『自分だけの森の色を見つけよう「自然観察・草木染め」』は、自然観察と構内にある植物を使つての草木染めを通して、自然界にある色の美しさと変化の面白さを体験してもらうことを目的とする。7月24日白糠区に小学生、保護者等13名と、標茶区は8月1日10名が参加して行われた（「主な取り組み」を参照）。「しべちやアドベンチャースクール ジュニアリーダー養成講座（標茶町教育委員会共催）」は、地元にある京都大学研究林を知るとともに、森林の役割や樹木の観察・識別法を学ぶことを目的とする。11月6日～7日に小学生5名と、リーダーの高校生5名が参加した。さらに、「冬の野外活動」と題して、1月22日～1月23日にも実施され、ここでは、スノーシューを着用して冬の樹木の様子や雪上の動物の足跡を観察し、厳しい寒さに立ち向かう動植物の知恵を学ぶことが目的とされた。小学生8名が参加した。

■施設の特記事項

北海道森林整備加速化・林業再生事業の間伐事業として北海道研究林（標茶区）無間伐のカラマツ人工林16.99haについて、標茶町森林組合を事業主体として補助金事業を実施した。平成21～23年度に計画の林野庁の「緑の産業再生プロジェクト（森林整備加速化・林業再生事業）」の補助金事業として取り組まれたものであり、国の出資金事業を北海道（各総合振興局）が補助事業の主体となり京都議定書の目標とする森林吸収量の達成に向け北海道全体で2万haを整備するという計画である。なお、間伐地は、補助事業実施後10年は施業対象地外となる。

北海道林業試験場より研究課題「森林及び林業分野における温暖化緩和技術の開発」の中で、試験場が開発した炭素固定能の高いグイマツF1品種「クリーンラーチ」について、林分成長特性などを解明し二酸化炭素吸収量を推定する取り組みがあり、様々な環境下（場所）に試験地を設定し「クリーンラーチ」の環境適応性を明らかとするため、釧路地域において試験地を設定したいとの依頼があり、当研究林に試験地を設定することにした。22年度中に試験地の選定、区画測量、地拵、植栽詳細区画設定、無償提供されるクリーンラーチ以外のグイマツF1、カラマツの苗木の予約手配などを実施した。試験地は10林班ろ2の不成績造林地を分割し改植することにした。地拵面積は0.82haで実際の植栽面積は0.68ha、鹿柵設置のため管理面積を設けた。植栽は23年度に行う予定である。北海道研究林として試験地を提供し、事業に協力するとともに共同研究につなげて行くことで技術職員の様々な研究技術の向上に繋げていきたい。

3) 和歌山研究林

和歌山研究林長 柴田 昌三

■教育研究

和歌山研究林は、2010 年度に 16 件の研究利用申請を受け付け、延べ 519 人日の研究利用を受け入れた。学内からの利用はフィールド研教職員や農学研究科、理学研究科、東南アジア研究所からの利用が中心であったが、学外からの利用も多く、名古屋大学高等研究院、名城大学農学部、東京農業大学生物産業学部、近畿大学農学部、東京大学大学院農学生命科学研究科、三重大学大学院生物資源学研究科、鳥取大学農学部、奈良女子大学共生科学研究センター、大阪府立大学大学院文学研究科、奈良教育大学が利用した。また学内霊長類研究所を介してアメリカ人研究者の利用も検討したが、予算的な問題からこの利用は断念された。大学関係以外からは、地元和歌山県下からのさまざまな研究者の利用も多かった。主な利用者の所属する組織は、和歌山県立博物館、和歌山県立環境衛生研究センター、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課、日本野鳥の会和歌山県支部、であり、県外からは(株)環境総合テクノスからの利用があった。

一方、教育利用としては 10 件の申請を受け、許可した。延べ 339 人日の利用があった。学内からの利用はフィールド研教員による少人数セミナーがあった。これ以外利用は大阪府立大学大学院生命環境科学研究科による「緑地環境科学実験実習Ⅱ」、有田川町内の小中高等学校による各種体験学習であった。高校の利用は県立有田中央高等学校清水分校による授業である「ウッズサイエンス」と SHIMIZU TIME(森林ウォーク)と名付けられた授業の利用であった。ウッズサイエンスでは、年間を通じて合計 23 回の利用があった。中学校からは有田川町立白馬中学校から「森林体験学習」、同町立八幡中学校から「職場体験学習」の利用を受け入れた。小学校からは同町立八幡小学校から 2 つの授業、「森は友だち森林の町清水」、「森を守ろう」を受け入れたほか、同町立田殿小学校と同町立石垣小学校から「森とあそぶまなぶ」と名付けられた授業を受け入れ、それぞれに対して技術職員を中心とする対応が行われた。

■社会連携

社会連携事業のうち、和歌山研究林が主体的に行っている地元小中高等学校に対する連携事業はすでに述べたとおりであるが、このうち、田殿小学校と石垣小学校による授業は、有田川町産業課主催「紀の国森づくり基金活用事業」として実施した。

■施設の特記事項

2010 年度には和歌山研究林は、念願のインフラストラクチャーの充実が進捗した。まず、インターネット環境の整備が 2010 年 12 月に完成し、光回線の導入により、本部地区と同等あるいはそれ以上のインターネット環境が実現した。また、2010 年度事業として町のご理解により、事務所前までの未舗装道路 3.0km の舗装が開始された。舗装の完成は翌年度に持ち越されたが、その実現は間近である。

部局内措置としては、気象観測機器の整備が実施できた。これまで、観測機器が設置されていた場所は特に湿度が高いことから、高湿度環境における観測結果に疑問が持たれていたが、高湿度環境での観測にも対応した機器への更新によって、観測結果は改善されたと思われる。

4) 上賀茂試験地

上賀茂試験地長 安藤 信

■教育研究

上賀茂試験地では、2010 年度の利用申請が計 68 件あり、教育、研究に市民の見学等の利用も加えると延べ 2,300 人が訪れた。

教育に関しては 17 件の申請があり、利用者数は 891 人であった。内訳は、フィールド研、農学部森林科学科、理学部、農学研究科地域環境科学専攻、大学院地球環境学舎、生態学研究センター等の学内の利用が 12 件で、学外は京都府立大学、京都教育大学、京都精華大学、京都造形芸術大学によるものであった。また、他大学の学生を対象にした「森林公開実習－近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴－」が本試験地と芦生研究林を拠点として 2 泊 3 日のプログラムで始まった。

研究に関しては 38 件の申請があり、利用者数は 730 人であった。学内からの申請件数が 80%近くを占め、本部キャンパスから至近の距離に所在する本試験地の立地特性は、フィールドを対象とする研究者にとっても貴重である。また、民間団体からの利用も 13 件あり、本試験地が収集した国内外の見本樹や植生が大きな魅力になっていることが伺える。

■社会連携

社会連携活動として、2010 年度も春と秋に 2 回の自然観察会を開催した。春の観察会には 25 人、秋には 33 人の参加があり、応募者にはリピーターも多い。これらの活動以外にも、学内外の諸団体が主催する観察会を積極的に受け入れた。

■施設の特記事項

本試験地では、2010 年度の夏に水害、境界問題が発生し、ナラ枯れ被害が拡大した。

7 月 13 日-15 日に総雨量 296.5 mm の降雨があり、林内では林道のり面等の崩壊が 2 箇所、路面浸食が 5 箇所発生した。また、試験地境界部の水路が氾濫して、下流の試験地進入路や府道が冠水し、一部の住宅では床下浸水をもたらした。林内の被害箇所は直営作業で補修を行ったが、氾濫した水路は公共農業水路であることから京都市と協議を行い再整備等の検討を続けている。一方、試験地周辺の急速な宅地化、樹木の老齢・大径化に伴い、近年、境界部の住民からの苦情も多い。8 月には試験地内の樹木が真夜中に住宅へ倒れ込むという事件が発生した。そのため、境界部の樹木調査を実施し、危険木 132 本 37m³ の伐倒を行った。

ナラ枯れは、本試験地では 2006 年度に初めて被害が確認され、枯死木は 2009 年度に 37 本 15 m³ と急増し、2010 年度には被害はさらに拡大して 77 本 45 m³ となった。被害木は伐倒、くん蒸するとともに、一部は薪ストーブの燃料として活用した。これまでに、被害を受けやすいとされるコナラ大径木や貴重なブナ科見本樹の健全木 200 本あまりを対象に、根元から高さ 3m までの幹部をナイロンでラッピングするという方法で、防除策を講じてきた。2010 年度の京都市三山の被害量は前年と比較して 4 倍とされ、試験地周辺の森林と比べても被害が著しく少ないことから、ラッピングはある程度効果があるものと考えられた。

5) 北白川試験地

北白川試験地長 柴田 昌三

■教育研究

北白川試験地では、2010 年度には合計 33 件の研究利用、6 件の教育利用と、京都市水道局によるボーリング調査のための利用 1 件、合計 40 件の利用申請を受け付けた。年間利用者数は、延べ 1855 人日であり、農学研究科やフィールド研教員による利用が多かったが、学内からは理学研究科や地球環境学堂からの利用に加えて、工学研究科からの利用もあった。学外からは、大阪市立大学理学研究科と京都学園大学バイオ環境学部からの利用があった。北白川試験地は、フィールド研の施設の中で唯一本学キャンパス内に所在する施設であることから、大規模な教育・調査地の設定は困難であるが、研究室に直結した研究が可能であり、その立地を活かした教育・研究利用が盛んである。2010 年度には、植栽樹木の枝葉の採取、土壌のサンプリング、植物観察等の実習や、苗畑を利用した植栽試験やガラス室内での鉢植えによる樹木類を中心とする植物の育成試験などの研究利用があった。また、他大学を対象とした森林公開実習の一環として、人間環境大学と京都学園大学の学部生を対象にした実習も行われた。

■社会連携

2010 年度には、京都大学が主催するホームカミングデイの一環として、11 月 13 日に、京都大学 OB の皆さんが数十名、北白川試験地を訪問された。京都大学は近年、同窓会組織の充実をめざした活動を行っているが、本行事もその一部である。久しぶりの北部キャンパスを、皆さんは懐かしそうに散策しておられた。

■施設の特記事項

2010 年度にはマツ枯れによって枯死したアカマツを 4 本伐採したが、これ以上のマツ枯れは認められなかった。一方、ナラ枯れ被害に関しては、試験地東側の学内通路沿いにあるシングルオークと、北側見本園のミズナラにフラスが確認されたが、量的にはそれほど多くなかったことから、経過を観察することとなった。

7 月 13 日に台風の強風によって学内通路沿いのケヤキの大木から落枝が発生した。幸い人的被害はなかったが、境界部のフェンスが一部破損した。そのため、フェンスの修理とさらに落下の恐れがある枝の枝下ろしを請負で行った。また、当該通路は学内措置によって身障者の通路として整備が進むこととなったため、ケヤキ以外の大木についても、試験地北側と東側において越境している樹木の枝下ろしを行った。これらの作業のうち比較的軽作業が可能な樹木の一部については、直営で行った。

2010 年度の夏は非常な酷暑であった。フィールド研の各施設では酷暑に注意し、対応した作業を行ったが、残念ながら、北白川試験地では技術職員一名が熱中症の症状を示し、救急車で搬送される事態となった。森林系技術職員の多くは林業職での採用であり、夏場の野外での業務が多いことが特徴であるが、近年の酷暑に対するさらなる配慮の必要性が考えられる出来事であった。

6) 徳山試験地

徳山試験地長 中島 皇

■教育研究

「瀬戸内に見る森里海連環」(少人数セミナー(ポケゼミ):全学共通科目)の実施:特任教授向井宏先生とTA小出和彰君(森林情報学研究室M1)の協力を得て、8/6~10の日程で実施した。昨年から再開されたゼミに、今年は定員の7名がプレハブに雑魚寝のキャンプ体制で集った。1回生男子7名(理1,薬1,工4,農1)の理系メンバーが、徳山試験地と末武川源流の烏帽子岳から瀬戸内海(大島干潟)までをフィールドとして森と里と海の繋がりを実体験した(詳しくはポケゼミ報告p.45参照)。徳山試験地としては、車(8人乗り)・冷蔵庫・炊飯器・扇風機を更新したり、寝具やバーキュー道具を揃えたりと施設の充実を行った。参加学生は満足していたようで、人数的にはなんとか対応が可能なものだと考えている。今後、女子学生の比率が多くなった場合の検討をしておく必要がある。

環境学習教室「森林とふれあい自分だけのオリジナル図鑑を作ってみよう」の開催:10月23日に周南市公民館(楠浜・久米・大島・杵島・菊川・中央)の主催で小学生27名と公民館スタッフ5名が試験地の森林や山を歩きながら、様々な植物や生物にふれあい、植物図鑑の作成や「ネイチャーゲーム」を通じて環境について学習した。

■社会連携

周南市公園花とみどり課との共催で「「みどりの案内人」養成プロジェクト(周南市の事業)」特別講座を実施した。年3回(6月,10月,12月)日曜日の午前中に徳山試験地の作業所で森里海連環学や森林学の講義を受講し、その後お昼までフィールド見学を行うというもので、周南西緑地が旧徳山試験地であった縁から開催が実現した。受講者は各回20~40名、全体で91名の参加があった。受講生の皆さんは熱心で、環境に対する関心の高さが感じられ、講義の後には毎回多くの質問が出されていた。

■特記事項

8~10月には、連日の猛暑と少雨により給水施設の水枯れが起きた。給水施設は試験地運営の基本的施設であるため、今後ボーリングを行って水源を確保するよう努力をしたい。

作業所横にあるプレハブトイレが更新され、連絡通路が新設された(各所建物修繕費(追加予算)により)。

2月13日の雪(2/14朝、事務所で積雪7cm)により3林班と2小班のヒノキ3本・0.360m³、3林班と3小班のスギ161本・33.908m³の雪害があった。

7) 紀伊大島実験所

紀伊大島実験所長 梅本 信也

■教育研究

紀伊大島実験所は2004年度以来継続している古座川プロジェクトの拠点であり、その具体的な展開である古座川合同調査を実施する植物班、きのこ班、聞き書き班、アユ班、文化班、河川班、ダム班、地震班など、官民学諸班の参加者間の連絡調整、情報交換、議論、資料閲覧、簡易宿泊の場として2010年度も積極的に活用された。古座川合同調査は毎月開催され、4月の第53回調査から翌年3月の第64回調査まで本年度も合計12回実施された。古座川合同調査は当センターの3大柱のひとつである地域連携を前提に行っており、次項に述べる社会連携と不可分の関係にある。合計12回の調査内容の一部は「古座川合同調査報告集 第5巻」(本文は2段組で189ページ)として出版された。古座川プロジェクトの展開を円滑にするために、和歌山県が主体運営する古座川流域協議会や地域行政諸機関、古座川内水面漁協、和歌山東漁業協同組合各支所との連絡調整を適宜行った。

古座川プロジェクトおよび古座川合同調査で得られた成果を古座川流域ならびに串本湾岸域関係者に還元周知し、さらに高次の認識共有を達成するために、古座川町中央公民館および古座川町明神生活改善センターにおいて紀伊大島実験所主催、古座川流域協議会共催、関連5漁協後援で2010年7月、2010年12月、2011年3月にそれぞれ第11回、第12回、第13回古座川シンポジウムを開催した。それぞれのテーマは、きのこ班による「古座川流域のきのこ相」、植物班による「古座川断層東端ぶつづつ川の博物誌」、和歌山県環境生活部による「古座川の水質環境」で、いずれも報道機関によって詳細に紹介された。

■社会連携

紀伊大島実験所は、従来の教育、プロジェクト研究、教員研究、地域貢献を意識しての諸活動を、フィールド研と統合した後は、教育・研究・社会連携に書き換えて、さらに関係地域や分野を拡大して活動している。2010年度の延べ利用者は1,100名前後、一般見学者、講義実習関係の学生院生、教員や研究者、行政機関職員、マスコミ関係者からの利用は毎月30名前後となっている。2011年3月にはSSH名古屋市立向陽高校34名が来所、2時間にわたって自然と里域に関する野外特別講義と活発な質疑応答を行った。概要は報道機関によって紹介された。なお、詳細な受講行動分析報告は2011年秋に発行予定の「古座川合同調査報告集 第6巻」に掲載する。

■特記事項

1999年に紀伊大島は本州と串本大橋により地続きとなったが、その副産物として島内にイノシシが侵入・増殖し、島民の生活に甚大な被害をもたらしてきている。和歌山県鳥獣保護区である当実験所の希少な植生、たとえばショウガ科アオノクマタケラン、も被害を受けているため、2009年初夏から保護区規制を解除して和歌山県、串本町、当実験所等が共同で捕獲作戦を展開しているが、芳しい成果が得られていない。

一方、和歌山県鳥獣保護区指定の構内では本年度も日本鳥学会と共同で夏期と冬期に捕獲による鳥類調査を継続、フクロウ科オオコノハズクが確認された。

京都産業大学、串本町檜野地区と当実験所が連携し、紀伊大島東部地区で地中電磁場変動観測所設営工事が行われ、2011年9月に完成、本格始動にむけての試運転と調整が行なわれている。

8) 舞鶴水産実験所

舞鶴水産実験所長 山下 洋

■教育研究

2010 年度に舞鶴水産実験所里海生態保全学分野に所属する大学院生のは、修士課程 6 名、博士後期課程 7 名であり、うち 2 名はインド、台湾からの留学生である。これに加えて、フルブライト研究員 1 名（特別研究学生；アメリカ）、プロジェクトによる研究員 4 名（うち 1 名は韓国）が在籍し、大変にぎやかにまた活発に研究活動を行っている。本年度中に教員、大学院生が発表した原著論文は、国際誌 17 編、国内誌 1 編、学会における講演数は 41（うち国際学会 8）となった。外部資金により水産実験所が主体となって実施しているプロジェクトは、「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」、「魚類との相互関係に基づく大型クラゲの発生制御（クラゲプロジェクト）」、「舞鶴湾におけるナマコ資源の増殖等に係る研究（ナマコプロジェクト）」、「西日本日本海側外海砂浜域における既存の環境情報及び生物生産に関する情報の収集・分析（西日本ヒラメプロジェクト）」である。「木文化プロジェクト」はフィールド研全体で実施する事業であるが、その中で舞鶴水産実験所では「森里海連環学若狭湾海域・陸域統合プロジェクト（WakWak）」と呼んで、由良川河口域・丹後海的环境、生物多様性、生物生産機構に関する研究を、農学研究科と共同で実施している。「WakWak」に参加する大学院生 2 名（うち 1 名は海洋生物環境学分野所属）と「クラゲプロジェクト」に参加する大学院生 1 名が来年度から特別研究員として採用されたことは、両プロジェクトの大きな成果である。「ナマコプロジェクト」では、研究員 3 名が舞鶴湾をフィールドとしてナマコの種苗生産技術、天然採苗技術、資源生態と管理に関する研究を行っており、着実に成果が得られつつある。このほか、日本海における魚類・エビ類の分類学的研究においても、多くの成果が報告された。さらに、3 名の大学院生が 4 課題の研究助成金を独力で獲得しており、研究に対する大学院生の積極的な姿勢が評価される。

また、水産実験所で実施する実習・講義科目として、京都大学の学生・院生を対象とした 9 コース、他大学 3 コース、高等学校 6 コースの合計 18 コースを行った。

■社会連携

水産実験所では、地域社会との連携活動として、催しなどへの協力（15 件）、小・中・高等学校の生徒に対する出前講義（6 校）や教員研修（2 件）などを行った。これらの中には、サイエンスパートナーシッププログラム（京都府立南陽高等学校、同西舞鶴高等学校）、スーパーサイエンスハイスクール（京都教育大学附属高等学校、兵庫県立神戸高等学校）、見学学習（京都府海洋高等学校）などが含まれる。主な地域との連携活動として、由良川市民講座、舞鶴市ネイチャーガイド養成講座、舞鶴市高等教育機関合同フェアなどに積極的に主催、協力、参加した。このほか、当実験所教員が京都府漁業調整委員、京都府農林水産技術センター評議委員、舞鶴市環境基本計画委員会委員長などを担当し、京都府北部域や舞鶴市の地域産業の活性化と自然環境の管理などにおいて多くの重要な役割を担った。

■施設の特記事項

舞鶴水産実験所における今後の最も大きな課題は、実習・研究用舟艇として水産実験所の教育研究活動の核となる緑洋丸の代船建造である。本船は平成 2 年 3 月に竣工しすでに 22 年目に入っており、船体や機関などの不具合の発生件数も増加しつつある。安全な教育環境を維持するためにも早期の代船建造が強く求められる。また、平成 15 年に建てられた研究棟も鉄筋コンクリート製ではなく軽量鉄骨による簡易的な建築物であり、耐震性に乏しく耐久性が低いことから今後長期間使用できるとは考えられない。できるだけ早く鉄筋コンクリート製の建物を建築する必要がある。

9) 瀬戸臨海実験所

瀬戸臨海実験所長 白山 義久

■教育研究

瀬戸臨海実験所では、理学研究科の協力講座（海洋生物学分科）として、大学院生を受け入れている。2010年度の構成は、修士1名、博士3名である。その他に農学研究科から委託研究学生として博士1名を受け入れた。また、日本学術振興会のポスドク1名を受け入れた。さらに、卒論学生を1名受け入れた。

理学部の学部生を対象としては、夏期に3コース、春期に2コースの臨海実習を行った。それぞれ、1週間程度の期間、実験所の周囲の環境を利用し海洋環境から生物自体まで幅広い分野を教えた。またポケットゼミを4コース開催した。

研究活動としては、2010年度も引き続き、NaGISAプロジェクトで、原田百閑氏と青山弘氏をポスドクとして採用し、研究活動の充実を図った。

海洋酸性化に関する環境省地球環境推進費にもとづく研究を継続した。これは海洋の二酸化炭素環境を日周変動・年周変動も含めて詳細に制御する装置を開発し、それを活用して将来の海洋酸性化が海洋生物に与える影響を精密に予測することを目指すものである。2010年度もこの研究を推進するために、ポスドクを1名採用し、本格的な実験を行った。

■社会連携

瀬戸臨海実験所の最大の社会連携は、水族館の通年公開であるが、それ以外には、京大の学生・院生を対象とした実習を13コース（瀬戸臨海実験所主催の臨海実習5コースとポケットゼミ4コースを含む）、他大学の実習を9コース、高等学校・中学校の実習を9コース、放送大学など生涯学習コースを2コース実施した。これらの実習による受け入れは総計（延べ人数）で2,337人・日である。他大学の実習では、5コースについて非常勤講師や実習担当として、また高等学校・中学校の実習においてもSPPおよびSSH事業の一環となっているものを中心に、9コースについて、実際の実習を担当した。

2010年度には2つの研究集会が瀬戸で実施された。

その他の社会連携として、各種の国の委員会において重要な役割を果たし、研究成果の社会への還元に貢献した。例えば経済産業省の鉱業分科会委員として、鉱業法の改正に関する提言のとりまとめを行った。

■施設の特記事項

理学研究協会が解散し、楽学荘・静修寮及び周辺土地について京都大学に寄附を受けた。また水族館では第2駐車場の整備・観覧者用トイレ改修を行い、職員宿舎2号棟の解体を行った。

また平成23年2月1日より閉館時間を午後5:15から5:00に変更し、それに伴い看板やパンフレットの開館時間の修正を行った。

10) 海域陸域統合管理学研究部門

海域陸域統合管理学研究部門 向井 宏

■教育研究

日本財団の助成を受けて、海域陸域統合管理学研究部門は研究と教育に引き続き取り組んでいる。2010年度は、全学教育科目の「水圏生物学入門」「森林学」「森里海連環学」「沿岸環境保全学」の4科目と、「森里海連環学実習A（由良川）」「同B（古座川）」「同C（別寒辺牛川）」の野外実習を行った。4科目はこれまでと同じようにリレー講義とし、合計33名の学内・学外の講師により講義を行った。実習のBコースとCコースは、北海道大学との合同実習を行い、北海道大学教員も指導に加わった。4教科の受講者は、「水圏生物学入門」は約350名、「森林学」は約120名、「森里海連環学」は約140名、「沿岸環境保全学」は約50名であった。一方、「森里海連環学実習」のうち、Aコースは13名、Bコースは、京大から6名、北海道大学からも6名が参加、Cコースでは、京大から10名、北海道大学から9名が合宿形式で参加した。なお、Bコースについては、北海道大学との合同実習は2010年度限りとすることになった。

また、公共政策大学院において、佐藤真行准教授による「環境政策評価論」の講義を行った。受講者は13名であった。

■社会連携

2010年度、海域陸域統合管理学研究部門では全国3ヶ所で地域連携講座を開催した。開催したのは、由良川市民講座「森・里・海の対話」として京都府福知山市で12月4日におこない、130名ほどの市民が聴講した。高知県仁淀川流域では、10月30日に高知市内のサンライズホテルにおいて「森・里・海」と題して、高知県京都大学同窓会との共催で開催した。京都大学総長も参加して挨拶をした。高校生らを中心に約120名が参加、熱心に講演に聴き入っていた。また、北海道別寒辺牛川水系では、厚岸町と標茶町との共催で、11月16日に「流域管理と住民参加」をテーマに講演会とパネルディスカッションを行った。参加者は80名程度で、昨年に比べてやや少なめであった。

■特記事項

1. 教科書の発行：日本財団の助成を受けて、「森里海連環学シリーズ2」の教科書「森と海をつなぐ川」の編集を行い、2011年に京都大学学術出版会から刊行予定である。著者は、京大フィールド研教員を中心に学外研究者も含まれる。なお、2007年に刊行したシリーズの第1の「森里海連環学 ～森から海までの統合的管理を目指して～」は、初版が完売し、改訂増補版を出版する。

2. ICMセミナー：2人の海外の研究者も含めて5回、ICMセミナーを開催し、統合的沿岸域管理について、研究の紹介と議論を行った。その詳細は下記の通り。

第12回：2010年5月11日（火） 報告者 鈴木啓太氏（京大フィールド研） 論題 「大きな潮汐を備えた河口域における粒状有機物の動態」

第13回：2010年6月22日（火） 報告者 富士泰期氏（京大農学研究科） 論題 「由良川河口域におけるスズキ稚魚の初期生活史」

第14回：2010年7月20日（火） 報告者 鈴木健太郎氏（京大フィールド研） 論題 「由良川水系における懸濁態有機物の起源と底棲生物群集」

第15回：2011年1月13日（木）

報告者1 田中克氏（マレーシア、サバ大学） 論題：「A newly integrated "H to O studies" to conserve and restore for more sustainable human society in the world」

報告者2 マルーフ・カシム氏（インドネシア、ハルオレオ大学） 論題：「The Establishment of Community Based -Marine Protected Areas for Marine Ecotourism in Eastern Indonesia」

第16回：2011年2月21日（月） 報告者 SuriyanTunkijjanukij氏（タイ、カセサート大学） 論題 「Shrimp and fish pond management related to coastal management and conservation in Thailand（タイにおけるエビ・魚養殖池の管理－沿岸域管理・保全と関連して－）」

11) 森里海連環学プロジェクト支援室

森里海連環学プロジェクト支援室長 吉岡 崇仁

■特記事項

森里海連環学プロジェクト支援室では、2010 年 4 月より教務補佐員 1 名を採用し、4 名の体制でスタートした。従来の森林生態、物質循環に加えて、社会調査の実施も支援する体制が整った。木文化プロジェクトにおいて実施した仁淀川および由良川流域の調査の実施、分析のほか、「流域の森林利用に関する意識調査」では、調査票の作成・回収、データ入力から解析までを支援した。2010 年度の調査等の日程および分析等の業務は以下の通りである。

<仁淀川プロジェクト>

- ・2010 年 5 月 10 日～13 日 仁淀川本流広域水質調査
- ・2010 年 6 月 17 日 仁淀川プロジェクト検討会議（高知市）
- ・2010 年 6 月 18 日 仁淀川プロジェクト・池川伐採試験地調査
- ・2010 年 11 月 8 日～10 日 仁淀川本流広域水質調査
- ・2010 年 12 月 木文化仁淀川アンケート調査（社会調査）

<由良川プロジェクト>

- ・2010 年 4 月 12 日～13 日 由良川プロジェクト検討会議（芦生研究林）
- ・2010 年 4 月 19 日～21 日 由良川広域水質調査
- ・2010 年 6 月 2 日～3 日 芦生研究林下谷において量水堰設置検討調査
- ・2010 年 5 月 19 日 南丹市にて野生鳥獣害検討会へ参加（社会調査）
- ・2010 年 7 月 13 日～19 日 由良川広域水質調査
- ・2010 年 8 月 13 日～15 日 芦生研究林長治谷シカ柵区にて植生調査
- ・2010 年 8 月 18 日～19 日 由良川本流広域水質調査
- ・2010 年 9 月 7 日～10 日 芦生研究林上谷シカ柵集水域にて降雨出水調査
- ・2010 年 10 月 4 日～5 日 芦生研究林長治谷シカ柵区にて植生調査
- ・2010 年 10 月 19 日～21 日 芦生研究林下谷伐採試験地にて水文観測・土壌予備調査
- ・2010 年 11 月 4 日 芦生研究林下谷伐採試験地の検討会議（京都市）
- ・2010 年 11 月 15 日～18 日 由良川広域水質調査
- ・2010 年 11 月 22 日～24 日 芦生研究林幽仙谷集水域にて植生調査
- ・2010 年 12 月 7 日～9 日 芦生研究林下谷伐採予定地にて土壌採取および流量観測
- ・2010 年 12 月 22 日 芦生研究林にて積雪深計設置
- ・2010 年 12 月 木文化由良川アンケート調査（社会調査）
- ・2011 年 2 月 15～16 日 由良川広域水質調査

<木文化プロジェクト>

- ・2010 年 11 月 20 日 第 7 回時計台対話集会の総司会およびスタッフ
- ・2010 年 12 月 4 日 第 2 回由良川地域連携講座スタッフ
- ・2011 年 3 月 14 日 平成 22 年度木文化プロジェクト報告会

<分析・解析等>

- ・由良川流域および仁淀川流域の GIS データの整備
- ・水質分析（全窒素、全リン、アニオン・カチオン、アルカリ度、溶存有機態炭素、蛍光特性、溶存鉄、懸濁物質等）
- ・水質分析結果のとりまとめ（データベース化）
- ・「流域の森林利用に関する意識調査」の調査票の作成・回収、データ入力・解析

12) 企画情報室

企画情報室長 白山 義久

■特記事項

<広報>

企画情報室では、定期刊行物として、年報を1冊(第7号)、ニュースレターを3号(20～22号)編集・発行・発送した。インターネット上ではフィールド研のウェブページを、随時更新している。その他、百周年時計台記念館におけるディスプレイ映像の更新、展示用パネルの管理等をおこなった。

<情報システムの企画、開発、運用>

企画情報室では、学内ネットワークにおけるVLANの設定、メーリングリストの管理、大判プリンタなど共用機器類の管理、各施設等の不具合等に対する連絡調整、各施設の教職員が参加するテレビ会議システムの運用などを担当している。公開ウェブページを、従来のhtmlファイルによる構成から、CMS(コンテンツマネジメントシステム)としてWordPressというブログ用ソフトウェアをカスタマイズして運用する構成への変更を進めた(2011年4月から運用開始予定)。9月には、隔地教員研究室の移転に伴い、大判プリンタの設置場所を臨時に男子更衣室に変更している。また、12月には、和歌山研究林に光ファイバによるネットワーク常時接続体制になるのにあわせて、KUINS(学内ネットワーク)に収容する機器の設置を支援した。さらに、舞鶴水産実験所で運用を予定している遠隔講義システムについて、情報環境機構に協力いただきながら、システムや機材の検討をおこなった。

<各施設及びセンター教職員の各種情報の収集>

企画情報室は、フィールド研及び教職員の各種活動状況を収集するため、各施設から毎月報告される利用実績報告書の集計、新聞・雑誌等のセンター関連記事の収集、講義や事業の映像記録、研究業績・外部資金・各種活動などの業績調べをおこなっている。また、職員の利用するコンピュータとソフトウェアライセンスの管理状況について年に2回調査し、情報システム管理センターに報告した。今年度から、教員の管理するライセンスについての調査も始まり、全教員(助教以上)を管理担当者として調査していただいた状況を取りまとめ、年度末に報告した。

<センター常設各種委員会に係る実務>

企画情報室では各種委員会の実務を担当しており、シラバス調べ、アンケート集計、各種調書への対応、全施設におけるコンピュータウィルス対応支援などをおこなっている。

<センター行事(イベント)に係る実務>

企画情報室は、7月の公開講座(芦生)及び11月の時計台対話集会の運営の一部を担当した。

<その他>

企画情報室は、各種申請・提出書類の作成の支援、センター長秘書に係る実務、公用車管理の一部、施設・教職員による業務の支援、教職員交流イベントの開催支援等を弾力的におこなった。

(2) 各施設を利用した学生実習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.04.29 ~ 10.04.30	2	京都大学	理学研究科	ヘビの採集法の講習会	野生生物研究会 全学1回生	8	6	
10.05.01 ~ 10.05.03	3	京都大学		野生生物観察研修(新歓合宿)		60		
10.05.20 ~ 10.05.21	2	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「豊かな森をめざして！」		18	4	
10.05.28	1	京都大学	生存圏研究所	芦生研究林における木材腐朽菌による劣化調査	修士・博士	4	3	
10.05.30	1	東京学芸大学	小泉 武栄	芦生研究林における樹種の分布と地形・地質条件との関係		2	7	
10.06.19 ~ 10.06.20	2	京都大学	情報学研究科社会情報学専攻	生物圏情報学セミナー		32	10	
10.06.26 ~ 10.06.27	2	京都大学	アジア・アフリカ地域研究研究科	アジア・アフリカ地域研究演習	A・A研 大学院1回生	30	6	
10.07.03 ~ 10.07.05	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	全学1回生	21	12	
10.08.08 ~ 10.08.09	2	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習A	全学全回生	22	16	
10.08.10 ~ 10.08.11	2	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「環境の評価」	全学1回生	14	6	
10.08.30 ~ 10.09.03	5	京都大学	農学研究科森林科学専攻	研究林実習Ⅰ	森林科学科2回生	144	16	
10.09.06 ~ 10.09.08	3	京都大学	フィールド研	公開森林実習	森林科学科3回生	15	11	
10.09.15 ~ 10.09.18	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻	研究林実習Ⅱ		44	14	
10.09.27 ~ 10.09.30	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻	森林利用学実習及び実習法		104	33	
10.09.29	1	京都大学	生存圏研究所循環材料創成分野	天然林の見学と実習	全学全回生	7	2	
11.02.10 ~ 11.02.13	4	京都大学	フィールド研	暖地性積雪地域における冬の自然環境		67	7	
10.08.01	1	石川県立大学	生物資源環境学部	日本海側の森林の潜在的植生の観察とシカによる食害が植生に与える影響の把握		11	2	
10.10.09 ~ 10.10.11	3	京都造形芸術大学	こども芸術学科	科目名「こどもといのち」 こども狩猟採集学入門：自然と地域とこども		105	6	
10.11.04 ~ 10.11.05	2	神戸大学	農学部	応用植物学専門演習		16	4	
10.11.05	1	京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター	The Japanese Garden Intensive Seminar		19	4	
計	48		(20件)			743	169	

北海道研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.08.31 ~ 10.09.05	6	京都大学	フィールド研	研究林実習Ⅲ 夏の北海道・北海道東部の人と自然	全学共通	131	56	標茶区
10.08.29 ~ 10.08.31	3	京都大学	フィールド研	研究林実習Ⅲ 夏の北海道・北海道東部の人と自然	全学共通	60	28	白糠区
10.09.09 ~ 10.09.12	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習C(北大との共催)	全学共通	68	42	標茶区
11.02.20 ~ 11.02.28	9	京都大学	フィールド研	研究林実習Ⅳ 冬の北海道・北海道東部の厳冬期の自然環境	全学共通	122	47	標茶区
11.02.22 ~ 11.02.24	2	京都大学	フィールド研	研究林実習Ⅳ 冬の北海道・北海道東部の厳冬期の自然環境	全学共通	34	18	白糠区
計	24		(5件)			415	191	

和歌山研究林

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.09.27 ~ 10.09.29	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「森のつくりだすもの」	B3	3	3	
10.10.27	1	大阪府立大学	大学院生命環境科学研究科	緑地環境科学実験実習Ⅱ		2	1	
計	4		(2件)			5	4	

上賀茂試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.04.10	1	京都大学	農学部森林科学科	平成22年度 農学部森林科学科ガイダンス	1回生	54	22	
10.05.15	1	京都大学	農学研究科森林科学専攻	農学研究科森林科学専攻 新入生ガイダンス		153	46	
10.05.17 ~ 10.05.25	3	京都大学	理学研究科生物科学専攻	生物学実習「野外調査法－昆虫の密度推定法」	3回生	52	4	
10.05.28 ~ 10.06.03	2	京都大学	フィールド研	森林総合実習及び調査法	3回生	58	6	
10.05.29	1	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「京をめぐる森と人のくらし」	1回生	7	2	
10.06.02	1	京都大学	生態学研究センター	生物学実習B 野外調査法（生態）	3回生	11	2	
10.06.02 ~ 10.06.30	4	京都大学	農学研究科森林科学専攻森林生物学分野	森林生物学実験及び実験法	3回生	105	4	
10.06.09	1	京都大学	農学研究科地域環境科学専攻	「土壌物理学・水環境工学実験」 土壌の三相分布測定及び侵入能試験実習	3回生	17	1	
10.06.20	1	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「原生的な森林の働き」	1回生	5	1	
10.07.06	1	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「木造校舎を造る：木の文化再生へ」	1回生	5	5	
10.08.31	1	京都大学	フィールド研	里山再生論	M1・M2	4	2	
10.09.06	1	京都大学	フィールド研	公開森林実習		5	3	
10.10.19	1	京都大学	フィールド研	森林科学実習Ⅳ	2回生	61	7	
10.05.12 ~ 10.12.01	2	京都造形芸術大学	環境デザイン学科	庭園実習Ⅰ・Ⅱ	3回生	33	4	
10.07.06	1	京都府立大学	生命環境学研究科	森林植物学実習	3回生	35	4	
10.09.30	1	京都教育大学	教育学部産業技術科学科	栽培実習Ⅱおよび栽培と飼育の実践Ⅱ		6	5	
計	23		(16件)			611	118	

徳山試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	参加者数	教員等数	備考
10.08.06 ~ 10.08.10	5	フィールド研	中島 皇	少人数セミナー「瀬戸内に見る森里海連環」	全学部・一回生	40	10	
計	5		(1件)			40	10	

北白川試験地

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.04.09	1	京都大学	農学研究科食品生物科学専攻	有機化学実験および実験法	3回生	36	4	
10.04.21	1	京都大学	農学研究科地域環境科学専攻	「土壌物理学・水環境工学実験」 土壌三相分布測定	3回生	19	1	
10.06.04	1	京都大学	農学研究科食品生物科学専攻	有機化学実験および実験法	3回生	47	2	
10.09.08	1	京都大学	フィールド研	公開森林実習		5	2	
10.10.04	1	京都大学	農学研究科森林科学専攻	森林水文学・砂防学実験及び実験法	3回生	20	1	
10.11.17	1	京都大学	農学研究科応用生命科学専攻	生物有機化学Ⅲ	応用生命科学科3回生	32	1	
計	6		(6件)			159	11	

紀伊大島実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.08.09 ~ 10.08.12	4	京都大学	紀伊大島実験所	里域植物保全論	修士院生	24	4	
10.08.23 ~ 10.08.27	5	京都大学	紀伊大島実験所	少人数セミナー「森里海のつながりを清流古座川に見る」	本学1回生	20	5	
10.09.06 ~ 10.09.10	5	京都大学	農学研究科	植物調査法と実習	農学科2回生	36	6	
10.09.16 ~ 10.09.22	7	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習B（北大との共催）		105	38	
計	21		(4件)			185	53	

舞鶴水産実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.06.18 ～ 10.06.20	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「環境と魚の河口域生態学入門」		12	3	
10.07.02 ～ 10.07.04	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「魚類心理学入門」		27	3	
10.08.09 ～ 10.08.12	4	京都大学	フィールド研	森里海連環学実習A		40	36	
10.08.09 ～ 10.08.11	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「お魚好きのための魚類研究入門」		18	6	
10.08.20 ～ 10.08.31	13	京都大学	農学研究科・応用生物科学専攻	海洋生物科学技術論と実習Ⅰ・Ⅱ		133	42	
10.09.06 ～ 10.09.09	4	京都大学	農学研究科・水資源利用工学研究室	「水理学実験」の実験実習		108	12	
10.10.08 ～ 10.10.09	2	京都大学	理学研究科地質学鉱物学教室	地質学野外実習（大島半島他）のため		16	6	
11.02.21 ～ 11.02.23	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「日本海に遊ぶ～日本海学入門」		9	3	
10.05.17 ～ 10.05.21	5	近畿大学	農学部	環境生態学実験・実習Ⅰ実施のため		134	5	
10.09.13 ～ 10.09.18	6	岐阜大学	教育学部	臨海実習		78	14	
11.03.09 ～ 11.03.10	2	東京大学	理学系研究科	サンプリング		4		
計	48		(11件)			579	130	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	大学	部局	科 目 名	学年	学生数	教員等数	備考
10.04.09 ～ 10.04.10	2	京都大学	理学研究科	インターラボ	M1	110	4	
10.05.01 ～ 10.05.05	5	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「海岸生物の生活史」		35	5	
10.06.04 ～ 10.06.06	3	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「サンゴ礁生態学入門」		12	3	
10.06.11 ～ 10.06.13	2	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「サンゴ礁生態学入門」	1年生	4	2	
10.08.02 ～ 10.08.03	2	京都大学	大学院理学研究科	最先端科学の体験型学習講座（略称：ELCAS）		52	20	
10.08.26 ～ 10.08.30	5	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「海産無脊椎動物-分類群と形の多様性」		15		
10.09.01 ～ 10.09.02	2	京都大学	防災研究所	少人数セミナー「空を観る・海を観る・川を観る」		8	4	
10.09.01 ～ 10.09.09	9	京都大学	理学部	公開臨海実習第1部	2回生	36		
10.09.01 ～ 10.09.09	9	京都大学	理学部	公開臨海実習第4部	3回生	9		
10.09.09 ～ 10.09.13	5	京都大学	地球環境学堂	探究型化学実験－湖と海の化学調査		50	15	
10.09.15 ～ 10.09.16	2	京都大学	防災研究所 流域災害研究センター	大学院生ポケットゼミ		22	10	
10.09.21 ～ 10.09.24	4	京都大学	フィールド研	少人数セミナー「海洋生物の多様性」		32	8	
11.03.03 ～ 11.03.06	4	京都大学	人間・環境学研究科	生物学実習Ⅱ		60	20	
10.04.15 ～ 10.04.19	5	和歌山大学	教育学部（生物学教室）	臨海実習		65	15	
10.05.25 ～ 10.05.30	6	奈良女子大学		臨海実習		120	18	
10.06.12 ～ 10.06.13	2	放送大学京都学習センター		海洋生物の多様性		40		
10.06.13 ～ 10.06.17	5	大阪教育大学		臨海実習		80	5	
10.06.27 ～ 10.07.01	5	奈良教育大学		臨海実習		65	15	
10.07.07 ～ 10.07.13	7	大阪市立大学	大学院理学研究科	臨海実習		168	49	
10.07.13 ～ 10.07.15	3	近畿大学	農学部	環境生態学専門実験・実習		90	3	
10.07.29 ～ 10.8.02	5	信州大学	理学部	分析化学持論実習		75	20	
10.08.03 ～ 10.08.11	9	国立大学臨海臨湖実験所長会議		公開臨海実習（夏期）		63		
10.08.22 ～ 10.08.26	5	関西学院大学	理工学部	臨海実習		95	25	
10.08.26 ～ 10.08.31	6	大阪大学	理学研究科	生物学臨海実習	大学院生	102	36	
10.11.06 ～ 10.11.07	2	放送大学京都学習センター		海洋と地球環境		40		
11.03.20 ～ 11.03.26	7	国立大学臨海臨湖実験所長会議		公開臨海実習（春期）		56	28	
計	121		(26件)			1,504	305	

(3) 各施設を利用した社会連携教育および野外学習等

(学生数・教員等数は、延人数)

芦生研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 07. 27	1	南丹市立鶴ヶ岡小学校	美山町第4学年合同自然体験教室「美山っ子グリーンワールド」		51	9	
10. 08. 09 ～ 10. 08. 10	2	大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎	学校設定科目「環境論」		66		
10. 09. 10	1	京都市立葛野小学校	総合的な学習		94	7	
10. 10. 14	1	京都市立大枝小学校	総合的な学習		83	9	
10. 10. 29	1	京都府立北桑田高等学校	環境科学基礎		32	3	
10. 10. 31	1	兵庫県立尼崎小田高等学校	科目名「自然科学研究」 テーマ プナ葉緑体DNAの分析、プナ林の生態調査		7		
10. 05. 02 ～ 10. 11. 28	31	NPO法人芦生自然学校	自然観察、自然体験、環境教育		455		
10. 05. 12 ～ 10. 05. 14	2	NPO法人シニア自然大学	芦生原生林の自然観察会		49		
10. 05. 29	1	京丹波町役場職員互助会	環境意識を高めるための現地研修		9	1	
10. 05. 29 ～ 10. 05. 30	2	NPO法人エコロジー・カフェ	第5回エコの寺子屋		19	5	
10. 06. 05	1	京都大学 フィールド研	自然観察会	一般	24	12	
10. 06. 14	1	知井振興会	環境学習会		17	5	
10. 07. 30 ～ 10. 08. 01	3	京都大学 フィールド研	フィールド研 公開講座	一般	96	70	
10. 08. 24 ～ 10. 08. 25	2	京都大学 フィールド研	森林体験学習（共催：和歌山県立有田中央高等学校清水分校、ANA「私の青空」）		54	14	
10. 10. 16 ～ 10. 10. 17	2	京都大学 理学研究科	最先端科学の体験型学習講座（略称：E L C A S）		78	2	
10. 10. 25 ～ 10. 10. 28	4	中国・四国・近畿地区大学附属演習林協議会	平成22年度技術職員研修		58	40	
10. 10. 20 ～ 10. 10. 27	2	社団法人びわ湖高島観光協会	自然観察会		22		
計	58	(17件)			1,214	177	

北海道研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 05. 21	1	標茶町立標茶小学校	遠足	3年生	59	1	標茶区
10. 06. 22	1	標茶町立沼幌小学校	木工教室（図工）	2年生～6年	13	4	標茶区
10. 11. 06 ～ 10. 11. 07	2	標茶町教育委員会	平成22年度しべちャアドベンチャースクール第4ステージ「秋の森林学習」ー京都大学森林ステーションでの自然学習ー	標茶町の小中高生	20	12	標茶区
11. 01. 22 ～ 11. 01. 23	2	標茶町教育委員会	平成22年度しべちャアドベンチャースクール第5ステージ「冬の雪山活動」ー京都大学森林ステーションでの雪上散策ー	標茶町の小中高生	16	13	標茶区
10. 07. 24	1	京都大学 フィールド研	ミニ公開講座	一般	13	7	白糠区
10. 08. 01	1	京都大学 フィールド研	ミニ公開講座	一般	10	6	標茶区
計	8	(6件)			131	43	

和歌山研究林

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 04. 20 ～ 10. 12. 07	23	県立有田中央高等学校清水分校	ウッズサイエンス	3年生	78	66	
10. 05. 12	1	県立有田中央高等学校清水分校	総合的な学習の時間「SIMIZUタイム」（森林ワーク）	1年生	28	7	
10. 06. 04	1	有田川町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森は友だち森林の町清水」	5年生	14	5	
10. 08. 31	1	有田川町立白馬中学校	総合的な学習の時間	1年生	12	6	
10. 09. 17	1	有田川町産業課	「森とあそぶまなぶ」森林体験学習	4年生	38	6	
10. 09. 28 ～ 10. 09. 30	3	有田川町立八幡中学校	職業体験学習	2年生	18		
10. 10. 15	1	有田川町産業課	「森とあそぶまなぶ」森林体験学習	4年生	26	6	
10. 11. 11	1	有田川町立八幡小学校	総合的な学習の時間「森を守ろう」環境	5年生	14	6	
計	32	(8件)			228	102	

上賀茂試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 04. 24	1	京都大学 フィールド研	上賀茂試験地春の自然観察会	一般	25	7	
10. 07. 29	1	京都府立大学 生命環境学研究科	洛北高校スーパーサイエンス研究室訪問	高校生	1	1	
10. 08. 01	1	岡山大学 大学院環境学研究科	子供たちを対象とした昆虫観察会およびセミナー	小学5、6年、中学生	42		
10. 11. 11 ～ 10. 11. 13	3	京都精華大学 人文学部社会環境学科	ネイチャーゲーム講習会		84	6	
10. 11. 13	1	京都大学 フィールド研	上賀茂試験地秋の自然観察会	一般	33	6	
計	7	(5件)			185	20	

徳山試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 06. 13	1	周南市公園花とみどり課	周南市「みどりの案内人養成プロジェクト」特別講座	受講生	16	7	共催
10. 10. 03	1	周南市公園花とみどり課	周南市「みどりの案内人養成プロジェクト」特別講座	受講生	16	6	共催
10. 10. 23	1	周南市教育委員会	周南市環境学習教室「森林とふれあい自分だけのオリジナル図鑑を作ってみよう」	周南市内小学生	27	8	共催
10. 12. 12	1	周南市公園花とみどり課	周南市「みどりの案内人養成プロジェクト」特別講座	受講生	13	5	共催
計	4	(4件)			72	26	

北白川試験地

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 12. 10	1	京都大学 地球環境学堂景観生態保全論分野	集中セミナー	大阪府立大手前高校	25	1	
計	1	(1件)			25	1	

紀伊大島実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
11. 03. 22	1	名古屋市立向陽高等学校	自然域と里域に関するフィールドワーク		34	4	
計	1	(1件)			34	4	

舞鶴水産実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 05. 11	1	京都府立海洋高等学校	施設見学と講義	1年	27	12	
10. 05. 29	1	兵庫県立神戸高校	サイエンスツアー		42		
10. 07. 28 ~ 10. 07. 30	3	京都教育大学附属高等学校	SSHクラス臨海実習		60		
10. 07. 27	1	兵庫県立西宮今津高等学校	調査船緑洋丸による海洋調査		19		
10. 07. 22 ~ 10. 07. 23	2	京都府立西舞鶴高等学校	平成22年度SPP講座参加のため		87		
10. 08. 04	1	京都府立南陽高等学校	夏季臨海実習		43		
10. 11. 02	1	中舞鶴小学校	ウォークラリー		350		
10. 08. 17	1	舞鶴市小学校教育研究会	社会科夏季研究会	園児	15		
10. 08. 18	1	綾部市学校教育研究会	理科研究会		25		
11. 03. 09	1	中保育所	稚ナマコ放流		41		
計	13	(10件)			709	21	

瀬戸臨海実験所

期 間	日数	主催者	講座・イベント名	対象者	参加者数	教員等数	備考
10. 04. 29	1	和歌山県立向陽高等学校	SSH実習	環境科学科2年生	3	1	
10. 06. 05 ~ 10. 06. 06	2	奈良県立奈良高等学校	臨海実習	2年生	20	4	
10. 07. 17 ~ 10. 07. 19	3	大阪府立住吉高等学校 理科・生物科	水生生態理解のための臨海実習		66	6	
10. 07. 21 ~ 10. 07. 24	4	滋賀県立膳所高等学校	サイエンスキャンプ（第41回生物実習旅行）		88	20	
10. 07. 27 ~ 10. 07. 29	3	奈良女子大学附属中等教育学校	臨海実習およびウニの発生実験		114	18	
10. 08. 09	1	和歌山県立向陽高等学校	実習受講 番所崎におけるイソアワモチ類のデータ収集		3	1	
10. 08. 21 ~ 10. 08. 22	2	兵庫県立尼崎小田高等学校	臨海実習		26	4	
10. 09. 04	1	和歌山県立 向陽高等学校	番所崎におけるイソアワモチ類のデータ収集		4	1	
10. 10. 08	1	奈良県立奈良北高等学校	校外研修「海の動物の多様性について」		40	2	
10. 11. 04 ~ 10. 11. 06	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	宿泊体験学習(海洋実習・前半)		60	6	
10. 11. 11 ~ 10. 11. 13	3	兵庫県立姫路飾西高等学校	宿泊体験学習(海洋実習・後半)		60	6	
10. 11. 09	1	田辺市立龍神小学校	水族館バックヤード	1~6年生	22	6	
10. 11. 16	1	上富田町立上富田小学校	水族館バックヤード	2・3年生	33	5	
11. 01. 07 ~ 11. 01. 09	3	大阪府立豊中高等学校	生物特別臨海実習2010		42	6	
11. 02. 24	1	田辺市立三里小学校	社会見学	6年生	10	1	
10. 12. 14	1	NPO法人 ハートツリー	水族館業務体験	センター長、会員	2		
11. 01. 29	1	(京都大学瀬戸臨海実験所・久保田信)	水辺環境教育・バードウォッチング		10	5	
11. 03. 19	1	白浜町立児童館	水族館のバックヤード見学	小学校低学年および父兄	36	1	
計	33	(18件)			639	93	

●●● 3. フィールド研教職員の活動の記録 ●●●

(1) フィールド研関連事業における活動

◆フィールド科学教育研究センター 刊行物

□フィールド研年報

『京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第7号』, 京都大学フィールド科学教育研究センター, 106p, 2009.

□報告書

第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」 講演録: 京都大学フィールド科学教育研究センター編集, サイファアソシエーツ株式会社 編集協力, 80p, 2011.

□ FSERC News

< No. 20 2010年8月 >

ー目次ー

- ニュー ス: 徳山試験地の「京都大学白浜水族館にライブカメラを設置」 (加藤 哲哉)
Nippon Foundation-POGO Centre of Excellence in Observational Oceanography に参加して (鈴木 健太郎)
- 研究ノート: 芦生研究林でワラジムシの新種発見
大面積シカ排除柵から見えるシカと森林生態系の複雑な関係 (福島 慶太郎)
なんかおかしい舞鶴の海 (上野 正博)
- 活動の記録: 2010年2月～2010年7月
- フィールド散歩: 各施設及びその周辺の写真6枚

<No. 21 2011年1月>

ー目次ー

- ニュー ス: 第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」 (田川 正朋)
佐藤拓哉さんの白眉研究員採用によせて -ハリガネムシの佐藤さん (徳地 直子)
- 教育ノート: 舞鶴水産実験所における高校生向け教育プログラム (甲斐 嘉晃)
フィールド研の実習風景「アフエンの森に学ぶ」 (柴田 昌三)
- 活動の記録: 2010年8月～2010年11月
- フィールド散歩: 各施設及びその周辺の写真6枚

<No. 22 2011年3月>

ー目次ー

- ニュー ス: 平成23年度公開実習のお知らせ
平成22年度 受賞者一覧
- 教育ノート: フィールド研の実習風景「魚類心理学入門」 (益田 玲爾)
- 活動の記録: 2010年12月～2011年1月
- フィールド散歩: 各施設及びその周辺の写真6枚

□研究林・試験地情報

『研究林・試験地情報 2009(平成21)年度』, 京都大学フィールド科学教育研究センター森林・里域フィールド管理部, 128p, 2011.

ー目次ー

各施設年次報告

- 芦生研究林年次報告 (芝 正己)
- 北海道研究林年次報告 (安藤 信)
- 和歌山研究林年次報告 (柴田 昌三)

上賀茂試験地年次報告	(柴田 昌三)
徳山試験地年次報告	(中島 皇)
北白川試験地年次報告	(長谷川 尚史)
業務報告	
プロジェクト研究関連報告	
芦生研究林の天然林における種子・実生動態調査ー2009年度の報告ー	(芦生研究林・小嶋 宏和他)
北海道研究林・標茶区の天然林における樹種構成と構造	(北海道研究林・岡部 芳彦他)
モミ・ツガ林の樹種構成と構造ーモニタリングサイト 1000 登録調査区の報告ー	(和歌山研究林・上西 久哉他)
開地と被陰ネット下におけるホオノキ苗木の生長比較	(北白川試験地・山内隆之)
業務関連報告	
公開講座を終えて	(浅野 善和)
芦生の森自然観察会の応募状況について	(荒井 亮)
和天別川流域の河川水の pH・EC	(柳本 順)
北海道研究林標茶区における降水の pH と ECー1999 年から 2009 年までの 11 年間の変化ー	(勝山 智憲)
直営による林道新設工事について	(長谷川 孝)
上賀茂試験地の見本林・実験林におけるマツ属の生育状況	(上賀茂試験地・柴田 泰征他)
G I S を用いた見本園植栽木情報管理データベースの構築	(奥田 賢)
技術ノート	
NP0 法人芦生自然学校「マザーツリープロジェクト」への協賛	(藤井 弘明)
芦生研究林上谷歩道沿いにおけるマルバマンサク葉枯れ病の調査	(長谷川 敦史)
芦生研究林に生えるキノコの個体調査	(西岡 裕平)
研修報告	
研究資料	
業務資料	

□ 森林研究 (2010 年度は発行なし)

□ 瀬戸臨海実験所年報

『瀬戸臨海実験所年報』第 23 巻, 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所編集, 日本印刷出版株式会社 印刷, 69p, 2010.

ー 目次ー

記事 1. 概要 2. 臨海実習等 3. 研究会・来訪研究者 4. 水族館記録 5. 水族館観覧者 6. 業績目録

資料 水族館飼育生物 水族館水温

研究・技術報告

瀬戸臨海実験所水族館におけるチゴガニの飼育展示と成長・活動 (山本 泰司・太田 満)

海藻類の簡便な水槽展示方法 (山本 泰司・太田 満)

京都大学白浜水族館にて行ったアンケート調査: 2007 年 4 月-2008 年 9 月の結果とその分析 (原田 桂太)

秋冬季に瀬戸臨海実験所構内に頻繁に出現した熱帯性のサツマゴキブリ (ゴキブリ目, ゴキブリ上科) (久保田 信)

和歌山県白浜町に所在する“京都大学瀬戸臨海実験所北浜”へ最近の 43 ヶ月間(2007-2010 年)に打ち上がった熱帯系の 2 種の二枚貝 (久保田 信)

□ 瀬戸臨海実験所紀要『Publications of the Seto Marine Biological Laboratory』 (2010 年度は発行なし)

□ Publications of the Seto Marine Biological Laboratory Special Publication Series Vol. 10.

『Selected Papers of the NaGISA Westpac Congress 2009』(H. Harada and Y. Shirayama (ed)), NaGISA 西部太平洋会議 2009 実行委員会(京大フィールド研瀬戸臨海実験所内)編集・発行, 日本印刷出版株式会社 印刷, 80p, 2010.

ー 目次ー

New Species of *Tethygeneia* (Eusiridae: Amphipoda) and New Record of Algae-Living Gammarid Amphipods in

South Sea Islands Marine National Park, Nakhon Si Thammarat Province, Thailand
 (Koraon Wongkamhaeng, Anuchit Darakrai and Pornsilp Pholpunthin)
 The Genus *Euthalenessa* (Sigalionidae: Polychaeta) from Thai and Japanese Waters
 (Charatsee Aungtonya, Danny Eibye-Jacobsen and Tetsuya Kato)
 Spatial and Temporal Variability of Intertidal Rocky Shore Molluscs in Sichang Island, East Coast of Thailand
 (Sujitra Samakramana, Gray A. Williamsb and Monthon Ganmanee)
 Review Article
 Actual Status and Some Conservation Problems of Coastal Biodiversity in Vietnam
 (Dang Ngoc Thanh)
 Baseline Assessment of Seagrass Communities of Lubang and Looc Islands, Occidental Mindoro, Philippines
 (Genibeth E. Genito, Fenelyn M. Nabuab, Cristy S. Acabado, Bella Sheila Albasin and Pacifico D. Beldia II)
 Assessment of Marine Meiobenthic Assemblages in Transplanted Mangrove Forests along the Inner Gulf of
 Thailand
 (Chittima Aryuthaka and Chawaporn Jittanoon)

□木文化プロジェクト報告書

『概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009年度報告書』京都大学フィールド科学教育研究センター編集・発行、257p、2010.

—目次—

由良川プロジェクト

仁淀川プロジェクト

平成21年度木文化プロジェクトにおける主な取り組み

◆フィールド研主催事業

1) 公開講座 2010「森のしくみとその役割」（芦生研究林）

日時：2010年7月29日(金)13時～8月1日(日)12時（2泊3日）

会場：芦生研究林（京都府南丹市美山町芦生）

実行委員会委員長：柴田 昌三

企画責任者：長谷川 尚史

（プログラム）

7月30日	講義	芦生研究林の紹介 芦生の森はどう変化したか？ 大学の山「芦生」 山を活かす 樹木識別入門	長谷川 尚史 安藤 信 川那辺 三郎（名誉教授） 神崎 康一（名誉教授） 長谷川 敦史・西岡 裕平
7月31日	野外実習	森林の観察・体験学習（天然林内での講義並びに実習） 吉岡、柴田、徳地、長谷川、寄元、中西、坂野上、福島、他職員	
8月1日	講義	山の暮らしの未来 芦生の暮らし	酒井 徹朗（情報学研究科 教授） 中根 勇雄（元技術職員）

2) 第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」

日時：2010年11月20日（土）13:30～17:00

会場：京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

企画責任者：田川 正朋

（プログラム）

基調講演Ⅰ「森里海連環教育の目指すところ—ムツゴロウとオランウータンの会話—」

田中 克（財団法人国際高等研究所 フェロー）

基調講演Ⅱ「子どもたちと森で学んだこと」

久山 慶子（フィールドソサイエティー事務局長）

講演 「“森里海連環学”と社会連携」

天野 礼子（作家）

報告 「まず大人が変われ... 日本のフィールド教育」

上野 正博（京都大学フィールド研 助教）

パネルディスカッションおよび会場との対話

コーディネーター

白山 義久（京都大学フィールド研）

パネリスト

田中 克・久山 慶子・天野礼子・上野 正博

3) 第2回由良川市民講座「森・里・海の対話」(由良川地域連携講座)

日時：2010年12月4日(土) 13:00～16:45

会場：ホテルロイヤルヒル福知山

主催：京都大学フィールド科学教育研究センター・京都府中丹広域振興局

助成：日本財団

後援：福知山市・舞鶴市・綾部市・南丹市・京丹波町・国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所

協力：エコロジーカフェ・京都モデルフォレスト協会

企画責任者：向井 宏

(プログラム)

講演「森と木の問題が、私達に語りかけていること」 白井 裕子(早稲田大学理工学術院 准教授)

講演「里がつなぐ森と海 ―昔、今、そして未来―」 柴田 昌三(京都大学フィールド研)

講演「由良川里山回廊構想って何？」 西村 悦雄(京都府中丹広域振興局農林商工部長)

4) 京都大学高知講演会・第2回仁淀川地域連携講座「森・里・海」

日時：2010年10月30日(土) 15:00～17:00

会場：高知サンライズホテル・2階向陽

主催：京都大学

助成：日本財団

後援：京都大学研究教育振興財団

(プログラム)

講演「海洋生物の多様性 現状と将来」 白山 義久(京都大学フィールド研センター長)

講演「仁淀川流域で探求する森里海連環」 柴田 昌三(京都大学フィールド研)

5) 第3回別寒辺牛川地域連携講座「流域管理と住民参加 ―環境保全の担い手へ―」

日時：2010年11月6日(土) 13:30～16:30

会場：厚岸町情報館2階

主催：京都大学フィールド科学教育研究センター、厚岸町、標茶町

助成：日本財団

企画責任者：向井 宏

(プログラム)

講演「流域ガバナンスを実現するには? ―琵琶湖の農業濁水問題を例に―」

谷内 茂雄氏(京都大学生態学研究センター准教授)

パネルディスカッション「環境保全に流域の住民参加をどう進めるか?」

司会：向井 宏(京都大学フィールド研)

パネリスト：津田 明宏(厚岸漁協青年部)、室崎 正之(厚岸せっけんの会)、福田 美樹夫(ネイバル厚岸)、

渋谷 辰生(厚岸町)、谷内 茂雄(京都大学)、佐藤 真行(京都大学)、徳地 直子(京都大学)、

仲岡 雅裕(北海道大学)、川辺 みどり(東京海洋大学)

6) 公開森林実習

日時：2010年9月6日～8日

会場：上賀茂試験地・芦生研究林・北白川試験地

参加者5人(人間環境大学他)

7) 公開シンポジウム「森里海連環と地球的課題」シンポジウム

日時：2010年9月24日～26日

会場：国際高等研究所

主催：国際高等研究所・京都大学フィールド科学教育研究センター他

◆フィールド研共催・後援事業

1) 全日空「私の青空・森づくり活動」において、森林・環境教室「京都大学フィールドセミナー(青空塾)」を開講

2010年4月24日 小松空港・安宅関の森 柴田 昌三

2010年5月22日 三宅島空港・アカコッコの森 中島 皇

2010年6月5日 根室中標津空港・シマフクロウの森 徳地 直子

2) 第6回南紀白浜まなびツアー

共催：NP0法人エコロジー・カフェ関西事務所

- 2010年9月22～23日 (瀬戸臨海実験所)
講義・指導 白山 義久
- 3) 森里海学びツアー in 志津川・気仙沼
共催：NPO 法人エコロジー・カフェ
協賛：(財)日本財団
2010年8月20～25日
講師： 畠山 重篤 (社会連携教授), 白山 義久他
- 4) 第5回エコの寺子屋～出張版・芦生の森で深呼吸しよう～ (講義／フィールド学習)
共催：NPO 法人エコロジー・カフェ
2010年5月29～30日 芦生研究林
講師 長谷川 尚史・高柳 敦 (農学研究科)
- 5) 京都大学ジュニアキャンパス 2010
中学生向けゼミ「森の作るおいしい水」 徳地・福島
2010年9月25日 (フィールド研第一会議室)
- 6) 東京で学ぶ 京大の知 シリーズ2 生きものの多様な世界
日時：2011年1月15日・29日・2月5日・12日
会場：京都大学東京オフィス
講演「人類の夢、不老不死のベニクラゲの神秘」 久保田 信
「海洋生物の行動学」 益田 玲爾
「マツ枯れナラ枯れ」 安藤 信
「海洋生物の生物多様性」 白山 義久
- 7) 第66回京大サロントーク
日時：2011年2月8日
会場：京都大学百周年時計台記念館京大サロン
講演「古都・京都の森林景観の回復」 安藤 信
- 8) 京都大学総合博物館レクチャーシリーズ no. 87 ジュニアレクチャー
日時：2011年2月12日
会場：京都大学総合博物館
講演「めったに咲かない竹の花が咲くとき…」 柴田 昌三
- 9) 共催：アサヒビール環境文化講座特別シンポジウム「自然の恵みを明日へ」
日時：2010年7月25日
会場：京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール
主催：アサヒビール株式会社, 社団法人日本環境教育フォーラム主催, フィールド研共催
白山センター長がパネリストとして参加
- 10) 後援：「仁淀川の森と水を考える」シンポジウム (高知県土佐市)
主催：仁淀川漁業協同組合
日時：2010年8月22日(日)
会場：グランディーズ (旧ウェディングプラザ寿苑) (高知県土佐市高岡町)
- 11) 協力：エコロジーカフェ関西事務所第3回シンポジウム「食文化と生物多様性から環境を考える」
主催：NPO 法人エコロジー・カフェ
日時：2010年7月16日
会場：京都産業会館
講演：「海洋生物から見る生物多様性」 白山 義久

◆各施設等主催共催事業

- 1) 芦生研究林
- | | |
|----------------------------------|--------|
| 芦生の森自然観察会 入門編「春の森を歩きながら樹木観察をしよう」 | 6月5日 |
| 美山町第4学年合同自然体験教室「美山っ子グリーンワールド」 | 7月27日 |
| 京都市立葛野小学校との共催で、総合的な学習の時間 | 9月10日 |
| 京都市立大枝小学校との共催で、総合的な学習の時間 | 10月14日 |

全国大学演習林協議会 中国・四国・近畿地区大学附属演習林等技術職員研修	10月26～28日
京都府立北桑田高等学校森林リサーチ科1年生「環境科学基礎」校外学習	10月29日
第17回森林生産システム研究会を後援	11月26～27日
(会場：日吉町森林組合間伐作業山林及び京都府立るり溪少年自然の家)	
2) 北海道研究林	
木工教室(標茶町立沼幌小学校との共催)	6月22日
ミニ公開講座「自然観察, 草木染め」(白糠区)	7月24日
ミニ公開講座「自然観察, 草木染め」(標茶区)	8月1日
ジュニアリーダー養成講座「しべちゃアドベンチャースクール」第4講座 (標茶町教育委員会社会教育課との共催)	11月6～7日
ジュニアリーダー養成講座「しべちゃアドベンチャースクール」第5講座 (標茶町教育委員会社会教育課との共催)	2011年1月22～23日
3) 和歌山研究林	
ウッズサイエンス(和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催)計25回	4月20日～1月18日
「SIMIZU タイム」(ふるさと体験)(和歌山県立有田中央高等学校清水分校との共催)	5月12日
総合的な学習の時間「森は友だち森林の町清水」(有田川町立八幡小学校との共催)	6月4日
芦生研究林・上賀茂試験地において森林体験学習(和歌山県立有田中央高等学校清水分校) (全日空との提携事業)	8月24～25日
「森とあそぶまなぶ」森林体験学習(有田川町産業課との共催) (町内小学生を対象に・「紀の国森づくり基金活用事業」の一環)	9月17日・10月15日
総合的な学習の時間「職業体験学習」(有田川町立八幡中学校との共催)	9月28日～30日
総合的な学習の時間「森を守ろう」(有田川町立八幡小学校との共催)	11月11日
有田川町立白馬中学校との共催で、総合的な学習の時間	8月31日
4) 上賀茂試験地	
上賀茂試験地春の自然観察会	4月24日
上賀茂試験地秋の自然観察会	11月13日
5) 北白川試験地	
京都大学ホームカミングデー参加者の見学会	11月13日
6) 徳山試験地	
「みどりの案内人養成プロジェクト」特別講座	6月13日, 10月3日, 12月12日
(周南市「みどりの案内人養成プロジェクト」実行委員会と共催)	
周南市環境学習教室「森林とふれあい自分だけのオリジナル図鑑を作ってみよう」 (楠浜・久米・大島・杵島・菊川・中央公民館と共催)	10月23日
7) 紀伊大島実験所	
古座川合同調査(第53回～第64回, 毎月開催)	
第11回古座川シンポジウム(古座川流域協議会と共催・和歌山県古座川町)	6月30日
第12回古座川シンポジウム(古座川流域協議会と共催・和歌山県古座川町)	12月16日
第13回古座川シンポジウム(古座川流域協議会と共催・和歌山県古座川町)	3月17日
SSH事業 名古屋市立向陽高等学校	3月22日
8) 舞鶴水産実験所	
SPP事業 京都府立西舞鶴高等学校	7月22～23日, 9月18日
SSH事業 兵庫県立神戸高等学校	5月29日
SSH事業 京都教育大学附属高等学校	7月28～30日, 3月14日
SPP事業 京都府立南陽高等学校サイエンスリサーチ科 講義と実習	7月17日, 8月3～4日
京都府立海洋高等学校海洋科学科 講義と施設案内	5月11日
兵庫県立西宮今津高等学校 フィールド科学実習	7月27日
舞鶴市小学校教育研究会社会科夏季研究会 講演	8月17日
綾部市学校教育研究会 夏季研究会	8月18日
第2回舞鶴高等教育機関等合同PR事業(展示解説及び講演・舞鶴市西市民プラザ)	9月19日
「ネイチャーガイド養成講座」に講師派遣(舞鶴市商工観光センター)	9月14日
舞鶴市立中保育所・見学, 講話	10月19日, 3月9日

向日市立第3 向陽小学校 講演	11 月 2 日
舞鶴市立大浦小学校 講演	11 月 5 日
舞鶴市立倉橋小学校 講演	11 月 4 日
亀岡市立川東小学校 講演	2011 年 2 月 23 日
宮津市立日置小学校 講演	2011 年 3 月 10 日
舞鶴市立高野小学校 講演	2011 年 3 月 16 日

9) 瀬戸臨海実験所

「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」(毎日開催)	2010 年 3 月 25 日～4 月 7 日
公開臨海実習(2009 年度春期) (国立大学法人臨海臨湖実験所長会議 主催)	2010 年 3 月 28 日～4 月 3 日
小・中・高・大連携による紀南地域の森林環境学習 (和歌山県紀の国森づくり基金活用事業)	
(三栖小学校・高雄中学校・神島高等学校)	2010 年 4 月～
きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の磯採集体験・バックヤード体験学習」	4 月 17 日, 5 月 15 日, 6 月 12 日
SSH 事業実習 和歌山県立向陽高等学校	4 月 29 日
開館 80 周年記念特別展 内海富士夫展	6 月 1 日～1 月 10 日
SSH 事業実習 奈良県立奈良高校	6 月 5～6 日
大阪府立住吉高等学校 理科・生物科 水族生態理解のための臨海実習	7 月 17～19 日
「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」 (毎日開催)	7 月 21 日～8 月 31 日
SSH 事業実習 滋賀県立膳所高等学校	7 月 21～24 日
SSH 事業実習 奈良女子大学附属中等教育学校	7 月 27 日～29 日
公開臨海実習(2010 年度夏期) (国立大学法人臨海臨湖実験所所長会議 主催)	8 月 3 日～11 日
兵庫県立尼崎小田高等学校 臨海実習	8 月 21～22 日
奈良県立奈良北高等学校 校外研修「海の動物の多様性について」	10 月 8 日
きのくに県民カレッジ連携講座「水族館の飼育体験」	10 月 30 日, 12 月 4 日, 2 月 26 日
SSC コース 兵庫県立姫路飾西高等学校	11 月 4 日～6 日 (A 班)・11 月 11 日～13 日 (B 班)
「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」 (毎日開催)	12 月 25 日～1 月 10 日
大阪府立豊中高等学校 生物特別臨海実習	2011 年 1 月 7～9 日
公開臨海実習(2010 年度春期) (国立大学法人臨海臨湖実験所長会議 主催)	2011 年 3 月 20～26 日
「研究者と飼育係のこだわり解説ツアー」・「バックヤードツアー」 (毎日開催)	2011 年 3 月 25～31 日

10) 海域陸域統合管理学研究部門

海域陸域統合管理学会セミナー

第 12 回 鈴木 啓太「大きな潮汐を備えた河口域における粒状有機物の動態」	5 月 11 日
第 13 回 富士 泰期(京大農学研究科 M2)「由良川河口域におけるスズキ稚魚の初期生活史」	6 月 22 日
第 14 回 鈴木 健太郎「由良川水系における懸濁態有機物の起源と底棲生物群集」	7 月 20 日
第 15 回 田中 克(マレーシア, サバ大学)「A newly integrated "H to O studies" to conserve and restore for more sustainable human society in the world」	
マルーフ・カシム(インドネシア, ハルオレオ大学)「The Establishment of Community Based -Marine Protected Areas for Marine Ecotourism in Eastern Indonesia」	1 月 13 日
第 16 回 SuriyanTunkijjanukij(タイ, カセサート大学)「Shrimp and fish pond management related to coastal management and conservation in Thailand (タイにおけるエビ・魚養殖池の管理ー沿岸域管理・保全と関連してー)」	2 月 21 日

◆フィールド研関連刊行物編集委員会等

- 「森林研究」編集委員(フィールド研教員のみ)
柴田 昌三(委員長)・吉岡 崇仁・安藤 信・芝 正己・徳地 直子・中島 皇・寄元 道徳・坂野上なお
- 「Publications of the Seto Marine Biological Laboratory」編集委員(フィールド研教員のみ)
白山 義久(委員長)・久保田 信・宮崎 勝己・大和 茂之・深見 裕伸

(2) 研究成果

◆著書

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

Ogawa, N. O. ; Wada, E. ; Smirnova-Zalumi, N. S. ; Melnik, N. G. ; Bondarenko, N. A. ; Shimaraev, M. N. ; Smirnov, V. V. ; Yoshioka, T. "Fish scales as a record of atmospheric change". Earth, Life, and Isotopes. Ohkouchi, N. ; Tayasu, I. ; Koba, K. ed., Kyoto University Press, 2010, p.263-270.

吉岡 崇仁. "環境アセスメント". 地球環境学事典. 総合地球環境学研究所編. 弘文堂, 2010, p. 526-527.

里域生態系部門

■山下 洋

Fujita, Junta; Nakayama, Kouji; Kai, Yoshiaki; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. "Comparison of genetic population structures between the landlocked shrimp, *Neocaridina denticulata denticulata*, and the amphidromous shrimp, *Caridina leucosticta* (Decapoda: Atyidae) as inferred from mitochondrial DNA sequences". Netherlands. Asakura, A. ed., Brill, 2011, p.183-196.

■柴田 昌三

柴田 昌三 (文), 石森 愛彦 (絵). "木?それとも草?竹は竹". 福音館書店, (月刊「たくさんのふしぎ」 2010 年 10 月号 (第 307 号)) 2010, 40p.

■益田 玲爾

Burk, J. ; Masuda, Reiji. "Behavioral quality of flatfish for stock enhancement". Practical Flatfish Culture and Stock Enhancement. Daniels H.V., Watanabe, W.O. ed., Blackwell, 2010, p.303-322.

益田 玲爾. "行動観察". 魚類生態学の基礎. 塚本 勝巳編. 恒星社厚生閣, 2010, p.120-131.

益田 玲爾. "群れ行動". 魚類生態学の基礎. 塚本 勝巳編. 恒星社厚生閣, 2010, p.264-274.

益田 玲爾. "コラム 魚の目から見たクラゲ". 水産の 21 世紀. 田中 克・川合 真一郎・谷口 順彦・坂田 泰造編. 京都大学学術出版会, 2010, p.415-416.

■田川 正朋

田川 正朋, 田中 克. "14 章 変態と着底". 魚類生態学の基礎. 塚本 勝巳編. 恒星社厚生閣, 2010, p.161-171.

■梅本 信也

梅本 信也. 里域連環学入門. ユニバース印刷, 2010, 103p.

梅本 信也 (分担執筆). 雑草学事典. 山口裕文・編集, 梅本信也・副編集. 日本雑草学会, 2011, 362p.

■長谷川 尚史

長谷川 尚史. "森林利用研究のレビュー作業". 森林利用学会誌 25 年のあゆみ. 森林利用学会, 2011, p.37-40.

■上野 正博

Fujita, Junta; Nakayama, Kouji; Kai, Yoshiaki; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. "Comparison of genetic population structures between the landlocked shrimp, *Neocaridina denticulata denticulata*, and the amphidromous shrimp, *Caridina leucosticta* (Decapoda: Atyidae) as inferred from mitochondrial DNA sequences". Netherlands. Asakura, A. ed., Brill, 2011, p.183-196.

■中山 耕至

Fujita, Junta; Nakayama, Kouji; Kai, Yoshiaki; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. "Comparison of genetic population structures between the landlocked shrimp, *Neocaridina denticulata denticulata*, and the amphidromous shrimp, *Caridina leucosticta* (Decapoda: Atyidae) as inferred from mitochondrial DNA sequences". Netherlands. Asakura, A. ed., Brill, 2011, p.183-196.

■甲斐 嘉晃

Fujita, Junta; Nakayama, Kouji; Kai, Yoshiaki; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. "Comparison of genetic population structures between the landlocked shrimp, *Neocaridina denticulata denticulata*, and the amphidromous shrimp, *Caridina leucosticta* (Decapoda: Atyidae) as inferred from mitochondrial DNA sequences". Netherlands. Asakura, A. ed., Brill, 2011, p.183-196.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

Konar, B. ; Iken, K. ; Pohle, G. ; Miloslavich, P. ; Cruz-Motta, J. J. ; Benedetti-Cecchi, L. ; Kimani, E. ; Knowlton, A. ;

Trott, T.; Iseto, Toru; Shirayama, Yoshihisa. "Surveying Nearshore Biodiversity". Life in the World's Oceans: Diversity, Distribution, and Abundance. Wiley-Blackwell, 2010, p. 27-41.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

向井 宏. "3.10 石西礁湖自然再生事業". 自然再生ハンドブック. 日本生態学会編. 地人書館, 2010, p. 155-162.

向井 宏. "広域対応・全国的な対応が必要とされる課題". 自然再生ハンドブック. 日本生態学会編. 地人書館, 2010, p. 163-166.

■佐藤 真行

佐藤 真行. "予防原則、オプション価格、費用便益分析". 環境リスク管理と予防原則— 法学的・経済学的検討. 植田和弘・大塚直編. 有斐閣, 2010,

◆原著論文・総説（査読あり）

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

吉岡 崇仁; Mostofa, K. M. G. 琵琶湖およびバイカル湖とその集水域における溶存有機物の動態. 日本腐植物質学会誌. 2010, 7, p. 5-14.

佐々木 尚子, 吉岡 崇仁, 小川 安紀子, 勝山 正則, 日野 修次, 高原 光. 鉛-210・セシウム-137 法による年代測定ならびに花粉分析に基づく朱鞠内湖集水域における過去 50 年間の植生復元. 日本花粉学会会誌. 2010, 56(1), p. 31-43.

Anawar, Hossain; Yoshioka, Takahito; Konohira, Eiichi; Akai, Junji; Freitas, M.; Tareq, Shafi. Sources of organic carbon and depositional environment in the Bengal delta plain sediments during the Holocene period. Limnology. 2010, 11(2), p. 133-142.

Tobari, Y.; Koba, K.; Fukushima, K.; Tokuchi, N.; Ohte, N.; Tateno, R.; Toyoda, S.; Yoshioka, T.; Yoshida, N. Contribution of atmospheric nitrate to stream-water nitrate in Japanese coniferous forests revealed by the oxygen isotope ratio of nitrate. Rapid Communications in Mass Spectrometry. 2010, 24(9), p. 1281-1286.

■芝 正己

Masuda, Reiji; Shiba, Masami; Yamashita, Yoh; Ueno, Masahiro; Kai, Yoshiaki; Nakanishi, Asami; Torikoshi, Masaru; Tanaka, Masaru. Fish assemblages associated with three types of artificial reefs: density of assemblages and possible impacts on adjacent fish abundance. Fishery Bulletin. 2010, 108(2), p. 162-173.

■徳地 直子

徳地 直子, 臼井 伸章, 上田 実希, 福島 慶太郎. 里山の植生変化と物質収支: 竹林拡大に関する天王山における考察. 水利科学. 2010, 54, p. 90-103.

大手 信人, 徳地 直子, 藤本 将光. N03—流出の季節変動を制御する要因. 水利科学. 2010, 54(1), p. 1-16.

Arai, Hirotsugu; Tokuchi, Naoko. Soil organic carbon accumulation following afforestation in a Japanese coniferous plantation based on particle-size fractionation and stable isotope analysis. Geoderma. 2010, 159(3-4), p. 425-430.

Arai, Hirotsugu; Tokuchi, Naoko. Factors contributing to greater soil organic carbon accumulation after afforestation in a Japanese coniferous plantation as determined by stable and radioactive isotopes. Geoderma. 2010, 157(3-4), p. 243-251.

Ohte, Nobuhito; Tokuchi, Naoko; Fujimoto, Masamitsu. Seasonal Patterns of Nitrate Discharge from Forested Catchments: Information Derived from Japanese Case Studies. Geography Compass. 2010, 4(9), p. 1358-1376.

Ueda, Miki; Mizumachi, Eri; Tokuchi, Naoko. Winter nitrate uptake by the temperate deciduous tree *Quercus serrata*. Journal of Forest Research. 2010, 15(6), p. 411-414.

■寄元 道徳

Matsuyama, Shuhei; Sakimoto, Michinori. Sexual dimorphism of reproductive allocation at shoot and tree levels in *Zanthoxylum ailanthoides*, a pioneer dioecious tree. Botany. 2010, 88(10), p. 867-874.

■坂野上 なお

坂野上 なお. 木材生産・流通に影響を与える需要側の変化を追って—林業経済研究は木材需要の行方をどのように捉えるか（[林業経済学会]2011 年春季大会論文 林業経済研究は森林セクターにどう貢献するか—気鋭の研究者はこう考える）. 林業経済研究. 2011, 57(1), p. 19-26.

■佐藤 拓哉

Sato, Takuya; Watanabe, Katsutoshi; Kanaiwa, Minoru; Niizuma, Yasuaki; Harada, Yasushi; Lafferty, Kevin.

- Nematomorph parasites drive energy flow through a riparian ecosystem. *Ecology*. 2011, 92(1), p.201-207. (2010 オンライン公開 doi: 10.1890/09-1565.1)
- Sato, Takuya. Adult hairworms face the risk of ingestion by stream salmonids via predation on their cricket hosts. *Limnology*. 2011, 12(1), p.83-88.
- Sato, Takuya; Gwo, Jin-Chywan. Demographic and genetic consequences of population subdivision in Formosa land-locked salmon *Oncorhynchus masou formosanus*, the southernmost subspecies of the salmonids. *Ichthyological Research*. 2011, p.1-8.
- Sato, Takuya; Demise, Teruko; Kubota, Hitoshi; Nagoshi, Makoto; Watanabe, Katsutoshi. Hybridization, Isolation, and Low Genetic Diversity of Kirikuchi Char, the Southernmost Populations of the Genus *Salvelinus*. *Transactions of the American Fisheries Society*. 2010, 139(6), p.1758.
- 長田 典之
- Osada, Noriyuki; Onoda, Yusuke; Hikosaka, Kouki. Effects of atmospheric CO₂ concentration, irradiance, and soil nitrogen availability on leaf photosynthetic traits of *Polygonum sachalinense* around natural CO₂ springs in northern Japan. *Oecologia*. 2010, 164(1), p.41-52.
- Osada, Noriyuki. Height-dependent changes in shoot structure and tree allometry in relation to maximum height in four deciduous tree species. *Functional Ecology*. 2011 (2011 オンライン出版 doi: 10.1111/j.1365-2435.2011.01833.x)
- 里域生態系部門**
- 山下 洋
- 山下 洋. 森・里・海とつながる生態系. 沿岸海洋研究. 2011, 48, p.131-138.
- 藤浪 祐一郎, 山下 洋. ヒラメ: 放流効果低迷の原因を考える. 日本水産学会誌. 2010, 76(2), p.256-257.
- Chin, Byung-Sun; Nakagawa, Masahiro; Tagawa, Masatomo; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ontogenetic changes of habitat selection and thyroid hormone levels in black rockfish (*Sebastes schlegelii*) reared in captivity. *Ichthyological Research*. 2010, 57(3), p.278-285.
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihito; Suzuki, Keita; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. Freshwater migration and feeding habits of juvenile temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in the stratified Yura River estuary, the Sea of Japan. *Fisheries Science*. 2010, 76(4), p.643-652.
- Islam, Md Shahidul; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. Growth-dependent survival mechanisms during the early life of a temperate seabass (*Lateolabrax japonicus*): field test of the 'growth-mortality' hypothesis. *Fisheries Oceanography*. 2010, 19(3), p.230-242.
- Kanaji, Y.; Kishida, M.; Watanabe, Y.; Kawamura, T.; Xie, S.; Yamashita, Y.; Sassa, C.; Tsukamoto, Y. Variations in otolith patterns, sizes and body morphometrics of jack mackerel *Trachurus japonicus* juveniles. *Journal of Fish Biology*. 2010, 77(6), p.1325-1342.
- Kishida, Munenori; Kanaji, Yu; Xie, Songguang; Watanabe, Yoshiro; Kawamura, Tomohiko; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ecomorphological dimorphism of juvenile *Trachurus japonicus* in Wakasa Bay, Japan. *Environmental Biology of Fishes*. 2011, 90(3), p.301-315.
- Masuda, Reiji; Shiba, Masami; Yamashita, Yoh; Ueno, Masahiro; Kai, Yoshiaki; Nakanishi, Asami; Torikoshi, Masaru; Tanaka, Masaru. Fish assemblages associated with three types of artificial reefs: density of assemblages and possible impacts on adjacent fish abundance. *Fishery Bulletin*. 2010, 108(2), p.162-173.
- Miyajima, Y.; Masuda, R.; Kurihara, A.; Kamata, R.; Yamashita, Y.; Takeuchi, T. Juveniles of threadsail filefish, *Stephanolepis cirrifer*, can survive and grow by feeding on moon jellyfish *Aurelia aurita*. *Fisheries Science*. 2011, 77(1), p.41-48.
- Miyajima, Yuko; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Feeding preference of threadsail filefish *Stephanolepis cirrifer* on moon jellyfish and lobworm in the laboratory. *Plankton and Benthos Research*. 2011, 6(1), p.12-17.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Ueno, Masahiro; Fukunishi, Yuichi; Yamashita, Yoh. Effects of turbidity on survival of larval ayu and red sea bream exposed to predation by jack mackerel and moon jellyfish. *Fisheries Science*. 2011, 77(2), p.207-215.
- Omoto, Naotaka; Koya, Yasunori; Chin, Byungsun; Yamashita, Yoh; Nakagawa, Masahiro; Noda, Tsutomu. Gonadal sex differentiation and effect of rearing temperature on sex ratio in black rockfish (*Sebastes schlegelii*). *Ichthyological Research*. 2010, 57(2), p.133-138.
- Takahashi, K.; Masuda, R.; Yamashita, Y. Ontogenetic changes in the spatial learning capability of jack mackerel

- Trachurus japonicus*. Journal of Fish Biology. 2010, 77(10), p.2315-2325.
- Wada, T. ; Yamada, T. ; Shimizu, D. ; Aritaki, M. ; Sudo, H. ; Yamashita, Yoh; Tanaka, M. Successful stocking of a depleted species, spotted halibut *Verasper variegatus*, in Miyako Bay, Japan: evaluation from post-release surveys and landings. Marine Ecology Progress Series. 2010, 407, p.243-255.
- 田川 正朋
- Chin, Byung-Sun; Nakagawa, Masahiro; Tagawa, Masatomo; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ontogenetic changes of habitat selection and thyroid hormone levels in black rockfish (*Sebastes schlegelii*) reared in captivity. Ichthyological Research. 2010, 57(3), p.278-285.
- Nishikawa, Taizo; Aritaki, Masato; Shimizu, Daisuke; Wada, Toshihiro; Tanaka, Masaru; Tagawa, Masatomo. Faster growth before metamorphosis leads to a higher risk of pseudoalbinism in juveniles of the starry flounder *Platichthys stellatus*, as suggested by otolith back-calculation. Fisheries Science. 2010, 76(5), p.827-831.
- 益田 玲爾
- 益田 玲爾. 魚類の群れ行動の個体発生:反射の連鎖から社会の形成まで. 日本水産学会誌. 2011, 77(1), p.117.
- Masuda, Reiji; Shiba, Masami; Yamashita, Yoh; Ueno, Masahiro; Kai, Yoshiaki; Nakanishi, Asami; Torikoshi, Masaru; Tanaka, Masaru. Fish assemblages associated with three types of artificial reefs: density of assemblages and possible impacts on adjacent fish abundance. Fishery Bulletin. 2010, 108(2), p.162-173.
- Chin, Byung-Sun; Nakagawa, Masahiro; Tagawa, Masatomo; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ontogenetic changes of habitat selection and thyroid hormone levels in black rockfish (*Sebastes schlegelii*) reared in captivity. Ichthyological Research. 2010, 57(3), p.278-285.
- Ito, Yusuke; Yasuma, Hiroki; Masuda, Reiji; Minami, Kenji; Matsukura, Ryuichi; Morioka, Saho; Miyashita, Kazushi. Swimming angle and target strength of larval Japanese anchovy (*Engraulis japonicus*). Fisheries Science. 2011, 77(2), p.161-167.
- Kishida, Munenori; Kanaji, Yu; Xie, Songguang; Watanabe, Yoshiro; Kawamura, Tomohiko; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ecomorphological dimorphism of juvenile *Trachurus japonicus* in Wakasa Bay, Japan. Environmental Biology of Fishes. 2011, 90(3), p.301-315.
- Miyajima, Y. ; Masuda, R. ; Kurihara, A. ; Kamata, R. ; Yamashita, Y. ; Takeuchi, T. Juveniles of threadsail filefish, *Stephanolepis cirrifer*, can survive and grow by feeding on moon jellyfish *Aurelia aurita*. Fisheries Science. 2011, 77(1), p.41-48.
- Miyajima, Yuko; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Feeding preference of threadsail filefish *Stephanolepis cirrifer* on moon jellyfish and lobworm in the laboratory. Plankton & benthos research. 2011, 6(1), p.12-17.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Ueno, Masahiro; Fukunishi, Yuichi; Yamashita, Yoh. Effects of turbidity on survival of larval ayu and red sea bream exposed to predation by jack mackerel and moon jellyfish. Fisheries Science. 2011, 77(2), p.207-215.
- Takahashi, K. ; Masuda, R. ; Yamashita, Y. Ontogenetic changes in the spatial learning capability of jack mackerel *Trachurus japonicus*. Journal of Fish Biology. 2010, 77(10), p.2315-2325.
- 梅本 信也
- 梅本 信也. 和歌山県那智勝浦町ぶつぶつ川の里域植物誌. 熊野誌. 2010, 57(1), p.116-127.
- Umemoto, Shinya. Linkage Equilibrium of Human Ecosystem and its Transformation in Laurel Forest of Guizhou Province, China. Genetic Assay and Study of Crop Germplasm in and around China(4th). 2010, p.11-20.
- 中西 麻美
- Masuda, Reiji; Shiba, Masami; Yamashita, Yoh; Ueno, Masahiro; Kai, Yoshiaki; Nakanishi, Asami; Torikoshi, Masaru; Tanaka, Masaru. Fish assemblages associated with three types of artificial reefs: density of assemblages and possible impacts on adjacent fish abundance. Fishery Bulletin. 2010, 108(2), p.162-173.
- 上野 正博
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihide; Suzuki, Keita; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. Freshwater migration and feeding habits of juvenile temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in the stratified Yura River estuary, the Sea of Japan. Fisheries Science. 2010, 76(4), p.643-652.
- Islam, Md Shahidul; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. Growth-dependent survival mechanisms during the early life of a temperate seabass (*Lateolabrax japonicus*): field test of the 'growth-mortality' hypothesis. Fisheries Oceanography. 2010, 19(3), p.230-242.
- Masuda, Reiji; Shiba, Masami; Yamashita, Yoh; Ueno, Masahiro; Kai, Yoshiaki; Nakanishi, Asami; Torikoshi, Masaru;

Tanaka, Masaru. Fish assemblages associated with three types of artificial reefs: density of assemblages and possible impacts on adjacent fish abundance. *Fishery Bulletin*. 2010, 108(2), p.162-173.

Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Ueno, Masahiro; Fukunishi, Yuichi; Yamashita, Yoh. Effects of turbidity on survival of larval ayu and red sea bream exposed to predation by jack mackerel and moon jellyfish. *Fisheries Science*. 2011, 77(2), p. 207-215.

■中山 耕至

Iseki, Tomoaki; Mizuno, Kouki; Ohta, Taro; Nakayama, Kouji; Tanaka, Masaru. Current status and ecological characteristics of the Chinese temperate bass *Lateolabrax* sp., an alien species in the western coastal waters of Japan. *Ichthyological Research*. 2010, 57(3), p. 245-253.

Nakabo, Tetsuji; Nakayama, Kouji; Muto, Nozomu; Miyazawa, Masayuki. *Oncorhynchus kawamurae* “Kunimasu,” a deepwater trout, discovered in Lake Saiko, 70 years after extinction in the original habitat, Lake Tazawa, Japan. *Ichthyological Research*. 2011, p.1-4.

■甲斐 嘉晃

Katafuchi, Hiroshi; Kai, Yoshiaki; Nakabo, Tetsuji. “Genetic divergence in *Ditrema jordani* (Perciformes: Embiotocidae) from the Pacific coast of southern Japan, as inferred from mitochondrial DNA sequences”. *Ichthyological Research*. 2010, p.1-5.

Masuda, Reiji; Shiba, Masami; Yamashita, Yoh; Ueno, Masahiro; Kai, Yoshiaki; Nakanishi, Asami; Torikoshi, Masaru; Tanaka, Masaru. Fish assemblages associated with three types of artificial reefs: density of assemblages and possible impacts on adjacent fish abundance. *Fishery Bulletin*. 2010, 108(2), p.162-173.

■南 憲吏

Minami, Kenji; Hamano, Akira; Nakamura, Takeshi. Shape and target strength of vesicles of two *Sargassum* species common to the coastal waters of Japan. *海洋音響学会誌*. 2010, 37(3), p.147-155.

Minami, Kenji; Yasuma, Hiroki; Tojo, Naoki; Fukui, Shin-ichi; Ito, Yusuke; Nobetsu, Takahiro; Miyashita, Kazushi. Estimation of kelp forest, *Laminaria* spp., distributions in coastal waters of the Shiretoko Peninsula, Hokkaido, Japan, using echosounder and geostatistical analysis. *Fisheries Science*. 2010, 76(5), p.729-736.

Ito, Yusuke; Yasuma, Hiroki; Masuda, Reiji; Minami, Kenji; Matsukura, Ryuichi; Morioka, Saho; Miyashita, Kazushi. Swimming angle and target strength of larval Japanese anchovy (*Engraulis japonicus*). *Fisheries Science*. 2011, 77(2), p.161-167.

■陳 炳善

陳 炳善, 野田 勉. クロソイ: 栽培漁業による資源増殖の現状と将来展望. *日本水産学会誌*. 2010, 76(2), p.254-255.

Omoto, Naotaka; Koya, Yasunori; Chin, Byungsun; Yamashita, Yoh; Nakagawa, Masahiro; Noda, Tsutomu. Gonadal sex differentiation and effect of rearing temperature on sex ratio in black rockfish (*Sebastes schlegelii*). *Ichthyological Research*. 2010, 57(2), p.133-138.

Chin, Byung-Sun; Nakagawa, Masahiro; Tagawa, Masatomo; Masuda, Reiji; Yamashita, Yoh. Ontogenetic changes of habitat selection and thyroid hormone levels in black rockfish (*Sebastes schlegelii*) reared in captivity. *Ichthyological Research*. 2010, 57(3), p.278-285.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

Benedetti-Cecchi, Lisandro; Iken, Katrin; Konar, Brenda; Cruz-Motta, Juan; Knowlton, Ann; Pohle, Gerhard; Castelli, Alberto; Tamburello, Laura; Mead, Angela; Trott, Tom; Miloslavich, Patricia; Wong, Melisa; Shirayama, Yoshihisa; Lardicci, Claudio; Palomo, Gabriela; Maggi, Elena. Spatial Relationships between Polychaete Assemblages and Environmental Variables over Broad Geographical Scales. *PLoS ONE*. 2010, 5(9), p.e12946.

Cruz-Motta, Juan; Miloslavich, Patricia; Palomo, Gabriela; Iken, Katrin; Konar, Brenda; Pohle, Gerhard; Trott, Tom; Benedetti-Cecchi, Lisandro; Herrera, César; Hernández, Alejandra; Sardi, Adriana; Bueno, Andrea; Castillo, Julio; Klein, Eduardo; Guerra-Castro, Edlin; Gobin, Judith; Gómez, Diana Isabel; Riosmena-Rodríguez, Rafael; Mead, Angela; Bigatti, Gregorio; Knowlton, Ann; Shirayama, Yoshihisa. Patterns of Spatial Variation of Assemblages Associated with Intertidal Rocky Shores: A Global Perspective. *PLoS ONE*. 2010, 5(12), p.e14354.

Fujikura, Katsunori; Lindsay, Dhugal; Kitazato, Hiroshi; Nishida, Shuhei; Shirayama, Yoshihisa. Marine Biodiversity in Japanese Waters. *PLoS ONE*. 2010, 5(8), p.e11836.

Iken, Katrin; Konar, Brenda; Benedetti-Cecchi, Lisandro; Cruz-Motta, Juan; Knowlton, Ann; Pohle, Gerhard; Mead,

Angela; Miloslavich, Patricia; Wong, Melisa; Trott, Thomas; Mieszkowska, Nova; Riosmena-Rodriguez, Rafael; Airoldi, Laura; Kimani, Edward; Shirayama, Yoshihisa; Frascchetti, Simonetta; Ortiz-Touzet, Manuel; Silva, Angelica. Large-Scale Spatial Distribution Patterns of Echinoderms in Nearshore Rocky Habitats. PLoS ONE. 2010, 5(11), p. e13845.

Konar, Brenda; Iken, Katrin; Cruz-Motta, Juan; Benedetti-Cecchi, Lisandro; Knowlton, Ann; Pohle, Gerhard; Miloslavich, Patricia; Edwards, Matt; Trott, Thomas; Kimani, Edward; Riosmena-Rodriguez, Rafael; Wong, Melisa; Jenkins, Stuart; Silva, Angelica; Pinto, Isabel Sousa; Shirayama, Yoshihisa. Current Patterns of Macroalgal Diversity and Biomass in Northern Hemisphere Rocky Shores. PLoS ONE. 2010, 5(10), p. e13195.

■久保田 信

久保田 信, 檜山 嘉郎, 田名瀬 英朋. 和歌山県白浜町の3箇所に発育したグンバイヒルガオ(ヒルガオ科)は初回の越冬できず. 南紀生物. 2010, 52(1), p. 61-62.

久保田 信, 檜山 嘉郎, 山本 泰司, 田名瀬 英朋, 湊 宏, 小山 安生. 和歌山県白浜町沿岸へのオウムガイ(オウムガイ科)の漂着記録4例. 南紀生物. 2010, 52(1), p. 79-80.

久保田 信, 大藪 健. “大型”のベニクラゲ(ヒドロ虫綱, 花クラゲ目)の千葉県沿岸への初出現. 南紀生物. 2010, 52(2), p. 149-150.

Kubota, Shin; Hyakutake, Kanako; Akiyama, Hisashi. First occurrence of the hydromedusa *Paralovenia bitentaculata* (Hydrozoa: Leptomedusae) in Japan. Biogeography. 2010, 12, p. 143-144.

Kubota, Shin; Lee, Ji Min; Chang, Cheon Young. Later appearance of giant jelly fish, *Nemopilema nomurai* (Scyphozoa: Rhizostomeae) in the inshore waters at the Jindo Island and the Jeju Island, Korea in November, 2009. Biogeography. 2010, 12, p. 9-11.

Kubota, Shin; Nomaru, Eriko; Uchida, Hiroko; Murakami, Akio. Distribution pattern of GFP (green fluorescent protein) in a bivalve-inhabiting hydrozoan, *Eutima japonica* (Leptomedusae: Eirenidae). Journal of the Marine Biological Association of the UK. 2010, 90, p. 1371-1374.

秋山 仁, 堀之内 詩織, 山崎 悠介, 辻田 明子, 久保田 信. わが国で確認されたキョヒメクラゲ(有触手綱, カブトクラゲ目、キョヒメクラゲ科)の飼育と観察および最大個体について. 日本生物地理学会会報. 2010, 65p. 97-99.

宇井 賢二郎, 久保田 信. 秋田県男鹿半島で記録された稀少なハナクラゲモドキ *Mercuritum octocostatum* (軟クラゲ目、ハナクラゲモドキ科). 南紀生物. 2010, 52(2), p. 111-112.

森 喜信, 久保田 信, 上野 俊士郎. 和歌山県みなべ町沿岸で小型魚類を捕食した稀少種ヒクラゲ(刺胞動物門, 箱虫綱, アンドンクラゲ科). 南紀生物. 2010, 52(1), p. 16-17.

Han, Jian; Kubota, Shin; Uchida, Hiro-omi; Stanley, George D. Jr; Yao, Xiaoyong; Shu, Degan; Li, Yong; Yasui, Kinya. Tiny sea anemone from the Lower Cambrian of China. PLoS ONE. 2010, 5(10), p. e13276.

■宮崎 勝己

Miyazaki, Katsumi; Makioka, Toshiki. Structure of the adult female reproductive system in the sea spider, *Propallene longiceps* (Pycnogonida, Callipallenidae) and its functional and evolutionary significance. Invertebrate Reproduction and Development. 2010, 54(1), p. 35-39.

Yusa, Yoichi; Takemura, Mayuko; Miyazaki, Katsumi; Watanabe, Tetsuya; Yamato, Shigeyuki. Dwarf males of *Octolasmis warwickii* (Cirripedia: Thoracica): The first example of coexistence of males and hermaphrodites in the suborder Lepadomorpha. Biological Bulletin. 2010, 218(3), p. 259-265.

■大和 茂之

Inatsuchi, Ayano; Yamato, Shigeyuki; Yusa, Yoichi. Effects of temperature and food availability on growth and reproduction in the neustonic pedunculate barnacle *Lepas anserifera*. Marine Biology. 2010, 157(4), p. 899-905.

■深見 裕伸

深見 裕伸, 立川 浩之, 鈴木 豪, 永田 俊輔, 杉原 薫. 日本における造礁性イシサンゴ類の同定の現状とその分類学的問題点. 日本サンゴ礁学会誌. 2010, 12p. 1-15.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

Whanpetch, Napakhwan; Nakaoka, Masahiro; Mukai, Hiroshi; Suzuki, Takao; Nojima, Satoshi; Kawai, Takashi; Aryuthaka, Chittima. Temporal changes in benthic communities of seagrass beds impacted by a tsunami in the Andaman Sea, Thailand. Estuarine, Coastal and Shelf Science. 2010, 87(2), p. 246-252.

■佐藤 真行

Sakagami, Masaji; Sato, Masayuki; Ueta, Kazuhiro. A Study on Japanese Consumers Preferences for Agricultural

Spinach as Fresh Foods. Current Nutrition and Food Science. August 2010, 6, p.200-203.

Tokimatsu, Koji; Yamaguchi, Rintaro; Sato, Masayuki; Yasuoka, Rieko; Nishio, Masahiro; Ueta, Kazuhiro. Measuring future dynamics of genuine saving with changes of population and technology: application of an integrated assessment model. Environment, Development and Sustainability. 2011, p.1-23.

企画研究推進部門

■福島 慶太郎

徳地 直子, 臼井 伸章, 上田 実希, 福島 慶太郎. 里山の植生変化と物質収支: 竹林拡大に関する天王山における考察. 水利科学. 2010, 54, p.90-103.

Tobari, Y.; Koba, K.; Fukushima, K.; Tokuchi, N.; Ohte, N.; Tateno, R.; Toyoda, S.; Yoshioka, T.; Yoshida, N. Contribution of atmospheric nitrate to stream-water nitrate in Japanese coniferous forests revealed by the oxygen isotope ratio of nitrate. Rapid Communications in Mass Spectrometry. 2010, 24(9), p.1281-1286.

■石原 正恵

Ishihara, Masae Iwamoto; Hiura, Tsutomu. Modeling leaf area index from litter collection and tree data in a deciduous broadleaf forest. Agricultural and Forest Meteorology. 2011, 151(7), p.1016-1022.

◆原著論文・総説（査読なし）

里域生態系部門

■山下 洋

山下 洋, 藤浪 祐一郎. II-3. 河口域. 日本水産学会誌. 2010, 76(6), p.1093.

江口 さやか, 森口 真衣, 上原 優紀, 山中 舞子, 上野 正博, 益田 玲爾, 山下 洋, 山本 義和. 京都府舞鶴湾の鉛を中心とした重金属汚染実態調査(4)2009年度調査結果と総括. 神戸女学院大学論集. 2010, 57(2), p.1-10.

■益田 玲爾

江口 さやか, 森口 真衣, 上原 優紀, 山中 舞子, 上野 正博, 益田 玲爾, 山下 洋, 山本 義和. 京都府舞鶴湾の鉛を中心とした重金属汚染実態調査(4)2009年度調査結果と総括. 神戸女学院大学論集. 2010, 57(2), p.1-10.

■上野 正博

江口 さやか, 森口 真衣, 上原 優紀, 山中 舞子, 上野 正博, 益田 玲爾, 山下 洋, 山本 義和. 京都府舞鶴湾の鉛を中心とした重金属汚染実態調査(4)2009年度調査結果と総括. 神戸女学院大学論集. 2010, 57(2), p.1-10.

基礎海洋生物学部門

■久保田 信

久保田 信. 和歌山県田辺市で16回連続して鳴いたクマゼミ（カメムシ目＝半翅目，セミ科）. KINOKUNI. 2010, (78), p.12-13.

久保田 信. 和歌山県白浜町でトビ（タカ目，タカ科）が生きたクマゼミ（カメムシ目＝半翅目，セミ科）を捕獲. KINOKUNI. 2010, (78), p.13-14.

久保田 信. ルリタテハ（鱗翅目，タテハチョウ科）が静止時に翅を開閉する回数. KINOKUNI. 2010, (78), p.12-14.

久保田 信. サツマゴキブリ（ゴキブリ目，ゴキブリ上科）の白浜町と田辺市への再出現. KINOKUNI. 2010, (78), p.14-15.

久保田 信. 日本の歌の歌詞に登用された陸生爬虫類の歌. くろしお. 2010, (2), p.19.

久保田 信, 田名瀬 英朋, 岸田 拓士. 和歌山県白浜町沿岸に出現したヒロオウミヘビ *Laticauda laticaudata* (Linnaeus)（コブラ科；ウミヘビ亜科）. くろしお. 2010, (2), p.12-13.

久保田 信. ベニクラゲ（刺胞動物門，ヒドロ虫綱）の不老不死の生活史. 海洋化学研究. 2010, 23(1), p.20-28.

中務 裕子, 土井 敏男, 久保田 信. ウリクラゲ *Beroe cucumis* FABRICIUS（有櫛動物門、無触手綱、ウリクラゲ目）の幼若個体の形態と行動. Kuroshio Biosphere. 2011, 7, p.37-40.

檜山 嘉郎, 久保田 信. 和歌山県白浜町の海岸へ漂着した2個体目のサツマゴキブリ. KINOKUNI. 2010, (77), p.22.

Kubota, Shin. New distribution patterns of green fluorescene in small hydromedusae. Kuroshio Biosphere. 2011, 7, p.41-43.

Kubota, Shin. Green fluorescene in young individual(s) of cubomedusa, scyphomedusa and ctenophora. Kuroshio Biosphere. 2011, 7, p.45-46.

◆その他（一般誌・報告書等）

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

吉岡 崇仁. 木文化由良川プロジェクトの全体構想と 2009 年度の進捗状況. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 3-9.

河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 谷尾 陽一, 白澤 紘明, 堤 直人, 相本 道宏. 溶存有機物と溶存鉄の分布. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 17-32.

福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏. 由良川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 33-37.

■芝 正己

芝 正己. 芦生研究林の概要. 京都大学環境報告書 2010. 2010, p. 59.

芝 正己, 藤井 弘明. 由良川河内谷試験地の森林施業の現状と操作実験計画について. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 10-16.

■徳地 直子

河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 谷尾 陽一, 白澤 紘明, 堤 直人, 相本 道宏. 溶存有機物と溶存鉄の分布. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 17-32.

福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏. 由良川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 33-37.

福島 慶太郎, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 白澤 紘明, 大森 真貴子, 山中 律. 仁淀川の流下過程にともなう水質変化. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 228-236.

福島 慶太郎, 福澤 加里部, 徳地 直子, 長谷川 尚史, 向 昌宏, 竹本 雅浩. 仁淀川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 223-227.

■中島 皇

中島 皇. 2009 年徳山試験地の動向. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 18-19.

里域生態系部門

■山下 洋

秋山 諭, 上野 正博, 山下 洋. 丹後海由良川河口域におけるニホンハマアミ *Orientomysis japonica* の繁殖特性と個体群動態. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 91-135.

江口 さやか, 薄元 志帆, 山本 沙織, 芳村 碧, 上野 正博, 益田 玲爾, 山下 洋, 山本 義和. 京都府舞鶴湾内の一部地域における鉛汚染追跡調査 - 生物試料, 底泥, 土壌を用いた汚染評価法 -. 環境技術. 2010, 39(4), p. 238-245.

■益田 玲爾

益田 玲爾. よく似た魚の違い. 磯・投げ情報. 2011, 2011 年 1 月号, p. 136.

益田 玲爾. イワシの打ち上げ. 磯・投げ情報. 2011, 2011 年 5 月号, p. 137.

益田 玲爾. クラゲと魚のおいしい関係. アクアネット. 2010, 3 月号 p. 26-29.

江口 さやか, 薄元 志帆, 山本 沙織, 芳村 碧, 上野 正博, 益田 玲爾, 山下 洋, 山本 義和. 京都府舞鶴湾内の一部地域における鉛汚染追跡調査 - 生物試料, 底泥, 土壌を用いた汚染評価法 -. 環境技術. 2010, 39(4), p. 238-245.

■梅本 信也

梅本 信也 他. 古座川合同調査報告集 第 5 巻. 2011, p. 198p

梅本 信也. 学校給食懐古句集. 2010, 106p.

■長谷川 尚史

長谷川 尚史. 木文化仁淀川プロジェクトの全体構想と 2009 年度の進捗状況. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 197-200.

長谷川 尚史, 杉本 和也, 福井 遼, 白澤 紘明, 武田 あずさ, 市川 隆史, 池山 祐司, 大原 栄博. 高密度作業道を用いた間伐作業のモデル化. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 201-205.

長谷川 尚史, 福井 遼, 武田 あずさ, 飯田 明訓. 作業道路面処理が林業機械の走行に及ぼす影響の検証. 平成 22 年

度林業機械化研究助成事業実績報告書. 2011, p. 38pp.

長谷川 尚史. 書評「森林管理の理念と技術—森林と人間の共生の道へ—」. 森林利用学会誌. 2010, 25(1), 福島 慶太郎, 福澤 加里部, 徳地 直子, 長谷川 尚史, 向 昌宏, 竹本 雅浩. 仁淀川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 223-227.

京都府森林組合連合会, 長谷川 尚史, 杉本 和也, 白澤 紘明. 職務満足度アンケート調査・原木流通シミュレーション事業報告書. 平成 22 年度森林整備広域連携促進対策事業報告書. 2011, p. 49pp.

■中西 麻美

深田 英久, 中西 麻美. 仁淀川森グループ調査報告—旧池川町の民有林の現状と調査林分の概要および間伐施業前の状況について—. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 206-216.

中西 麻美, 深田 英久, 今西 亜友美, 福島 慶太郎. 川成川およびヒウラ谷流域におけるスギ、ヒノキ林の土壌と葉の窒素特性. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 217-222.

■上野 正博

秋山 諭, 上野 正博, 山下 洋. 丹後海由良川河口域におけるニホンハマアミ *Orientomysis japonica* の繁殖特性と個体群動態. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 91-135.

江口 さやか, 薄元 志帆, 山本 沙織, 芳村 碧, 上野 正博, 益田 玲爾, 山下 洋, 山本 義和. 京都府舞鶴湾内の一部地域における鉛汚染追跡調査 - 生物試料, 底泥, 土壌を用いた汚染評価法 -. 環境技術. 2010, 39(4), p. 238-245.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

白山 義久. 海洋生物の多様性を明らかにする国際的な試み. 環境と健康. 2010, 23(4), p. 522-528.

■久保田 信

久保田 信. 新刊紹介 荻野みちる著「クジラの死体はかく語る」. 南紀生物. 2010, 52(1), p. 85.

久保田 信. 新刊紹介 日本プランクトン学会・ベントス学会編「海の外来生物 人間によって攪乱された地球の海」. 南紀生物. 2010, 52(1), p. 85.

久保田 信. 不老不死で若返るベニクラゲ類の生活史. 遺伝. 2010, 64(5), p. 86-92.

久保田 信. 読者のコーナー(5). 環境と健康. 2010, 23(3), p. 398.

久保田 信. 読者のコーナー(6). 環境と健康. 2010, 24(1), p. 131.

久保田 信. 不老不死のベニクラゲの神秘と人類の夢. Milsil. 2010, 3(2), p. 15-17.

■宮崎 勝己

渡辺 順也, 沼田 篤志, 宮崎 勝己. 2008 年度森里海連環学実習 B における水生昆虫調査報告. 古座川合同調査報告集. 2010, 4, p. 54-87.

拝野 晃希, 小川 直記, 梶野 泰弘, 平林 凌太郎, 宮崎 勝己, 深見 裕伸. 古座川における水生昆虫調査報告. 古座川合同調査報告集. 2010, 4, p. 101-106.

■深見 裕伸

拝野 晃希, 小川 直記, 梶野 泰弘, 平林 凌太郎, 宮崎 勝己, 深見 裕伸. 古座川における水生昆虫調査報告. 古座川合同調査報告集. 2010, 4, p. 101-106.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

向井 宏. 瀬戸内海の干潟再生事業とその問題点. Ebucheb (エブオブ). 2010, 37, p. 2-6.

向井 宏. 海はきれいになったの? ならないの?. nagisa (フリーラン別冊なぎさ). 2010, 1, p. 22-27.

向井 宏. 水産生物の乱獲と海洋保護区. JAWAN (日本湿地ネットワーク・JAWAN 通信). 2010, 98, p. 2-5.

■佐藤 真行

佐藤 真行. 貸し借りということ. 嶋臺塾記録. 2011, 6, p. 3-33.

企画研究推進部門

■福島 慶太郎

福島 慶太郎. シカによって改変される森林の生態系機能 -京都・芦生における大規模シカ柵実験から. 財団法人自然保護助成基金 Pro Natura ニュース. 2010, 20, p. 6.

福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏. 由良川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要

求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 33-37.
福島 慶太郎, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 白澤 紘明, 大森 真貴子, 山中 律. 仁淀川の流下過程にともなう水質変化. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 228-236.

福島 慶太郎, 福澤 加里部, 徳地 直子, 長谷川 尚史, 向 昌宏, 竹本 雅浩. 仁淀川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 223-227.

中西 麻美, 深田 英久, 今西 亜友美, 福島 慶太郎. 川成川およびヒウラ谷流域におけるスギ、ヒノキ林の土壌と葉の窒素特性. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 217-222.

河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 谷尾 陽一, 白澤 紘明, 堤直人, 相本 道宏. 溶存有機物と溶存鉄の分布. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 17-32.

■今西 亜友美

今西 亜友美. 芦生研究林長治谷におけるシカスポット防除柵設置 1 年後の植生回復. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 38-45.

中西 麻美, 深田 英久, 今西 亜友美, 福島 慶太郎. 川成川およびヒウラ谷流域におけるスギ、ヒノキ林の土壌と葉の窒素特性. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 217-222.

河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 谷尾 陽一, 白澤 紘明, 堤直人, 相本 道宏. 溶存有機物と溶存鉄の分布. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 17-32.

福島 慶太郎, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 白澤 紘明, 大森 真貴子, 山中 律. 仁淀川の流下過程にともなう水質変化. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 228-236.

管理技術部

■浅野 善和

浅野 善和. 公開講座を終えて. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 43-44.

■荒井 亮

荒井 亮. 芦生の森自然観察会の応募状況について. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 45-46.

■奥田 賢

奥田 賢. G I Sを用いた見本園植栽木情報管理データベースの構築. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 61-64.

■勝山 智憲

勝山 智憲. 北海道研究林標茶区における降水の pH と EC—1999 年から 2009 年までの 11 年間の変化—. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 49-54.

■西岡 裕平

西岡 裕平. 芦生研究林に生えるキノコの個体調査. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 71-73.

■長谷川 敦史

長谷川 敦史. 芦生研究林上谷歩道沿いにおけるマルバマンサク葉枯れ病の調査. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 69-70.

■長谷川 孝

長谷川 孝. 直営による林道新設工事について. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 55-56.

■藤井 弘明

藤井 弘明. NPO 法人芦生自然学校「マザーツリープロジェクト」への協賛. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 67-68.

■向 昌宏

河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 谷尾 陽一, 白澤 紘明, 堤直人, 相本 道宏. 溶存有機物と溶存鉄の分布. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 17-32.

福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 向 昌宏. 由良川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要

求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 33-37.
福島 慶太郎, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 白澤 紘明, 大森 真貴子, 山中 律. 仁淀川の流下過程にともなう水質変化. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 228-236.

福島 慶太郎, 福澤 加里部, 徳地 直子, 長谷川 尚史, 向 昌宏, 竹本 雅浩. 仁淀川流域における人工林施業が山地溪流水質に与える影響. 概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（木文化プロジェクト）」2009 年度報告書. 2010, p. 223-227.

■柳本 順

柳本 順. 和天別川流域の河川水の pH・EC. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 47-48.

■山内 隆之

山内 隆之. 開地と被陰ネット下におけるホオノキ苗木の生長比較. 研究林・試験地情報 2009(平成 21)年度. 2010, p. 38-39.

◆学会発表（発表要旨集合む）

森林生物圏部門

■吉岡 崇仁

吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 向 昌宏, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 谷尾 陽一. “由良川流域における溶存物質の動態について-森里海連環学ことはじめ-”. 日本地球惑星科学連合 2010 年大会「陸域の生物地球化学」セッション. 2010-05-26. 2010.

上田 茉由, 北守 顕久, 吉岡 崇仁, 小松 幸平. “乾燥方法の違いによるスギ心持ち正角の視覚的差異”. 第 61 回日本木材学会大会. 京都大学, 2011-03-19. 2011.

勝山, 正則・吉岡, 崇仁・木平, 英一, 若松 孝志, 新藤 純子. “日本全国の溪流水酸素・水素安定同位体比分布とその決定要因”. 第 121 回日本森林学会大会. つくば, 2010-04-03. 2010.

小島 礼慈, 杉山 裕子, 早川 和秀, 和田 千弦, 西本 鷹耶, 石川 可奈子, 丸尾 雅啓, 神澤 真一, 奥村 亮二, 藤原 学, 吉岡 崇仁, 熊谷 哲. “PARAFAC を使用した琵琶湖溶存有機物の三次元励起蛍光スペクトルの解析”. 日本陸水学会第 75 回大会（弘前大会）. 弘前大学, 2010-09-18. 2010.

福崎 康司, 河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 向 昌宏, 堤 直人, 相本 道宏. “由良川流域における溶存鉄の分布と動態”. 日本陸水学会第 75 回大会（弘前大会）. 弘前大学, 2010-09-18. 2010.

福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 上野 正博, 徳地 直子, 福崎 康司, 大槻 あずさ. “河川上流域のダム湖における水質変化”. 日本陸水学会第 75 回大会（弘前大会）. 弘前大学, 2010-09-18. 2010.

福島 慶太郎, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 谷尾 陽一, 白澤 紘明. “由良川流下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化”. 日本地球惑星科学連合 2010 年大会. 幕張, 2010-05-26. 2010.

■芝 正己

寄元 道德, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”. 第 121 回日本森林学会. つくば市. 2010, p. Pa2-12.

寄元 道德, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第 122 回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■安藤 信

中村 真介, 呉 初平, 安藤 信. “京都・東山のシイ林において短期間に 2 度伐採された林分の更新状況”. 第 121 回日本森林学会大会. 2010-04-03. 2010.

山崎 理正, 小田 崇, 伊東 康人, 安藤 信. “カシノナガキクイムシ穿孔木の枯死確率は空間的に不均一”. 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.

山崎 理正, 伊東 康人, 安藤 信. “ミズナラとクリが優占する 2 次林におけるカシノナガキクイムシ穿孔木の分布様式”. 第 121 回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04-04. 2010.

Nakamura, Shinsuke; Ando, Makoto. “Initial regeneration after a cutting aimed for conversion of forest types in a suburban forest: A study of *Castanopsis* forest in Higashiyama, Kyoto”. Proceedings of the 2nd International Conference of Urban Biodiversity and Design (URBI02010). Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010, p. 160.

■徳地 直子

- 徳地 直子, 大手 信人, 臼井 伸章, 福島 慶太郎. "森林生態系への窒素負荷の影響". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-10. 2011.
- 徳地 直子, 大手 信人, 臼井 伸章, 福島 慶太郎. "森林生態系における窒素負荷の影響". 第 58 回日本生態学会. 札幌, 2010-03-10. 2011.
- 徳地 直子, 福島 慶太郎. "森の作るおいしい水". 京都大学ジュニアキャンパス 2010. 京都, 2010-09-25, 2010.
- 新井 宏受, 徳地 直子. "安定炭素・放射性同位体を用いた針葉樹人工林設定後の土壌炭素蓄積に寄与する要因". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-10. 2011.
- 臼井 伸章, 米田 聡美, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 尾坂 兼一. "モウソウチクの広葉樹二次林への侵入が窒素循環に与える影響". 日本生態学会第 58 回全国大会. 2011-03-09. 2011.
- 江草 智弘, 大手 信人, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 佐藤 拓哉, 谷尾 陽一. "森林溪流における栄養塩吸収に関する研究". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.
- 長田 典之, 藤井 佐織, 徳地 直子. "植物の地上部と地下部の形態の関連: コーナー則は地下部に適用可能か?". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.
- 小原 章裕, 大手 信人, 小田 智基, 江草 智弘, 谷尾 陽一, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 鈴木 雅一. "山地森林溪流における溶存有機物の流出特性に関する研究". 第 121 回日本森林学会. つくば, 2010-04-02. 2010.
- 勝山 正則, 福島 慶太郎, 徳地 直子. "堆積岩山地における溪流水の平均滞留時間決定機構". 第 122 回日本森林学会大会. 2011. (開催中止)
- 福崎 康司, 河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 向 昌宏, 堤 直人, 相本 道宏. "由良川流域における溶存鉄の分布と動態". 日本陸水学会第 75 回大会 (弘前大会). 弘前大学, 2010-09-18. 2010.
- 福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 上野 正博, 徳地 直子, 福崎 康司, 大槻 あずさ. "河川上流域のダム湖における水質変化". 日本陸水学会第 75 回大会 (弘前大会). 弘前大学, 2010-09-18. 2010.
- 福島 慶太郎, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 谷尾 陽一, 白澤 紘明. "由良川流下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化". 日本地球惑星科学連合 2010 年大会. 幕張, 2010-05-26. 2010.
- 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 向 昌宏, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 谷尾 陽一. "由良川流域における溶存物質の動態について-森里海連環学ことはじめ-". 日本地球惑星科学連合 2010 年大会「陸域の生物地球化学」セッション. 2010-05-26. 2010.
- 米田 聡美, 臼井 伸章, 徳地 直子, 大手 信人, 勝山 正則, 福島 慶太郎. "ヒノキ林における土壌無機態窒素の制御要因". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.

■中島 皇

- 中島 皇, 福島 慶太郎. "森の働きについての「誤った？」認識 II". 瀬戸内海研究フォーラム in 徳島. 2010-08-26/27. 2010, p. 38.
- 中島 皇. "原生的な森林の保全と森林教育". 日本森林学会 第 122 回大会. 静岡大学, 2011-03-27, 2011. (開催中止)
- Nakashima, Takashi. "Debris from the natural forest watershed in a mountain region in Japan". XXIII IUFRO World Congress. Seoul, 2010-08-23/28. 2010, p. 83.

■寄元 道徳

- 寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. "多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新". 第 121 回日本森林学会. つくば市, 2010, p. Pa2-12.
- 寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. "多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因". 第 122 回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)
- 国永 知裕, 平山 貴美子, 松田 陽介, 寄元 道徳, 高原 光. "冷温帯スギ・落葉広葉樹混交林におけるブナの更新過程: 外生菌根形成がブナの更新に与える影響". 日本森林学会. p. L-12, 2011. (開催中止)
- 松山 周平, 大澤 直哉, 寄元 道徳. "ウルシ科樹木ヤマウルシにおける訪花昆虫群集による送粉". 日本生態学会近畿地区会. 2010.

■佐藤 拓哉

- 佐藤 拓哉. "生態系の中の寄生者: 溪畔生態系においてハリガネムシ類が駆動するエネルギー流". 日本生態学会第 58 回大会 シンポジウム「寄生虫生態学-寄生虫学と進化生態学の融合を目指して」. 札幌, 2011-03-09, 札幌コンベンションセンター. 2011.

江草 智弘, 大手 信人, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 佐藤 拓哉, 谷尾 陽一. “森林溪流における栄養塩吸収に関する研究”. 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09, 2011.

■長田 典之,

長田 典之, 藤井 佐織, 徳地 直子. “植物の地上部と地下部の形態の関連：コーナー則は地下部に適用可能か?”. 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.

長田 典之. “植物の分枝構造と窒素分配パターンの関連”. 日本植物学会第 74 回大会シンポジウム「植物群落の生産構造 2010」. 春日井, 2010-09-09, 中部大学. 2010.

野村 拓也, 長田 典之, 北山 兼弘. “温帯 19 樹種間の当年枝形態、当年枝資源配分、樹冠形の比較”. 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌コンベンションセンター, 2011-03-11. 2010.

齊藤 わか, 長田 典之, 北山 兼弘. “当年生シュートにおける形態と力学的強度の種間比較”. 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-11. 2011.

里域生態系部門

■山下 洋

山下 洋. “河口域生態系における生物生産と利用”. 神戸大学大学院海事科学研究科附属国際海事研究センター海事環境エネルギー研究部門キックオフシンポジウム, 要旨集. 神戸大学, 2010-06. 2010, p. 8.

山下 洋. “由良川をモデルにした森里海連環研究-II”. 公開シンポジウム“京都から世界へ”「森里海連環と地球的課題」, 要旨集. 木津川, 2010-09, 国際高等研究所. 2010, p. 14, .

秋山 諭, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域におけるアミ類の分布量と環境要因の季節変化－春季の高密度分布を支える要因は？－”. 2010 年日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会講演要旨集. 千葉県柏市, 2010-10-09. 2010, p. 21.

秋山 諭, 上野 正博, 山下 洋. “丹後海由良川河口域におけるニホンハマアミ現存量と生産量の季節変化”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)

大嶋 真謙, Dominique Robert, 上原 伸二, 栗田 豊, 米田 道夫, 富山 毅, 富永 修, 上野 正博, 山下 洋. “丹後海と仙台湾・常磐海域におけるヒラメ着底稚魚密度の違いとその原因について”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 71. (開催中止)

大畑 亮輔, 益田 玲爾, 真壁 竜介, 栗原 拓也, 上野 正博, 南 憲次, 山下 洋, 上 真一. “音響カメラ DIDSON によるクラゲおよび魚類の現存量推定値と濁度の関係”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 14. (開催中止)

小路 淳, 福田 温史, 水野 健一郎, 上村 泰洋, 堀 正和, 山下 洋, 高見 秀輝. “藻場の魚類生産の広域的解析-8 日本三景付近における生態系サービス比較の試み”. 平成 22 年度日本水産学会秋季大会講演要旨集. 京都市, 2010-09-24. 2010, p. 33.

高橋 宏司, 益田 玲爾, 山下 洋. “マアジ稚魚における観察学習能力の個体発生”. 第 58 回日本生態学会大会講演要旨集. 札幌市, 2011-03-11, 2011, p. 502.

高橋 宏司, 益田 玲爾, 山下 洋. “群れはマアジの学習を促進するか？－海産魚マアジにおける社会学習の効果－”. 日本動物行動学会第 29 回大会プログラム・講演要旨集. 那覇市, 2010-11-19. 2010, p. 62.

高橋 宏司, 益田 玲爾, 松山 倫也, 山下 洋. “岩礁域への移行前後のマアジにおける異なる刺激に対する学習能力”. 日本動物心理学会第 70 回大会. 東京, 2010-08-29. 2010, p. 223.

高橋 宏司, 益田 玲爾, 山下 洋. “映像を利用した模倣学習によるマダイ稚魚の報酬訓練と逃避訓練”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 154. (開催中止)

高橋 宏司, 益田 玲爾, 宮島 悠子, 山下 洋. “ミズクラゲ給餌によるマダイ稚魚の避学習能力の向上”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 154. (開催中止)

多賀 真, 山下 洋. “トラフグ仔稚魚の成長における低塩分の有効性”. 日本水産増殖学会第 9 回大会講演要旨集. 佐賀県唐津市, 2010-10-30, 2010, p. 1.

年藤 俊一, 水野 健一郎, 上村 泰洋, 毛利 紀恵, 平川 浩司, 野田 勉, 青野 英明, 山下 洋, 小路 淳. “シロメバル仔稚魚の成長に水温が与える影響の南北比較：天然および飼育魚による検討”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 205. (開催中止)

福田 温史, 水野 健一郎, 上村 泰洋, 小路 淳, 堀 正和, 仲岡 雅裕, 野田 勉, 大竹二雄, 森本 充, 高見 秀輝, 山下 洋. “藻場の魚類生産の広域的解析-10 魚類群集の広域比較-2010 年”. 平成 22 年度日本水産学会秋季大会講演要旨集. 京都市, 2010-09-24, 2010, p. 34.

富士 泰期, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “京都府由良川河口域におけるスズキ稚魚の河川への回遊と塩水遡上との関係”. 2010 年度水産海洋学会研究発表大会講演要旨集. 東京, 2010-11-19. 2010, p. 22.

- 富士 泰期, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域におけるスズキ稚魚の回遊と成長”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 61. (開催中止)
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “淡水性ヌマエビ科エビ類の発生様式と遺伝的分化形成プロセスとの関係”. 第 81 回日本動物学会. 東京大学駒場キャンパス, 2010-09-23/25. 2010.
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “両側回遊種ミゾレヌマエビとヤマトヌマエビの地理的分布における黒潮の役割”. 2010 年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会. 東京大学大気海洋研究所, 2010-10-08/11. 2010.
- 藤田 純太, 上田 祐司, 山下 夕帆, 伊藤 正木, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “深海性クロザコエビの遺伝的集団構造”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 190. (開催中止)
- 藤浪 祐一郎, 清水 大輔, 八谷 三和, 青野 英明, 山下 洋. “小型種苗放流によるヒラメ資源造成の可能性”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 22. (開催中止)
- 舟橋 達宏, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “弱混合域における河川流量と塩水遡上の関係—数値実験によるアプローチ—. 2010 年度水産海洋学会研究発表大会講演要旨集. 東京, 2010-11-19. 2010, p. 45.
- 舟橋 達宏, 上野 正博, 山下 洋, 笠井 亮秀. “数値実験を用いた由良川河口域における出水に対する塩水楔の応答研究”. 平成 22 年度日本水産学会近畿支部後期例会講演要旨集. 奈良市, 2010-12-11. 2010, p. 5.
- 舟橋 達宏, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域における塩水楔の短期変動に関する数値実験”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- 松井 彰子, 上野 正博, 山下 洋. “同所的に生息するスジハゼ 3 タイプの生活史特性～舞鶴湾において～”. 第 58 回日本生態学会大会講演要旨集. 札幌市, 2011-03-09. 2011, p. 328.
- 水野 健一郎, 上村 泰洋, 福田 温史, 小路 淳, 堀 正和, 森本 充, 玉置 仁, 山下 洋, 梶山 誠, 荒木 希世. “藻場の魚類生産の広域的解析-11 優占種シロメバル仔稚魚の成長の南北比較～2010 年の結果”. 平成 22 年度日本水産学会秋季大会講演要旨集. 京都市, 2010-09-24. 2010, p. 34.
- 南 憲吏, 大嶋 真謙, 益田 玲爾, 上野 正博, 山下 洋. “舞鶴湾におけるマナモコの効率的な天然採苗方法”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 187. (開催中止)
- 宮島 悠子, 益田 玲爾, 山下 洋. “ウマヅラハギ仔魚のミズクラゲに対する回避能力と摂餌行動の個体発生”. 平成 22 年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会. 2010-10-09. 2010, p. 117.
- 宮島 悠子, 益田 玲爾, 栗原 紋子, 高橋 宏司, 山下 洋, 竹内 俊郎. “ミズクラゲ給餌がマダイ人工孵化稚魚の横臥行動に与える影響”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 154. (開催中止)
- 渡辺 謙太, 上野 正博, 山下 洋. “由良川下流域における夏季の塩水遡上に伴う海産植物プランクトンのブルーム形成”. 2010 年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会講演要旨集. 千葉県柏市, 2010-10-09, p. 70, 2010.
- 渡辺 謙太, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域における植物プランクトン群集の季節変化”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- Antonio, E. S.; Ueno, Masahiro; Kasai, A.; Ishihi, Y.; Yokoyama, H.; Yamashita, Yoh. “Feeding dynamics of macrobenthic communities from the Yura River-Estuary to Tango Sea”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- Lien Yi-Ting, 山下 洋, 白山 義久, 深見 裕伸. “温帯域の造礁サンゴに共生する褐虫藻のクレード解析”. 日本サンゴ礁学会第 13 回大会講演要旨集. 2010-12-02/05. 2010, p. 17.
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihide; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. “Migration and growth pattern of the temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in the Yura River estuary revealed by $\delta^{13}C$ ”. International Symposium on Isotope Ecology 2010 in Kyoto: Relationship between biodiversity and ecosystem function Abstract book. 京都市, 2010-11-2/4. 2010, p. 40.
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihide; Suzuki, Keita; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. “Early life of the temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in the stratified Yura River estuary, Japan”. Techno-Ocean 2010 A New Era of the Ocean Final Program. 神戸市, 2010-10-16. 2010, p. 29.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Ueno, Masahiro; Fukunishi, Yuichi; Yamashita, Yoh. “Effects of turbidity on anti-predatory performance of fish larvae”. ECSA 47 symposium. Figueira da Foz, Portugal, 2010-09. 2010.
- Walsh, M. L.; Fujimoto, H.; Yamamoto, T.; Yamada, T.; Takahashi, Y.; Yamashita, Y. “A multi-year, collaborative effort to evaluate the impact of acclimation cage conditioning for stocking Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, in Wakasa Bay, Japan”. US-Japan Natural Resources Panel on Aquaculture (UJNR) 39th Meeting and 54. Symposium Program and Abstracts. Presentation 25. 鹿児島市, 2010-10-24/30. 2010, p. 50.
- Walsh, M. L.; Fujimoto, H.; Yamamoto, T.; Yamada, T.; Takahashi, Y.; Yamashita, Y. “Case Studies in Flatfish Stock

- Enhancement: Evaluating the impact of acclimation cage conditioning for Japanese flounder, *Paralichthys olivaceus*, in Wakasa Bay, Japan". 12th Flatfish Biology Conference. Book of abstract, 19. Westbrook, CT, 2010-12-01/02. 2010.
- Yi-Ting, Lien; Yamashita, Yoh; Fukami, Hironobu. "Genetic variation of *Symbiodinium* sp. from reef corals in high-latitude Japan". 2nd Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand, 2010-06-20/24. 2010, p. 220.
- 柴田 昌三
- 柴田 昌三, 吉田 幸弘. "植生への管理再開が里山生態系に与える影響". 第 121 回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04-04. 2010.
- SHIBATA, Shozo. "Influence of the restoration of vegetation management on ecosystem and biodiversity of Satoyama". 2nd Intl. Conference of Urban Biodiversity & Design (URBIO2010). Nagoya, Wink Aichi, 2010-05-21. 2010.
- 陶山 佳久, 齋藤 智之, 西脇 亜也, 蒔田 明史, 柴田 昌三. "48 年周期で一斉開花したタケ (*Melocanna baccifera*) 群落のジェネット構造と親子解析". 第 121 回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04-04. 2010.
- 中西 麻美, 稲垣 善之, 柴田 昌三, 大澤 直哉. "ヒノキの繁殖分配に小面積皆伐が及ぼす影響". 第 121 回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04. 2010.
- 中西 麻美, 稲垣 善之, 柴田 昌三, 大澤 直哉. "斜面位置の異なるヒノキ林の落葉の量と質に影響を及ぼす要因". 第 61 回日本森林学会関西支部等合同大会「研究発表会」. 島根大学, 2010-10-23. 2010.
- ABE, Yuhei; FUKAMACHI, Katsue; OKU, Hirokazu; SHIBATA, Shozo. "The connection between urban and rural areas through the use of dwarf bamboo leaves in Kyoto City". 2nd Intl. Conference of Urban Biodiversity & Design (URBIO2010). Nagoya, Wink Aichi, 2010-05-20. 2010.
- Imanishi, Ayumi; Shibata, Shozo; Nakanishi, Asami; Osawa, Naoya. "Change of woody-species composition in an early stage of plant succession after cutting in a suburban secondary forest dominated by *Chamaecyparis obtusa*". URBIO 2010 International Conference. Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010.
- Imanishi, Ayumi; Shibata, Shozo; Nakanishi, Asami & Osawa, Naoya. "Change of woody-species composition in an early stage of plant succession after cutting in a suburban secondary forest dominated by *Chamaecyparis obtusa*". 2nd Intl. Conference of Urban Biodiversity & Design (URBIO2010). Nagoya, Wink Aichi, 2010-05-21. 2010.
- Osawa, Naoya; Nakanishi, Asami; Shibata, Shozo. "Logging impacts on forest carabid assemblages at the secondary forest in Japan". URBIO 2010 International Conference. Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010.
- 田川 正朋
- 吉川 尚樹, Thamootharan Mammaram, Elvin M., Bavoh, 田中 克, 田川 正朋. 祖先的なカレイ目魚類ボウズガレイの親魚適性の検討. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 30. (開催中止)
- 辻 寛人, 田川 正朋. "ヒラメ稚魚の無眼側に発現する二次黒化－発現過程の解析と黒化部位の特徴－". 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 30. (開催中止)
- 益田 玲爾
- 益田 玲爾. "魚類の群れ行動の個体発生: 反射の連鎖から社会の形成まで". 日本水産学会秋季大会. 京都, 2010-09-01. 2010.
- 益田 玲爾. "異なる水温条件下におけるカワハギのミズクラゲ摂餌". 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011-03-29. 2011 (開催中止)
- Masuda, Reiji. "Ontogeny of anti-predator behavior in jack mackerel: onset of schooling, swimming speed and interaction with jellyfish". The 34th Larval Fish Conference. 2010-05-01, Santa Fe, New Mexico, USA. 2010.
- 大畑 亮輔, 益田 玲爾, 真壁 竜介, 栗原 拓也, 上野 正博, 南 憲次, 山下 洋, 上 真一. "音響カメラ DIDSON によるクラゲおよび魚類の現存量推定値と濁度の関係". 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 14. (開催中止)
- 南 憲次, 大嶋 真謙, 益田 玲爾, 上野 正博, 山下 洋. "舞鶴湾におけるマナモコの効率的な天然採苗方法". 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 187. (開催中止)
- 宮島 悠子, 益田 玲爾, 山下 洋. "ウマヅラハギ仔魚のミズクラゲに対する回避能力と摂餌行動の個体発生". 平成 22 年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会. 柏, 2010-10-09. 2010, p. 117.
- 宮島 悠子, 益田 玲爾, 栗原 紋子, 高橋 宏司, 山下 洋, 竹内 俊郎. "ミズクラゲ給餌がマダイ人工孵化稚魚の横臥行動に与える影響". 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 154. (開催中止)
- 高橋 宏司, 益田 玲爾, 山下 洋. "マアジ稚魚における観察学習能力の個体発生". 第 58 回日本生態学会大会講演要旨集. 札幌市, 2011-03-11. 2011, p. 502.
- 高橋 宏司, 益田 玲爾, 山下 洋. "群れはマアジの学習を促進するか?－海産魚マアジにおける社会学習の効果－".

- 日本動物行動学会第29回大会プログラム・講演要旨集. 那覇市, 2010-11-19. 2010, p. 62.
- 高橋 宏司, 益田 玲爾, 松山 倫也, 山下 洋. "岩礁域への移行前後のマアジにおける異なる刺激に対する学習能力". 日本動物心理学会第70回大会. 東京, 2010-08-29. 2010, p. 223.
- 高橋 宏司, 益田 玲爾, 山下 洋. "映像を利用した模倣学習によるマダイ稚魚の報酬訓練と逃避訓練". 平成23年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 154. (開催中止)
- 高橋 宏司, 益田 玲爾, 宮島 悠子, 山下 洋. "ミズクラゲ給餌によるマダイ稚魚の避学習能力の向上". 平成23年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 154. (開催中止)
- 横田 高士, 益田 玲爾, 竹内 宏行, 町田 雅春, 升間 主計, 津崎 龍雄, 荒井 修亮. "アカアマダイ人工種苗の成長に伴い変化する巣穴の日周利用". 平成23年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学, 2011. (開催中止)
- Ohata, R.; Masuda, Reiji; Ueno, M.; Fukunishi, Y.; Yamashita, Yoh. "Effects of turbidity on anti-predator performance of fish larvae". Estuarine & Coastal Science Association 47 Symposium. 2010-09-01, Figueira da Foz, Portugal. 2010.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Ueno, Masahiro; Fukunishi, Yuichi; Yamashita, Yoh. "Effects of turbidity on anti-predatory performance of fish larvae". ECSA 47 symposium. Figueira da Foz, Portugal, 2010-09. 2010.
- 長谷川 尚史
- 長谷川 尚史, 市川 隆史, 杉本 和也. "路網作設単価を考慮した素材生産システムの選択". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010.
- 岩井 有加, 大塚 和美, 長谷川 尚史, 前田 多恵子. "針葉樹コンテナ苗の形態的特徴と植栽後の成長". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010.
- 白澤 紘明, 長谷川 尚史. "原木市場の適正配置に関する一考察". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010.
- 杉本 和也, 伊東 康人, 長谷川 尚史. "林業事業体における従業員の満足度調査". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010.
- 武田 あずさ, 杉本 和也, 長谷川 尚史. "ハーベスタを用いた粗仕分けによる林地残材収集システムの効率化". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010.
- 福井 遼, 杉本 和也, 長谷川 尚史, 前田 多恵子, 首藤 洋一. "ウインチ集材に利用した繊維ロープの摩耗特性". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010.
- 白澤 紘明, 長谷川 尚史. "遺伝的アルゴリズムを用いた林道の三次元線形最適化モデル". 第17回森林利用学会学術研究発表会. 2010.
- 白澤 紘明, 長谷川 尚史. "素材生産作業における施設配置問題の解法". 第122回日本森林学会大会. 静岡大学, 2011, p. 187. (開催中止)
- 福井 遼, 長谷川 尚史, 飯田 訓久. "作業道の路面舗装と縦断勾配が車両に与える影響". 第122回日本森林学会大会. 静岡大学, 2011, p. 697. (開催中止)
- 池山 祐司, 長谷川 尚史, 杉本 和也. "傾斜林地におけるマルチシートの形状が下草による被圧に与える影響". 第122回日本森林学会大会. 静岡大学, 2011, p. 707. (開催中止)
- 杉本 和也, 伊東 康人, 長谷川 尚史. "森林組合職員の職務満足向上に必要な取組について". 第122回日本森林学会大会. 静岡大学, 2011, p. 570. (開催中止)
- 武田 あずさ, 福井 遼, 白澤 紘明, 長谷川 尚史. "ホイール式ハーベスタとセミ・クローラ式フォワーダを導入した作業システムの検討". 第122回日本森林学会大会. 静岡大学, 2011, p. 683. (開催中止)
- Yoshimura, Tetsuhiko; Nose, Mitsuhiro; Hasegawa, Hisashi; Gumus, Selcuk. "Evaluating the GPS accuracy for different GPS antenna heights under forest canopy". The 1st International Symposium on Turkish & Japanese Environment and Forestry. 2010, Volume 1 p. 79-88.
- 中西 麻美
- 中西 麻美, 稲垣 善之, 柴田 昌三, 大澤 直哉. "ヒノキの繁殖分配に小面積皆伐が及ぼす影響". 第121回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04. 2010.
- 中西 麻美, 稲垣 善之, 柴田 昌三, 大澤 直哉. "斜面位置の異なるヒノキ林の落葉の量と質に影響を及ぼす要因". 第61回日本森林学会関西支部等合同大会「研究発表会」. 島根大学, 2010-10-23, 2010.
- Nakanishi, Asami; Inagaki, Yoshiyuki; Osawa, Naoya; Shibata, Shozo; Hirata, Kei'ichi. "Effects of patch cutting on leaf nitrogen nutrition in natural regenerated hinoki cypress stands at different elevations along a slope in Kyoto, Japan". URBio 2010 International Conference. Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010,
- 稲垣 善之, 中西 麻美. "気象条件の異なるヒノキ林における表層土壌の性質". 日本地球惑星科学連合2010年大会. 2010-05 2010.

- 稲垣 善之, 三浦 覚, 中西 麻美, 大浦 典子, 戸田 浩人, 市川 貴大, 福島 慶太郎, 舘野 隆之輔. “林齢の異なるスギとヒノキ林におけるリターフォール窒素量の比較”. 第 122 回日本森林学会大会. 2011-03. 2011. (開催中止)
- 浦川 梨恵子, 柴田 英昭, 菱 拓雄, 稲垣 善之, 舘野 隆之輔, 福澤 加里部, 戸田 浩人, 平井 敬三, 中西 麻美, 福島 慶太郎, 中田 誠, 小柳 信宏, 榎木 勉. “気候変動による積雪変化が森林土壌の物質循環機能に及ぼす影響”. 第 122 回日本森林学会大会. 2011-03. 2011. (開催中止)
- 黒岩 恵, 磯部 一夫, 木庭 啓介, 柴田 英昭, 戸田 浩人, 稲垣 善之, 舘野 隆之輔, 中西 麻美, 浦川 梨恵子, 福澤 加里部, 妹尾 啓史, 楊 宗興. “4 地点の森林土壌における総硝化速度と微生物”. 第 121 回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04. 2010.
- 柴田 英昭, 戸田 浩人, 稲垣 善之, 舘野 隆之輔, 木庭 啓介, 中西 麻美, 福澤 加里部, 浦川 梨恵子, 山崎 朱夏, 長谷川 由布子. “森林生態系の窒素動態に関する土壌培養の地域比較実験”. 第 121 回日本森林学会大会. 筑波大学, 2010-04. 2010.
- Imanishi, Ayumi; Shibata, Shozo; Nakanishi, Asami; Osawa, Naoya. “Change of woody-species composition in an early stage of plant succession after cutting in a suburban secondary forest dominated by *Chamaecyparis obtusa*”. URIBO 2010 International Conference. Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010,
- Osawa, Naoya; Nakanishi, Asami; Shibata, Shozo. “Logging impacts on forest carabid assemblages at the secondary forest in Japan”. URIBO 2010 International Conference. Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010,
- 上野 正博
- 秋山 諭, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域におけるアミ類の分布量と環境要因の季節変化—春季の高密度分布を支える要因は?—”. 2010 年日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会講演要旨集. 千葉県柏市, 2010-10-09. 2010, p. 21.
- 秋山 諭, 上野 正博, 山下 洋. “丹後海由良川河口域におけるニホンハマアミ現存量と生産量の季節変化”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- 大畑 亮輔, 益田 玲爾, 真壁 竜介, 栗原 拓也, 上野 正博, 南 憲次, 山下 洋, 上 真一. “音響カメラ DIDSON によるクラゲおよび魚類の現存量推定値と濁度の関係”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 14. (開催中止)
- 大嶋 真謙, Dominique Robert, 上原 伸二, 栗田 豊, 米田 道夫, 富山 毅, 富永 修, 上野 正博, 山下 洋. “丹後海と仙台湾・常磐海域におけるヒラメ着底稚魚密度の違いとその原因について”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 71. (開催中止)
- 富士 泰期, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “京都府由良川河口域におけるスズキ稚魚の河川への回遊と塩水遡上との関係”. 2010 年度水産海洋学会研究発表大会講演要旨集. 東京, 2010-11-19, 2010, p. 22.
- 富士 泰期, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域におけるスズキ稚魚の回遊と成長”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 61. (開催中止)
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “淡水性ヌマエビ科エビ類の発生様式と遺伝的分化形成プロセスとの関係”. 第 81 回日本動物学会. 東京大学駒場キャンパス, 2010-09-23/25. 2010.
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “両側回遊種ミゾレヌマエビとヤマトヌマエビの地理的分布における黒潮の役割”. 2010 年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会. 東京大学大気海洋研究所, 2010-10-08/11. 2010.
- 藤田 純太, 上田 祐司, 山下 夕帆, 伊藤 正木, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “深海性クロザコエビの遺伝的集団構造”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 190. (開催中止)
- 舟橋 達宏, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “弱混合域における河川流量と塩水遡上の関係—数値実験によるアプローチ—. 2010 年度水産海洋学会研究発表大会講演要旨集. 東京, 2010-11-19. 2010, p. 45.
- 舟橋 達宏, 上野 正博, 山下 洋, 笠井 亮秀. “数値実験を用いた由良川河口域における出水に対する塩水楔の応答研究”. 平成 22 年度日本水産学会近畿支部後期例会講演要旨集. 奈良市, 2010-12-11. 2010, p. 5.
- 舟橋 達宏, 笠井 亮秀, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域における塩水楔の短期変動に関する数値実験”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- 松井 彰子, 上野 正博, 山下 洋. “同所的に生息するスジハゼ 3 タイプの生活史特性—舞鶴湾において—”. 第 58 回日本生態学会大会講演要旨集. 札幌市, 2011-03-09. 2011, p. 328.
- 松井 彰子, 乾 隆帝, 上野 正博, 山下 洋. “スジハゼ類 3 タイプの生息環境”. 平成 23 年度日本魚類学会年会講演要旨集. 三重県津市, 2010-09-25. 2010, p. 49.
- 南 憲史, 大嶋 真謙, 益田 玲爾, 上野 正博, 山下 洋. “舞鶴湾におけるマナモコの効率的な天然採苗方法”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 187. (開催中止)

- 渡辺 謙太, 上野 正博, 山下 洋. “由良川下流域における夏季の塩水湖上に伴う海産植物プランクトンのブルーム形成”. 2010 年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会講演要旨集. 千葉県柏市, 2010-10-09, 2010, p. 70.
- 渡辺 謙太, 上野 正博, 山下 洋. “由良川河口域における植物プランクトン群集の季節変化”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- Antonio, E. S.; Ueno, Masahiro; Kasai, A.; Ishihi, Y.; Yokoyama, H.; Yamashita, Yoh. “Land-Sea Connection”. Key for Management of Estuary-Marine Systems ECSA 47 Symposium, Book of Abstracts (Estuarine and Coastal Sciences Association). Figueira da Foz, Portugal, 2010-09-14/19. 2010, p. 53-54.
- Antonio, E. S.; Ueno, Masahiro; Kasai, A.; Ishihi, Y.; Yokoyama, H.; Yamashita, Yoh. “Feeding dynamics of macrobenthic communities from the Yura River-Estuary to Tango Sea”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihito; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. “Migration and growth pattern of the temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in the Yura River estuary revealed by $\delta^{13}C$ ”. International Symposium on Isotope Ecology 2010 in Kyoto: Relationship between biodiversity and ecosystem function Abstract book. 京都市, 2010-11-2/4. 2010, p. 40.
- Fuji, Taiki; Kasai, Akihito; Suzuki, Keita; Ueno, Masahiro; Yamashita, Yoh. “Early life of the temperate seabass *Lateolabrax japonicus* in the stratified Yura River estuary, Japan”. Techno-Ocean 2010 A New Era of the Ocean Final Program. 神戸市, 2010-10-16. 2010, p. 29.
- Ohata, Ryosuke; Masuda, Reiji; Ueno, Masahiro; Fukunishi, Yuichi; Yamashita, Yoh. “Effects of turbidity on anti-predatory performance of fish larvae”. ECSA 47 symposium. Figueira da Foz, Portugal, 2010-09. 2010.
- 中山 耕至
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “淡水性ヌマエビ科エビ類の発生様式と遺伝的分化形成プロセスとの関係”. 第 81 回日本動物学会. 東京大学駒場キャンパス, 2010-09-23/25. 2010.
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “両側回遊種ミゾレヌマエビとヤマトヌマエビの地理的分布における黒潮の役割”. 2010 年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会. 2010-10-08/11, 東京大学大気海洋研究所. 2010.
- 藤田 純太, 上田 祐司, 山下 夕帆, 伊藤 正木, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “深海性クロザコエビの遺伝的集団構造”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 190. (開催中止)
- Jeong, Choong-Hoon; Nakayama, Kouji; Nakabo, Tetsuji. “Population genetic structure of the ocellate spot skate *Okamejei kenojei* (Chondrichthyes: Rajidae) in the East Asia using mtDNA”. Annual meeting of the Ichthyological Society of Korea. 2010-05-07, 2010.
- Suzuki, K. W.; Nakayama, K.; Kanematsu, Y.; Tanaka, M. “Micro-distribution and feeding habits of larvae and juveniles of long-tailed anchovy in relation to the estuarine turbidity maximum in the Ariake Sea, Japan”. 34th Annual Larval Fish Conference. 2010-06-30/07-03, Santa Fe, New Mexico, USA. 2010.
- 甲斐 嘉晃
- 甲斐 嘉晃, 中坊 徹次. “日本海南西部の魚類相とその特徴”. 日本魚類学会. 三重県総合文化センター, 2010-09-24/25. 2010.
- 亀甲 武志, 根本 守仁, 三枝 仁, 藤岡 康弘, 甲斐 嘉晃. “水田を利用したホンモロコの初期育成”. 日本魚類学会. 2010-09-24/25. 2010.
- 亀甲 武志, 三枝 仁, 臼杵 崇広, 藤岡 康弘, 甲斐 嘉晃. “琵琶湖及び伊庭内湖におけるホンモロコの産卵期間と卵サイズの変化”. 日本魚類学会. 2010-09-24/25. 2010.
- 亀甲 武志, 根本 守仁, 三枝 仁, 藤岡 康弘, 甲斐 嘉晃. “水田におけるホンモロコの初期成長と生残”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会. 2011-03-27/31 (予定). 2011. (開催中止)
- 亀甲 武志, 根本 守仁, 三枝 仁, 藤岡 康弘, 甲斐 嘉晃. “水田で育成したホンモロコ種苗の琵琶湖までの分散”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会. 2011-03-27/31 (予定). 2011. (開催中止)
- 武藤 望生, 甲斐 嘉晃, 野田 勉, 中坊 徹次. “岩手県宮古市周辺におけるキツネメバルとタヌキメバルの形態比較”. 日本魚類学会. 三重県総合文化センター, 2010-09-24/25. 2010.
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “淡水性ヌマエビ科エビ類の発生様式と遺伝的分化形成プロセスとの関係”. 第 81 回日本動物学会. 東京大学駒場キャンパス, 2010-09-23/25. 2010.
- 藤田 純太, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “両側回遊種ミゾレヌマエビとヤマトヌマエビの地理的分布における黒潮の役割”. 2010 年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会. 東京大学大気海洋研究所, 2010-10-08//11. 2010.

藤田 純太, 上田 祐司, 山下 夕帆, 伊藤 正木, 中山 耕至, 甲斐 嘉晃, 上野 正博, 山下 洋. “深海性クロザコエビの遺伝的集団構造”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p.190. (開催中止)

■大嶋 真謙

大嶋 真謙, Dominique Robert, 上原 伸二, 栗田 豊, 米田 道夫, 富山 毅, 富永 修, 上野 正博, 山下 洋. “丹後海と仙台湾・常磐海域におけるヒラメ着底稚魚密度の違いとその原因について”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p.71. (開催中止)

南 憲吏, 大嶋 真謙, 益田 玲爾, 上野 正博, 山下 洋. “舞鶴湾におけるマナモコの効率的な天然採苗方法”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p.187. (開催中止)

■南 憲吏

南 憲吏, 東条 斉興, 安間 洋樹, 伊藤 祐介, 野別 貴博, 宮下 和士. “音響手法を用いた知床半島におけるコンブ林の分布推定 -2008 年及び 2009 年の漁前後の分布-”. 平成 22 年度日本水産学会秋季大会. 東京海洋大学, 2010-09-24,

南 憲吏, 大嶋 真謙, 益田 玲爾, 上野 正博, 山下 洋. “舞鶴湾におけるマナモコの効率的な天然採苗方法”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p.187. (開催中止)

南 憲吏, 濱野 明, 東条 斉興, 中村 武史, 安間 洋樹, 宮下 和士. “計量魚探を用いたガラモ場の分布推定”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会. 2011. (開催中止)

大畑 亮輔, 益田 玲爾, 真壁 竜介, 栗原 拓也, 上野 正博, 南 憲次, 山下 洋, 上 真一. “音響カメラ DIDSON によるクラゲおよび魚類の現存量推定値と濁度の関係”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p.14. (開催中止)

松倉 隆一, 澤田 浩一, 安部 幸樹, 南 憲吏, 永島 宏, 米崎 史郎, 小野寺 恵一, 村瀬 弘人, 宮下 和士. “仙台湾周辺におけるイカナゴ (*Ammodytes personatus*) のターゲットストレングス測定とモデル計算との比較”. 平成 23 年度日本水産学会春季大会. 2011. (開催中止)

宮下 和士, 松倉 隆一, 東条 斉興, 南 憲吏, 安間 洋樹, 永島 宏, 小野寺 恵一, 渡邊 光, 米崎 史郎, 村瀬 弘人. “計量魚探による鯨類餌生物のモニタリング”. 水産海洋学会 水産海洋シンポジウム 鯨類を中心とした北西太平洋の海洋生態系. 2010-11-21. 2010.

基礎海洋生物学部門

■白山 義久

Shirayama, Yoshihisa; Suwa, Ryota. “Effects of low pCO₂ conditions on sea urchin larvae”. Pre-work shop event of IPCC workshop on ‘Impacts of ocean acidification on marine biology and ecosystems’. 沖縄県名護市. 2011.

Shirayama, Yoshihisa; Suwa, Ryota. “Potential impacts of ocean acidification on marine biodiversity”. Pre-work shop event of IPCC workshop on ‘Impacts of ocean acidification on marine biology and ecosystems’. 沖縄県名護市. 2011.

Shirayama, Yoshihisa. “Characteristics of Benthos Biodiversity in the Western Pacific - an overview”. Horiba International Conference “New Direction of Ocean Research in the Western Pacific”. Atmosphere and Ocean Research Institute, The University of Tokyo, 2010-10-28. 2010,

座安 佑奈, 野村 恵一, 白山 義久, 深見 裕伸. “造礁性イシサンゴ類 2 科とそれらに生息するサンゴヤドリガニ類との共進化を探る”. 日本サンゴ礁学会 第 13 回大会. 茨城県つくば市「つくばカピオ」, 2010-12-02. 2010.

Lien Yi-Ting, 山下 洋, 白山 義久, 深見 裕伸. “温帯域の造礁サンゴに共生する褐虫藻のクレード解析”. 日本サンゴ礁学会第 13 回大会講演要旨集. 2010-12-02/05., 2010, p.17.

Kitano, Y.F.; Shirayama, Yoshihisa; Fukami, Hironobu. “Phylogenetic relationship of two flower pot corals *Alveopora* and *Goniopora* in the family Poritidae”. The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.

Kitano, Y.F.; Tachikawa, H.; Shirayama, Yoshihisa; Fukami, Hironobu. “Evolution of the zooxanthellate and azooxanthellate corals in the family Dendrophylliidae”. The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.

Suwa, Ryota; Shirayama, Yoshihisa. “Effects of diurnal pCO₂ fluctuation on sea urchin larvae: a preliminary report”. International symposium on “Climate change effects on fish and fisheries”. 宮城県仙台市, 2010-04-01. 2010, p. W2-6361.

Zayas, Y.; Nomura, K.; Shirayama, Yoshihisa; Fukami, Hironobu. “Species boundary between *Acanthastrea hemprichii* and *A. echinata*”. The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.

■久保田 信

久保田 信. “GFP などのヒドロ虫類の系統分類への貢献, 第 7 回 Hydrozoan Society Workshop 報告, および中国カンブ

- リア紀の単体性六放サンゴ類化石の系統分類, 不死と早死のヒドロクラゲ”. 日本腔腸動物等談話会 第6回大会. 2010-09-01. 2010.
- Kubota, Shin. "Evolutionary Meaning of Different Timing between spawning and release of eumedusoid in a bivalve-inhabiting hydrozoan *Eugymnanthea*". THE SEVENTH WORKSHOP OF THE HYDROZOAN SOCIETY. Marine Biology Museum, University of Salento Porto Cesareo (Lecce), 2010-09-10/18. 2010.
- Kubota, Shin. "Infinite culture of *Turritopsis* hydroid (Cnidaria, Hydrozoa)". THE SEVENTH WORKSHOP OF THE HYDROZOAN SOCIETY. Marine Biology Museum, University of Salento Porto Cesareo (Lecce), 2010-09-10/18. 2010.
- Kubota, Shin; Gravili, Cinzia; Boero, Ferdinando. "Biological meaning of distinct difference of distribution of green fluorescent protein (GFP) and its relative substances between hydromedusae and hydroids". THE SEVENTH WORKSHOP OF THE HYDROZOAN SOCIETY. Marine Biology Museum, University of Salento Porto Cesareo (Lecce), 2010-09-10/18. 2010.
- 河村 真理子, 上野 俊士郎, 奥泉 和也, 井口 直樹, 長谷川 徹, 西内 耕, 久保田 信. "平衡胞重量を用いたエチゼンクラゲの日齢査定 - 飼育クラゲ幼体の結果を含めて -". 2010 年度日本プランクトン学会・日本ベントス学会合同大会. 2010-10-01. 2010.
- Ueno, S.; Kawamura, M.; Okuizumi, K.; Iguchi, N.; Hasegawa, T.; Nishiuchi, K.; Kubota, Shin. "Age determination of *Nemopilema nomurai* using statocyst weight with analysis of cultured young medusae". The 7th Korea-Japan-China International Workshop. Gyeongju, Korea, 2010-12-01. 2010.
- Yasui, Kinya; Han, Jian; Yao, Xiaoyong; Kubota, Shin; Uchida, Hiro-omi. "The earliest hexacorallian microfossil from the Lower Cambrian of China". 日本古生物学会第 160 回例会. 高知大学 (高知県), 2011-01-28/30. 2011.
- 宮崎 勝己
- 宮崎 勝己. "日本産カイヤドリウミグモは地中海産のものと同種なのか? (予報)". 日本節足動物発生学会第 46 回大会. 2010-06-11. 2010.
- 藤本 心太, 宮崎 勝己. "京都・賀茂川に産する淡水クマムシ類について (予報)". 日本節足動物発生学会第 46 回大会. 2010-06-11. 2010.
- 藤本 心太, 宮崎 勝己. "田辺湾 (和歌山) の海産クマムシ類". 日本動物学会第 81 回大会. 2010-09-23, 2010.
- 深見 裕伸
- Fukami, H.; Nagata, S.; Sugihara, K. "Morphologic and phylogenetic variations of *Favia* in Japan and its taxonomic implication". The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.
- 座安 佑奈, 野村 恵一, 白山 義久, 深見 裕伸. "造礁性イシサンゴ類 2 科とそれらに生息するサンゴヤドリガニ類との共進化を調べる". 日本サンゴ礁学会 第 13 回大会. 茨城県つくば市「つくばカピオ」, 2010-12-02. 2010.
- Lin, M.-F.; Chen, C.-H.; Chuang, Y.; Fukami, Hironobu; Wallace, C.; Knowlton, N.; Chen, C. A. "Phylogenetic analysis of 43 mitochondrial genomes reveal that corallimorpharians (Anthozoa; Corallimorpharia) are not skeleton-lost corals". The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.
- Yi-Ting, Lien; Yamashita, Yoh; Fukami, Hironobu. "Genetic variation of *Symbiodinium* sp. from reef corals in high-latitude Japan". 2nd Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand, 2010-06-20/24. 2010, p. 220.
- Kitano, Y. F.; Shirayama, Yoshihisa; Fukami, Hironobu. "Phylogenetic relationship of two flower pot corals *Alveopora* and *Goniopora* in the family Poritidae". The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.
- Kitano, Y. F.; Tachikawa, H.; Shirayama, Yoshihisa; Fukami, Hironobu. "Evolution of the zooxanthellate and azooxanthellate corals in the family Dendrophylliidae". The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.
- Zayas, Y.; Nomura, K.; Shirayama, Yoshihisa; Fukami, Hironobu. "Species boundary between *Acanthastrea hemprichii* and *A. echinata*". The second Asia Pacific Coral Reef Symposium. Phuket, Thailand. 2010.
- Lien Yi-Ting, 山下 洋, 白山 義久, 深見 裕伸. "温帯域の造礁サンゴに共生する褐虫藻のクレード解析". 日本サンゴ礁学会第 13 回大会講演要旨集. 2010-12-02/05. 2010, p. 17.
- 諏訪 僚太
- Suwa, Ryota; Inoue, Mayuri; Shirayama, Yoshihisa. "Effects of future pCO₂ conditions on the growth of juvenile corals". Pre-work shop event of IPCC workshop on 'Impacts of ocean acidification on marine biology and ecosystems'. 沖縄県名護市. 2011.
- Suwa, Ryota; Shirayama, Yoshihisa. "Effects of diurnal pCO₂ fluctuation on sea urchin larvae: a preliminary report". International symposium on "Climate change effects on fish and fisheries". 宮城県仙台市, 2010-04-01..

2010, p.W2-6361.

Shirayama, Yoshihisa; Suwa, Ryota. "Effects of low pCO₂ conditions on sea urchin larvae". Pre-work shop event of IPCC workshop on 'Impacts of ocean acidification on marine biology and ecosystems'. 沖縄県名護市. 2011.

Shirayama, Yoshihisa; Suwa, Ryota. "Potential impacts of ocean acidification on marine biodiversity". Pre-work shop event of IPCC workshop on 'Impacts of ocean acidification on marine biology and ecosystems'. 沖縄県名護市. 2011.

海域陸域統合管理学研究部門

■向井 宏

向井 宏. "海洋保護区の課題と求められているもの". 日本野鳥の会シンポジウム「海の生物多様性と海鳥 IBA-陸から海へ」. 東京. 2010.

Mukai, Hiroshi. "Forest ecosystem serves to coastal marine biodiversity and production". International Symposium for the conservation on biological diversity -The role of forest biodiversity in the sustainable use of ecosystem goods and services in agro-forestry, fisheries, and forestry-. Tokyo. 2010.

金森 誠, 長谷川 夏樹, 向井 宏, 五嶋 聖治. "海草スガモ葉上におけるウチダヘソカドタマキビの産卵場所選択". 日本貝類学会平成 22 年度大会. 名古屋. 2010.

福島 朋彦, 向井 宏, 末永 芳美. "新しい海洋秩序に伴う学際的的海洋教育". 第 22 回海洋工学シンポジウム (日本海洋工学会・日本船舶海洋工学会). 東京. 2011.

Antonio, E.; Mukai, Hiroshi; Lucero, R. "Dugong conservation and human land use in Davao Gulf, Mindanao, Philippines". 日本湿地学会 (Conference of the Japan Wetland Society). Tokyo, Japan, 2010-09-04. 22010.

Kawai, T.; Watanabe, M.; Nakaoka, M.; Mukai, Hiroshi. "Interspecific variation in responses to emergence stress between two seagrasses, *Zostera asiatica* and *Z. marina* in a cold-temperate seagrass bed". 2010 World Seagrass Conference. Phuket, Thailand. 2010.

Nakaoka, M.; Hori, M.; Tanaka, Y.; Mukai, H.; Inoue, T.; Fujita, M. "Monitoring Sites 1000: a nationwide program on long-term monitoring of seagrass beds in Japan". 2010 World Seagrass Conference. Phuket, Thailand. 2010.

■佐藤 真行

佐藤 真行. "領域横断的研究・教育の可能性と課題". 海洋工学会. 2011-03, 2011. (開催中止)

佐藤 真行, 佐々木 健吾. "持続可能性指標のボラティリティと制度の質". 応用地域学会. 2010-12-01. 2010.

佐藤 真行, サムレト ソワンルン, 山口 臨太郎. "持続可能性の国際依存". 環境経済・政策学会. 名古屋大学, 2010-09-01. 2010.

Sato, Masayuki; Samreth, Sovannroeun; Sasaki, Kengo. "Stability of Sustainable Development Path and the Institution". Environmental Economics and Sustainable Development Workshop. Kyoto, Japan, 2011-01. 2011.

山川 肇, 佐藤 真行, 杉浦 淳吉, 福岡 雅子. "肉の袋売りの実態とその発生抑制効果". 廃棄物資源循環学会. 金沢市文化ホール, 2010-11-01. 2010.

Yamada, Katsunori; Sato, Masayuki; Nakamoto, Yasuhiro. "Measurement of Social Preference from Utility-Based Choice Experiments". International Symposium on Econometric Theory and Application. Singapore Management University, Singapore, 2010-05-01. 2010.

Tokimatsu, Koji; Yamaguchi, Rintaro; Sato, Masayuki; Nishio, Masahiro; Ueta, Kazuhiro. "Measuring future dynamics of Genuine Saving and comprehensive Wealth: an application of an integrated assessment model". 4th World Congress on Environmental and Resource Economists. Quebec University at Montreal, 2010-07-01. 2010.

Nakagawa, Shintaro; Sato, Masayuki; Yamaguchi, Rintaro. "Environment, Growth, and Technology Gap in a Two-Country Overlapping Generations Model". Environmental Economics and Sustainable Development Workshop. Kyoto, Japan, 2011-01. 2011.

Nakagawa, Shintaro; Sato, Masayuki; Yamaguchi, Rintaro. "Growth and Voluntary Abatement of Transboundary Pollution in an Overlapping Generations Model". 4th World Congress on Environmental and Resource Economists. Quebec University at Montreal, 2010-06-30. 2010.

■Antonio, Emily S.

Antonio, E.; Mukai, Hiroshi; Lucero, R. "Dugong conservation and human land use in Davao Gulf, Mindanao, Philippines". 日本湿地学会 (Conference of the Japan Wetland Society). Tokyo, Japan, 2010-09-04. 22010.

Antonio, E. S.; Mukai, Hiroshi; Lucero, R. "Land-use and Seagrass-Dugong Conservation in Davao Gulf". Dugong Forum. Malita, Davao del Sur, Philippines, 2011-02-28. 2011.

Antonio, E. S.; Ueno, M.; Kasai, A.; Ishihi, Y.; Yokoyama, H.; Yamashita, Y. "Land-Sea Connection: Crucial for

Management of Estuary-Marine Systems". Techno-Ocean 2010, A New Era of the Ocean. Kobe, Japan, 2010-10-14/16. 2010.

Antonio, E. S.; Ueno, Masahiro; Kasai, A.; Ishihi, Y.; Yokoyama, H.; Yamashita, Yoh. "Land-Sea Connection". Key for Management of Estuary-Marine Systems ECSA 47 Symposium, Book of Abstracts (Estuarine and Coastal Sciences Association). Figueira da Foz, Portugal, 2010-09-14/19. 2010, p. 53-54.

Antonio, E. S.; Ueno, Masahiro; Kasai, A.; Ishihi, Y.; Yokoyama, H.; Yamashita, Yoh. "Feeding dynamics of macrobenthic communities from the Yura River-Estuary to Tango Sea". 平成 23 年度日本水産学会春季大会講演要旨集. 2011, p. 60. (開催中止)

企画研究推進部門

■福島 慶太郎

福島 慶太郎. "森林生態系の物質循環から見える日本の森林環境". 第 86 回秋田県立大学森林科学セミナー. 秋田県立大学, 秋田, 2010-11-25. 2010.

福島 慶太郎. "ニホンジカによる過採食が芦生の冷温帯天然林の生物多様性と生態系機能に及ぼす影響の解明". 第 16 回プロ・ナトゥーラ・ファンダ助成成果発表会. 東京, 2010-12-11. 2010.

福島 慶太郎, 臼井 伸章. "緯度系列で比較するモウソウチクの葉の形態的可塑性". 第 58 回日本生態学会. 札幌, 2011-03-09. 2011.

福島 慶太郎, 吉岡 崇仁, 上野 正博, 徳地 直子, 福崎 康司, 大槻 あずさ. "河川上流域のダム湖における水質変化". 日本陸水学会第 75 回大会 (弘前大会). 弘前大学, 2010-09-18. 2010.

福島 慶太郎, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 谷尾 陽一, 白澤 紘明. "由良川流下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化". 日本地球惑星科学連合 2010 年大会. 幕張, 2010-05-26. 2010.

福島 慶太郎. "森林立地と物質循環". 森林立地学会総会・シンポジウム. 2011-03-28. 2011. (開催中止)

稲垣 善之, 三浦 寛, 中西 麻美, 大浦 典子, 戸田 浩人, 市川 貴大, 福島 慶太郎, 館野 隆之輔. "林齢の異なるスギとヒノキ林におけるリターフォール窒素量の比較". 第 122 回日本森林学会大会. 2011-03. 2011. (開催中止)

臼井 伸章, 米田 聡美, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 尾坂 兼一. "モウソウチクの広葉樹二次林への侵入が窒素循環に与える影響". 日本生態学会第 58 回全国大会. 2011-03-09. 2011.

浦川 梨恵子, 柴田 英昭, 菱 拓雄, 稲垣 善之, 館野 隆之輔, 福澤 加里部, 戸田 浩人, 平井 敬三, 中西 麻美, 福島 慶太郎, 中田 誠, 小柳 信宏, 榎木 勉. "気候変動による積雪変化が森林土壌の物質循環機能に及ぼす影響". 第 122 回日本森林学会大会. 2011-03. 2011. (開催中止)

吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 向 昌宏, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 谷尾 陽一. "由良川流域における溶存物質の動態について-森里海連環学ことはじめ-". 日本地球惑星科学連合 2010 年大会「陸域の生物地球化学」セッション. 2010-05-26. 2010.

勝山 正則, 福島 慶太郎. "森林伐採に伴う溪流からの窒素流出 -PnET-CN モデルを用いた検討-". 日本地球惑星科学連合 2010 年大会. 幕張, 2010-05-26. 2010.

勝山 正則, 福島 慶太郎, 徳地 直子. "堆積岩山地における溪流水の平均滞留時間決定機構". 第 122 回日本森林学会大会. 2011. (開催中止)

江草 智弘, 大手 信人, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 佐藤 拓哉, 谷尾 陽一. "森林溪流における栄養塩吸収に関する研究". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.

阪口 翔太, 藤木 大介, 井上 みずき, 福島 慶太郎, 山崎 理正, 高柳 敦. "シカ採食圧の放置と排除は植物多様性・群集構造にどのように影響するのか". 第 122 回日本森林学会大会. 2011. (開催中止)

徳地 直子, 大手 信人, 臼井 伸章, 福島 慶太郎. "森林生態系への窒素負荷の影響". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-10. 2011.

菱 拓雄, 館野 隆之輔, 福島 慶太郎, 藤巻 玲路, 伊藤 正美, 徳地 直子. "林分の発達に伴う養分制限に対するスギ細根系の解剖特性、形態および菌根化率の変化". 第 122 回日本森林学会大会. 2011. (開催中止)

米田 聡美, 臼井 伸章, 徳地 直子, 大手 信人, 勝山 正則, 福島 慶太郎. "ヒノキ林における土壌無機態窒素の制御要因". 日本生態学会第 58 回全国大会. 札幌, 2011-03-09. 2011.

境 優, 夏原 由博, 福島 慶太郎, 加藤 真. "シカによる下層植生の過採食が冷温帯針広混交林流域における底生無脊椎動物の生物食物網に与える影響". 日本陸水学会第 75 回大会. 弘前, 2010-09-17. 2010.

小原 章裕, 大手 信人, 小田 智基, 江草 智弘, 谷尾 陽一, 福島 慶太郎, 徳地 直子, 鈴木 雅一. "山地森林溪流における溶存有機物の流出特性に関する研究". 第 121 回日本森林学会. つくば, 2010-04-02. 2010.

福崎 康司, 河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 向 昌宏, 堤 直人, 相本 道宏. “由良川流域における溶存鉄の分布と動態”. 日本陸水学会第75回大会(弘前大会). 弘前大学, 2010-09-18. 2010.

■今西 亜友美

Imanishi, Ayumi; Shibata, Shozo; Nakanishi, Asami; Osawa, Naoya. “Change of woody-species composition in an early stage of plant succession after cutting in a suburban secondary forest dominated by *Chamaecyparis obtusa*”. URBIO 2010 International Conference. Nagoya, Japan, 2010-05-21. 2010,

吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 向 昌宏, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 谷尾 陽一. “由良川流域における溶存物質の動態について-森里海連環学ことはじめ-”. 日本地球惑星科学連合2010年大会「陸域の生物地球化学」セッション. 2010-05-26. 2010.

福島 慶太郎, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 谷尾 陽一, 白澤 紘明. “由良川流下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化”. 日本地球惑星科学連合2010年大会. 幕張, 2010-05-26. 2010.

管理技術部

■浅野 善和

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”. 第121回日本森林学会. つくば市, 2010, p. Pa2-12.

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■伊藤 雅敏,

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”. 第121回日本森林学会. つくば市, 2010, p. Pa2-12.

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■太田 健一

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”. 第121回日本森林学会. つくば市. 2010, p. Pa2-12.

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■大橋 健太

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■大牧 治夫

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”. 第121回日本森林学会. つくば市. 2010, p. Pa2-12.

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■岡部 芳彦

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会. 静岡市. 2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■小嶋 宏和

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己.

“多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”。第121回日本森林学会。つくば市。2010, p. Pa2-12.

■境 慎二郎

境 慎二郎, 柴田 昌三, 寺井 厚海. “強度間伐地で伐り残した樹木が鳥類による種子散布に及ぼす影響”. Proceedings of the 2nd International Conference of Urban Biodiversity and Design (URBIO2010). 2010-05-21. 2010.

■長谷川 敦史

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”。第121回日本森林学会。つくば市。2010, p. Pa2-12.

■向 昌宏

吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 今西 亜友美, 向 昌宏, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 谷尾 陽一. “由良川流域における溶存物質の動態について-森里海連環学ことはじめ-”. 日本地球惑星科学連合 2010 年大会「陸域の生物地球化学」セッション. 2010-05-26. 2010.

福島 慶太郎, 大槻 あずさ, 河本 晴恵, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 今西 亜友美, 向 昌宏, 谷尾 陽一, 白澤 紘明. “由良川流下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化”. 日本地球惑星科学連合 2010 年大会. 幕張, 2010-05-26. 2010.

福崎 康司, 河本 晴恵, 大槻 あずさ, 吉岡 崇仁, 徳地 直子, 福島 慶太郎, 向 昌宏, 堤 直人, 相本 道宏. “由良川流域における溶存鉄の分布と動態”. 日本陸水学会第75回大会（弘前大会）. 弘前大学, 2010-09-18. 2010.

■藤井 弘明

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”。第121回日本森林学会。つくば市。2010, p. Pa2-12.

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会。静岡市。2011, p. Pa1-90. (開催中止)

■柳本 順

寄元 道徳, 藤井 弘明, 浅野 善和, 太田 健一, 長谷川 敦史, 小嶋 宏和, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 大牧 治夫, 芝 正己. “多雪地天然林におけるスギとブナの空間分布パターン、地形対応、更新”。第121回日本森林学会。つくば市。2010, p. Pa2-12.

寄元 道徳, 藤井 弘明, 大牧治夫, 柳本 順, 伊藤 雅敏, 浅野 善和, 大橋 健太, 岡部 芳彦, 太田 健一, 芝 正己. “多雪地の尾根・谷地形上におけるスギとブナの種子実生の動態と関与要因”. 第122回日本森林学会。静岡市。2011, p. Pa1-90. (開催中止)

(3) 教育活動

◆全学共通科目

フィールド研は、学内共同教育研究施設として京都大学の全学共通科目へ多くの講義を行っている。集中講義として開講する実習が4科目、リレー講義を4科目、新入生向け少人数セミナー（ポケゼミ）を今年度は19科目開講した。さらに、農学部提供している講義を5科目、全学共通科目としても履修できるようにしている。また、他部局が提供する全学共通科目3科目に教員を非常勤講師として派遣している。（B群：自然科学系科目・A群：人文・社会科学系科目）

（講義・実習：B群）

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
森里海連環学実習 A	山下，益田，長谷川，上野，中西，甲斐ほか	実習	全回生	前期集中	2
森里海連環学実習 B	梅本，徳地，久保田，宮崎，大和，深見	実習	全回生	前期集中	2
森里海連環学実習 C	吉岡，向井，佐藤，中山，坂野上	実習	全回生	前期集中	2
水圏生物学入門	白山，山下，久保田，益田，田川，宮崎，上野，大和，深見ほか	講義	全回生	前期	2
森里海連環学－森里海のつながり－	山下，白山，柴田，吉岡，徳地，長谷川，中島，畠山ほか	講義	全回生	後期	2
沿岸環境保全学	白山，向井，山下，柴田，向井，佐藤ほか	講義	全回生	後期	2
森林学	柴田，吉岡，徳地，芝，長谷川，安藤，中島，寄元，坂野上，中西ほか	講義	全回生	後期	2
暖地性積雪地域における冬の自然環境	中島	実習	全回生	後期集中	1
北海道東部の人と自然	吉岡，徳地，坂野上ほか（農学部講義と合同）	実習	全回生	前期集中	2
北海道東部の厳冬期の自然環境	吉岡，徳地，長谷川，坂野上ほか（農学部講義と合同）	実習	全回生	後期集中	2
森林基礎科学A	吉岡ほか（農学部講義と合同）	講義	主として1・2回生	前期	2
森林基礎科学B	柴田ほか（農学部講義と合同）	講義	主として1・2回生	後期	2
昆虫・魚・哺乳動物の生理学	田川ほか（農学部講義と合同）	講義	主として1・2回生	前期	2

（少人数セミナー：B群）

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
お魚好きのための魚類研究入門	田川，中山	ゼミ	1回生	前期集中	2
原生的な森林の働き	中島	ゼミ	1回生	前期集中	2
海岸生物の生活史	久保田	ゼミ	1回生	前期集中	2
魚類心理学入門	益田	ゼミ	1回生	前期集中	2
森のつくりだすもの	徳地	ゼミ	1回生	前期集中	2
森里海のつながりを清流古座川に見る	梅本	ゼミ	1回生	前期集中	2
C.W.ニコル“アフアンの森”に学ぶ	柴田，長谷川	ゼミ	1回生	前期集中	2
フィールド実習“森は海の恋人”	白山	ゼミ	1回生	前期集中	2
海洋生物の多様性	白山	ゼミ	1回生	前期集中	2
木造校舎を造る：木の文化再生へ	柴田，芝，田中（名誉教授）ほか	ゼミ	1回生	前期	2
豊かな森をめざして！	芝	ゼミ	1回生	前期集中	2

海産無脊椎動物-分類群と形の多様性	宮崎	ゼミ	1 回生	前期集中	2
サンゴ礁生態学入門	深見	ゼミ	1 回生	前期集中	2
森林の再生と動態	安藤	ゼミ	1 回生	前期集中	2
環境と魚の河口域生態学入門	山下	ゼミ	1 回生	前期集中	2

(少人数セミナー：A・B群)

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
環境の評価	吉岡	ゼミ	1 回生	前期	2
日本海に遊ぶ～日本海学入門	上野	ゼミ	1 回生	後期	2
瀬戸内に見る森里海連環	中島，向井	ゼミ	1 回生	前期	2
京をめぐる森と人の暮らし	寄元，坂野上	ゼミ	1 回生	後期	2

(他部局提供科目への協力：B群)

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
探求型化学実験－湖と海の化学調査－	大和ほか（総合人間学部提供科目）	実験	全回生	前期集中	2
生物圏の科学－生命・食糧・環境－	山下，吉岡，安藤，徳地ほか （農学部提供科目）	講義	全回生	後期	2
基礎生物学A	白山ほか（理学部提供科目）	講義	主として1・2 回生	前期	2

なお，フィールド研の非常勤講師として，全学共通科目の講義を担当していただいている方は，次の通りである。

全学共通科目における非常勤講師（学外は5人）

森里海連環学－森里海のつながり－	畠山 重篤 谷内 茂雄 藤原 建紀 竹門 康弘 中野 孝教	（社会連携教授） （京大大学生態学研究センター・准教授） （京都大学大学院農学研究科・教授） （京都大学防災研究所・准教授） （総合地球環境学研究所・教授）
森林学	川村 誠	（京都大学大学院農学研究科・准教授）
沿岸環境保全学	磯崎 博司 松田 治	（明治学院大学・教授） （広島大学・名誉教授／三重県産業支援センター・エー ジェント）
	萱場 祐一	（（独）土木研究所自然共生研究センター長・統括主任 研究員）
水圏生物学入門	奥田 昇 鯉坂 哲朗 加藤 真	（京大大学生態学研究センター・准教授） （京都大学大学院農学研究科・教授） （京都大学地球環境学堂・教授）
木造校舎を造る：木の文化再生へ	小林 正美	（京都大学地球環境学堂・教授）

◆大学院教育・学部教育

フィールド研は、協力講座として、京都大学大学院農学研究科へ3分野、理学研究科へ1分野が参画して、大学院教育および学部教育を行っている。また、大学院地球環境学堂および公共政策大学院へも科目を提供している。なお、フィールド研河川域生態学分野は、フィールド研に農学研究科から現在参画している流動分野であり、農学研究科では応用生物科学専攻海洋生物増殖学分野として位置づけられている。

協力講座としての教員配置と学生数（2010年4月現在）

	専攻	分野	教員	ポスドク など	博士後期 課程	修士課程	学部生 (4回生)
農学研究科	森林科学専攻 森林資源学講座	森林育成学分野	柴田 昌三（教授） 安藤 信（准教授） 徳地 直子（准教授） 長谷川 尚史（准教授） 寄元 道德（助教）	1	2(4)	6(1)	4
		森林情報学分野	吉岡 崇仁（教授） 芝 正己（准教授） 中島 皇（講師） 中西 麻美（助教） 坂野上 なお（助教）	0	3	5	2
	応用生物科学専攻	海洋生物増殖学分野 （流動分野）	田川 正朋（准教授） 中山 耕至（助教） 中坊 徹次 （総合博物館教授）	0	1	4	3
		里海生態保全学分野 ＜舞鶴水産実験所＞	山下 洋（教授） 益田 玲爾（准教授） 上野 正博（助教） 甲斐 嘉晃（助教）	1	8	5	0
	（講義担当教員として協力）		梅本 信也（准教授）	－	－	－	－
理学研究科	生物科学専攻	海洋生物学分科 ＜瀬戸臨海実験所＞	白山 義久（教授） 久保田 信（准教授） 宮崎 勝己（講師） 大和 茂之（助教） 深見 裕伸（助教）	1	3	0(1)	1

（）内は、休学中の学生数

大学院での提供科目

大学院農学研究科 農学専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
雑草学専攻実験	梅本ほか	I 45	修士1・2回生	通年	10

大学院農学研究科 森林科学専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
森林情報学特論Ⅰ	吉岡，中島	Ⅱ113	修士1・2回生	後期	2
森林育成学特論Ⅰ	柴田，長谷川	Ⅱ115	修士1・2回生	後期	2
森林情報学専攻演習	吉岡，芝，中島，坂野上，中西	Ⅱ207	修士1・2回生	通年	8
森林育成学専攻演習	柴田，安藤，徳地，長谷川，寄元	Ⅱ208	修士1・2回生	通年	8
森林情報学専攻実験	吉岡，芝，中島，坂野上，中西	Ⅱ307	修士1・2回生	通年	10
森林育成学専攻実験	柴田，安藤，徳地，長谷川，寄元	Ⅱ308	修士1・2回生	通年	10

大学院農学研究科 応用生物科学専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
海洋生態学特論	山下	IV225	修士1・2回生	前期集中	2
海洋資源生物学演習	田川，中山ほか	IV307	修士1・2回生	通年	6
里海生態保全学演習	山下，益田，上野，中西，甲斐	IV317	修士1・2回生	通年	6
海洋資源生物学専攻実験	田川，中山ほか	IV407	修士1・2回生	通年	12
里海生態保全学専攻実験	山下，益田，上野，中西，甲斐	IV418	修士1・2回生	通年	12

大学院理学研究科 生物科学専攻動物学系

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
形態機能系統特論A	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8006	修士1・2回生	前期	2
形態機能系統特論B	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8007	修士1・2回生	後期	2
海洋生物学特論	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8040	修士1・2回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールA	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8091	修士1回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールB	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8092	修士1回生	後期	2
海洋生物学ゼミナールC	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8093	修士2回生	前期	2
海洋生物学ゼミナールD	白山，久保田，宮崎，大和，深見	8094	修士2回生	後期	2
海洋生物学ゼミナール	白山，久保田，宮崎，大和，深見	—	博士後期	—	—

大学院地球環境学舎 環境マネジメント専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
里山再生論	柴田ほか	3507	修士1・2回生	前期集中	1
里域植生保全論	梅本	3563	修士1・2回生	前期集中	2

大学院公共政策教育部 公共政策専攻

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
環境政策評価論	佐藤	—	修士1・2回生	後期	2

学部での提供科目

農学部 森林科学科

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
森林基礎科学Ⅰ	吉岡ほか	E103	1回生	前期	2
森林基礎科学Ⅳ	柴田ほか	E106	1回生	後期	2
森林育成学	柴田，徳地，安藤，長谷川，寄元	E128	3回生	後期	2
森林植物学	安藤	E129	3回生	前期	2
森林資源管理学	芝，坂野上	E130	3回生	後期	2
森林環境学	吉岡，中島	E131	3回生	後期	2
森林科学実習Ⅳ	柴田，芝，徳地ほか	E214	2回生	後期集中	1
森林総合実習及び実習法	安藤，芝，長谷川，中島，寄元，坂野上ほか	E221	3回生	前期集中	2
研究林実習Ⅰ	フィールド研教員ほか	E237	2回生	後期集中	1
研究林実習Ⅱ	徳地ほか	E238	3回生	後期集中	1
研究林実習Ⅲ	吉岡，安藤，坂野上ほか	E239	3回生	前期集中	2
研究林実習Ⅳ	吉岡，徳地，長谷川ほか	E240	3回生	後期集中	2

農学部 資源生物科学科

講義名	担当教員（敬称略）	科目	対象	開講期	単位
資源生物科学概論Ⅲ	山下，田川，中山ほか	A107	2回生	後期	2
動物生理学	田川ほか	A113	2回生	前期	2

資源生物科学基礎実験	田川, 益田, 中山ほか	A118	2 回生	後期	1
海洋生物科学技術論と実習Ⅰ	田川, 益田, 上野, 中山, 甲斐ほか	A205	2 回生	前期集中	2
海洋生物科学技術論と実習Ⅱ	山下, 上野, 甲斐ほか	A206	2 回生	前期集中	2
植物調査法と実習	梅本ほか	A208	2 回生	前期集中	2
海洋生物生態学	山下, 田川, 益田, 上野, 中山, 甲斐	A224	3 回生	前期	2
資源生物科学専門外書講義Ⅱ	田川, 中山ほか	A237	3 回生	前・後期	各 2
資源生物科学実験および実験法Ⅰ	資源生物科学科教員 (田川, 中山ほか)	A238	3 回生	前期	6
資源生物科学実験および実験法Ⅱ	資源生物科学科教員 (田川, 中山ほか)	A239	3 回生	後期	6
海洋生物生理学	田川	A248	3 回生	後期	2
魚類学	中山, 甲斐ほか	A250	3 回生	後期	2
海洋生物資源学演習	田川, 中山ほか	A512	4 回生	通年	2

理学部 生物科学科

講義名	担当教員 (敬称略)	科目	対象	開講期	単位
海洋生物学	白山	2705	2 回生	前期	2
無脊椎動物学	白山, 久保田, 宮崎	2708	2 回生	後期	2
臨海実習第 1 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	2733	2 回生	夏期集中	2
生物学セミナー B	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	3761	3 回生	後期	2
臨海実習第 2 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	3767	3 回生	春期集中	2
臨海実習第 4 部	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	3769	3 回生	夏期集中	2
生物科学課題研究:海洋生物学	白山, 久保田, 宮崎, 大和, 深見	5724	4 回生	通年	12

◆学位授与

(森林情報学分野)

学士	三木 敏裕	京都府中丹・南丹地域における木材生産と流通の変化－森林組合・素材生産業者の事業展開を中心に－
修士	臼井 伸章	モウソウチク林の物質循環特性：植物－土壌系の窒素内部循環と葉の形態に着目して
修士	白澤 紘明	遺伝的アルゴリズムを用いた林道の三次元線形最適化モデル
博士	坂本 朋美	日本における森林認証制度の展開と課題

(森林育成学分野)

学士	池山 祐司	マルチシートの敷設による下刈作業代替の可能性
学士	小森 由衣	林業・木材利用に関する消費者・林業関係者への意識調査
修士	阿方 智子	ササの開花・枯死が森林生態系の窒素動態に及ぼす影響
修士	福井 遼	作業道における運搬車の走行負荷の評価
博士	新井 宏受	Factors and mechanisms that change soil organic carbon stocks and dynamics after afforestation in a Japanese coniferous plantation (日本の針葉樹人工林における人工林設定後の土壌有機炭素量及び動態に変化を及ぼす要因・機構)

(海洋生物増殖学分野)

学士	越後 はるな	ヒラメの白い無眼側体表が傷修復によって黒くなる現象について
学士	東海林 明	Two morphotypes of Pempheris nyctereutes (Pisces: Pempheridae) based on the specimens from the Pacific coast of southern Japan
学士	吉川 尚樹	祖先的なカレイ目魚類ボウズガレイの親魚適正の検討
修士	辻 寛人	変態完了後のヒラメ無眼側に発現する黒化（二次黒化）－発現過程の解析と黒化部位の特徴－

(里海生態保全学分野)

修士	多賀 真	トラフグ仔稚魚の成長における低塩分の有効性とそのメカニズム
修士	松井 彰子	舞鶴湾におけるスジハゼ Acentrogobius pflaumii 3 タイプの生息環境と生活史
修士	宮島 悠子	魚類によるクラゲ摂餌の生態学および栄養学的評価

博士	Antonio, E.S.	Feeding Dynamics of Benthic Communities from Yura River-Estuary to Tango Sea
博士	福西 悠一	海産魚類の初期生活期における紫外線適応の個体発生と種間差
論文博士	奥村 裕	Mass Balance and Bioaccumulation of Major Dioxins in Sendai Bay (海洋生物学分科)
学士	藤本 心太	和歌山県田辺湾の海産クマムシ相に関する研究

◆公開臨海実習

公開臨海実習は、文部科学省の財政的支援を受けて、国立大学法人臨海臨湖実験所長会議に所属する施設が開講する実習であり、フィールド研では瀬戸臨海実験所が1989年度から夏と春の2回、実習題目「海洋無脊椎動物の多様性と進化」を実施している。研究船ヤンチナや実験所の磯での試料採集と分別、光学顕微鏡を用いた詳細な形態観察、附属水族館での大型動物観察などを通じて、できるだけ多様な動物門を対象とした上で、特定の分類群について形態的特徴から系統関係や進化過程を推定する実習がおこなわれる。参加学生（原則として2回生以上）の所属機関の長に対して、受講を証明する書類（2単位相当・評価付き）が発行される。2010年度は、夏期（9月3日～11日）に4人（日本獣医生命科学大学3人・東京大学）、春期（2011年3月20～26日）に8人（京都府立大学・熊本大学・北海道大学・信州大学・日本獣医生命科学大学3人・東京電機大学）が参加した。

◆公開森林実習

「京都大学公開森林実習－近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴－」は、全国大学演習林協議会の取り組みの一環として、標準履修年次：2・3年、1単位の実習として今年度開設した科目である。京都大学農学部の特設聴講学生となる制度を整備したが、申込み締切が前年度中であることもあり、申込者はなかった。2010年度は、2つの私立大学から実習科目実施の要望があり、これを受け入れる形で公開森林実習（9月6-8日）を実施した。受講生は計5名（京都学園大学2人・人間環境大学3人）であった。初日に上賀茂試験地において里山（京都市近郊の二次林）の植生について学び、翌日は芦生研究林において奥山（天然林や人工林）の観察、獣害被害地・調査区等の見学を行った。そして、3日目は、美山町北山かやぶきの里、北山杉の里総合センター、北白川試験地を観察して林業や森と人とのかかわりについて学んだ。参加学生には修了証を発行した。

◆他大学・各種学校の講義・実習

（高校生以下を対象とする講義などは、(6)社会貢献活動 参照）

森林生物圏部門

吉岡 崇仁	奈良教育大学「生態科学特論」
吉岡 崇仁	日本大学生物資源科学部「生物資源科学特論」
吉岡 崇仁	人間環境大学「基礎生物学A・B」「環境意識調査法」
中島 皇	京都教育大学「栽培と飼育の実践Ⅱ－いのちを育み、慈しむ－」

里域生態系部門

山下 洋	神戸大学海事科学部「河口域における生物生産と利用」
山下 洋	三重大学生物資源学部「水圏環境生物学」
山下 洋	日本大学生物資源科学部「生物資源科学特論」
益田 玲爾	岐阜大学教育学部・臨海実習
益田 玲爾	高知大学 総合研究センター JICA 集団研修「海域における水産資源の管理及び培養」

基礎海洋生物学部門

白山 義久	放送大学学園（面接授業担当）・非常勤講師
久保田 信	AWS動物学院・ベニクラゲ他についての講演
久保田 信	大阪市立大学・臨海実習
久保田 信	大阪大学大学院理学研究科・生物学臨海実習
宮崎 勝己	大阪教育大学教育学部・臨海実習（6月13～17日）
宮崎 勝己	奈良教育大学教育学部・野外実習A-II（6月27日～7月1日）
大和 茂之	関西学院大学・臨海実習

(4) 学会等における活動

◆学会役員・シンポジウム企画等

森林生物圏部門

- 吉岡 崇仁 日本生態学会近畿地区委員
日本森林学会北海道支部評議員
- 徳地 直子 日本森林学会評議員
日本生態学会関西支部会評議員
- 芝 正己 国際林業工学学会誌(IJFE) 国際編集員
森林利用学会理事
日本森林学会関西支部学会誌編集委員
国際森林研究機関連合(IUFRO) Division3 S3.06.00 座長・S3.06.02 副座長
米国林業工学協議会(COFE) USA 国際会員・学会誌(IJFE) 国際編集員
地盤・車両系国際学会(ISTVS)国際会員
近畿中国森林管理局森林・林業交流研究会審査委員
- 安藤 信 日本森林学会北海道支部評議員
- 佐藤 拓哉 日本生態学会第 58 回大会 シンポジウム「寄生虫生態学ー寄生虫学と進化生態学の融合を目指して」2011 年 3 月 9 日

里域生態系部門

- 山下 洋 日本水産学会幹事・国際交流委員・水産増殖懇話会委員
水産海洋学会常任幹事・国際誌委員長
日本プランクトン学会常任幹事
Fisheries Oceanography 副編集委員長
平成 22 年度日本水産学会水産増殖懇話会講演会「里海の水産増養殖による利用」企画代表者 9 月 22 日
- 柴田 昌三 日本緑化学会 副会長・理事・研究部門長・学会賞選考委員長・環境林研究部会長
日本造園学会 評議員・学会賞選考委員・関西支部幹事
日本森林学会 評議員
日本生態学会 近畿地区会委員
竹文化振興協会 参与・研究雑誌編集委員
京都竹文化振興財団 評議員
森林再生支援センター専門委員
日本森林技術協会関西支部京都大学支部長・監査委員
World Bamboo Organization: Member of Board
International Consortium of Landscape and Ecological Engineering: Secretary general
2nd International Conference of Urban Biodiversity & Design (URBIO2010): 監事
セニード(Center for Nepal Environmental and Educational Development)後援会 会長
- 田川 正朋 日本水産学会 平成 22 年度水産学教育推進委員・平成 22 年度日本水産学会出版委員
- 益田 玲爾 Journal of Plankton Research 編集委員
- 梅本 信也 日本雑草学会 用語委員
- 長谷川 尚史 森林利用学会常務理事・編集委員
森林計画学会企画委員
森林生産システム研究会主事
森林空間利用研究会主事
森林学会評議員
- 中山 耕至 日本魚類学会 電子情報委員会委員長
- 甲斐 嘉晃 日本魚類学会 評議員・Ichthyological Research, 魚類学雑誌, 編集委員・電子情報委員(副委員長)

基礎海洋生物学部門

- 白山 義久 動物分類学会評議員・賞選考委員
日本線虫学会編集委員
日本海洋学会沿岸環境部会編集委員

久保田 信 漂着物学会誌編集委員
宮崎 勝己 日本節足動物発生学会 編集委員
大和 茂之 南紀生物同好会 編集委員
深見 裕伸 日本サンゴ礁学会 評議員

海域陸域統合管理学研究部門

向井 宏 日本生態学会生態系管理専門委員会委員・自然保護専門委員会上関問題アフターケア委員会委員
日本ベントス学会環境保全委員会委員

企画研究推進部門

今西 亜友美 日本景観生態学会 会計幹事
日本緑化工学会 大会特集号編集委員
URBIO2010 Organizing Committee: Member of academic affairs division and general affairs division

◆受賞歴

森林生物圏部門

吉岡 崇仁・徳地 直子

年月日： 2010 年 5 月 26 日

受賞者： 福島 慶太郎・大槻 あずさ・河本 晴恵・吉岡 崇仁・徳地 直子・今西 亜友美・向 昌宏・谷尾 陽一・
白澤 紘明

受賞内容： 日本地球惑星科学連合 2010 年大会 最優秀ポスター賞 「陸域の生物地球化学」セッション「由良川流
下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化」

里域生態系部門

田川正朋 年月：2011 年 3 月

受賞者： 西川 泰造・有瀧 真人・清水 大輔・和田 敏裕・田中 克・田川 正朋

受賞内容： 平成 22 年度日本水産学会論文賞

Faster growth before metamorphosis leads to a higher risk of pseudoalbinism in juveniles of the
starry flounder *Platichthys stellatus*, as suggested by otolith back-calculation.

中山 耕至 年月：2011 年 3 月

受賞者： 鈴木 啓太・杉本 亮・笠井 亮秀・中山 耕至・田中 克

受賞内容： 夏期の有明海筑後川の高濁度汽水域における粒状有機物の動態-河川流量の変動にともなう変化（水産海
洋学会論文賞）

基礎海洋生物学部門

久保田 信 年月：2010 年 4 月

受賞者： 久保田 信

受賞内容： 日本生物地理学会学会賞 「刺胞動物門ヒドロ虫綱の個体発生、分布、生態を含む生活史に関する研究」

企画研究推進部門

福島慶太郎・今西 亜友美

年月日：2010 年 5 月 26 日

受賞者： 福島 慶太郎・大槻 あずさ・河本 晴恵・吉岡 崇仁・徳地 直子・今西 亜友美・向 昌宏・谷尾 陽一・
白澤 紘明

受賞内容： 日本地球惑星科学連合 2010 年大会 最優秀ポスター賞 「陸域の生物地球化学」セッション「由良川流
下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化」

管理技術部

佐藤 修一 年月日：2010 年 9 月 16 日

受賞者： 佐藤 修一

受賞内容： 平成 22 年度全国大学演習林協議会 第 12 回森林管理技術賞 受賞

向 昌宏 年月日：2010 年 5 月 26 日

受賞者： 福島 慶太郎・大槻 あずさ・河本 晴恵・吉岡 崇仁・徳地 直子・今西 亜友美・向 昌宏・谷尾 陽一・
白澤 紘明

受賞内容： 日本地球惑星科学連合 2010 年大会 最優秀ポスター賞 「陸域の生物地球化学」セッション「由良川流
下過程に伴う溶存有機物および溶存鉄の濃度変化」

(5) 社会貢献活動

◆学外委員会委員等

森林生物圏部門

吉岡 崇仁 特定非営利活動法人 日本国際湿地保全連合・モニタリングサイト 1000 陸水域調査事業会議参画
 安藤 信 京都伝統文化の森推進協議会 専門委員
 特定非営利活動法人 森林再生支援センター・三山森林景観保全・再生ガイドライン案検討委員会委員
 財団法人 阪本奨学会 理事
 徳地 直子 財団法人 防災研究協会・非常勤研究員
 京都市・京都市土地利用審査会委員
 坂野上 なお 滋賀県森林審議会委員
 滋賀県琵琶湖淀川の流域管理に関する検討委員会委員
 京都市バイオマス活用推進会議委員
 大阪府森林審議会委員

里域生態系部門

山下 洋 独立行政法人 水産総合研究センター・運営費交付金プロジェクト研究外部委員
 海洋政策研究財団・海域と流域圏の相互作用に関する調査研究委員会委員
 環境省地球環境推進費アドバイザー
 京都府漁業調整委員
 第2回由良川市民講座実行委員
 京都府農林水産技術センター評議委員
 舞鶴市環境基本計画委員会委員長
 農水省・先端技術を活用した農林水産研究高度化事業評価委員
 国連大学いしかわかなざわオペレーションセンター生物多様性勉強会講師
 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員
 国交省由良川下流水面利用協議会委員
 柴田 昌三 京都府中丹広域振興局・由良川里山回廊構想策定委員会座長
 日本特用林産振興会・竹林管理体系策定事業委員
 清流高津川を育む木の家づくり協議会・「木の家づくり」を進めるための社会システム構築をめざす委員会」設置に係る外部委員
 総合地球環境学研究所・共同研究員
 田川 正朋 水産総合研究センター「遺伝的環境ストレス指標による地域資源の健康度診断法の開発」評価委員
 滋賀県水産試験場外部アドバイザー
 益田 玲爾 農林水産実用技術開発事業「マグロ類の人工種苗による新規養殖技術の開発」外部評価委員
 農林水産実用技術開発事業「沿岸育成場を利用したキジハタ、オニオコゼの資源増殖技術の開発」外部評価委員
 京都水族館（仮称）の展示活動等に関する専門家委員会
 財団法人京都府水産振興事業団評議委員
 独立行政法人 水産総合研究センター・外部アドバイザー
 梅本 信也 総合地球環境学研究所・共同研究員
 長谷川 尚史 株式会社 工業市場研究所（林野庁委託）・搬出間伐推進調査検討委員会委員
 独立行政法人 森林総合研究所 四国支所・事前推進評価会議外部評価委員
 株式会社 アミタ持続可能経済研究所（林野庁委託）・先進林業機械の導入・改良事業検討委員
 清流高津川を育む木の家づくり協議会・「木の家づくり」を進めるための社会システム構築をめざす委員会」設置に係る外部委員
 有限会社 向井林業（林野庁委託）・先進林業機械の導入・改良事業運営委員
 株式会社 自然産業研究所・林野庁補助事業「先進林業機械改良・新作業システム開発事業」検討委員
 日吉町森林組合（林野庁委託）・先進林業機械の導入・改良事業運営委員
 兵庫県林業普及全県プロジェクト委員

兵庫県森林審議会委員
 芦生地域有害鳥獣対策協議会委員
 南丹市美山エコツーリズム推進協議会委員
 岡山県東北部森林・所有者データベース運営委員会（委員長）
 全国森林組合連合会 平成 22 年度森林整備革新的取組支援事業（指導）
 中西 麻美 京都府中丹広域振興局・由良川里山回廊構想策定委員会委員
 京都府中丹広域振興局・京都府中丹地域戦略会議委員
 特定非営利活動法人森林再生支援センター 理事
 中山 耕至 日本水産資源保護協会平成 22 年度水産資源保護啓発研究活動推進委員
 甲斐 嘉晃 舞鶴市高等教育機関等合同 PR 事業委員会・副委員長

基礎海洋生物学部門

白山 義久 大阪市・大阪市環境影響評価専門委員会委員
 科学技術振興機構・国際科学技術協力推進委員
 奈良女子大学 共生科学研究センター・外部評価委員会委員
 (独)科学技術振興機構・国際科学技術協力推進委員
 日本エヌ・ユー・エス株式会社(環境省委託業務)・海底下 CCS に係る環境管理手法の高度化検討会 検討員
 日本エヌ・ユー・エス株式会社(環境省委託業務)・海底下 CCS に係るモニタリング手法の高度化分科会 検討員
 日本エヌ・ユー・エス株式会社(環境省委託業務)・海底下 CCS に係る環境影響評価手法の高度化分科会 検討員
 独立行政法人 海洋研究開発機構・生態影響検討部会部会長
 文部科学省 研究開発局・科学技術・学術審議会専門委員
 社団法人 自然環境研究センター(環境省自然環境局の委託)・海洋生物多様性保全戦略専門家検討会
 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構・海底熱水鉱床開発委員会委員
 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構・海底熱水鉱床開発委員会環境影響評価ワーキンググループ委員
 大阪市・環境影響評価専門委員会委員
 北海道大学 創生研究機構・外部評価委員会委員
 島根大学 汽水域研究センター・外部評価委員
 独立行政法人 海洋研究開発機構・環境・社会システム統合研究フォーラム「深海底資源開発と海洋地球研究」の構成員
 経済産業省 資源エネルギー庁・総合資源エネルギー調査会臨時委員
 環境省・中央環境審議会臨時委員
 独立行政法人 海洋研究開発機構・IOC 協力推進委員会、海洋環境・生物国内専門部会委員
 独立行政法人 海洋研究開発機構・海洋・極限環境生物圏領域アドバイザー
 海洋政策研究財団((財)シップ・アンド・オーシャン財団)・「総合的海洋政策研究委員会」委員
 清流高津川を育む木の家づくり協議会・「木の家づくり」を進めるための社会システム構築をめざす委員会」設置に係る外部委員
 日本エヌ・ユー・エス株式会社・「ボーキサイト残さ(赤泥)海洋投入処分環境影響評価調査」検討委員会委員
 特定非営利活動法人 日本国際湿地保全連合・環境省「モニタリングサイト 1000」事業の会議への参画
 久保田 信 和歌山県立自然博物館協議会委員
 漂着物学会学会誌編集委員
 日本刺胞・有櫛動物研究談話会代表(会長)
 白浜国際交流協会副会長
 大和 茂之 財団法人 天神崎の自然を大切にする会 評議員

海域陸域統合管理学研究部門

向井 宏 日本学術会議連携会員
 茨城県鹿島灘生態調査委員会委員長・同専門部会委員長
 特定非営利活動法人 日本国際湿地保全連合・モニタリングサイト 1000 アマモ場調査事業会議参画
 厚岸町史編集委員会協力員
 環境省環境研究企画委員会第 4 研究分科会
 厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金審査会委員
 “Marine Ecology” editorial board

水源地生態研究会環境経済研究グループ委員
佐藤 真行 財団法人 ダム水源環境整備センター・水源地生態研究会 環境経済研究グループ委員

管理技術部

佐藤 修一 標茶町文化財専門委員兼標茶町郷土館運営審議委員
藤井 弘明 京都府南丹広域振興局 京都丹波食と森の交流の都構想検討委員

◆高校生までを対象としたプログラム

森林生物圏部門

徳地 直子 京都大学ジュニアキャンパス 2010 にて講義「森の作るおいしい水」, 9 月 25 日
中島 皇 環境学習教室「森林とふれあい自分だけのオリジナル図鑑を作ってみよう」(徳山試験地・周南市公民館主催) 徳山試験地, 10 月 23 日
坂野上 なお 和歌山県立有田中央高校清水分校 1 年森林見学会・講師 和歌山研究林, 5 月 12 日
有田川町立八幡小学校 5 年森林体験学習・講師 和歌山研究林, 6 月 4 日
有田川町立田殿小学校森林学習・講師 和歌山研究林, 9 月 17 日

里域生態系部門

山下 洋 京都府立西舞鶴高等学校 SPP・講師, 7 月 22, 23 日, 9 月 18 日
田川 正朋 京都府教育委員会・講師
益田 玲爾 京都教育大学附属高校 臨海実習・講師 舞鶴水産実験所, 7 月 28 日
京都府立南陽高校・講師 福井県海浜自然センター, 8 月 3 日
舞鶴市日星高校・講師 「生化学」講義 日星高校, 8 月 30 日
京都府漁連 Mackay North State High School 見学会講演 'From the underwater to the table: how we utilize the productivity of the ocean' 京都府漁連, 9 月 29 日
舞鶴市中保育所園児見学案内および講演「まいづるのうみのいきもの」 舞鶴水産実験所, 10 月 19 日
京都府「子供の好奇心をくすぐる体験事業」講演「若狭湾の魚たちの素顔」 向日市立第 3 向陽小学校, 11 月 2 日
講演「なまこのはなし」 舞鶴市中保育所, 12 月 21 日
京都府「子供の好奇心をくすぐる体験事業」講演「若狭湾の魚たちの素顔」 亀岡市立川東小学校, 2011 年 2 月 3 日
舞鶴市中保育所園児見学案内および講演「なまことさかなのはなし」 舞鶴水産実験所 2011 年 3 月 9 日
講演「若狭湾の魚たちの素顔」 宮津市立日置小学校 2011 年 3 月 10 日
ハワイ研修事前学習講義「海外生活の愉しみ方: ヨーロッパの海とハワイの海」 京都教育大学附属高校 2011 年 3 月 14 日
子育て支援 講演「海の中から見た舞鶴の豊かさ」 舞鶴市立高野小学校 2011 年 3 月 16 日
長谷川 尚史 京都市立葛野小学校 総合的な学習の時間・講師 9 月 10 日
京都市立大枝小学校 総合的な学習の時間・講師 10 月 14 日
京都府立北桑田高等学校森林リサーチ科 1 年生「環境科学基礎」校外学習・講師 10 月 29 日
中西 麻美 京都府立西舞鶴高等学校 SPP・講師, 7 月 12, 22, 23 日, 9 月 18 日
上野 正博 京都府立西舞鶴高等学校 SPP・講師, 7 月 12, 22, 23 日
甲斐 嘉晃 京都府立海洋高校・講義・施設見学, 5 月 12 日
京都府立南陽高校・講師 南陽高校・舞鶴水産実験所, 7 月 17 日, 8 月 4 日
京都府立西舞鶴高等学校 SPP・講師, 7 月 22, 23 日

基礎海洋生物学部門

久保田 信 滋賀県立膳所高等学校 生物実習旅行・講師, 7 月 22~24 日
奈良県立奈良高等学校 S S H サイエンスツアー・講師, 6 月 6 日
大阪府立住吉高校 夏期臨海研究実習・講師, 7 月 17~19 日
兵庫県立姫路路西高等学校海洋実習 A 班・講師, 11 月 4~5 日
兵庫県立姫路路西高等学校海洋実習 B 班・講師, 11 月 11~12 日
大阪府立豊中高等学校・講師, 2011 年 1 月 7~11 日
白浜町立児童館・白浜町生活環境課・南方熊楠記念館による「自然観察会」において解説, 2011 年 1 月 29 日

宮崎 勝己 滋賀県立膳所高等学校生物実習旅行・講師，7月21～24日
奈良女子大学附属中等教育学校SSHサイエンス夏の学校・講師，7月27～29日
兵庫県立尼崎小田高等学校SSH臨海実習・講師，8月21～22日
奈良県立奈良北高等学校校外研修・講師，10月8日
大阪府立豊中高等学校SSH生物特別臨海実習・講師，2011年1月7～9日

企画研究推進部門

福島 慶太郎 京都大学ジュニアキャンパス2010にて講義「森の作るおいしい水」，9月25日

管理技術部

奥田 賢 兵庫県立尼崎小田高等学校・講師，10月31日

◆社会人等を対象としたプログラム

森林生物圏部門

吉岡 崇仁 平成22年度「みどりの案内人」養成プロジェクト特別講座第2回「森・里・海と人びとのつながり」徳山試験地，10月3日
公開シンポジウム 京都から世界へ「森里海連環と地球的課題」において〈セッション2〉司会 財団法人 国際高等研究所ホール，9月25日
公開シンポジウム 京都から世界へ「森里海連環と地球的課題」において〈セッション2〉研究発表「由良川をモデルにした森里海連環研究Ⅰ」財団法人 国際高等研究所ホール，9月25日
第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」総合司会 京都大学百周年時計台記念館，11月20日
安藤 信 上賀茂試験地「春の自然観察会」講師 4月24日
公開講座において講義「芦生の森はどう変化したか？」芦生研究林，7月30日
上賀茂試験地「秋の自然観察会」講師 11月13日
京都大学 東京オフィスにおける「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ2 生きものの多様な世界において講演「マツ枯れナラ枯れ」京都大学 東京オフィス，2011年2月5日
第66回京大サロントークにおいて講演「古都・京都の森林景観の回復」京都大学 百周年時計台記念館1階 京大サロン，2011年2月8日
徳地 直子 H22年度京都大学森林科学公開講座「樹木から植物材料へ ～木の来し方行く末～」において，講義「森のリサイクル」，10月17日
標茶町林業推進協議会「未来へつなぐ森と水のセミナー」において講演「森林の現状と水質形成機能」，標茶町，2011年2月5日
中島 皇 「みどりの案内人」養成プロジェクト特別講座第1回「森・里・海の循環学から」講師 徳山試験地 6月13日（徳山試験地・周南市共催）徳山試験地
寄元 道德 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（講義及び野外実習）
坂野上 なお 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（野外実習）
木の文化を支える森林 文化財建造物の保存に必要な木材および植物性資材の安定確保の基礎的要件に関する研究成果発表会・講演 奈良女子大学記念館，12月10日
周南市みどりの案内人養成プロジェクト特別講座第3回「木材を使うことー今・昔」講師 徳山試験地，12月12日

里域生態系部門

山下 洋 公開シンポジウム 京都から世界へ「森里海連環と地球的課題」において〈セッション1〉司会 財団法人 国際高等研究所ホール，9月25日
公開シンポジウム 京都から世界へ「森里海連環と地球的課題」において〈セッション2〉研究発表「由良川をモデルにした森里海連環研究Ⅱ」財団法人 国際高等研究所ホール，9月25日
舞鶴の川と海を美しくする会 講演
第2回舞鶴高等教育機関等合同PR事業 講演
舞鶴市産官学勉強会 講演
柴田 昌三 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生研究林）実行委員長，7月30日
京都大学総合博物館レクチャーシリーズ no.87 において，講演「めったに咲かない竹の花が咲くとき…」京都大学総合博物館，2011年2月12日
第2回仁淀川地域連携講座において，講演「仁淀川流域で探求する森里海連環」高知サンライズホテル，

10月30日

第2回由良川地域連携講座（由良川フォーラム）において、講演「里がつなぐ森と海 一昔、今、そして未来」 ホテルロイヤルヒル福知山、12月4日

ANA 青空塾 私の青空 小松空港：安宅関の森「海岸砂防林について」 石川県小松市、4月23日

京都大学竹の環プロジェクト「なぜタケノコを残すのか？」 京都大学桂キャンパスDクラスター、5月9日

山陰中央新報文化センター「自然に学ぶ“森里海連環学”カルチャー教室「竹と生きてきた日本人」 島根県益田市、5月28日

神戸経済同友会環境委員会講演会「日本の森林の現状と森林がもたらすCO2削減効果について」 神戸市、6月10日

水俣竹林園メロカンナ勉強会「水俣竹林園のメロカンナとはどのような竹なのか」 水俣市竹林園、7月19日

森里海連環学シンポジウム田辺講演会「京都大学和歌山研究林産の木材を用いた耐震性木造構造物 j.Pod 一財源から資源へ 京都大学の新たな森林資源の利用」 和歌山県田辺市、7月26日

国際協力ステーション2009活動報告会「ネパール人のネパール人のための環境教育支援活動と成果」 京都府国際センター、10月2日

京都大学竹の環プロジェクト「竹林資源の新たな利用」 京都大学桂キャンパスDクラスター、10月16日
第三回智の木協会ワークショップ「竹のたくさんのふしぎ」 大阪大学中之島センター、11月5日

全日本竹産業連合会・第10回JBA ヤンガーフォーラム・コーディネータ 大津市ピアザ淡海、11月11日
平成21年度全日本竹産業連合会パネルディスカッション・コーディネータ 大津市ピアザ淡海、11月12日

平成21年度全日本竹産業連合会鼎談（嘉田滋賀県知事、川那辺浩也琵琶湖博物館長と） 大津市ピアザ淡海、11月12日

京都大学フィールド科学教育研究センター第7回時計台対話集会・閉会挨拶 京都大学、11月20日

街角サロン企画（みどり部会）「竹について学ぼう」 京都大学上賀茂試験地、12月11日

北区民環境セミナー第3回「水と森と里の恵みを知ろう」「水と森と里山について」 京都市北区、2011年2月5日

益田 玲爾

シニア自然大学「潜水観察でさぐる海の生物の多様な生態」講演 大阪市福島区民ホール、8月06日

舞鶴市社会科教員研修「日本近海の水産資源とこれからの栽培漁業」講演 舞鶴水産実験所、8月17日

ネイチャーガイド養成講座「舞鶴湾の魚たち」講演 舞鶴市商工観光センター、9月14日

テレビ番組出演 関西テレビ「S-コンセプト・オサカナと食卓の科学」において解説、9月25日

公開シンポジウム「森里海連環と地球的課題」講演「魚類群集の潜水観察からさぐる沿岸域再生の好機」国際高等研究所、9月26日

ケーブルテレビつりビジョン「四畳半の狼」出演 新宿区ケーブルテレビスタジオ、10月28日

いきいきセミナー「由良川や若狭湾の自然と生き物」舞鶴市加佐公民館、11月11日

いきいきセミナー「若狭湾水中散歩」舞鶴市南公民館、11月18日

はまなすの会講演「舞鶴湾は宝石箱！海が育てた舌が喜ぶおいしい恵み」舞鶴市中総合会館、2011年1月21日

京都大学 東京オフィスにおける「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ2 生きものの多様な世界において講演「海洋生物の行動学」 京都大学東京オフィス、2011年1月29日

東八塾講演「海の中から見た舞鶴の魅力」舞鶴市商工観光センター、2011年2月28日

シニア自然大学 食と健康と環境の科学「旬の魚たちの行動・生態と料理法について」大阪市行き生き地球館、2011年3月02日

長谷川 尚史

エコの寺子屋講師（芦生、エコロジー・カフェ主催）5月29～30日

芦生研究林春の自然観察会（芦生、芦生研究林主催）6月5日

京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生研究林）において講義「芦生研究林の紹介」、7月30日

全国大学演習林協議会 中国・四国・近畿地区大学附属演習林等技術職員研修 10月26・28日

平成22年度兵庫県低コスト作業システム研修講師（宍粟市）10月27日

京都大学ホームカミングデー北部キャンパスツアー解説 11月13日

第17回森林生産システム研究会—高密路網での作業システムの将来像—（実行委員長） 11月26～27日
 サントリー 壊れない道づくり研修会講師—吉野 11月29～30日
 先進林業機械導入現地検討会—阿寒（コメンテーター） 2011年1月21日
 京都府森林組合連合会講演会（講師） 2011年2月16日
 先進林業機械導入現地検討会—岡山（コメンテーター） 2011年2月24～25日
 中西 麻美 芦生の森自然観察会 入門編『春の森を歩きながら自然観察をしよう』 芦生研究林, 6月5日
 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座（芦生）講師（野外実習） 芦生研究林, 7月31日
 上野 正博 第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」において、報告「まず大人が変われ... 日本のフィールド教育」, パネルディスカッションパネリスト 京都大学百周年時計台記念館, 11月20日
 甲斐 嘉晃 綾部市学校教育研究会, 講師, 8月18日
 舞鶴市高等教育機関等合同PR事業, 9月19日

基礎海洋生物学部門

白山 義久 COP10 社会と学術の対話フォーラム「生物多様性を主流に」セッション1「世界の課題」に参加。（発表「海の生物の多様性」） 名古屋大学豊田講堂, 9月4日
 富山県・（財）環日本海環境協力センター主催「環日本海生物多様性フォーラム」において、パネルディスカッション参加 富山国際会議場, 10月16日
 ジオ多様性研究会主催の第1回フォーラム「ジオ多様性とは何か、その重要性を問う」において講演「深海はなぜ生物多様性が高いのか？」 国際高等研究所 2011年1月14日
 京都大学 東京オフィスにおける「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ2 生きものの多様な世界において講演「海洋生物の生物多様性」 京都大学 東京オフィス 2011年2月12日
 第7回時計台対話集会「森里海をつなぐ人づくり」において、パネルディスカッションコーディネーター 京都大学百周年時計台記念館, 11月20日
 第2回仁淀川地域連携講座において、講演「海洋生物の多様性 現状と将来」 高知サンライズホテル, 10月30日
 久保田 信 白浜水族館こだわり解説ツアー・バックヤードツアー 瀬戸臨海実験所
 和歌山県「環境月間記念講演会」 和歌山県民文化会館, 6月7日
 白浜水族館「海の中まで白浜をしっちゃおう！」白浜温泉組合解説ツアー 瀬戸臨海実験所（8月・7回）
 NP0 法人地球環境大学・研修講師 瀬戸臨海実験所 10月17日
 京大OB職員会・研修講師 瀬戸臨海実験所 11月10日
 京都大学 東京オフィスにおける「東京で学ぶ 京大の知」シリーズ2 生きものの多様な世界において講演「人類の夢、不老不死のベニクラゲの神秘」 京都大学東京オフィス 2011年1月15日
 白浜ロータリークラブ「海水温上昇と生物変化」講演 2011年1月28日
 スマスイボランティアフェスタ 最強生物対談&歌合戦！ 神戸市立須磨海浜水族園 2011年3月6日
 白浜ライオンズクラブ「不老不死のベニクラゲの紹介」講演 2011年3月15日
 白浜商工祭「ベニクラゲ」講演 Big・U 2011年3月26・27日
 テレビ番組協力 フジテレビ（よみうりテレビ）「カスペ！・へんな生き物 100 連発第三弾」「決定！激レアランキング」6月22日
 テレビ番組出演 よみうりテレビ「大阪ほんわかTV」11月22日
 テレビ番組出演 NHK・BSハイビジョン「アインシュタインの眼「#107 クラゲ ～なぜ刺す なぜ増える～」 6月13日
 テレビ番組出演 関西テレビ「よいいドン！」「いい街おいでよ 自画自賛 旅しおり」和歌山県・白浜 7月20日
 テレビ番組出演 よみうりテレビ「ス・マタン」 8月9日

海域陸域統合管理学研究部門

向井 宏 森林総合研究所主催・OECD 国際共同プログラム後援・生物多様性条約 COP10 記念シンポジウム「農林水産業に寄与する生態系サービスの持続的利用に果たす森林の生物多様性の役割」（セッション2 森林がもたらす生態系サービスのゆくえ）において、講演「森林の生態系サービスがもたらす沿岸域の多様性及び生産」 早稲田大学小野記念講堂, 4月26日
 瀬戸内海の豊かな自然を守るために / 京都三条ラジオカフェ（FM797）「京から Green コミュニケーション！」出演（約30分）, 7月16日
 日本野鳥の会シンポジウム「海洋保護区について」講演, 7月24日

企画研究推進部門

■福島 慶太郎

福島 慶太郎 全国大学演習林協議会 中国・四国・近畿地区大学附属演習林等技術職員研修で講義“鹿の食害が物質循環へ及ぼす影響”，10月28日

管理技術部

西岡 裕平 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座(芦生研究林)講師 (樹木識別入門)

長谷川 敦史 京都大学フィールド科学教育研究センター公開講座(芦生研究林)講師 (樹木識別入門)

(6) 国際活動

◆国際研究プロジェクト

基礎海洋生物学部門

白山 義久 CBD(生物多様性条約)科学者会合に出席 (ケニア・ナイロビ サファリクラブ, 5月8～15日)
Census of Marine Life(CoML)科学推進会議に出席 (アメリカ・ロックフェラー大学, 6月1～6日)
生物多様性の保全と持続可能な利用のための分類学能力構築及びガバナンス会合に出席 (フィリピン・Dusit Thani Hotel, 8月31日～9月2日)

◆国際学会

森林生物圏部門

中島 皇 XXIII IUFRO World Congress (韓国 ソウル, 8月23～28日)

中島 皇 砂防ワークショップ参加・講演, 資料収集 (韓国 忠北大学校, COEX 11月13～15日)

里域生態系部門

柴田 昌三 2nd Intl. Conference of Urban Biodiversity & Design (URBI02010) (日本・名古屋市ウインクあいち, 5月18～22日: 監事及び発表5件)

益田 玲爾 34th Annual Larval Fish Conference に参加 (米国 Fort Marcy Hotel Suites, 5月29日～6月4日)

基礎海洋生物学部門

白山 義久 IPBES(生物多様性と生態系サービスに関する政府間科学プラットフォーム)ワークショップに参加 (アメリカ National Center Training Center, 5月3～7日)
Census of Marine Life 2010: A Decade of Discovery (イギリス The Royal Institution of Great Britain, The Royal Society, 10月3～8日)

久保田 信 7th Workshop of the Hydrozoan Society に出席 (イタリア University of Salento, 9月9～19日)

深見 裕伸 2nd Asia Pacific Coral Reef Symposium に出席, サンゴ類に共生する大型無脊椎動物の多様性に関する情報収集および打合せ (タイ・プーケット ROYAL PHUKET CITY HOTEL, 6月20～24日)

原田 百聞 Training Workshop on Corals Taxonomy に出席, NaGISA プロジェクトの引継業務 (マレーシア Universiti Sains Malaysia, 12月4～9日)

Census of Marine Life 2010: A Decade of Discovery (イギリス The Royal Institution of Great Britain, The Royal Society, 10月3～8日)

海域陸域統合管理学研究部門

向井 宏 The World Seagrass Conference に出席 (タイ The Club Andaman Beach Resort Hotel, 11月22～24日)
International Symposium for the convention on biological diversity (東京, 7月26～28日)

佐藤 真行 4th World Congress of Environmental and Resource Economists に出席, 発表 (カナダ Universite du Quebec a montreal, 6月28日～7月3日)

Antonio, Emily Sucaldito ECSA47 Symposium に出席, 発表, プラント川からモンデゴ河口にかけて生物や植物を調査 (ポルトガル CAE, 9月14～19日)

◆海外調査

森林生物圏部門

安藤 信 ニュージーランドの南極ブナ・マキ科樹木の植生調査, 情報収集 (ニュージーランド, Mt. Cook 国立公園・オークランド植物園他, 12月17～28日)

- 徳地 直子 東南アジア熱帯地域におけるプランテーション型バイオマス社会の総合的研究（マレーシア・クチン，8月12～23日）
- 長田 典之 ウォーカー循環系における大気振動と山岳の森林限界の形成に関する調査（マレーシア・キナバル公園局，2011年2月19日～3月3日）

里域生態系部門

- 山下 洋 ナマコの種苗生産と養殖技術に関する視察調査（中国・大連，10月19～22日）
- 柴田 昌三 インド北東州における竹類の一斉開花枯死の調査（インド・インド北東州竹林，ミゾラム大学，5月31日～6月5日）
- ミゾラム州における竹類の一斉開花枯死の調査（インド・ミゾラム大学，11月22～28日）
- ネパールにおける竹類の一斉開花枯死の調査（インドミゾラム州周辺広域の追跡調査），情報収集（ネパール・トリブヴァン大学自然史博物館，2011年2月20～22日）
- ブータンにおける竹類の一斉開花枯死の調査（インドミゾラム州周辺広域の追跡調査），情報収集（ブータン・インド国境付近の竹林，2011年3月24～31日）
- 長谷川 尚史 伐採・集材の実演，風害跡地・森林路網の視察，「バイオマス利用に関する研究」について現地関係者と情報交換（ドイツ・クライルスハイム市の森林，フライブルグ市の森林，5月8～10日）
- 「バイオマス利用」に関する林業（路網と架線集材）の視察，現地関係者と情報交換（スイス，5月11～12日）
- 「バイオマス利用」に関する林業（路網と架線集材）の視察（ドイツ Hessen Forst，5月13～14日）
- 大嶋 真謙 ナマコの種苗生産と養殖技術に関する視察調査（中国・大連，10月19～22日）
- 南 憲吏 ナマコの種苗生産と養殖技術に関する視察調査（中国・大連，10月19～22日）

基礎海洋生物学部門

- 白山 義久 サンゴ分類能力育成ワークショップに出席（マレーシア・マレーシア科学大学，12月4～9日）
- 久保田 信 刺胞動物化石の共同研究（中国 Northwest University，4月22～27日）
- エチゼンクラゲの研究調査（韓国 Ewha Womans University，5月7～12日）
- エチゼンクラゲの研究調査（韓国 Ewha Womans University，6月10～14日）

海域陸域統合管理学研究部門

- 向井 宏 河川沿岸，水，底生生物の調査（フィリピン・クラマン川，イリガン川，4月15～20日）
- ラグーン調査，Bo川上流域調査，フエ市内の市場視察（ベトナム・フエ，2011年2月14～16日）
- ジュゴン個体群の生態と河川生態系の影響の研究調査，「Dugon Forum」に出席（フィリピン・マリタ市 New Algaos，マティ市 Pujada 湾，ダバオ州立大学，2011年2月26日～3月4日）
- Antonio, Emily Sucaldito 河川沿岸，水，底生生物の調査（フィリピン・クラマン川，イリガン川，4月15～20日）
- ジュゴン個体群の生態と河川生態系の影響の研究調査，「Dugon Forum」に出席（フィリピン・マリタ市 New Algaos，マティ市 Pujada 湾，ダバオ州立大学，2011年2月26日～3月4日）

企画研究推進部門

- 福島 慶太郎 サラワク州における流域河川水質調査会議と視察（マレーシア・クチン，7月27～29日）

管理技術部

- 向 昌宏 ジュゴン個体群の生態と河川生態系の影響の研究調査，「Dugon Forum」に出席（フィリピン・マリタ市 New Algaos，マティ市 Pujada 湾，ダバオ州立大学，2011年2月26日～3月4日）

◆在外研究

基礎海洋生物学部門

- 久保田 信 ベニクラゲの生物学的研究（イタリア universita' del Salento，5月24～27日）

◆その他出張研修

森林生物圏部門

- 中島 皇 森里海連環学に関する資料収集（韓国・清州市，8月19～22日）

里域生態系部門

- 柴田 昌三 「里山生態系の評価と再生技術について」成果まとめのため，関係研究者から情報・資料収集（韓国 ソウル大学，2011年2月28日～2011年3月2日）

◆招聘外国人学者

森林生物圏部門

Hassan-Zaki Pakhriazad (ハッサン-ザキ パクリアザド) / マレーシアにおける FSC(森林管理協議会) 認証の森林施業体系について (マレーシア プトラマレーシア大学講師, 2009 年 10 月 30 日~2010 年 4 月 19 日, 受入教員: 芝 正己)

海域陸域統合管理学研究部門

Suriyan Tunkijjanukij (スリヤン ツンキジャヌキ) / タイにおける沿岸管理学 (タイ Kasetsart University 水産学部長, 2011 年 2 月 21~22 日, 受入教員: 向井 宏)

◆外国人共同研究員

基礎海洋生物学部門

Zeina Amr Farag Abdel Kader Mohamed (ゼイナ アムル ファラグ アブドル カデル モハメド) / 「海産藻類群集の生態学的研究」(エジプト Al-AZHAR 大学 Marine and Fish laboratory・Assistant Lecturer, 2010 年 4 月 15 日~9 月 30 日 および 11 月 1 日~2011 年 4 月 14 日, 受入教員: 白山 義久)

海域陸域統合管理学研究部門

MARUF KASIM (マルーフ カシム) / 緯度に沿った河口域生態系における植物プランクトン群集の役割 (インドネシア・ハルオレオ大学講師兼研究員, 2010 年 11 月 20 日~2011 年 1 月 28 日, 向井 宏)

◆留学生

森林育成学分野

Alex Souza 国費留学生 (ブラジル, 柴田 昌三/長谷川 尚史)

里海生態保全学分野

陳 炳善 研究員 (韓国, 山下 洋)
Chaitanya Kumar Bhandare 私費留学生 (インド, 山下 洋)
Yi-Ting Lien (連怡婷) 私費留学生 (台湾, 山下 洋)
Michelle L. Walsh フルブライト研究員 (米国, 山下 洋)

(7) 研修参加・資格取得等

◆研修参加 (学外)

平成 22 年度中国・四国・近畿地区大学附属演習林等技術職員研修

主催 京都大学フィールド科学教育研究センター森林フィールド管理部門・(全国演習林協議会)
開催日時・場所 10 月 26~28 日・芦生研究林
参加者 佐藤 修一・上西 久哉・柴田 泰征・大橋 健太 (4 名) (世話役) 境 慎二郎・山内 隆之

平成 22 年度北海道・東北地区大学演習林等技術職員研修

主催 東京大学農学生命科学研究科附属演習林 (全国演習林協議会)
開催日時・場所 6 月 22~25 日・東京大学北海道演習林 (富良野)
参加者 勝山 智憲・西岡 裕平 (2 名)

第 13 回関東甲信越地区大学演習林等技術職員研修

主催 東京大学農学生命科学研究科附属演習林 (全国演習林協議会)
開催日時・場所 6 月 29 日~7 月 2 日・東京大学千葉演習林
参加者 柳本 順 (1 名)

第 19 回九州地区農学部附属演習林等技術職員研修

主催 九州大学農学部附属演習林 (全国演習林協議会)
開催日時・場所 7 月 27~30 日・九州大学宮崎演習林
参加者 紺野 絡 (1 名)

平成 22 年度東海地区農学部附属演習林等技術職員研修

主催 名古屋大学大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター（全国演習林協議会）
開催日時・場所 10 月 5～7 日・名古屋大学稲武フィールド
参加者 長谷川 孝・荒井 亮（2 名）

平成 22 年度熊本大学総合技術研究会

主催 熊本大学総合技術研究会実行委員会（全国総合技術研究会）
開催日時・場所 3 月 17～18 日・熊本大学 工学部 2 号館等
参加者 境 慎二郎・柳本 順（2 名）

平成 22 年度 第 31 回都市緑化のための土壌・農薬・病虫害対策研修会

主催 一般財団法人 日本造園修景協会
開催日時・場所 9 月 8～9 日・兵庫県民会館及び神戸市相楽園
参加者 長谷川 敦史（1 人）

◆研修参加（学内）

安全保障輸出管理説明会

2～3 月 吉岡 崇仁・田川正朋他（計約 10 人）

e-Learning 研修「研究費等の適正な使用について」（オンライン研修）

1～3 月 教員・職員・特定研究員等 計 23 人

農学研究科・フィールド科学教育研究センター第 13 回技術職員研究集会：農学研究科附属農場

2 月 21 日 境 慎二郎・紺野 絳・中村 はる奈（3 人）

京都大学技術職員研修（第 3 5 回）：京都大学学術情報メディアセンター・宇治川オープンラボラトリ

2 月 17～18 日 柴田 泰征，柳 直文，大橋 健太，荒井 亮，吉岡 歩（5 人）

（世話役）境 慎二郎

京都大学技術職員研修（専門研修：第 2 専門技術群：システム・計測系）：洛西浄化センター，京都市松ヶ崎浄水場

2 月 9 日 向 昌宏（1 人）

京都大学技術職員研修（専門研修：第 3 専門技術群：物質・材料系）：吉田南キャンパス

3 月 11 日 向 昌宏（1 人）

京都大学技術職員研修（専門研修：第 4 専門技術群：生物・生態系）：農学研究科附属牧場

11 月 25 日 境 慎二郎・紺野 絳・安藤 公（3 名）

京都大学技術職員研修（専門研修：第 6 専門技術群：情報系）：学術情報メディアセンター

10 月 15 日 槇田 盤（1 人）

ヒューマンスキル研修会 マネージメントマインド研修

1 月 13 日 槇田 盤（1 人）

ヒューマンスキル研修会 会議の進め方

1 月 20 日 中村 はる奈（1 人）

平成 22 年度京都大学英語実践研修

9 月～2 月（20 回）主催 槇田 盤（1 人）

パソコン研修

Word2007 基礎 長谷川 敦史・小嶋 宏和・西岡 裕平（3 人）

Excel2007 基礎 藤井 弘明・長谷川 敦史（2 人）

Excel2007 マクロ/VBA 入門 藤井 弘明（1 人）

ホームページビルダー11 基礎 荒井 亮（1 人）

◆免許・資格等の取得

伐木等の業務特別教育 安藤 公（1 人）

刈払機作業安全衛生教育 安藤 公（1 人）

振動工具取り扱い作業教育講習 なし

研磨砥石の取り替え（自由） なし

小型車両系建設機械（整地等 3t 未満） 安藤 公（1 人）

玉掛け技能講習 安藤 公（1 人）

車両系建設機械（整地等）	安藤 公（1人）
車両系建設機械（解体用）	なし
フォークリフト運転技能講習	なし
小型移動式クレーン	勝山 智憲・林 大輔（2人）
高所作業車運転技能講習	境 慎二郎・紺野 絡（2人）
危険物取扱車免状（乙種4類）	なし
大型特殊免許	古田 卓（1人）
潜水士免許	なし
エックス線作業主任者免許	なし
◆安全衛生に関する講習会等	
安全運転管理者講習	佐藤 修一・長谷川 孝・藤井 弘明（3人）
危険物取扱者保安講習	長谷川 孝・浅野 善和・荒井 亮（3人）
安全衛生推進者養成講座	なし
化学物質管理・取扱講習会	中西 麻美・福島 慶太郎（新規取扱者コース 2人） 吉岡 崇仁・向 昌宏（管理者・一般コース 2人）
無機廃液処理装置（KMS）指導員候補者のための講習会	福島 慶太郎（1人）
振動工具取扱作業に対する安全衛生教育	長谷川 敦史・太田 健一・荒井 亮・小嶋 宏和・西岡 裕平（5人）

● ● ● 4. 資料 ● ● ●

(1) 職員配置表

平成22年10月 1日現在

区 分	教 授	准教授	講 師	助 教	事務職員	技術職員	非 常 勤 職 員 等
流動分野研究室		田 川 正 朋		中 山 耕 至			黒 河 七 菜 子
研究室	吉 岡 崇 仁						植 田 晶 子 村 上 彩 子 石 角 静 子 長 田 典 美 金 井 美 代
企画情報室	(室長〔兼〕) 白 山 義 久					○柳 直文 ○榎 盤 中村はる奈	上 野 亜 紀
森里海連環学 プロジェクト支援室	(室長〔兼〕) 吉 岡 崇 仁	(副室長〔兼〕) 徳 地 直 子		(研究員) ◆ 福 島 慶 太 郎 ◆ 石 原 正 恵		向 昌 宏	大 川 智 船
海域陸域統合管理学 研究部門	(特任) ◇ 向 井 宏	◆ 佐 藤 真 行					Antonio Emily S 麻 生 佳 穂 里
事務部					(専門員) 河村喜代美 大谷 啓子	針 木 知 枝	山 本 み ゆ き
図書室							
森林フィールド管理部門						△◎山内 隆之	
里域フィールド管理部門						▽◎境 慎二朗	
水域フィールド管理部門						◎山本 泰司	
芦生研究林		(研究林長) 長 谷 川 尚 史		▼ 中 西 麻 美	(掛長) 石 田 将 人 (再)長 野 敏	●藤井 弘明 ○浅野 善和 太田 健一 荒井 亮 長谷川敦史 小嶋 宏和 西岡 裕平 (再)大牧 治夫	山 口 サ ト 子 中 野 は る み
北海道研究林	▲(研究林長) 吉 岡 崇 仁	徳 地 直 子			(掛長) 川 合 忍	[標茶区] ●佐藤 修一 ○岡部 芳彦 勝山 智恵 林 大輔 吉岡 歩 [白糠区] ○柳本 順 古田 卓	川 村 由 紀 枝 谷 口 多 見 子
和歌山研究林	□▲(研究林長) ☆ 柴 田 昌 三			▲ 坂 野 上 な お		●長谷川 孝 ○上西 久哉 ○平井 岳志 ○細見 純嗣 中川 智之	松 場 輝 信 松 場 京 子
上賀茂試験地		(試 験 地 長) 安 藤 信		寄 元 道 徳		●柴田 泰征 ○大橋 健太 黒田 真人 奥田 賢公 安藤 公	
徳山試験地			☆(試験地長) 中 島 皇			●秋田 豊 伊藤 雅敏	近 森 道 子 石 丸 美 由 希
北白川試験地	(試験地長〔兼〕) 柴 田 昌 三					○紺野 絡	北 村 伊 都 子
紀伊大島実験所		(実験所長) 梅 本 信 也					
舞鶴水産実験所	(実験所長) 山 下 洋	益 田 玲 爾		上 野 正 博 甲 斐 嘉 晃	(再)松尾 壽雄	○志賀 生実 (再)佐藤 一夫	亀 井 ま り 子 松 尾 春 美 荻 野 文 代 山 下 正 枝 大 嶋 真 謙 南 憲 史
瀬戸臨海実験所	(実験所長) ■ 白 山 義 久	久 保 田 信	宮 崎 勝 己	大 和 茂 之 深 見 裕 伸 (研究員) ◆ 青 山 弘 ◆ 諏 訪 僚 太 ◆ 原 田 百 聞	(掛長) 大坪 博 史 (主任) 福岡 由美 (主任) 砂田 明展	(兼)◎山本 泰司 ○津越 健一 加藤 哲哉 原田 桂太 興田喜久男 (再)太田 満 (再)山本 善万	興 田 道 子 笠 松 麻 衣 子 宮 本 佳 菜 (派)

■ センター長
□ 副センター長

▲ 勤務地: 京都 ▼ 勤務地: 上賀茂試験地 △ 勤務地: 北海道研究林 ▽ 勤務地: 北白川試験地
◆ 特定有期雇用教職員 ◇ 有期雇用教職員

◎ 技術長
(兼)兼務

● 技術班長
(再)再雇用

○ 技術主任
(休)休職

(2) 常設委員会名称及び委員一覧

平成 22 年 11 月 10 日現在

＜教授が担う委員会＞		
将来構想企画委員会	白山・山下・柴田・吉岡	
教育研究評価委員会	白山・山下・柴田・吉岡	
施設・設備整備委員会	白山・山下・柴田・吉岡	
＜教授が当面委員長を務める委員会＞		
教育プログラム委員会	○山下・徳地・田川・長谷川・中島・宮崎	
研究プログラム委員会	○吉岡・安藤・梅本・益田	
広報委員会	○柴田・久保田・梅本・寄元・坂野上・甲斐・佐藤・横田	
人権問題対策検討委員会	○白山・山下・柴田・吉岡・徳地・益田・和田	
情報セキュリティ委員会	○白山・上野(幹事)・中山・横田	
＜准教授・講師・助教が委員長を務める委員会＞		
施設・設備整備委員会ワーキンググループ		
遠隔講義システム等整備WG	○安藤・宮崎・坂野上・上野	
連携棟新営WG	○梅本・久保田・田川・中西	
社会連携委員会	○佐藤・長谷川・中島・益田・大和・田川・中山・寄元・中西	
国際委員会	○益田・中西	
労働安全衛生委員会	○徳地・吉岡・坂野上・甲斐・大和・向	
		(○ は、委員長)
技術職員の在り方検討委員会(役職指定)		
		センター長・副センター長・総務課長・技術長
危機管理委員会		
		全教授・各施設長・技術職員(若干名)

(3) 全学委員会等

平成 22 年 7 月 1 日現在

＜部局長が対応する委員会＞		
教育研究評議会	大学評価委員会	全学共通教育委員会
研究所長・センター長会議	全学情報セキュリティ委員会	地球環境学堂・学舎協議会
生態学研究センター・協議員会	総合技術部委員会	
＜他の教員が対応する委員会＞		
学生の安全対策検討WG		吉岡
組換え DNA 実験安全委員会		中山
高等教育研究開発推進機構	全学共通教育システム委員会 少人数教育部会	益田
高等教育研究開発推進機構	全学共通教育システム委員会 生物学部会	田川
広報委員会		安藤
国際交流委員会		柴田
国際交流推進機構運営委員会		柴田
情報環境機構 KUINS 利用負担金検討委員会		中西
ジュニアキャンパス実施検討委員会		吉岡
生態学研究センター運営委員会		徳地
総合博物館運営委員会		久保田
地球環境学堂三才学林協議員		柴田
組み替え DNA 実験安全委員会		深見
大学評価委員会 点検・評価実行委員会		山下
教室系技術職員の在り方検討WG		柴田
施設整備委員会吉田キャンパス整備専門委員会		吉岡

〈その他学内委員会等〉

国際交流会館小委員会

北部構内交通委員

農学研究科コンピュータ援用物理系実習室運営委員会

農学研究科コンピュータ援用物理系実習室管理実務委員会

柴田

寄元

長谷川

坂野上

(4) 運営委員会

区分	氏名	所属・職名
議長	白山 義久	フィールド研 センター長
1 号	山下 洋	フィールド研 教授
	柴田 昌三	フィールド研 教授
	吉岡 崇仁	フィールド研 教授
2 号	渡辺 勝敏	理学研究科 准教授
	北山 兼弘	農学研究科 教授
	森本 幸裕	地球環境学堂 教授
	高林 純示	生態学研究センター 教授
	本川 雅治	総合博物館 准教授
	安藤 和雄	東南アジア研究所 准教授

(5) 協議委員会

区分	氏名	所属・職名	備考
1 号	白山 義久	フィールド研 センター長	
2 号	山下 洋	フィールド研 教授	
	柴田 昌三	フィールド研 教授	
	吉岡 崇仁	フィールド研 教授	
3 号	山本 行男 (9 月 30 日まで)	高等教育研究開発推進センター 教授	高等教育研究開発推進機構長
	淡路 敏之 (10 月 1 日より)	理学研究科 教授	
	吉川 研一	理学研究科 教授	理学研究科長
	堀 道雄	理学研究科 教授	理学研究科 教授
	遠藤 隆	農学研究科教授	農学研究科長
	米森 敬三	農学研究科 准教授	農学研究科附属農場長
	小林 慎太郎	地球環境学堂 教授	地球環境学堂長
	中村 裕一	学術情報メディアセンター 教授	
	椿 宜高	生態学研究センター 教授	
	大野 照文	総合博物館 教授	総合博物館長

(6) 新聞記事

センターに関する記事

年月日	掲載面	掲載紙	タイトル	内容・キーワード等
2010年4月7日	朝刊地域 22面	読売新聞	京都大学附置研究所・センターシンポジウム	フィールド研
2010年4月11日	10面	紀伊民報	水族館で飼育体験 17日、白浜	白浜水族館
2010年4月16日	朝刊関西広域 23面	京都新聞	芦生研究林で樹木の観察会 南丹、6月、参加募る	芦生研究林
2010年4月16日	2面	京都大学新聞	上賀茂試験地 春の観察会 地面の下からにきよき	上賀茂試験地
2010年4月24日	夕刊 7面	京都新聞	豊穣の森芦生 目覚め 力満ちた巨木の君臨	芦生研究林
2010年4月24日	4面	紀伊民報	京大島実験所 絶滅危惧13種を確認 田原湿地で植物調査	紀伊大島実験所
2010年4月26日	朝刊科学 14面	読売新聞	芦生の森自然観察会入門編「春の森を歩きながら自然観察をしよう」	芦生研究林
2010年5月	pp.2-3	読売Life (5月号)	紀州のこだわり水族館	白浜水族館
2010年5月7日	9面	紀伊民報	体験イベント 15日、白浜水族館	白浜水族館
2010年5月8日	8面	紀伊民報	白浜の魅力知って 京大新入生がセミナー	瀬戸臨海実験所
2010年5月16日	13面	熊野新聞	ブラシノギ餅やかに 京大植物実験所で	紀伊大島実験所
2010年5月25日	13面	熊野新聞	絶滅危惧種のシダ見つかる 京大紀伊大島実験所で	紀伊大島実験所
2010年5月26日	和歌山紀南版 23面	毎日新聞	実験所長の「遺産」30点 内海富士夫展	瀬戸臨海実験所
2010年5月26日	27面	読売新聞	発芽根性シダい 串本・紀伊大島コンクリすき間から	紀伊大島実験所
2010年5月28日	9面	紀伊民報	餌やりや磯採集など 8日まで参加者募集	白浜水族館
2010年5月29日	夕刊 7面	京都新聞	豊穣の森芦生 ナラ枯れ 保護活動、輪を広げよう	芦生研究林
2010年5月31日	朝刊 1面	京都新聞	凡語(社説)	芦生研究林
2010年6月3日	4面	紀伊民報	準絶滅危惧4種を確認 ツミヤハタカ 紀伊大島で鳥類調査	紀伊大島実験所
2010年6月5日	朝刊 26面	読売新聞	南丹の京大研究林で「森のしくみ」講座	芦生研究林
2010年6月5日	8面	紀伊民報	臨海実験所第5代所長 内海さんの業績など紹介	瀬戸臨海実験所
2010年6月9日	33面	朝日新聞	ハタカ・ツミ…希少猛禽類 串本に棲息確認 専門家調査	紀伊大島実験所
2010年6月19日	15面	紀伊民報	森づくり考える 田辺で7月シンポジウム	フィールド研
2010年6月19日	4面	紀伊民報	ショウベンノギの花咲く 串本町須江	紀伊大島実験所
2010年6月23日	1面	紀伊民報	白浜で海の生物学ぶ 26日、講演会と観察会	瀬戸臨海実験所
2010年6月26日	夕刊 7面	京都新聞	豊穣の森芦生 水の恵み 絶え間ない循環で育つ	芦生研究林
2010年7月2日	4面	紀伊民報	「風倒木被害とも関連」古座川流域のきのこ相 シンボで大槻さん講演	紀伊大島実験所
2010年7月3日	13面	熊野新聞	古座川町 流域はキノコの宝庫 古座川シンボで講演	紀伊大島実験所
2010年7月7日	9面	紀伊民報	フジツボの魅力紹介 白浜 倉谷さんが講演	瀬戸臨海実験所
2010年7月10日	15面	紀伊民報	京大水族館で解説ツアー 白浜 旅館組合が夏休み企画	白浜水族館
2010年7月14日	-	釧路新聞	24日白糠皮切りに京大研究林公開講座【白糠・標茶】	北海道研究林
2010年7月20日	朝刊18-19面	読売新聞	森を育て海の養分に「里海」親しみ自然守る	フィールド研
2010年7月23日	-	北海道新聞	草木染体験しよう京大研究林で講座【標茶】	北海道研究林
2010年7月25日	-	北海道新聞	草木染って「不思議」白糠・京大研究林講座	北海道研究林
2010年7月26日	-	釧路新聞	京大道研究林が「ミニ公開講座」	北海道研究林
2010年7月31日	夕刊 7面	京都新聞	豊穣の森芦生 小さな生命 激変する虫の楽園	芦生研究林
2010年8月1日	8, 9面	紀伊民報	シンポジウム 21世紀を 森林の時代に	フィールド研
2010年8月12日	12面	紀伊民報	日本近海に15万種が生息	海洋生物センサス
2010年8月13日	4面	熊野新聞	京大院生6人が植物調査 須江と樫野で聞取り	紀伊大島実験所
2010年8月18日	4面	紀伊民報	京大院生6人が植物調査実習 串本・紀伊大島 地元住民に聞取り	紀伊大島実験所
2010年8月24日	1面	紀伊民報	真っ白なウナギ展示 日置川支流で釣る	白浜水族館
2010年8月26日	4面	熊野新聞	紀伊大島実験所「漁業への影響」課題に 京大生 串本、古座川で聞取り調査	紀伊大島実験所
2010年8月28日	夕刊 7面	京都新聞	豊穣の森芦生 森と共存 自然生かし村おこし	芦生研究林
2010年9月2日	4面	紀伊民報	串本、古座川 漁業の今と昔を調査 京大生が実習	紀伊大島実験所
2010年9月4日	4面	紀伊民報	幹事会で情報交換 古座川流域協議会	紀伊大島実験所
2010年9月4日	27面	読売新聞	南海地震予測へ 地中電磁波 串本に観測所	紀伊大島実験所
2010年9月7日	4面	熊野新聞	川の濁りをなくすには 古座川流域協議会	紀伊大島実験所
2010年9月9日	4面	紀伊民報	ナンバンギセル咲く 串本・京大島実験所 アオノクマタケランに寄生	紀伊大島実験所
2010年9月14日	9面	京都新聞	環境、「ナラ枯れ」・京の山で深刻化・	芦生研究林
2010年9月16日	4面	紀伊民報	樫野に電磁波観測施設「地震予測に貢献したい」	紀伊大島実験所
2010年9月17日	4面	紀伊民報	京大生が調査実習 住民から聞取り	紀伊大島実験所
2010年9月25日	夕刊 7面	京都新聞	豊穣の森芦生 獣たち 過疎の里に新たな「隣人」	芦生研究林
2010年9月25日	4面	紀伊民報	山と海のつながり学ぶ 串本・古座川 京大と北大生	紀伊大島実験所
2010年10月2日	22面	毎日新聞	流域の自然再生考える 国際高等研で公開シンボ	フィールド研
2010年10月5日	1面	京都新聞	「芦生」国定公園候補に	芦生研究林
2010年10月5日	35面	読売新聞	国立公園候補新たに5地域	芦生研究林
2010年10月13日	25面	京都新聞	芦生研究林で昆虫減	芦生研究林
2010年10月14日	33面	読売新聞	鹿食害?「芦生の森」花減る	芦生研究林
2010年10月22日	9面	紀伊民報	京大白浜水族館がバックヤード体験 30日、参加者募集	白浜水族館

2010年10月22日、23日	関西広域21面、23面	京都新聞	京大の試験地で秋の自然観察会	上賀茂試験地
2010年10月30日	夕刊7面	京都新聞	豊穣の森芦生 キノコ 無音の営み、再生の物語	芦生研究林
2010年11月1日	7面	チャックプレス	「水族館バックヤード体験」参加申込	白浜水族館
2010年11月7日	23面	北海道新聞	別寒辺牛川 流域単位で環境保全	フィールド研
2010年11月9日	23面	毎日新聞	花に集まる昆虫の種類減少	芦生研究林
2010年11月11日	朝刊30面	朝日新聞	森里海をつなぐ人づくり(会と催し案内記事)	時計台対話集会
2010年11月18日	25面	京都新聞	持続可能な自然利用考える集会 京大で20日	時計台対話集会
2010年11月19日	32面	読売新聞	生態系守る人材づくり 京大であすシンポ	時計台対話集会
2010年11月27日	夕刊7面	京都新聞	豊穣の森芦生 彩り 人と自然 関係問いかけ	芦生研究林
2010年12月7日	－	両丹日日新聞	里山の大切さなど学ぶ 由良川市民公開講座	フィールド研
2010年12月14日	－	朝日新聞(東京版)	「東京で学ぶ京大の知」生きものの多様な世界	フィールド研
2010年12月15日	10面	紀伊民報	間伐体験で植林学ぶ	瀬戸臨海実験所
2010年12月15日	4面	紀伊民報	古座川シンポジウム 16日、町中央公民館	紀伊大島実験所
2010年12月22日	電子版	熊野新聞	「ぶつぶつ川の里域植物誌」貴重な植物の生息地 梅本所長が講演 古座川町	紀伊大島実験所
2010年12月23日	4面	紀伊民報	ぶつぶつ川の植生と保全 京大実験所 梅本所長が講演 古座川シンポ	紀伊大島実験所
2010年12月25日	夕刊7面	京都新聞	豊穣の森芦生 シカの害害 保護と捕獲 ジレンマ	芦生研究林
2010年12月29日	4面	紀伊民報	「里域連携学入門」作る 串本 京大大島実験所	紀伊大島実験所
2011年1月1日	23面	京都新聞	春を待つ	芦生研究林
2011年1月1日	54面	紀伊民報	今年は卯の年 ウサギにまつわる生き物たち	白浜水族館
2011年1月6日	26面	読売新聞	京大白浜水族館が2ツアー	白浜水族館
2011年1月12日	朝刊30面	読売新聞	森青く人生きて(番外編)出かけませんか 心の洗濯 府内名所ガイド	芦生研究林
2011年1月29日	夕刊7面	京都新聞	豊穣の森芦生 里の営み 担い手いない山仕事	芦生研究林
2011年2月9日	30面	読売新聞	古座川流域調査 最新報告書発行 京大大島実験所	紀伊大島実験所
2011年2月18日	4面	紀伊民報	京大紀伊大島実験所 第5巻を発刊 古座川調査の報告集	紀伊大島実験所
2011年2月25日	25面	毎日新聞	京都大フィールド科学教育研究センター長	フィールド研
2011年2月25日	26面	京都新聞	フィールド科学教育研究センター長に柴田教授	フィールド研
2011年2月26日	夕刊7面	京都新聞	豊穣の森芦生 厳冬期 雪面に残る命の息づかい	芦生研究林
2011年3月1日	NO.637 p20	広報しべちや	しべちや アドベンチャースクール2011	北海道研究林
2011年3月10日	27面	朝日新聞	舞鶴の保育所 給食にナマコ	舞鶴水産実験所
2011年3月13日	13面	紀伊民報	観光施設は営業中止 白浜 宿泊キャンセル相次ぐ	白浜水族館
2011年3月22日	10面	紀伊民報	バックヤードツアー 25日から白浜水族館	白浜水族館
2011年3月25日	4面	紀伊民報	植物の生態など学ぶ 梅本所長が野外授業 名古屋の向陽高校	紀伊大島実験所
2011年3月26日	夕刊5面	京都新聞	豊穣の森芦生 雪解け 満ちていく春の息吹	芦生研究林
2011年3月30日	4面	紀伊民報	水質環境について報告 古座川シンポジウム	紀伊大島実験所

教職員に関する記事

年月日	掲載面	掲載紙	タイトル	教職員
2010年4月	3157号	京大広報	第5回京都大学附置研究所・センターシンポジウムを開催	白山義久
2010年4月7日	朝刊地域 22面	読売新聞	京都大学附置研究所・センターシンポジウム「市民も生物多様性守ろう」	
2010年7月26日	朝刊地域 23面	京都新聞	生物の多様性再認識を 環境保全など討論	
2010年8月1日	11面	紀伊民報	海洋生物保護に向け環境省検討会座長に	
2010年8月3日	夕刊1面	京都新聞	日本近海、生物種の宝庫	
2010年8月3日	夕刊2面	読売新聞	日本近海 生物種数トップ	
2010年8月4日	27面	朝日新聞	日本の海 生命の宝箱	
2010年8月4日	1面	紀伊民報	(社説)水鉄砲	
2010年8月10日	朝刊9面	京都新聞	環境 漁業見直しなど総合的な施策を	
2010年8月18日	夕刊4面	京都新聞	変わる環境 見えない脅威 海洋酸性化	
2010年9月24日	朝刊4面	京都新聞	私論公論 海の生物多様性・生態系を守れ	
2010年10月5日	夕刊10面	毎日新聞	海の恵み100万種 新種生物も6000 国際調査チーム発表	
2010年10月5日	朝刊35面	読売新聞	海洋生物25万種確認	
2010年10月6日	朝刊24面	毎日新聞	世界の海に生物100万種 新種も6000 国際調査チーム発表	
2010年10月26日	朝刊15面	朝日新聞	世界の海洋生物 25万種 新種1200種 確認	
2010年10月30日	19面	北日本新聞	環日本海生物多様性フォーラム 海洋環境を守り生物と共存	
2010年10月31日	朝刊33面	高知新聞	多様性守る対策を 高知市 京大が研究成果発表	
2010年11月4日	夕刊10面	高知新聞	多様性豊かな日本の海 京都大教授 白山義久さん	
2010年7月24日	1面	紀伊民報	森林テーマにシンポジウム 26日、養老氏ら講演	白山義久・柴田昌三・長谷川尚史
2011年1月1日	2面	広報まいづる	パブリックコメント手続制度 良好な環境の保全と創造に向け 環境基本計画(素案)に意見を	山下洋
2010年5月10日	23面	毎日新聞	竹林整備奉仕でタケノコ掘り	柴田昌三
2010年5月10日	19面	朝日新聞	市民ら100人 竹林を整備	
2010年5月16日	3面	京都大学新聞	タケノコみつけた！ 桂キャンパスで竹林保全イベント	
2010年10月17日	朝刊29面	京都新聞	京日記	

2010年10月28日	朝刊	毎日新聞	里山再生 魅力を発信 府「由良川回廊構想」	柴田昌三
2011年2月12日	朝刊24面	読売新聞	珍しい竹の花 生態解説 12日、京大教授	久保田 信
2010年7月24日	8面	紀伊民報	会員の調査報告24編 南紀生物第52巻 ヒクラゲの紹介も	
2010年4月6日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「クマムシの子ども」	
2010年4月14日	10面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「マルサヤワムシの幼生」	
2010年4月21日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「舌形動物門の幼生」	久保田 信
2010年4月28日	10面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「サリネラの幼生」	
2010年5月8日	8面	紀伊民報	白浜の魅力知って 京大新入生がセミナー	
2010年5月14日	9面	紀伊民報	学校自慢 田辺第三小学校 天神崎で学ぼう	
2010年5月21日	15面	紀伊民報	ベニクラゲ 6回目の若返り成功 京大・久保田准教授	久保田 信
2010年5月22日	8面	紀伊民報	久保田・京大准教授、歌と映像で動物紹介	
2010年6月	pp46-48	チャレンジ未来 アドベンチャー6 年生	不老不死の生き物発見！ベニクラゲ	
2010年6月3日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「カニダマシの幼生」	
2010年6月3日	10面	紀伊民報	久保田准教授が環境講演 7日、和歌山	久保田 信
2010年6月10日	p3	昭和	カイヤドリヒドラ類の系統分類学的研究	
2010年6月16日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「ブルテウス幼生その2」	
2010年6月25日	14面	紀伊民報	ペットボトル漂着が急増 白浜で定点観測 京大准教授が指摘	
2010年6月30日	10面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「コベボダイト幼生」	久保田 信
2010年7月7日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「ユズタマの分身」	
2010年7月15日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「ブラキオラリア幼生」	
2010年7月29日	14面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「アオリイカの子」	
2010年7月30日	-	長崎新聞	希少種2個体 国内初の確認	久保田 信
2010年8月3日	-	西日本新聞	九十九島で国内初確認 「チョビヒゲクラゲ」	
2010年8月5日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「アルテミアの幼生」	
2010年8月5日	-	毎日新聞	命名「チョビヒゲクラゲ」国内初確認	
2010年8月12日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「ユムシの幼生」	久保田 信
2010年8月13日	15面	紀伊民報	“不老不死”のベニクラゲ 若返りのポリプ世界初の展示 京大水族館	
2010年9月	pp.86-92	遺伝 Vol.64 No.5	不老不死で若返るベニクラゲ類の生活史	
2010年9月2日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「アゴムシの幼体」	久保田 信
2010年9月8日	10面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「サンゴの胚」	
2010年9月16日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「カギムシの子」	
2010年9月16日	2面	京都大学新聞	クラゲのふしぎ ジェリーフィッシュ(著)	
2010年9月29日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「ソデイカの子ども」	久保田 信
2010年10月7日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「立方クラゲ類のポリプ」	
2010年10月14日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「直遊動物の幼生」	
2010年10月21日	1面	紀伊民報	最古の化石発見 イソギンチャクやサンゴの祖先	
2010年10月27日	9面	紀伊民報	サガリバナの果実漂着 白浜の海岸 県内で初確認	久保田 信
2010年10月27日	10面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「謎の寄生動物」	
2010年11月4日	14面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「ミシス幼生」	
2010年11月23日	12面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「イソギンチャクの幼生」	
2010年12月3日	14面	紀伊民報	海の不思議この子誰の子「コロダイの子」	久保田 信
2010年12月5日	10面	紀伊民報	田辺湾はクラゲ天国 90年で150種 京大実験所が調査	
2010年12月8日	10面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「エチゼンクラゲ」	
2010年12月15日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「カイヤドリヒドラクラゲ」	
2010年12月23日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「フウセンクラゲモドキ」	久保田 信
2010年12月24日	1面	紀伊民報	南方系イカの甲 冬季に大量漂着 3年前から白浜沿岸	
2010年12月29日	10面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「ユウレイクラゲ」	
2011年1月1日	54面	紀伊民報	今年は卯の年 ウサギにまつわる生き物たち	
2011年1月6日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「ベニクラゲ」	久保田 信
2011年1月16日	1面	紀伊民報	珍しい南方ハギ漂着 白浜町臨海の海岸	
2011年1月20日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「アマクサクラゲ」	
2011年1月26日	10面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「プイオンケリカークラゲ」	
2011年1月28日	1面	紀伊民報	白浜に「凍死」熱帯魚 寒波で漂着相次ぐ	久保田 信
2011年2月3日	1面	紀伊民報	白浜町の海岸 熱帯魚が寒波に“悲鳴”	
2011年2月3日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「ヨジレクラゲ」	
2011年2月10日	p.3	昭和	学術研究助成に応募57件	
2011年2月11日	14面	紀伊民報	9回目の若返りに成功 京大・久保田准教授 ベニクラゲの実験	久保田 信
2011年2月17日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「エビクラゲ」	
2011年2月18日	3面	紀伊民報	釣(ちょう)っとコラム	
2011年2月24日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「イボクラゲ」	
2011年3月2日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「カミクラゲ」	久保田 信
2011年3月11日	15面	紀伊民報	凍死熱帯魚は約70種871匹 白浜町北浜海岸 過去20年で最多漂着	
2011年3月17日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「マキヒゲクラゲ」	
2011年3月31日	12面	紀伊民報	日本一のクラゲ天国「アカクラゲ」	
2011年1月15日	1面	毎日新聞	余録(ベニクラゲの若返りの研究について言及あり)	

2010年春号	p.15	JMBA Global Marine Environment No.11	GREEN FLUORESCENT PROTEIN in a bivalve-inhabiting hydrozoan (論文紹介記事)	久保田 信
2010年11月3日	-	京都新聞	魚の生態 児童ワクワク	田川正朋・益田玲爾 徳地直子
2011年2月15日	13面	釧路新聞	標茶「水」と「空気」育む 森林の重要性解説	
2010年4月	pp.11-12	共通教育通信 vol.14(2010年春号)	授業紹介4 ポケットゼミ 魚類心理学	益田玲爾
2010年11月12日	朝刊33面	朝日新聞	街中にサケ! 舞鶴・寺川で発見	
2011年1月1日	8面	広報まいづる	地域の食と環境を学ぶ ナマコの保育所づくりスタート	
2011年2月8日	朝刊19面	朝日新聞	海水温上昇 近海の魚に異変	
2010年4月22日	4面	紀伊民報	ひっそり白い花 那智勝浦 絶滅危惧のコナミキ	
2010年6月3日	1面	熊野新聞	この時季にススキの穂 串本町大島で見つかる	梅本信也
2010年6月17日	4面	紀伊民報	イワダレソウ咲く 串本町須江	
2010年7月29日	4面	紀伊民報	山中湿地で草刈り 田原ウェットランドの会	
2010年9月8日	27面	読売新聞	林道沿い 秋の気配	
2010年10月6日	電子版	毎日新聞	キイジョウロウホトギス:猛暑の影響、開花危機 古座川、すさみ	
2010年12月25日	4面	紀伊民報	「学校給食懐古句集」作る 京大大島実験所長 梅本さん	
2011年1月6日	26面	読売新聞	給食の思い出 五七五に 梅本・京大実験所長が句集	
2010年7月28日	9面	紀伊民報	「森や海の資源生かそう」田辺 森林考えるシンボ	
2010年4月17日	4面	両丹日日新聞	日本海に遊ぶ 波のカーテン	
2010年5月22日	4面	別冊TOWN	日本海に遊ぶ Bon Voyage(ボンボヤージュ)	
2010年12月15日	1・34面	朝日新聞	絶滅クニマス生きていた	中山耕至
2010年12月15日	夕刊12面	読売新聞	クニマス絶滅してなかった	
2010年12月15日	9面	京都新聞	“絶滅”クニマス生息	
2011年2月22日	29面	読売新聞	「クニマス発見」英文誌に経緯 京大教授ら近く電子版掲載	
2010年6月24日	11面	紀伊民報	「山と川と海は一つ」 宮崎県気仙沼湾 漁師の畠山さんが講演	畠山重篤(社会連携教授)
2010年8月4日	6面	京都新聞	資源バトル 森が消える 山、川海は一つ 認識を	
2011年3月27日	24面	京都新聞	「海で生きる」再起決意 宮城の養殖業者ら	
2011年3月28日	33面	朝日新聞	「海は森の恋人」植樹20年の漁師・畠山さん 母犠牲「これも・・・海」	
2011年3月29日	31面	日本経済新聞	「豊かな海もう一度」カキ養殖業者	
2010年12月1日	-	京大広報 No.662	「白眉プロジェクト」次世代研究者育成センター採用者を内定	佐藤 拓哉(特別研究員)
2010年8月5日	1面	紀伊民報	白浜で夜光虫の赤潮 京大院生が発生確認	座安佑奈(大学院生)

(7) 各施設利用者数 (2010 年度)

(単位：人)

(所属) (目的) (利用者)	京都大学					他大学				
	教育		研究		その他	教育		研究		その他
	教職員等	学生	教職員等	学生		教職員等	学生	教職員等	学生	
芦生研究林	321	611	498	1043	4	76	168	120	187	0
北海道研究林白糠区	53	94	103	7	3	0	0	5	1	1
北海道研究林標茶区	153	293	292	4	3	12	28	40	3	0
和歌山研究林	105	3	192	35	0	1	2	66	172	0
徳山試験地	24	40	14	0	7	0	0	0	4	0
上賀茂試験地	122	532	324	311	35	17	191	6	12	29
北白川試験地	11	155	506	1,026	4	1	5	40	1	0
紀伊大島実験所	45	122	3	14	0	7	63	9	4	0
舞鶴水産実験所	132	427	217	4,784	51	17	212	56	65	1
瀬戸臨海実験所	117	474	16	1,969	0	193	1,139	97	264	0
計	1,083	2,751	2,165	9,193	107	324	1,808	439	713	31

(所属) (目的) (利用者)	教育研究機関等			一般			合計
	教育	研究	その他	教育	研究	その他	
芦生研究林	264	29	92	889	201	6,036	10,539
北海道研究林白糠区	0	0	0	13	4	90	374
北海道研究林標茶区	16	0	0	118	136	61	1159
和歌山研究林	228	18	0	0	36	15	873
徳山試験地	14	0	1	73	0	36	213
上賀茂試験地	0	20	56	100	57	488	2,300
北白川試験地	0	1	45	24	2	34	1,855
紀伊大島実験所	38	50	0	1	202	0	558
舞鶴水産実験所	672	78	51	44	10	246	7,063
瀬戸臨海実験所	431	228	1	84	220	64,626	69,859
計	1,663	424	246	1,346	868	71,632	94,793

(8) 人事異動 (2010 年度)

氏名	新職名	旧職名	異動年月日
吉岡 崇仁	北海道研究林長・教授	教授	2010. 4. 1
安藤 信	上賀茂試験地長・准教授	北海道研究林長・准教授	〃
芝 正己	北白川試験地長・准教授	芦生研究林長・准教授	〃
長谷川 尚史	芦生研究林長・准教授	北白川試験地長・准教授	〃
寄元 道徳	上賀茂試験地・助教	北白川試験地・助教	〃
中西 麻美	芦生研究林・助教（上賀茂試験地勤務）	上賀茂試験地・助教	〃
古田 卓	北海道研究林・技術職員	上賀茂試験地・技術職員	〃
原田 晶夫	農学研究科等経理課・主任（予算・決算G）	瀬戸臨海実験所・事務職員	〃
福田 光宏	工学研究科経理事務センター・主任（Cクラスター事務区会計掛）	北海道研究林・事務主任	〃
佐藤 修一	北海道研究林・技術班長（技術専門員）	北海道研究林・技術班長（技術専門職員）	〃
柳本 順	北海道研究林・技術主任（技術専門職員）	北海道研究林・技術主任（技術職員）	〃
細見 純嗣	和歌山研究林・技術主任（技術専門職員）	和歌山研究林・技術主任（技術職員）	〃
大橋 健太	上賀茂試験地・技術主任（技術専門職員）	上賀茂試験地・技術主任（技術職員）	〃
松尾 壽雄	舞鶴水産実験所・事務職員（再雇用）	舞鶴水産実験所・事務主任	
大川 智船	森里海連環学プロジェクト支援室・教務補佐員（採用）		〃
原田 桂太	瀬戸臨海実験所・技術職員（採用）		〃
陳 炳 善	舞鶴水産実験所・教務補佐員（採用）		2010. 4. 15
今西 亜友美	地球環境学堂・特定助教	森里海連環学プロジェクト支援室・特定研究員	2010. 6. 1
芝 正己	辞職（琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センター・教授へ割譲）	北白川試験地長・准教授	2010. 6. 30
深見 裕伸	辞職（宮崎大学農学部海洋生物環境学科・准教授へ割譲）	瀬戸臨海実験所・助教	〃
柴田 昌三	北白川試験地長（兼）・教授	教授	2010. 7. 1
石原 正恵	森里海連環学プロジェクト支援室・特定研究員（採用）		〃
針木 知枝	事務室・技術職員	農学研究科等総務課（情報技術室）・技術職員	2010. 8. 1
陳 炳 善	舞鶴水産実験所・研究員（研究機関）	舞鶴水産実験所・教務補佐員	〃
境 慎二朗	里域フィールド管理部門・技術長（北白川試験地勤務）	里域フィールド管理部門・技術長（上賀茂試験地勤務）	2010. 10. 1
安藤 公	上賀茂試験地・技術職員（採用）		〃
砂田 明展	瀬戸臨海実験所・事務主任	医学研究科	〃
河村 喜代美	定年退職	事務室・フィールド担当専門員	2011. 3. 31
秋田 豊	定年退職	徳山試験地・技術班長（技術専門職員）	〃
大谷 啓子	定年退職	森林系図書室	〃
青山 弘	任期満了退職	NaGISA プロジェクト・特定研究員	〃

原 田 百 聞	任期満了退職	NaGISA プロジェクト・特定研究員	2011. 3. 31
諏 訪 僚 太	任期満了退職	瀬戸臨海実験所・特定研究員	〃
白 山 義 久	辞職（海洋研究開発機構・理事へ割譲）	センター長・瀬戸臨海実験所長・教授	〃
A n t o n i o E m i l y S	辞職（南アフリカ・ローズ大学へ転出）	海域陸域統合管理学研究部門・教務補佐員	〃

(9) 規程の改正等

- ・「京都大学フィールド科学教育研究センターにおけるサバティカル制度実施要項」の制定（平成 21 年 12 月 9 日教授会決定・平成 22 年 4 月 1 日施行）
- ・「サバティカルの申請に必要な実績に関する申し合わせ」の制定（平成 21 年 12 月 9 日教授会決定・平成 22 年 4 月 1 日施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター規程」の一部改正（平成 22 年 3 月 29 日達示・4 月 1 日施行／12 月 21 日達示・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター森林ステーション芦生研究林 共同利用規程」の制定及び一部改正（平成 22 年 4 月 14 日教授会決定・施行／11 月 10 日教授会改正・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター里域ステーション上賀茂試験地 共同利用規程」の制定（平成 22 年 4 月 14 日教授会決定・施行／11 月 10 日教授会改正・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター里域ステーション上賀茂試験地 共同利用運営委員会内規」の制定及び一部改正（平成 22 年 4 月 14 日教授会決定・施行／11 月 10 日教授会改正・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所 利用要項」の一部改正（平成 22 年 6 月 30 日センター長裁定・7 月 1 日適用）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所 実習宿泊棟使用内規」の制定（平成 22 年 6 月 30 日センター長裁定・7 月 1 日適用）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所 楽学荘使用内規」の制定（平成 22 年 6 月 30 日センター長裁定・7 月 1 日施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション舞鶴水産実験所 共同利用規程」の制定（平成 22 年 11 月 10 日教授会決定・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション舞鶴水産実験所 共同利用運営委員会内規」の制定（平成 22 年 11 月 10 日教授会決定・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所 共同利用規程」の制定（平成 22 年 11 月 10 日教授会決定・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所 共同利用運営委員会内規」の制定（平成 22 年 11 月 10 日教授会決定・施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション瀬戸臨海実験所 水族館観覧規定」の一部改正（平成 23 年 1 月 18 日総長裁定・2 月 1 日施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション舞鶴水産実験所 利用要項」の一部改正（平成 23 年 2 月 9 日センター長裁定・4 月 1 日施行）
- ・「京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション舞鶴地区 実習宿泊施設利用内規」の一部改正（平成 23 年 2 月 9 日センター長裁定・4 月 1 日施行）

京都大学フィールド科学教育研究センター 年報 第8号
平成23年12月26日発行

発 行 京都大学フィールド科学教育研究センター
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

印 刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通麴屋町東入

